正　誤

【第四巻 326 頁】

「ドイツ語または英語では、かういふ曖昧は決して起りません」以下の表は、

[獨]

wollen können wil can	欲する事を能ふ
können wollen can will	能ふ事を欲する

[英]

[to] be able to be willing can will	欲する事を能ふ
[to] be willing to be able will can	能ふ事を欲する

と訂正す。

獨逸語大講座

第　四　巻

關口存男監修

Der Große Kursus

der

Deutschen Sprache

Band IV.

Gaikokugo Kenkyusha : Tokio

第三十五講

不定法（主として zu を伴ふ場合）

不定法の用法は、既に實地としては文例、練習問題其他でやつて來たのですが、玆で改めて統一をつけようと思ひます。

281. **引用形（Nennform）としての不定法** たとへば、辭書なぞで、一つの熟字、語法を示さうといふ時には、一定の主語に從つた定形を用ひないで——たとへば「交戰する」「宣戰する」を er führt Krieg, er erklärt den Krieg 等とは云はないで——主語なしに云へる形、卽ち不定形、または所謂引用形なるものを用ひます（Krieg führen, den Krieg erklären 等）。

玆までは英語と同じですが、これから次が一寸違ひます。といふのは、たとへば、交戰する、宣戰するは、英語ならば to wage war, to declare war で、その語順を獨逸語の不定形と比較して見ると、正反對なことが解るでせう。獨逸語の引用形は、動詞が最後に來ます。

これまでの講義中にも、熟字の引用形は盛に出て來ましたが、此の語順の點について、今はつきりと意識して頂きたいのです。一度一寸觸れた事のある Determinans（限定するもの）と Determinandum（限定されるもの）との區別は玆にもはつきりと現れてゐます。近代語は、各々その國語の傾向に從つて、語順によつて兩者の區別をはつきりさせようといふ努力を示してゐます。日本語のやうに、助詞の多い、しかも限者が必ず被限者の前に來るといふ嚴密に論理的な文章論（といふよりはむしろ餘りに單調なる習癖）を持つた言語に於ては全然問題にならない事ですが、西洋語の場合にあつてはこれが非常な問題になるので、むしろ文章論なるものの基礎は此の點にあると云つても過言ではありません。たとへば——既に一度述べた例ですが——佛語では

homme 男	femme 女	（女のやうな男）
femme 女	homme 男	（男のやうな女）

前にあるのが名詞で、後に來るのは名詞を形容詞的に用ひたのです。即ち、獨逸語や英語の場合とは反對に、限者を被限者の後に持つて來ます。(femme homme をドイツ語では Mannweib と云ひます。語順が反對です。)

動詞の場合でも同樣で、たとへば次の拉丁語の句の全體としての意味と、字の個々の意味とを考へて見ると、語順のはつきりしない拉丁語が如何に不便であるかがわかります。

velle 欲する	posse 能ふ	1. 欲する事を能ふ？ 2. 能はん事を欲する？
posse 能ふ	velle 欲する	1. 能はん事を欲する？ 2. 欲する事を能ふ？

つまり、語順は其の時次第で色々になる故、文脈を離れて句だけを拔き出すと、要するにどちらが限者だかわからないのです。どちらが限者だかわからないと云ふ事は、取りも直さず全體に何の意味もない、もしくは相反する二つの意味があるといふ事に等しいのです。

ドイツ語または英語では、かういふ曖昧は決して起りません。

【獨】

wollen	können	欲する事を能ふ
können	wollen	能ふ事を欲する

【英】

[to]	will	can	能ふ事を欲する
[to]	can	will	欲する事を能ふ

以上は、ドイツ語の不定形の語順が、被限者、即ち全體の基礎となる不定法を最後に置き、それを限定する動詞、名詞、副詞その他を前に置く。換言すれば日本語と同じ語順になるといふ説明です。

282. 不定法の名詞化 (附) 名詞以外の品詞の名詞化

不定法はその儘を大書して名詞に用ひる事が出來、然る時はその名詞は中性です。

das	Sein	實在	das	Leben	生活、命、人生
das	Gehen	步行	das	Schreiben	筆記
das	Wissen	智識	das	Können	能力

其の儘の形の名詞化は、動詞の不定法ばかりではなく、あらゆる品詞に亘つて行はれます。性はすべて中性として扱ひます。

das	Grün	綠	das	Rot	赤
das	Aber	「然し」、條件、言ひがかり			
das	Wenn	「若しも」といふ事			
das	Beieinander	團欒	das	Aufeinander	堆積、重疊

時にはまた、句全體を一つの名詞として扱ふ事があります。

1. Das bekannte divide et impera[1] war sein Wahlspruch.
   (彼の有名な「分割して統治せよ」が彼のモットーであつた。)
2. In diesem Falle kommt jenes Nietzsche'sche „Mitleid ist Sünde" wohl nicht in Betracht.
   (此の場合ニイチエの例の「同情は罪惡なり」なぞは恐らく問題になるまい。)

283. zu を伴ふ不定法の一般的性質

次は、愈々本問題に入つて、zu を伴ふ不定法の諸種の場合を研究しますが、まづその一般的特徴を述べて置きます。

最も簡單な場合は、主文章に、單に zu と不定法とのみが附隨する場合で、さういふ際には普通コンマで間を仕切りません。そして主文章、または被限者 (Determinandum) となる名詞、動詞等は、次のやうに種々の場合があります。

Die Art **zu sein** [Seinsart]	存在樣式
Er fängt an **zu gehen**	彼は步み始める
schön **anzusehen**	見た目が美しい

上例はみんな zu と不定法が前の者に對する限者であつて、その反對ではありません。もし不定法が被限者だつたら、Die Art zu sein は「樣式である事」、schön anzusehen は、「美しく眺める事」[2] なんて、變な事になつてしまひます。また實際さういふ誤譯が隨分見受けられます。これらは、zu を伴ふ不定法の最も簡單な場合なので、何か規定するものの附いてゐる長い場合ばかりに慣れてゐると、一寸さういふ間違ひを起し易いのです。

次には zu を伴ふ不定法に何等かの限定が附く場合を擧げて見ませう。

1. Ich habe keine Lust, **ins Theater** zu gehen.
   (私は芝居を見に行く氣がない。)
2. Ich bin nicht imstande, **dir** zu helfen.
   (私はおまへを助けることが出來ない。)
3. Er will mein Freund heißen, ohne **mir helfen** zu wollen.
   (彼は私を助けようとも欲しないでゐながら、私の友人だと稱したがる。)

上例のやうになつて來ると必ず主文章との間をコンマで仕切らなければなりません。——斯くの如く、主文章と對立して來ると云ふと、zu を伴ふ不定法の句を、勢ひ副文章と名づけなくてはならなくなりますが、文法學者は、これを一つの文章とは名づけません。その適否は別問題として、どうして「文章」でないと謂はれるのでせうか? それは、「主語」といふものが無いからです。少くとも文字になつては現れません。此の「主語が無い」といふ特徴には特に注意を要します。

それから、すぐ前に述べたばかりの、語順の點にも注目して頂きたい。英語ならば I am so sorry to hear it 獨逸語では Es tut mir leid, das zu hören です。(zu hören das ではありません。) どんなに延びても zu と不定法は一番最後に來るのが原則で、此の點は、定形を最後に持つて來る副文章の配語法と平行してゐます。ただ最後に來るのが定形ではなく、不定形であるといふのみがちがふ譯です。

最後に、意味の上から觀た最も重要な特徴は、zu を伴ふ不定形の句は、それ自身が必ず他の何物かの限者になるといふ事です。die Art zu sein の場合にあつては、zu sein は die Art を限定してゐます。Ich habe keine Lust, ins

Theater zu gehen にあつては ins Theater zu gehen は Lust を限定してゐます。Ich bin nicht imstande, dir zu helfen にあつては、dir zu helfen は nicht imstande sein (不能であること) なる熟字動詞、または分解して詳しく云へば Stand (狀態) といふ名詞を限定してゐます。

284. 不定代名詞 es, das, 等を先行詞とする zu を伴ふ不定法

はつきりした Lust なぞといふ先行詞を持たないで、es (その事は、その事を) das (その事は、その事を) daran (その事について) davon (その事について) 等、所謂不定代名詞を先行詞として、それを詳しく限定する際があります。

1. **Es** freut mich, dich wieder gesund zu sehen.
   (おまへが再び健康になつたのを見るのは嬉しい。)
2. **Es** ist schwer, zwei Herren zu dienen.
   (二君に仕へるは難し。)
3. Er liebt **es**, noch vor Sonnenaufgang spazieren zu gehen.
   (彼は日の出前に散歩することを好む。)
4. Er zieht **es** vor, selber hinzugehen.
   (彼は自分で出掛ける方を採る。)
5. Er denkt noch nicht **daran**, seine Schulden zu bezahlen.
   (彼はまだ自分の借財を支拂はうとまでは考へてゐない。)

es は、一格になる場合と四格になる場合とがありますが、四格の場合には es はよく略されます。

Er befiehlt [es] mir, sofort abzureisen.
(彼は、直ちに出發せよと私に命ずる。)

一格の場合と雖も、zu を伴ふ不定句が丁度 es の位置に來れば、es を存置する必要がないから省きます。

Zwei Herren zu dienen, ist schwer.

(二君に仕ふるは難し。)

但し daran, darum 等、前置詞が這入つて來ると先行詞の省略は普通行ひません。

285. **名詞を先行詞とする、zu を伴ふ不定法**

die Lust, ins Theater zu gehen (劇場へ行きたい慾望) 等の場合には、ins Theater gehen なる句は、謂はば二格になつて Lust といふ名詞に附いてゐるので、英語でも of going to theatre 等、of (の) といふ前置詞を附けます。故に、英語でも to go と云つたやうに不定法を用ひる樣な場合、(即ち前の項で述べた場合) とは嚴重に區別しなければなりません。

1. Das Recht, ohne Fahrkarte zu fahren.

(切符なしに乘車する權利。)

2. Der Wahn, unter allen Völkern der Welt das zivilisierteste zu sein.

(世界のあらゆる民族中最も開化した民であるといふ妄想。)

3. Der Nachteil, immer hinter seinen Nebenbuhlern zurückbleiben zu müssen.

(何時も自分の競爭者達の背後に置き殘されてゐなければならないと云ふ不利。)

4. Die Furcht, auf frischer Tat ertappt zu werden.

(現行犯を押さへられると云ふ恐怖。)

5. Die Kunst, zu versprechen und doch nicht zu versprechen.

(約束しつゝしかも約束せざる妙術。)

286. **「云々……するために」と云ふ、zu を伴ふ不定法**
[um]……zu ＋ 不定法 (1)

1. Um besser sehen zu können, muß man eine Brille tragen.

(よりよく見る事を得んがためには眼鏡を掛けざるべからず。)

2. Er ging zu seiner Mutter, um von ihr Abschied zu nehmen.

(彼は暇を乞ふために自分の母の所へ行つた。)

3. Hast du Ohren, um nichts zu hören?

(おまへは一たい何事も聞かないために耳を持つてゐるのか?)

時には接續詞 (前置詞とも云へます、zu を伴ふ不定句は謂はば長い名詞のやうなものですから) の um を省略することがあります。(さういふ時には、既に述べた二つの場合と混同しない樣にしなければなりません。)

287. **「云々……するにしては」といふ、zu を伴ふ不定法**
[um]……zu ＋ 不定法 (2)

これは前項の場合と少ししか違ひませんが、一つの變種 (Spielart) として注目しなければなりません。必ず主文章の方に zu (餘りに) または genug (充分) といふ副詞があるのを以て特徴とします。

Zunächst ist [es] klar zu machen, daß der moderne Lebensbegriff **zu** unbestimmt ist, **um** ohne genauere Determination das Fundament einer wissenschaftlichen Philosophie zu bilden. [Rickert, Die Philosophie des Lebens.)

譯 Zunächst 先づ以て der moderne Lebensbegriff 現代の所謂「生」なる概念が ohne genauere Determination 何等の詳しき制限もなしに〔直ちに〕das Fundament einer wissenschaftlichen Philosophie 學的哲學の基礎を um ……zu bilden 構成するにしては zu unbestimmt ist あまりに漠然たるものである daß といふ事が ist klar zu machen 明瞭にされなければならない。

Zu dieser Zeit fühlte sich unser Vaterland schon stark **genug um** mit Rußland einen Kampf auf Leben und Tod **zu wagen.**

(此の時に於ては、我々の祖國は既に露國と共に生死を賭しての鬪ひを敢行するだけの力を感じたのであつた。)

288. 「云々……するとすれば」といふ、zu を伴ふ不定法 [um]……zu ＋ 不定法 (3)

これも 286 に述べたものの變種です。これは必ず文章の途中に挿入される、所謂挿入句 (Einschaltung, Inseratsatz) の一種と見ても好いわけです。

Ich habe, **um ehrlich zu gestehen,** Sie für einen Spion gehalten.

(正直に白狀すると、僕は貴方を間諜だと思つたのです。)

斯ういふ挿入句は、略して過去分詞句を用ひても好いのです。

Ich habe, **ehrlich gestanden,** Sie für einen Spion gehalten.

一例だけでは心細いでせうから、次に數個似たやうな例句をあげます。

um es kurz zu machen	簡單に云つてしまふと
um nur ein Beispiel anzuführen	ほんの一例を擧げると
um mit Kant zu reden	カントの言を借りると
um es so auszudrücken	さう云ふ事が許されるならば
um von……zu schweigen	たとへ……は云はないにしても
um die Sache auf ihre Spitze zu treiben	これを極端化して云ふと

sozusagen (謂はば) といふ字は、此の用法が凝結したもので、um が省かれてあるわけです。Scherz beiseite (冗談は扨ておき) なぞも、これは zu を伴ふ不定法そのものを省いた熟語です。(um den Scherz beiseitezulegen)

289. ohne, statt, anstatt の次に來る、zu を伴ふ不定法

zu を伴ふ不定句に先行する接續詞には、um の他になほ ohne, (……することなく) statt, anstatt (……する代りに、……せずして) があります。

1. Als ich zu mir kam, hatte ich mich, ohne es zu wissen, tief in den Wald verloren.

(はつと氣がついた時には、それとも知らずに、深く森の中へ迷ひ込んでゐた。)

2. Ich riet ihm dies und das, ohne mich im geringsten darum zu kümmern, ob es ihm auch wohl gedeihen könnte.[3]

(私はそれが彼の爲になるかどうかなぞと云ふ點には些かも頓着せずに、あれやこれやと智恵をつけた。)

3. Wer zu freigebig ist, macht sich lächerlich, statt sich beliebt zu machen.

(あんまり氣前が好過ぎると、可愛がられないで、かへつて男前を下げる。)

290. 形容詞を限定する、zu を伴ふ不定法

これは極く稀な現象ですが、稀な現象として知つておく必要はあります。

gar lieblich anzusehen	見るも可愛い
gar schrecklich anzuschauen	見るも恐ろしい
gar seltsam auszusprechen	言ふも不思議
schwer zu sagen	云ひにくい

註。——この語法は拉丁では第二 supinum と云つて、一つの特別な形を持つてゐます。(たとへば gar seltsam auszusprechen は拉丁の mirabile dictu.)

291. 客語 [述語] としての zu を伴ふ不定法

ist zu erklären
- (1) ist erklärbar. / kann erklärt werden.
- (2) muß erklärt werden.

上項の用法から、被限者たる形容詞を省くと、また一種の別な用法が生れます。即ち zu を伴ふ不定法を、その儘一種の形容詞として、即ち客語的なものとして sein (所謂 Kopula, 繫詞の sein) と共に用ひるのです。此の用法の不定法には、其の場合によつて二つの全く別な意味があります。

(1) 「……され得る」といふ意味になる場合。(但し日本語では「……し得る」と云つても結局同じことになります。けれども嚴密に論理的に考へると、受動的になると云つた方が好いのです。) 此の場合には「……得る」といふ概念が附帶するのが特色です。(第二卷 118 參照)

Das ist wohl nicht zu erklären	それは一寸說明できない。
Das ist noch zu ertragen	それはまだ辛抱がなる
Dieses Buch ist überall zu haben	此の本は到る處で手に入る
Es ist kaum zu erwarten	それは到底期待す可くもない

此の語法は、極くドイツ語らしい、いはゆる國粹的 (volkstümlich) な熟字なぞでは、過去分詞で云ひ表はされることもあります。

Das ist bald gesagt, aber schwer getan.

それは言ふに易く、行ふに難い。

日本語で見ると、まるで 290 の項のとちつとも違はないやうですが、bald が「直ちに」または「容易に」といふ副詞であつて、形容詞でない事を考へれば、限定關係がむしろ逆になつてゐることがわかるでせう。290 項の語法はむしろ此の場合から轉用したと見る可きです。

(2) 「……されねばならぬ」といふ意味になる場合。上の場合と混同してはなりません。

Dies ist nicht mit dem obigen Falle zu verwechseln.

(これは上の場合と混同してはなりませぬ。)

Das ist noch zu erklären.

(それはまだ說明を要する。)

Was ist zu tun?	何をしたらいゝのか?
Was vorzubereiten ist	準備すべき事柄

Der Brief ist noch zu frankieren.

此の手紙にはまだ切手を貼らなければならない。

必ず sein を伴ふとは限りません。zu tun haben (爲す可く持つ) es gibt noch etwas zu tun (まだすべき事がある) 等、諸種の形態を取つて現れます。

註。——この語法は、拉丁の Gerundivum (動詞より轉來する形容詞) であつて、第一の場合のとは本質的に別なのです。

292. 客語 [述語] としての zu を伴ふ不定法を附加語に改める時は、不定法を現在分詞に改めること。 zu erklärend.

附加語に改めるといふのは、冠詞のやうに名詞に直接に冠させることです。この場合には、語尾に d をつけます。(sein と tun とは seiend, tuend になります)。つまり現在分詞になるわけです。

それから、附加語に用ひられる以上は、必ず格語尾が附く——これは形容詞と同じことです。

Eine leicht zu erklärende Erscheinung	容易に說明し得る現象
Ein schwer zu erklärendes Wort	說明しにくい言葉

此の方法は、290, 291 の兩項に適用します。

293. 關係代名詞を含む際の zu を伴ふ不定法の配語

これは、關係代名詞を先に立てた副文章と、zu を伴ふ不定法とがお互ひに一體になつて一つの副文章になる場合で、少し複雜ですから頭を好くして聽いて下さい。複雜は複雜だが、さらに出て來る形態で、非常に重要なものです。たとへば im Begriff sein, etwas zu tun (將に何かをせんとしてゐる) といふ熟語を用ひて、最初次のやうな文を作つてみるとします。

Er war eben im Begriff, den Wagenschlag aufzumachen.

彼は丁度馬車の扉を開けようとしてゐた。

次に、これを、「彼が丁度開けようとしてゐた所の馬車の扉」といふ風に、文全體を副文章にして、馬車(とは限りませんが)の扉といふ一字に引つ掛け

るとしたらどうでせう？ その際の語順は、不定法を前に置くか後に置くかの、二つの方法があります。

a. Der Wagenschlag, den aufzumachen er eben im Begriff war.

b. Der Wagenschlag, den er im Begriff war, aufzumachen.

關係が多少複雜ですから、なほ好く合點の行く樣に例を並べて見ませう。

(1) die Ehre haben, etwas zu tun. (云々する光榮を有する)

a. Der Herr, den Ihnen vorzustellen ich die Ehre hatte.

b. Der Herr, den ich die Ehre hatte, Ihnen vorzustellen.

譯。——私があなたに紹介するの光榮を有した所の紳士.

(2) nicht umhin können, etwas zu tun. (云々せざるを得ぬ)

a. Das Geheimnis, welches ihm anzuvertrauen ich nicht umhin konnte.

b. Das Geheimnis, welches ich nicht umhin konnte, ihm anzuvertrauen.

譯。——私が彼に打ち明けざるを得なかつた秘密。

(3) geneigt sein, etwas zu tun. (云々することを好む傾向がある)。

a. Die Nachricht, an deren Gewißheit zu glauben er ohnehin schon geneigt war.

b. Die Nachricht, an deren Gewißheit er ohnehin schon geneigt war zu glauben.[4]

譯。——さなくとも既に彼がその確實性を信じたがる傾向をもつてゐた所の報告。

294. **副文章が疑問詞を含む際の配語** zu を伴ふ不定法には無關係ですが、二つの文章が入り組むといふ點で似てゐますから、序でに述べておきま

す。たとへば「私がポケットの中に何を持つてゐるとお前は思ふか?」を獨譯するとします。もし日本語の儘をドイツ語に移すとなると——

Glaubst du, was ich in der Tasche habe?

ところがこんな事は云はないのです。文全體が疑問詞 (was 等) を中心としてゐる時には、疑問詞は必ず文の先頭に立たなければなりません。Weißt du, was ich in der Tasche habe? (私がポケットの中に何を持つてゐるか知つてるか?) 等の場合はその儘でよろしい、何故といふに、此の場合は、「知つてゐるか、知つてゐないか」と云ふ問題が重心で、つまり weißt du が全體を締め括つてゐるから、その儘で好いのです。所が此の場合は、言ひ換へれば、「私がポケットの中に持つてゐるのは何だ?」と、「何だ?」が重心になるのですから、was は第一位に置きます。其の際の文の語順は、他の配列を少しも變へないで、ただ was だけを先頭に置き移します。そして was の在つた位置に daß を入れます。

Was glaubst du, daß ich in der Tasche habe?

つまり、293 項の場合と、此の場合とを綜合して云ふと、關係代名詞、疑問詞の二品詞は必ず文の先頭に立たなければならない、それよりも前に置き得るのは前置詞だけなのです。そのために斯う云ふ一寸厄介な場合が生じて來るわけです。

上例の、was glaubst du の所だけを見て、「何をお前は信ずるか」なぞと考へてはいけない譯です。

295. **過去の不定法** 第三卷 248 の 4 に於て、wollen の特殊な用法を說明する時に、過去の不定法といふものがある事を述べて置きました。これは別に詳しく說明するまでもないと思ひますが、念のために紹介だけして置きます。(これに對して、今まで單に不定法と呼んで來たものを、現在の不定法と謂ひます。)

現在の不定法		過去の不定法	
sein	在る	gewesen sein	在つた事
haben	持つ	gehabt haben	持つた事
gehen	往く	gegangen sein	往つた事

sehen	見る	gesehen haben	見た事
schlafen	眠る	geschlafen haben	眠つた事

完全に言ふとすれば、この過去の不定法なるものは、「完了形」の不定法です。

その用法は既に紹介して來ました。たとへば、未來完了の時には werden とこれとを用ひます。ich werde gesehen haben 私は見てしまつてゐるであらう。(未來完了に就ては第二卷 112 の 6——sein か haben かの問題に就ては 113 參照。)

296. **zu を伴ふ不定句は省略せる副文章とも觀られる**

前までに述べて來た諸項の中で最も重要な、最も普通な用法は 284 と 285 ですが、それに就て、極く分り切つた文章論的註解を附け加へて置きます。意味の上からすぐ分る事ですから、次に、同意異文の數例を掲げませう。ゴチックは、zu の句を書き換へて、主語と定形とを用ひる完全な文章に直す時の接續詞です。

(1) 彼は醫者を連れて來るために家を出た。

a. Er ging aus, um einen Arzt zu holen.

b. Er ging aus, **damit** [**daß** 又は **auf daß**] er einen Arzt hole.

(2) 自己の秘密を漏洩しはせぬかといふ心配。

a. Die Furcht, sich zu verraten.

b. Die Furcht, **ob** er sich nicht verrate.

(3) 彼は私に暇乞ひもせずに出掛けて往つた。

a. Er ging fort, ohne von mir Abschied zu nehmen.

b. Er ging fort, **ohne daß** er von mir Abschied genommen hatte. (または hätte)

(4) 彼は自分で往かないで一人の使者を遣はした。

a. Statt selber hinzugehen, schickte er nur einen Boten.

b. **Statt daß** er selber hinging, schickte er nur einen Boten.

(5) 彼は私に彼女を連れに來いと命じた。

a. Er befahl mir, sie abzuholen.[5]

b. Er befahl mir, **daß** ich sie abhole.

damit, ob 等を用ひる際には、同時に定形が普通接續法になる事に注意を要します。

第三十六講

接　續　詞

297. **接續詞の分類**　接續詞と普通呼ばれてゐるものは、實は全然異つた四種類の型を包含してゐますから、私は舊來の Schulgrammatik (學校文法) を少し離れて、次の樣な合理的且つ實用的な分類を試みたいと思ひます。分類とは云へ、これが生きた文脈の文法的解釋に及ぼす影響は決して少くないのです。だから決して專門家の道樂だと思つてはいけません。

(1) 從屬的接續詞　weil, obgleich, nachdem 等
(2) 竝立的接續詞　und, aber, oder 等
(3) 對照的接續詞　je……desto, weder……noch 等
(4) 前置的接續詞　als, wie 等

從屬的接續詞といふのは weil ich dich liebe (私が汝を愛する故に) 等、定形後置の構造を惹き起すもの。——竝立的接續詞といふのは、du bist dumm, aber ich bin klug (汝は馬鹿だが私は利巧だ) 等、謂はば ＋ の符號で二つの獨立文章が結び附くもの。——對照的といふのは、du bist weder dumm noch klug (汝は馬鹿でもなく賢明でもない) 等、單語又は文章を二つ以上對立照應せしめ、相關的な文意をなさしめるもの。——前置的といふのは、たとへば Er war wie versteinert (彼はまるで化石したかの如くであつた) 等、まるで前置詞のやうに單語の前に置かれるもの。これは、もし前置詞といふ品詞から、名詞の前に置かれる、そして格支配をするといふ二つの特徴を拔き去つたとしたら、當然前置詞と謂はれる可き筈のものなのです。

以下、その重要さに從つて、まづ從屬的接續詞から論じませう。

298. **從屬的接續詞の主なるもの**　以下の表中、最も重要な、普通なものには * の印を附けました。それらは既に單語として今まで使つて來たものばかりです。

*daß	……と云ふ事が(は、を)	nun	……したる今となつては
*als	……した時に	derweil [稀]	……する間
*wenn	若し……ならば	da	……するが故に
*weil	……なる故に	wie	……してゐる「と」
*wie	……する如く	da	……してゐる「と」
*während	……する間に	so [古]	……(關係代名詞)
*indem	……しつつ	soviel	……する限り(幾らでも)
*sooft	……する度毎に	*als, als ob, wie wenn, als wenn,	
*solange	……する限り	wie als ob	……するかの如く
*sobald	……するや否や	*[so]daß	……する事程左樣に
*seit, seitdem	……して以來	auf daß	……するために
*bevor, ehe	……する前に	statt daß	……する代りに
*nachdem	……した後	anstatt daß	……(同上)
*damit	……するために	ohne daß	……しないで
wofern	……する範圍に於て	*obgleich 等	……にも拘らず
insofern	(同上)		[次項參照]
sofern	(同上)	zumal	就中……が故に
falls	……する場合には	sintemal (=en) [古]	……が故に
wann	……した時には [其他疑問詞全部]		
*bis,	……するまで	[als] daß	……する[より]はむしろ

註。——疑問詞については關係代名詞の部參照。
——um, ohne, statt, anstatt については前講參照。

299. **認容の意味を有する接續詞**
(構文の諸形態)　云々である書れども、云々であるに拘らず、たとへ如何に云々であつても、等、一度ある事を認容して置いて、實はその反對の方の事實を

强調するための豫備に用ひられる語法を認容語法と謂ひます。これは前項の表では obgleich を代表として擧げて置きましたが、實は澤山あるのです。また ob と gleich とを分けて配語する事も出來ると云つた樣な厄介な事がありますから、特に項を改めて述べる事にしました。

(1) 「彼は利巧であるに拘らず」を獨譯すると、

a. **Obgleich** er klug ist.

b. **Ob** er **gleich** klug ist.

即ち、分けて用ひるのと、分けないで用ひるのと、二つの方法があります。合成語を、また元の二部分に分割して、謂はばその胴首所を異にせしめると云つた樣な配語法にする事を Tmesis (切斷) と謂つて、ギリシヤ語では極く普通な現象になつてゐますが、この場合も、つまり Tmesis の一種です。(といふのは、普通 obgleich の方が多く用ひられるからさう云へるのです。)

此の obgleich と同じ用ひ方をするものが澤山ありますが、それを分解的に表にすると——

ob wenn wie	+	gleich schon auch wohl zwar selbst

合計三六十八の接續詞が出來上るわけですが、その中で最も普通なものとして結成してゐるのは次の數個です。

obgleich. obschon. obwohl. obzwar. wenngleich. wiewohl.

また auch を伴ふ時には一字に書かないと云ふ慣例があります。(wenn auch, ob auch 等)

(2) 上の ob, wenn, wie の位置に、so と形容詞、若くは副詞を持つて來る形態も非常に用途が廣く、「如何に云々であらうとも」の意に用ひられます。(後半部は大抵の場合 auch で、zwar, selbst, 等は稀です。)

so hübsch sie **auch** ist. 彼女が如何に綺麗でも。

so stark es **auch** regnet. どんなに甚く雨が降つても。

so kalt es **auch** war. 隨分寒くはあつたが。

斯う云ふ場合に mögen を用ひても好いわけです。(第三卷 247 mögen の 2 參照。)

so hübsch sie auch sein mag.

so stark es auch regnen mag.

so kalt es auch sein mochte. (これは過去)

主文章の形式にすると、so の前に普通 noch を入れて力を與へます。(もつと念を入れようとすれば wollen の句を後につける事は、やはり 247 の 2 で述べておきました。)

sie mag noch so hübsch sein (, wie sie will [wolle]).

es mag noch so stark regnen (, wie es will, [wolle].)

es mochte noch so kalt sein (, wie es wollte.)

(3) 同じく、どんな疑問詞でも auch と共に用ひて認容の意味を出す事が出來ます。

Wohin ich mich **auch** wendete	どちらの方を向いても
Woher es **auch** stammen mag	それが何處に由來しようと
Wie er sich **auch** anstrengte	彼が如何に努力しようと
Wann er **auch** kommen mag	彼が何時來ようと
Was er **auch** sagen mag	彼が何を言はうと
Wer es **auch** sein mag	たとへそれが誰であるにせよ
Wem er es **auch** geben mag	彼がそれを縱令誰にやらうと

(4) これらの auch は、簡潔 (knapp, bündig) ならしめんがためには、省略する事すらあります。)

so klein du bist	(貴樣は) いくら小さいからと云つて
wohin er geht	(彼が) 到る處
so fest es steht	しつかりとはしてゐるが

(5) wenn を用ひる代りに倒置法を行ふ事は既に詳しく述べました。(第一卷 73 及び第二卷 129) 從つて、wenn……auch を、wenn の代りに倒置で表はす事が出來ます。

Ist es auch wahr, たとへそれが眞でも

Wäre es auch wahr たとへそれが眞であるにしても

(6) 上の形式を、もつと强く用ひると、主文章の後に配して、その間に und を入れます。その際には auch を略した方がむしろ力が這入ります。

Diesen Kampf muß ich eingehen, **und wäre** es auf Leben und Tod.

(此の戰は試みねばならぬ、たとへそれが生死を賭してであらうとも。)

Ich will ihr Herz gewinnen, **und sollte** ich dabei zugrunde gehen.

(私は彼女の心を得ねばならぬ、たとへそのために身が破滅しようとも。)

Dieser Kranke soll geheilt werden, **und müßte** ich ihn dabei zu Tode quälen.

(此の患者は必ず治して見せる、たとへ苛め殺しても。)

(7) 上の形式は、形式だけ見るとまるで獨立文章のやうですが、意味は明らかに從屬的です。認容文はさういふ風な形式になり勝ちです。mögen を用ひる認容文も、全然主文章の形で、何等の接續詞をも介せず、コンマだけを間に挿んで、後に配置される事があります。

1. Diesen Kampf muß ich eingehen,[6] ich mag fallen oder siegen.

(たとへ斃れるにせよ勝つにせよ、この闘ひは試みねばならぬ。)

2. Ich will ihr Herz gewinnen, ich mag dabei zugrunde gehen oder nicht.

(たとへそのために身を滅ぼさうとどうしようと、私はどうしても彼女の愛を得ねばならぬ。)

3. Dieser Kranke soll geheilt werden, er mag leben oder sterben.

(此の患者は、殺さうと生かさうと、とにかく治すことは治して見せる。)

(8) 次に、認容文を主文章の「前に」配置する時に一つの特有な現象があります。それは、その副文章が先に立つに拘らず、その次に續く主文章に倒置が行はれないといふ點です。これも前述の場合と同じやうに、動ともすれば並立の形になりたがる傾向を持つてゐるからです。(第二卷 132 副文章の後に來る主文章の倒置、に詳しい說明があります。其の項の文例第三に注意。)

1. Ob er zwar ein sehr kluger Kopf ist, er ist (ist er の代り) am Ende doch ein Autodidakt.

(あの人はなるほど隨分頭は好いが、結局はやはり獨學者だからね。)

2. So sehr er sich auch zu entschuldigen suchte, der Tatbestand war doch nicht[7] wegzuleugnen.

(彼は辯解葬りに努める所があつたが、事實だけはまさか否定し去る譯にも行かなかつた。)

3. Mit oder ohne Vermögen, ich will sie heiraten, Amen.[8]

(財產附きだらうと財產附きでなからうと、俺は必ずあの女を貰ふ、アーメン。)

最後はまあ一番極端な例ですが、認容文といふ奴は、文の勢に乘じて、ありとあらゆる形を取つて現れます。

300. 一般に從屬文が有し得る二つの意味傾向 ——意學的考察——

玆で一寸課程の進行を止めて、意學 (Semantik, Semasiologie) の立場から、極く實用的な一つの觀察を加へて見ることにします。殊に意學と形態學

(Morphologie) との間の面白い關係がわかりますから、語學そのものに興味を持たれる人々に取つても非常に有益な研究です。

すぐに例から始めると、たとへば um……zu＋**不定法** は元來「……するために」の意ですが、時とすると、目的を指さないで、むしろ「成り行き」を指す事があります。

Immer wieder wird das Schifflein bis zum Himmel hinangetragen, um sich dann kopfüber in einen bodenlosen Abgrund hinunterzustürzen.

譯。—— 又しても小船は天にも達せんばかりの高みに持ち上げられるかと思ふと、その次には早速底知れぬ奈落の底へと眞逆様に投げ落される。

若しこいつを文字通りに次の如く譯したとしたら隨分變なものでせう。

誤譯。—— その次に底知れぬ奈落の底へと眞逆様に投げ落されんが「爲めに」、小船は又しても九天の彼方に擡ぎ上げられる。

飜譯家や創作家の道樂、または拙劣な技巧のために西洋語に存する限りの凡ての言ひ廻しは、今日の所先づ一通り日本語に移植され盡したやうですが、この um……zu だけは、どうしても變だから、まだ流行直譯調にならない樣です。またならない方が仕合せだらうと思ひます。

斯う云ふ例は、特殊な例として語學者が登錄するのが普通ですが、一般的法則として考へると、決して特殊な場合なのではなくて、むしろ凡ゆる接續文、(卽ち從屬文、又は副文章) が凡て斯う云ふ現象を惹き起す傾向を持つてゐるのです。

um……zu の場合は先づ最も露骨な一例ですが、凡ゆる從屬文に亘つて、「從屬的」「規定的」「前提的」な意味と、(卽ち、意味の上から考へて、主文章の限定となる場合) それから、形式だけは副文章で、一見限者たるかの如くに見えるが、その實、文總體の重みが主文章と同樣の獨立性を帶びてゐるか、それとも主文章よりもむしろ重みを帶びてゐて、意味の上ではむしろ主副顚倒したやうな關係になつて來る樣な場合とを區別する事ができるのです。

たとへば次の例を考へませう。譯文を二つづゝ擧げます。一つは直譯 (副文章だからと云ふので、意味にお構ひなく限者を限者として譯したもの) 他は意譯 (形態上の限者を、意味の重さの上から考へて被限者として譯したもの、卽ち正譯。) ですから、よく事實の關係を考へながら讀んで下さい。

1. Ich war **kaum** draußen, **als** es zu donnern und zu blitzen anfing.

直譯。(不適當)——雷鳴し稻光がし始めた時には私は辛うじて戸外に在つた。

意譯。(適譯)——戸外に出るや否や雷が鳴り稻光がし始めた。

【註】斯う云ふ形式の文章は非常に應用の範圍が廣いものですが、これと同じ意味の事を斯うも言ひ廻せます。Ich war kaum draußen, so fing es an zu regnen und zu blitzen. 卽ち so 以下が立派な主文となつて、先行文と對立することになります。否むしろ Ich war kaum draußen の方が副文章であるかの如き感を與へるやうになります。玆が意學と形態學との間の面白い關係で、此の場合にあつては、遂に「意味」が「形態」を征服したと云つて好いでせう。つまり人間の頭といふものは、一つの文章形態を用ひる時に、必ずしもその形態通りには考へない事があつて、さう云ふ場合には、時と共に、「形態意識」と「意味意識」との間に或種の喰ひ違ひが生じて來て、おしまひには形態の一部が意味の影響の下に或種の變化を起すことがあるのです。さうして出來上つた形は、形式の方からのみ考へると、形式の一貫を缺いてゐて一見トンチンカンなやうですが、其處には「語の形態、文の形態」とは混同を許さない「意味の形態」といふものが其の至當なる權利を要求してゐると見る可きではないでせうか。

2. Er hatte seinen Sohn solange einen Spitzbuben gescholten, **bis** endlich dieser wirklich einer zu werden sich vornahm und sich mit dem aus seiner Kasse entwendeten Gelde auf und davon machte.

直譯。(不適當)——彼の息子が遂に本當にそんなものになつて見る氣を起して、彼の金庫から偷み出した金を身につけてドロンを決め込む「までの其の間」彼は彼の息子を惡漢呼ばはりしてゐたのであつた。

意譯。(適譯)——彼は息子をあんまり惡漢呼ばはりしたものだから、本人も遂に一度そんなものになつて見たくなつて、彼の金庫から金を偷み出して、それを身につけて出奔してしまつた。

3. Eigentlich hätte ich schon gestern abend kommen sollen, aber als ich mich darauf besann, hatte es schon zwölf geschlagen, **sodaß** ich erst jetzt gekommen bin.

直譯。(不適當)——實は昨晩既に來なければならない筈だつたんだがね、その事を思ひ出した時には、やつと今になつて出掛けて來た「程」十二時を打つてしまつてゐたんだよ。

意譯。(適當)——實は昨夜既に來なければならない所だつたんだがね、その事を思ひ出した時には既に十二時を打つてしまつてゐたもんだから、「それで」今やつと出掛けて來たといふ譯さ。

4. Er war zu müde. Sonst konnte er stundenlang am Tische sitzen und arbeiten, solang er wollte, **während** es ihm diesmal nicht gelang.

直譯。(不適當)——彼は餘りに疲勞してゐた。何時もならば、「今度はそれが出來なかつたのに」、數時間ぶつ續けに机に向つて、いくら長くでも仕事が出來たのであつた。

意譯。(適譯)——彼は餘りに疲勞してゐた。いつもならば數時間ぶつ續けに机に向つて、いくら長くでも仕事をする事が出來たのに、こんどはそれができなかつた。

5. Er begab sich zuerst nach Paris, **wo** er dann einen russischen Maler kennen lernte, **der** ihn zuletzt mit[10] nach Rußland nahm.

直譯。(不適當)——彼は最後に彼を一緒にロシアへ連れて行つた一人のロシア人の畫家をその次に見知つた所の巴里へ先づ赴いた。

意譯。(適譯)——彼はまづ巴里へ行つて、次に其處で一人のロシアの畫家と知己になり、最後にその畫家が彼をロシアへ連れて行つた。

6. Er hatte eine Neigung zu schönen Versen, **die** er mit eintöniger, dumpfer Stimme vor[11] sich hin zu rezitieren liebte.

直譯。(不適當)——彼は彼が單調な陰氣な聲で口吟むのを好んでゐた所の美しい詩句に或種の嗜好を持つてゐた。

意譯。(適譯)——彼は美しい詩句に或種の嗜好を持ち、さういふ詩句を單調な陰氣な聲で口吟むのが好きだつた。

7. Die Frau las eifrig in[12] ihrem Gebetbuche, nur machten ihr die beiden Kinder zu schaffen,[13] **die** sie einmal vorschob, dann wieder

zurückhielt, **wie** ihr **denn**[14] überhaupt[15] die Ordnung des Leichenzugs sehr am Herzen zu liegen schien.[16] (Grillparzer, Der arme Spielmann).

直譯。(滅茶苦茶)——婦人は一生懸命に祈禱書を讀んでゐた、ただ、一たい彼女が此の葬式の行列の秩序を非常に氣にしてゐた如く、或ひは前へ押しやつたり或ひは引きとめたりしてゐた二人の子供には大分手を燒いてゐるらしかつた。

意譯。(適譯)——婦人は一生懸命に祈禱書を讀んでゐたが、ただ連れてゐた二人の子供には大分手を燒いてゐるらしく、二人を或ひは前へ押しやつたり或ひはうしろへ引きとめたりするのであつた。それに一體彼女は此の葬式の行列の秩序を非常に氣にしてゐるらしかつた。

現象の重要さに鑑みて、普通よりは心持ち多くの例を擧げました。斯う云ふ例文は矢張り丹念に讀んで篤と考へて頂く必要があります。さうでないと現象の本質を掴むことは困難です。

熟讀した人にはおのづから理解された事と思ひますが、如上の文例の、直譯が不適當で、意譯が適當といふ結果になるのには、いづれの場合にも共通した一つの根本現象があります。即ち、直譯の方はどれも原文の文法的形式を尊重して、副文章を副文章として移植しようとした結果、移植した日本語の表現に即して讀んで見ると、副文章が宛も單なる前置、(準備、先驅、條件、假定、出發點と謂つても好いでせう)に過ぎずして、文勢の落ち着く先、文意の歸するところ、即ち元來力を込めて云はうとした點が宛も主文章の方に在るかの如き觀を呈し、これが間違ひの原因になつてゐるのです。また別な方面から觀察すると、形式通りに譯した直譯體の方は、原文に於て前半を占めてゐるものを後半に移し、後半を占めてゐるものを前半に据ゑ、斯くして考への順序を顚倒してしまつてゐる。その爲めに、原文の方が折角現實界の時間の前後を尊重して其の儘を寫さうとしてゐるのに、譯文の方ではそれがあべこべになつてしまつて、言語形態に忠なるの餘り、遂には文意を裏切ると云ふ結果に陷入つてゐます。

次に、忠實なる直譯といふ此のいとも殊勝なる努力をして水泡に歸せしめる所の原因が那邊に在るかと云ふ事を見究めなければなりません。此の無殘なる結果に對する責任の一部はどうしても原文が負はなければならない。原文通りに譯すると原文通りにならないと云ふ、其處には斯う一寸何か變な所がある。それはたとへば、心に思つてゐる事を其の通りの形では決して言は

ない御主人と、さう云ふむつかしい御主人の所へ今度新たに雇はれて來た番頭さんとの間の關係みたいなものです。「斯うしろ」と云ふから其の通りにして來ると後で飛んだお眼玉を頂戴する。その内に追々と主人の氣心が呑み込めて來ると、主人の言語形式は必ずしも文字通りに受け取る可きものではなくて、内容と形式との間には、其間多少の疎隔があり、その疎隔が取りも直さず主人の性格の一部を構成してゐるのだと云ふ事がわかつて來て、つひには寧ろさうした表現のし方が當然のやうに思はれ出す……つまり一寸さう云つた樣な關係になつてゐるのです。

比喩を止して現在の問題に歸ると、原文の意味と形態との間には明らかに認め得られる一つの疎隔がある。それはどう云ふ疎隔であるかと云ふに、先づ形態の方を取つて考へると、此の「副文章」又は「從屬文章」なるものは、抑もそれ自身に歸結の重心を持つてゐると云つた樣な獨立的なものではなく、必ず他の何物か（即ち主文章）を限定し規定すべき筈の形態である。即ち私が今まで數回用ひて來た術語によると、所謂限者 (Determinans) である。日本語に於ては、限者は必ず被限者の前に置かれるといふ單調な關係になつてゐるが、西洋語ではさうは決まらない。むしろ限者を被限者の後に据ゑると云ふのが西洋近代語の傾向です。ところが、玆に改めて考慮に入れなければならないのは、その傾向は單に形態のみに關するのであつて、思想の方にはまた思想だけの範圍で起つて來る獨立した傾向がある。その傾向と云ふのは、つまり極く自然な當然の傾向、即ち現實に於て前なるものは言葉の上でも前とし後なるものは後にすると云ふ、極く何でもない傾向です。其處でつまり言語の形態と思想の形態とが正面衝突を起すわけです。

すると、さうした正面衝突がどう云ふ風にして解決されて行くかと云ふに、さう云ふ際に支配する或種の意學的原則を、私は「思想は強く言語は弱し」といふ標語 (Geflügelte Worte, epea ptereonta) で言ひ現はしたいと思ひます。即ち、どうせ思想の方が強い、強い者は清濁併せ飲む事が出來る、一寸した齟齬は咎めない、それは、決してその爲めに己れの存在を危ふくする樣な惧れがない事を知つてゐるからです。Goethe は西東詩篇 (West-östlicher Divan) の或る個所に——

Sei das Wort die Braut genannt,
Bräutigam der Geist;

Diese Hochzeit hat gekannt,
Wer Hafisen[17] preist.
言語を花嫁と呼び
思想を花婿と呼ばむに、
ハフイスを愛誦する者こそ
其の婚禮［媾合、一致］を見たりと云ふ可し。

と云つてゐますが、言語と思想との不即不離の關係を、花嫁花婿に譬へ、表現を兩者の媾合と考へるならば、言語の方を女に見、男に見立てなかつた所が面白いではありませんか。凡そ比較なるものは必ず比較せんとする點 (tertium comparationis) があつて、その範圍を無視して何處までも比較して行くのは考へものですが、此の際だけは不思議に tertium comparationis が玄妙不可思議なところまでも延長して考へられる。即ち男は強い、強いから相手を選ばない、東洋風な考へ方によると、どうせ子種を取るための器物に過ぎないと云ふので、相手の女が自分の性格に合はうが合ふまいが、其の時の快感が得られさへすればどんな相手とでも結婚する。從つて女の方にも或種の諦めが出來てゐて、敢て我を通さうとはしない。

要するに思想は強く言語は弱い。思想は言語を選ばず、言語は思想の留守番を勤める。言語は其の儘の形式で、たとへその形式と矛盾する思想とでも結びつくのです。言語その者の備へてゐる形態のために思想が誤られると云ふ事が尠いのは、たとへば或人が右の手袋を誤つて左に穿いたからと云つて、その左手を摑んで握手する樣な粗忽者は無いと同樣です。握手は手とするのであつて手袋とするのではありませんからね。

主文章の後に配屬せられる副文章を一つの形態として考へると、その形態は、今まで述べて來た所に從つて、二つの相反する意味傾向を帶びる事が出來ます。直譯して其の通りの意味が通ずる際には、その副文章は限定的 (determinierend) であると謂ひ、文脈を無視して原文通りの順序で云ひ表はし、最後に來る副文章の方に大意を歸着せしめないと原意が出ないと云ふ際には、その副文章は後續的 (konsekutiv) であると謂ひます。此の二つは、謂はば副文章形態の中に盛り得る意味傾向の兩極であつて、其の間に多くの段階が存すると見るのが妥當です。或る場合には兩者が同等の地位にあると云ふ竝立的な場合があり、その際はむしろ後で述べる竝立的接續詞を用ひるの

が適當なのですが、其の際に於てもやはり後續的といふ名稱はあてはまるので、日本語が必ず限者を被限者の前に置くといふ構造を持つてゐる關係上、即ち反對に云ふと、前に來るものはすべて限者として考へたがると云ふ人間的に自然な傾向が日本語に於てはあまりに單調に支配しすぎてゐると云ふ關係上、原文の意が餘程限定的の方に偏してゐる際でなければ其の儘を日本語に移植するのは危險なのです。

これで、あらゆる從屬文章、即ち副文章形式の持つてゐる二つの傾向、もしくは其の形式の包含し得る意味傾向の歸極性（Polarität）は理解されたらうと思ひます。

【註】限定的な場合は、これは極く普通な場合で、初學者は、關係代名詞や接續詞を先頭に立てる文章と云へばみんな限定的なものだと思つてゐるから、この方は別に述べない事にしました。今までのとは反對に、限定的なのを後續的に譯したとすれば同樣なトンチンカンが起るでせう。Ich hasse die Menschen, die eigennützig sind（私は身勝手な人間を憎む）は限定的ですが、これを後續的に譯したらどうでせう——「私はそもそも人間なるものを憎む、そして人間と云ふ奴は身勝手なものだ」——ずゐぶん意味が變つて來ますね。論文の飜譯なんゼをこんな調子でやられた日にはたまつたものぢやありません。時に類例なきにしも非ず。

301. 後續的意味を表現する助詞 „denn"

前項にあげた文例の中には、副文章が後續的な性質のものである事を表現するために、或る場合には露骨に dann（然る後）、また或る場合には其の弱い形の denn といふ副詞が這入つてゐたでせう。denn は dann を弱めたもので、やはり微かに dann の意味を持つてゐますが、これはむしろ後續的傾向に念を入れるための形式的助詞なので、dann の樣な堂々たる副詞ではありません。だから露骨に「それから後」とまでは考へない方が宜しい。

1. Aus jenem Mäßigkeitsprinzip gab man sodann sämtlichen positiven[18] Religionen gleiche Rechte, wodurch **denn** eine mit der andern gleichgültig[19] und unsicher wurde. (Goethe—Dichtung und Wahrheit.)

例の中庸主義からして、人々は、然る後 [sodann]、凡ての既成宗教に向つて同等の權利を與へてしまつた。そのためにどの宗教もお互ひに平等無差別な、あやふやなものになつて來たのであつた。（ゲーテ自叙傳中の一節）

2. Er versprach, mich abzuholen, was* er **denn** auch[20] tat.

譯。彼は私を連れに來ると約束した。そして果してその通りにした。

註——was* については後の 303 項參照。

302. 竝立文章の如き形態を備へながら其の意味形態は從屬的なる場合

これは今までに述べて來たのと反對の場合です。けれども法則と稱する程一般的なものではなく、凝結形式が多いから、次の數例を記憶にとどめて置けば事足ります。

(1) 認容文章。——前の 299 項參照。

(2) es sei denn, daß……（……ならば格別）及び denn を含む同樣の意味の認容文章。（第三卷 218 (2)）

(3) 時間關係の切迫を表現する句。

例。——Es dauerte nicht lange **und** er kam wieder zurück.

（「それは長くは續かなかつた、そして彼は歸つて來た」即ち「しばらくすると彼は歸つて來た」）。

此の場合には „und" と云ふ繋ぎが特徴です。此の und を利用して色んな形態が發展します。

例。——Noch einen Schritt, und er war verloren.

（其の時うつかり一歩でも踏み出してゐたら彼はもうおしまひだつたらう。——war は wäre gewesen の代りです。斯う云ふ際には直接法の方が力が這入るからです。）

例。——Ein Strich, und das Bild ist fertig.

（あと一筆で畫が出來上る。）

【註】——細かい事だが一寸注意して頂きたい。最後の二つの例で、Schritt（一足、一歩）も ein Strich（一筆、一抹）も共に男性です。ところが Schritt の方は einen Schritt と四格になつてゐて、Strich の方は ein Strich と一格になつてゐます。かう云ふ時には、本當は四格の方が正しいのですが、一格の方も用ひます。これも、如何なる文を略したと考へるか、その略された文

に依るわけです。たとへば前者の方は [Er ging] noch einen Schritt [weiter] と考へ、後の方は Ein Strich [kommt noch hinzu] (もう一筆が附け加へられる) とでも考へるべきでせう。

303. **文意を受ける was**
第二卷 171 の復習

不定關係代名詞でありながら、その用法が接續詞の如くになる was はかなり重要な現象です。(すぐ前の 301 項の最後の文例參照)「云々するところのもの」といふ、何か一定の單語を意味するやうな事にはならないで、その前の文の全體の意味、もしくは局部の意味を受けて、「其の事」といふ事になるのです。また必ずしも前に來るものを受けるとは限りません。後に續く筈の事柄を、豫め一寸斷はつて置く時にも用ひます。たとへば——

So war er denn, **was** sein Mütterchen nie ohne nasse[21] Augen erzählen konnte, der Aufseher und Herrscher über eine große Schar von Arbeitern geworden. (P. Heyse—David und Jonathan.)

譯。——さう云ふ風な譯でまづ、「これは」彼のお袋が涙ぐまずには決して話すことの出來なかつた事柄であるが、彼は大勢の勞働者の上に立つ監督、支配者となつたのであつた。

304. **竝立的接續詞の主なもの**

次は、二つの主文章、または二つの同等の單語を結びつける竝立的接續詞です。これらは、その二つが反對の意にならうと、一つが他の說明にならうと、また二つを單に並べるだけの役目にならうと、いづれにしても文法的形態の上からは、單に前と後との連結をするにすぎない、從つて其の次に來る文章を定形後置の副文章にしない接續詞です。即ち代數の方で云へば、プラス、マイナスの印で結び附くとでも云ひますか。或ひは化學に例を取るなら、化合でなくつて「混合」だとでも云へば好いでせう。これに反して今まで次つと述べて來た從屬的接續詞は、因子のやうに、化合するやうになつて、主體たる主文章に結びつくと謂へます。

nun	扨て	ja	然り、(否むしろ)
und	そして	aber	然し
oder	もしくは	jedoch	然し

denn	如何となれば	jedoch	然し
also	かるが故に	allein	然し
nun aber	然るに (一方)	dennoch	然し
und zwar	但し、しかも	oder aber	もしくはまた
so	すると、然らば	dann	然る時は
sowie	同樣に		
und doch	然るに	und so	斯くして
sonst	然らずんば		

(1) その他、nun aber, und zwar 等の如き成句で最も普通に使はれるものは——

zum Beispiel	[略 z. B.]	例へば
zum Exempel	[略 z. E.]	例へば
das heißt	[略 d. h.]	即ち
das ist	[略 d. i.]	即ち
beziehungsweise	[略 bzw.]	或ひは
nämlich	[略 näml.]	即ち

(2) その他、副詞とも接續詞とも決められないものに至つては無數です。以下はほんの一例。

überdies	おまけに	zudem	おまけに
desgleichen	また	endlich	最後に
außerdem	その他	dessenungeachtet	それにも拘らず
darum	それ故に	nichtsdestoweniger	それにも拘らず
daher	それ故に	folglich	從つて
deshalb	それ故に	mithin	從つて
deswegen	それ故に	demnach	從つて

305. **並立的接續詞の後に於ける配語**

斯くの如く、並立的接續詞の大部分は、元來副詞から轉用されたものですから、その次の語順に、例の「倒置」といふ現象を惹起します。(第二卷 127)——「後置」と混同すべからず。

Er ist arm, zudem **ist er** auch krank.

彼は貧乏だ、おまけに彼はまた病氣だ。

ところが、副詞から轉來したのではなくて、元から接續詞であるものには決して倒置といふ結果を伴ひません。

Er ist arm, aber **ich bin** reich.

彼は貧乏だ、しかし私は金持だ。

also, doch, dennoch 等、倒置したりしなかつたりするものもあります。
und, oder, denn, aber, allein は決して倒置を惹起しません。

306. **aber, nämlich 等の位置**

或種のものは、二つの獨立文章の間に立たないで、次に來る文章の中へまぎれ込んでしまふ傾向があります。日本語でも「君が見た例の男といふのは然しながら僕の友人である」なぞと云ひます。「然しながら僕の友人」と結び合せては困るので、「然し乍ら」は元來一番最初に置く可きなのですが、重要な文句を言ふのを急ぐために「然し乍ら」を言ひ殘すと云ふわけです。

1. Du sagst, ich sei feige; das ist **aber** ganz falsch.

君は僕の事を卑怯だと云ふ。それは「併し乍ら」全然嘘だ。

2. Für unser Lebensglück ist **demnach** das, was[22] wir sind, die Persönlichkeit, durchaus das Erste und Wesentlichste.

(Schopenhauer, Aphorismen.)

「從つて」我々の人生の幸福に取つては我々が何者であるかと云ふ事、即ち人格なるものが、徹頭徹尾第一義的且つ最も重要なるものである。(ショーペンハウエル、箴言錄)

3. Hieraus **nun** folgt, daß dem Menschen von außen viel weniger beizukommen ist, als man wohl meint.[23] (ibidem.)

「扨て」其の點から考へると、人間と云ふものは、外界からは、人が普通考へてゐるほど、それほど惡影響を蒙り易いものではないと云ふ事になつて來る。(同所)

307. **對照的接續詞の主なるもの**

對照的接續詞といふのは如何なる點に於て並立的接續詞と相違するか?

1. 並立的接續詞は、どんな文でもよろしい、隨意な二つの文を結びつけるが、對照的接續詞は、前半部をなす文章の中に必ず一定の副詞、または自己と對句をなして相對照される可き他の接續詞を要求する。

2. 並立的接續詞によつて結びつけられた二個の文章乃至單語は、それぞれ獨立して意味をなすが、對照的接續詞によつて結び附けられた二つの部分は、兩々相對照しなければ意味をなさない。故に、元來二つの文章を結びつける筈のものであるに拘らず、實際に於てはむしろ兩方が入り組んで一個の文を構成する事が多い。

[schön-]er……als……	……よりも……美しい……
entweder……oder……	……か……か(のどちらか)
weder……noch……	……も……も [二つの否定]
sowohl……als auch……	……も……も [二つの肯定]
nicht nur……sondern auch……	……のみならず……もまた
nicht……sondern	……に非ずして……むしろ
nicht……vielmehr……	(同上)
nicht sowohl……als……	(同上)
umsomehr……als……	……であるが故に益々……
je*……desto……	……する程……益々……
je*……je……	(同上)

einerſeits……andererſeits……	一方に於ては……他方では……
nicht……wohl aber……	……はせずと雖も……はする。
je*……umſo……	(同上)
zwar……aber……	……ではあるが……しかし
wohl……aber……	(同上)
freilich……aber……	(同上)
bald……bald……	或ひは……或ひは……
teils……teils……	一部は……一部は……

上例の各單語を一つ一つ檢べて行けばわかる通り、對照的接續詞は、從屬的なもの (* の印をつけたもの) や竝立的なものや、前置的なものや、副詞や、nicht なぞといふ否定詞や、色んなものの持ち寄りです。持ち寄り世帶ではあるが、結成して凝結形式となつた以上は、各人各個の原籍の如何を問はず、新たな「接續詞」としての一戸を構へる事になるのです。此の點を間違へてはいけません。nicht は接續詞ではないが nicht……ſondern は接續詞です。teils は副詞だが teils……teils…… は接續詞です。

〔註〕接續詞の各々について用法を説明したいのですが、それは讀物の方で會得して貰つた方が好いから、割愛します。文法部では、特異な現象と、一般的法則に關係ある事柄だけを述べる事にしてゐますから。

308. 對照的接續詞の用法

次に主なるものの用法を例示します。

(1) entweder……oder……

Wenn er ſogar anfängt, bei ſeinem Todfeinde zu betteln, ſo muß er **entweder** verrückt **oder** unglaublich[24] naiv ſein.

(あいつが仇敵の所へまで出掛けて哀れを乞ひ始めたとすれば、これは氣でも狂つたか、それともよつぽどお人が好いに相違ない。)

(2) weder……noch……

Schönes Fräulein, ich bitte Sie! — Nein danke, ich bin **weder** ſchön **noch** Fräulein.

(美しいお孃さん、ちよつと失禮ですが……——どういたしまして、私は美しくもなければお孃さんでもありません。)

(3) nicht……ſondern……

Man lebt **nicht**, um zu eſſen, **ſondern** ißt, um zu leben.

(人は食はんが爲めに生きるのではなくて、生きんが爲めに食ふのだ。)

(4) nicht ſowohl……als [vielmehr]……

Sie hat mich **nicht ſowohl** geküßt **als vielmehr** gebiſſen.

(彼女は私に接吻したといふよりはむしろ嚙み附いたのだつた。)

(5) je……deſto……

Je dicker der Sohn wird, **deſto** magerer wird der Beutel **des** Vaters.

(倅が太れば太るほど親父の財布は瘠せる。)

(6) zwar……aber……

Für Ihren guten Willen bin ich **zwar** ſehr dankbar, **aber nicht** für Ihre Abſicht.[25]

(お志は有難いがお思召しが恐ろしい。)

(7) Er denkt **bald** marxiſtiſch, **bald** liberaliſtiſch.

(彼奴は或ひはマルキシズム式な考へ方をするかと思ふとまた自由主義的な考へ方もする。)

(8) Der Menſch iſt **teils** Gott, **teils** Tier.[26]

(人間は一部分神であり一部分野獸である。)

309. **前置的接續詞とは何ぞや**

前置的接續詞だけは一寸豫め説明を加へて置く必要がありませう。第一に名稱が私だけのものですから。

前置詞を説明する時に、als (……として) に就て、これは前置詞ではない、接續詞だと云ふ事を斷はつて置きました。(第三卷 243 項)。ところが、今までに述べて來た接續詞の中には、此の als を包含し得る範疇がありませんでした。als Lehrer (先生として、先生たる資格に於て) と云へば、als は一たい何故接續詞なのでせう? これが先づ第一の疑問です。荒つぽく考へると、何々「として」と云ふ als や、何々の「如く」と云ふ wie は、前置詞ではないかとも思はれます。また意學的見地からは實際さう思つて差支へないのです。それが證據に、wie ein Tier (野獸の如く) と gleich einem Tier (野獸に等しく) との間には、意學的には何の差別もありません。gleich [形容詞が前置詞に轉じつつあるもの] も wie も、共に同じ心理形態を備へてゐるのです。ところが、形態論的 (morphologisch) には全然相違してゐて、gleich の方は三格支配ですが、wie の方は何格支配でもありません。wie einem Tier (野獸に對する如く) とも云へれば、四格にして wie ein Tier (野獸をの如く) とも云へます。要するに格支配と云ふ事實が無いのです。als の方も同樣です。—— 然るに、形式文法の方では、前置詞とある以上は必ず格支配をしなければならないと云ふ習慣があつて、その爲めに als や wie は、前置的なる點では全然前置詞と同じ使ひ方をするにも拘らず、前置詞とは謂はないのです。

けれども、さうかと云つて、als や wie を接續詞として扱はうとすると、また一寸變な事が起つて來ます。接續詞といふ以上は、讀んで字の如く、何物かを何物かと結び附けるものでなければなりません。一番最初に説明した從屬的接續詞ならば、一の副文章を一つの主文章に結び附けます。その次に述べた竝立的接續詞ならば、一つの主文章を他の別な主文章に結びつけます。或ひはまた一個の句、または單語を他の句または單語に結びつけます。——たとへば in der Stadt oder auf dem Lande (町で、或ひは田舍で) と云ふ際の oder は、句と句とを結合する竝立的接續詞であり、Stadt oder Land (町か田舍か) と云ふ際の oder は單語と單語とを結合します。つまり、接續詞と云つても、必ずしも文と文とを結合するものではないと云ふ事を云つてゐるのです。第三番目に出て來た對照的接續詞も同樣で、或ひは文と文とを、或ひは句と句、語と語を相對比しつつ結合して一つの纏まつた全文、または

全句を造り上げるのでした。要するに接續詞といふ以上は、其處には必ず接續される可き二つの何者かが無ければなりません。では als, wie 等の場合には、その結合接續される可きものは何でせうか? 何と何とを結びつけるのでせう?

いやに理屈つぽくなりましたが、これは決して學者の寢言ではありません。此の點を突き止めて、最後に前置的接續詞とは如何なるものであるかと云ふ事がわかると、西洋の言語のみならず、凡ゆる言語を研究する際の基本的な認識論がはつきりし、同時に世人が普通「助詞」とか「てにをは」とか云つた樣な曖昧な概念で好い加減にして置く種類の事柄が一部明瞭に整理される事になつて來るのです。

先づ als (……として) を例に取りませう。たとへば

Ich sage es dir **als dein Freund.**

私は「お前の友人として」それをお前に云ふのだ。

此の文をよく考へて見ませう。試みにこれを論理的に分解して見ると、Freund と云ふのは事實上誰を指してゐるかと云ふに、それは dein といふ物主代名詞の男性一格の形でもわかる通り、また第一意味の上から明瞭である通り、此の文の主語である ich その者を指してゐます。さうすると、als dein Freund の位置を少し前の方へ進めて Ich als dein Feund sage es dir (お前の友達としての私がそれをお前に云ふ) と云つても同じ意味になります。これをこんどは、主語の部分だけ、即ち ich als dein Freund だけを取つて考へると、ich = dein Freund または ich bin dein Freund と云へるわけですから、或種の意味に於て、ich も主語であり、dein Freund も第二義的條件附の主語であると謂へます。さうすると、此の文章は、論理的に、二つの文章に分解して考へられます。

(A) 表面的には　Ich sage es dir.

(B) その一面には　Dein Freund sagt es dir.

そして此の二つの文の間には Ich als dein Freund (汝の友人としての私) または Ich bin dein Freund (私は汝の友人だ) といふ關係が成立してゐます。

一言にして云ふと、als は、ich といふ語と dein Freund と云ふ語とを結びつけるものであつて、結びつける以上は接續詞だといふことになつて來るのです。

ただ、並立的接續詞や對照的接續詞と違ふ點には注意を要します。たとへば ich oder dein Freund なぞの際には、oder は其の次に來る dein Freund に前置詞のやうに結び附きません。ich, oder, dein Freund, と三つに切つて語象が現れます。ところが als の際は ich, als, dein Freund, といふ語象ではなく、ich, als dein Freund です。從つて Ich sage es dir als dein Freund なぞと、als は dein Freund と共に遊離してどこへでも置き得るのです。その點では als は全然前置詞なのです。aber や und や oder なぞとは語象が心理的に違ひます。

對照的接續詞と違ふことは、一言で說明されます。卽ち、對照的接續詞は必ず對をなす二つの接續詞が無ければなりませんが、als の際には als 一つきりです。その點ではむしろ並立的接續詞の方に近いのです。

しかし、いづれにしろ、als 等の前置的接續詞の最も顯著なる特徵は、それが前置的である事で、第一日本語に譯して見れば全然前置詞の場合と同じ扱ひ方になるでせう。

これから述べる、前置的接續詞なるものは、すべて als と同じやうに、日本語に直す時には、普通の前置詞と思つてかまひません。何々「すらも」、何々「のみは」、何々「に限つて」、何々「に非ずして」、何々「からして既に」と云つたやうに。

als の例ばかりでは心もとないでせうから、全然變つた他の例を少し附け加へて置きます。たとへば、何々「に限つて」といふ gerade 云々です。

Gerade er kann so etwas nicht tun.

「彼奴に限つて」そんな事をしさうにも無い

(彼奴に限つてそんな事はしない筈だが)

この場合には、gerade と er とはしつかと結び附いてゐます。gerade がもし副詞だとしたら、その次には定形の kann が來なくてはならない筈ですから、副詞ではありません。gerade er (彼奴に限つて) といふ一句だと思はなければなりません。(er gerade と gerade を後置しても構ひません) gerade ich (私に限つて) gerade du (お前に限つて) なぞと、名詞はどう取りかへても構はないので、玆が前置詞と全然同範疇に屬する所以です。それは例へば im Hause (家の中で) を im Garten (庭の中で) in der Stadt (町の中で) 等々どんなにでも名詞を取りかへる事が出來るのと同じで、「語象」はちつとも變りません。

啓蒙的なほど歡迎されるさうですから、なほもう一つくどく例を擧げると、たとへば何々「からして既に」[間違つてゐる] 等の「からして」と云ふ微妙な奴ですね。これは schon を用ひます。

Schon sein Gruß war mir verdächtig.

「彼奴の挨拶振りからして既に」怪しかつた。

さうすると必然的に、況してや彼奴の言葉に「おいてをや」と云ふ奴が考へられます。「おいてをや」又は、何々「に至つては」、何々「となると」といふのは vollends, erst, erst recht 等、元來副詞であつたものを前置的にして用ひます。

Vollends seine Rede!

彼奴の話「と來たら」!

Lauter Widersprüche!

齟齬「だらけ」さ!

Selbst meine Frau hat es bemerkt.

僕の妻「だつて」氣附いたよ。

Nur er hatte keine Ahnung[27] davon.

それに感づかなかつたのは御當人「きり」さ。

Das **eben**!

それなんだよ「つまり」!

一番最後のは一寸斷りを要しますが、「つまり」「とりも直さず」と云ふのも、日本語では一寸巧く表現できませんから前置詞的には受け取れないかも知れません。しかし Eben das! 又は Das eben は「それ取りも直さずが」「其の事丁度が」なぞと譯して考へて見ればわかります。勿論そんな日本語は何處へ行つたつてありはしませんがね。

今までに述べた諸種の例を一括して考へて見ると、als の場合には、比較したり結びつけたりする二個の概念が文字となつて文中に存在してゐましたが、それ以後の例には、一見何等比較すべき他の一半が無いやうに思はれます。けれども、それら凡てを一貫してゐる一つの共通な點に注目すると、その問題も從つて解決されます。どうせ少し理屈つぽくなつて來たのですから、この點も序でに述べてしまひませう。

als が ich と Freund とを結合してゐるといふ事を述べた時に既に頭の好い方は感づかれたでせうが、als は決して他の諸種の接續詞のやうな具合に、露骨に、具體的に、形式的に二つの名詞を結びつけてゐるのではありませんでした。謂はば意味の上で、內容の點で、論理關係で以て結び附けてゐるとも云へませう。それです。此の點が前置的接續詞全部に共通な特徵で、具體的に文字として現れてゐる名詞（本當は名詞だけではなく、形容詞や副詞や數詞でも好いのですが）が gerade, erst, lauter 等に依つて何と結び附いてゐるかといふと、先づ、明らかに文字としては現れてゐない他の何等かの概念と結び附いて居り、その結びつき方は必ず「對照的」もしくは「比較的」です。つまり其の點では對照的接續詞とよく似てゐるのです。其の事は次の項へ行つてから述べます。

たとへば、誰々「に限つて」そんな事はしない、といふのを取つて考へて見ると。

Gerade er kann so etwas nicht tun.

彼奴に限つてそんな事はしない筈だが。

これも als の場合と同樣に、表面と裏面との二つの文に分けて考へることが出來ます。

A. 裏面は　Die andern können so etwas tun.

他の奴等はそんな事をするかも知れぬ。

B. 表面は　Er kann so etwas nicht tun.

彼奴はそんな事はしない筈だ。

この二つの對照を考へて、さて B の方だけを云つて A の方を暗々裡に「きかせる」方法はどうかと云へば、それが gerade です。gerade はつまり、表面に現れないで、言ふ者の主觀の中だけで前提として考へてゐる A の方の文を、考への中で B に結びつけるための接續詞です。先程云つた「何と結びついてゐるか」といふ其の「何」は、其の時其の時で想像に任せて置くのです。定義を下すとすれば、「前置的接續詞とは、一つの語を、改めて言ふ必要のない一つの概念と接續する接續詞である」と云ふ事が出來るでせう。

次項に並べてある多くの前置的接續詞は、どれもみんな重要なもので、普通は「助詞」といふ變な部類に配屬されてゐるのですが、さういふ微妙な機

能を備へた小さな厄介な言葉が追々と非常な重要性を帶びて來て、普通の文法書では好い加減にして片づけるのが普通ですが、少しわかりかけて來た人たちが最も困難を感ずるのは主として斯う云ふ方面ではないかと思ひましたから、心持ち此の部分を詳しく述べて見ました。助詞なるものはまだこれでは極く一部しか片づきません。殘つたものは第五卷第六卷で、話の筋道と關係が生ずる毎に、一字一字について詳しく述べるつもりです。名詞や動詞は、辭書さへ引けば何時なんどきでも解りますが、或種の微妙な細かい助詞だけはどうしても一度實例に就て詳しい話を聞く必要があります。その意味に於て第五第六卷には私も全力を盡しましたから、皆さんの方でも腕によりをかけて傾聽して下さい。第四卷までは、まあ謂はば何處の文法書にでも出て來る「定石」を飛び飛びにお話してきたのですが、言葉と意味とがしつかと抱き合つた實例について詳しく研究されるのは第五卷第六卷だらうと思ひます。

310. 前置的接續詞の主なるもの

これを以てこれを見るに、要するに玆には明らかに一つの範疇が存すると云ふ事が解りませう。範疇［Kategorie］と云ふのが餘りに哲學的ならば一形態、一形式、または一部門、一類型と云つても好いでせう。これまた一つのタイプですね、つまり。どれもこれも一つの型にはまつてゐる。文法といふのはつまりなるべく重要な型を澤山覺える事です。同時にそれが何等海のものとも山のものとも附かぬと云つた樣な鹽梅にではなく、明らかに一つの型であれば、型を型として意識すると云ふ事、これが文法の重大使命の一つです。斯う云ふ點ではドイツ人は實に組織的ですよ。ですから斯う云ふ分類問題や、認識論や論理的な考へ方に怖れをなしてはいけません。

扨て本問題に歸つて、主な前置的接續詞を表示しますが、こいつは第三卷でやつた前置詞と同樣で、單語だけ切り離して覺えたのでは到底駄目で、また第一覺え難くてしやうがありませんから、必ず次に內容のある他の言葉を附けて覺えて下さい。「暗記」といふのはさう云ふものです。短かいものは覺え難くて、一寸長いと樂におぼえられる。單語帳に單語を書く時にでも、必ず「句」を書く可きです。「語」を書く可きではありません。本當は「文」にして覺える可きですが、こいつは數がふえると大變ですから、次の「句」で丸暗記して下さい。

—前置的接續詞—	—譯語—	—應用例と註釋—
als [König]	[國王]として	汝等に告げる、等
wie [tot]	[死せる]如く	に見える、等
nur [heute]	[今日]だけ	留守だ、等
bloß [heute]	[今日]だけ	〃 〃
auch [du]	[汝]も	一緒に行くか、等
selbst [ich]	[私]でさへ	それを知つてゐる、等
noch [heute]	[今日]にも	嵐が來るでせう、等
sogar [ich]	[私]でさへ	それを知つてゐる、等
gar [ich]	[私]でさへ	〃 〃
schon [dies]	[これ]が既に	間違つてゐる、等
erst [jetzt]	[今]やつと	着いた、等
erst [ich]	[私]なんぞと來たら	もつと甚いよ、等
vollends [ich]	[私]なんぞと來たら	〃 〃
gerade [ich]	[私]に限つて	そんな事はせぬ、等
eben [ich]	[私]がつまり	その問題の人だ、等
lauter [Gold]	[金]ばかり(づくめ)	で出來上つてゐる、等
und [hier]	[此處]も	同樣か、等
nicht einmal [das Abc.]	[ABC]すら	習つた事がない、等 [否定]
nicht [sie]	[彼女]が	ではなく「彼」がだ、等 [否定]
kaum [das Abc.]	[ABC] すら	滿足に言へぬ、等 [否定]
wohl aber [ich]	[私]だけは	[例外だの]意
[ich] allein	[私]だけ	それを知つてゐた、等
[der Mensch] überhaupt	抑々[人間]なるものが	さうしたものである、等

311. **前置的接續詞は必ず一語にかゝる** 前置的接續詞が、必ず一語と結び附くのを以て其の最も顯著なる特徴とすると云ふ事は、既に再三繰り返して陳べて來ましたが、なほ其の點を特に强調せんがために、こんどは少し違つた方面から違つた光に照らして考へて見ませう。

其の際特に注意して頂きたいのは、前置的接續詞として用ひられる言葉の大部分は、その前身を探つて見ると各々副詞、竝立的接續詞、或ひは對照的接續詞の片ちんばの樣なものですから、一見單語が等しいために、それらの元來の機能と混同される虞れが非常にあります。飜譯家のやる間違ひの過半部はさう云ふ處にあるやうに見受けます。

まづ、何でもない、易い言葉を採つて考へませう。auch は、「また」或ひは「も」ですが、

Es ist ein großer Irrtum, wenn man denkt, ein mittelmäßiges Stück[28] **auch** mit mittelmäßigen Schauspielern besetzen[29] zu können.

(Goethe.)

凡庸な脚本なら凡庸な俳優を振り當てても好いだらうなぞと考へると、それは大きな間違ひである。

〔ゲーテの談話としてエツケルマンが傳へてゐる詞〕

原文中の auch は故意と譯しませんでした。飜譯者の技量は、彼が何を「譯する」かと云ふ點に於てではなく、彼が何を「譯さないか」と云ふ點に主として見る可きです……なんて。

auch を何故譯さなかつたかと云ふと、それにはわけがあります。といふよりは寧ろ「凡庸な脚本なら」と云へば、その「なら」の中にもうちやんと含まつてゐるのです。なんなら譯して見ませうか？「凡庸な脚本を、同時にまた凡庸な俳優を以て配役し得ると考へるとすればそれは飛んだ料簡違ひである」——こんどは「同時に」なんて餘計なものが這入つて來ました。

要するに auch の意味は解つたでせう。つまり脚本も凡庸であり、役者「も亦」凡庸であつては困る、といふわけです。

此の際 auch は副詞です。auch noch (まだその上になほ) とも云へるでせうし、dazu noch (おまけに、加ふるに) とも云へるでせう。要するにみんな副詞です。

これが前置的接續詞に轉用されて來ると、今述べた auch のやうに、ぶらりんと中間にころがつてゐる事は出來なくなります。何か一つの語にしつかりと結び附かなければなりません。語象、即ち意學的範疇がすつかり別物になつて來ます。同じ一つの文を例に取つて、auch を色んな字にくつつけて見ませう。

Auch ich habe es gehört.

「僕も」その事は聞いたよ。

此の際は auch ich が一體です。もつとも同じ意味の事を Ich habe es auch gehört とも云へます。ich auch と順序を反對にしても宜しい。

Auch das habe ich gehört.

「それも」僕は聞いたよ。

此の次には、「聞く」といふのに附けて見ませう。こんどは、文章の基本たる動詞そのものにつけるのですから、うつかりすると auch が何にかゝるのやらわからなくなる虞れがあります。それで、Ich habe es auch gehört とやつて、auch と gehört とを特別に強めてもよし、または Ich habe es gehört auch と auch を後へ持つて來ても宜しいが、一番好いのは、gehört を先置します。これは口調として覺えてしまふ必要があります。一種のモデルですから。

Gehört habe ich es **auch**.

[見もしたが] 聞きもしたよ。

要するに、前置的接續詞は、前置といふのは單に便宜上の名稱で、後置もされれば島流しにもなり、胴首所を異にして右と左に吹つ飛んでもしまふが、要するに必ずどれか一つの單語と固く結びつくので、その結びつく先の言葉がどれかわからなくなれば、もはや意味は取れなくなります。

なほ單語がしつかりと覺はるやうに、二三の例を附け加へてお淺へをしませう。

1. **Selbst ein Kind** weiß es. 小供すらそれを知つてゐる。
2. **Erst jetzt** kommt er. やつと今彼は來る。

3. **Nicht ich** habe es getan. それをしたのは私ではない。
4. **Gerade ich** war dabei. [人もあらうに] 丁度此の私が其處に居合せた。

どれも一語だけにかゝつてゐて、どれも必ず其處に言ひ表はされてゐない他の何者かと結びついてゐます。Die andern wissen es alle (他の者は勿論みんなそれを知つてゐる): Ein Kind weiß es (子供がそれを知つてゐる) これを結びつけるのが selbst です。——「今までは來なかつた」「今來る」を結ぶのが「やつと」です。——

殊に解り易いのは nicht ich habe es getan の場合です。まづ ich habe es getan (私がした) と ein anderer hat es getan (他の者がした) とを否定肯定の關係に結びつけ、一方を捨てて他方を採らうとすれば、前出の nicht..... sondern を用ひます。即ち對照的接續詞です。

Nicht ich habe es getan: sondern ein anderer hat es getan.

ところが、半部を省いて他の半部のみで云はうとすれば、どうしても二つを兼ねる前置的なものを使はなければなりません。

Nicht ich habe es getan.

直譯して「私に非ざる者が」それをした、といふのも餘り極端で、それでは反つて語象を誤ることになりますが、「それをしたのは私ではない」といへば好いでせう。つまり sondern 云々といふ後半部が言外の意として仄めかしてあるのです。wohl aber ein anderer hat es getan (他の者「なら或ひは」やつたかも知れぬ) といへば、反對に前半が省かれた事になります。

第三十七講

副　　詞

副詞の部分は、單語は重要ですが、事實としては別に困難な事もありませんから、單に概觀を得ることに努めて下さい。何かごてごてと込み入つた說明のしてある所は勿論詳しく讀んで頂きたいが、單語の羅列してゐる所は、まあ好い加減に眼を通しておけば好い譯です。要するに副詞とか前置詞とか云つた樣なものは「細則」が主であつて、細則なんてものはさう急に覺はる譯のものでもありませんから、或種の個所は單なる Nachschlagebuch (索引書) として將來應用して頂きたいと思ひます。

一たいに、これから後の方は、もはや重要な項目は盡きてしまつた後の事ですから、「細則」を主としてやつて行きます。既に多少ドイツ語をやつておいでになる方は殊に注意して檢べて頂きたいと思ひます。全然初步の方々は、必ずしも凡てを覺えてしまはうとなさらない方が宜しい。どうせ第五第六卷で斯ういふところは何度も參照することになりますから、それらの細則の重要さは其の時になれば解ります。

これからの細則は、その說明の長さに應じて其の重要性を判斷して下さい。なるべく兩者が平行することに注意して編集しましたから。

312. **形容詞は大抵その儘を副詞に用ひる**　英語は形容詞に -ly を附けて副詞を作り、佛語は -ment の語尾をつけますが、獨逸語は形容詞の儘を直ぐ副詞に使へます。Er ist ungeschickt (彼はぶきつちよだ) と云へば、その ungeschickt の儘を副詞にして、ungeschickt arbeiten (下手に仕事をする) と云へます。此の點は非常に便利です。

けれども vice versa (その反對も眞なり) ではありません。sehr (非常に) といふ副詞を形容詞に融通して、ein sehrer Fleiß (非常な努力) なんて事は云へません。

313. **副詞と客語的 [述語的] 形容詞とを混同する勿れ**　動詞を修飾する如く見えるものは凡て副詞だと思ふと大きな間違ひです。たとへば Er ist schlau (彼は狡猾だ) と云へば、ist は sein と云ふ動詞だけれど

も schlau は副詞ではありません。形容詞です。形容詞の客語的用法、または述語的用法と云ふ奴です。(第一卷 94 項) この場合の ist 即ち sein は、普通の動詞ではなくて、繫詞 〔Kopula〕 であると云ひます。—— それに反して Er ist hier (彼は此處に居る) といふ際の ist は立派な普通の動詞であつて、「居る」「存在する」といふ意味を持つてゐます。これを若し繫詞と考へ誤つたならば、「彼は此處である」即ち彼と云ふ人間と此處と云ふ場所とが同一物だと云つたやうな全くのナンセンス 〔purer Unsinn〕 が出來上つてしまひます。

(1) 繫詞的なものには、sein の外になほ bleiben (依然として……である、……であることを歇めない、……で終始する) と werden (……に成る) との二つがあります。それらの特徵は、形容詞と共に用ひる事が出來ると同時に亦「名詞の一格」と共に用ひる事も出來ると云ふ點に存します。謂はば一格支配の動詞だとも云へるでせう。たとへば——

1. sein.	a.	Ich bin alt.	私は老年だ。
	b.	Ich bin ein alter Mann.	私は老人だ。
2. bleiben.	a.	Er bleibt jung.	彼は相變らず若い。
	b.	Er bleibt ein Jüngling.	彼は相變らず青年だ。
3. werden.	a.	Er wird wahnsinnig.	彼は狂氣になる。
	b.	Er wird ein Wahnsinniger.	彼は狂人になる。

名詞が各々一格ですから、それに相當する形容詞もまた一格だと云ふ事が出來ます。語尾のない形容詞を指して格を論ずると云ふのは少し變に感ぜられるかも知れませんが、それは拉丁語その他の古典語によつて證されます。

【註】 文法では、上例の a の方を Eigenschaftssatz 〔形容文〕 b の方を Nennsatz 〔命名文〕 と云つて、兩者を區別してゐます。

其處で、副詞と混同しないやうに、副詞と區別して「形容詞の一格形」といふ言葉を使つて云ふと、次にあげる文例の中の太文字の形容詞は、すべて其の「一格形」であつて、副詞ではありません。

Er scheint **jung**.	彼は若さうに見える。
Die Tür steht **offen**.	扉が開けつ放しである。

Der Bach liegt **trocken.** 小川が乾上つてゐる。

Er sitzt **stumm** da. 彼は默然として腰掛けてゐる。

scheinen (見える、思はれる) stehen, liegen, sitzen 等は、要するに sein と大して變らない意味を持つてゐて、殊に後の三つはドイツ語では sein と同じ意味に濫用します。

(2) 次には「四格の形容詞」といふものがあるのに注目して頂きたい。形としては何故四格だか全然わかりませんが、よく意味を考へて見るとわかります。たとへば「近頃は下の方の廣いズボンを穿くのが流行る」と云ふのを獨譯して見ると——

Jetzt trägt man die Hosen unten breit.

直譯.——世人は今、ズボンを、「下の方で廣く」穿く。

直譯を見ると、「下の方で廣く」と云ふ「廣く」が、一寸副詞のやうな感じを與へますが、さうではなく、breit は四格を取つてゐる主語の die Hosen (ズボン) を形容する「形容詞客語の四格形」です。拉丁語、ギリシヤ語その他形式の備つた、格語尾の豐富な言語では、かう云ふ時の形容詞は、ちやんと四格の格語尾を採ります。——換言すれば、上の文の中には die Hosen sind unten breit (ズボンは下部で廣い) といふ論理關係が看取されます。その際云ふまでもなく、die Hosen が主語で、breit がそれに對する客語〔述語〕です。此の主客關係は、上例の Jetzt trägt man 云々の文の中にあつてもやはり論理的には存續してゐるわけですから、die Hosen は、形は四格で、man といふ文法上の主語から見れば目的語ですが、breit から見れば主語です。然るに主語たる die Hosen は四格ですから、それを說明する breit も必然的に四格だと云ふ事が言へます。副詞ではありません。

breit を副詞だと考へると、何だか意味が變な事になつて來ます。「ズボンを穿く」と云ふ、其の「穿き方」が廣いなんて話はありませんからね。「ズボン」が廣いので、「穿き方」が廣いのではない。例へば狹いズボンを廣く穿くなんて事はどんなモボにだつて出來ないでせう。

なほ念のために、形容詞の四格形の例を二三擧げて置きます。太文字は、各々主語四語の名詞と、それを形容する形容詞の四格形です。

Er macht das **Faß voll.** 彼は樽を一杯にする。

Ich schlage **ihn tot.** 私は彼を打ち殺す。

Er bekommt sein **Gehalt ganz.** 彼は俸給を全部貰ふ。

Ich habe **ihn** nicht **nötig.** 私は彼を必要とせぬ。

Er glaubt **mich reich.** 彼は私を金持と信じてゐる。

Ich fühle **mich müde.** 私は自分が疲れたのを感ずる。

Sie wähnt **ihn fort.*** 彼女は彼が去つたと誤認する。

Er weiß **mich hier.*** 彼は私が此處に居る事を知つてゐる。

* 印をつけた所は、形容詞でないが、形容詞的用法をする副詞も同樣の扱ひをすると云ふ例を示したのです。

要するに、約言すれば、動詞に伴ふもの必ずしも副詞に非ずといふ事で、此の點は特に注意を要します。

314. **空間概念の副詞** 空間概念に關する副詞は最も原始的なもので、以下の諸項でも研究しますが、玆では其の最も普通なものを例示しておきます。(過半數は既知の單語です。)

da	其處に	hier	此處に	dort	彼方に
rechts	右に	links	左に	überall	到る處に
mitten	眞中に	irgendwo	何處かに	nirgend(s)	何處にも
hin	あちらへ	her	こちらへ	dahin	其處へ
daher	其處から	dorthin	彼方へ	dorther	彼方から
umher	其處ら中	oben	上に	unten	下に

315. **da と dort との區別** da (其處に) と dort (彼方に) とはどう違ふでせう? 日本語の譯語を見ると、da の方が自分に近くて dort の方は自分から遠いと云つた樣な氣持がしますが、それは必ずしもさうとは限りません。dort の方は、さうした空間關係のみを規準にして考へても先づ大した誤りはありませんが、da の方は一寸說明して置く必要があるでせう。

その前に dort と hier とを片づけませう。此の二つの間には確かにさうした距離關係が存します。hier は自分に近い事を云ひ、dort は自分から相當距りがある時に用ひます。つまり hier は「此處」dort は「彼處、彼方」で好い譯です。—— さて其の外になほ da といふのがあるのはどう云ふわけでせう？

da は、「其處に」「眼前に」「まのあたりに」「現在」「現に」「我々の意識の間近かに」といふ事です。嚴密に定義すると、da といふ副詞は、空間的に我々に接近してゐると否とに拘らず、我々の「意識」の間近かに迫つてゐる時に用ひます。Das Examen ist da! (愈々試驗がやつて來たぞ!) Gott ist da. (神存在す) Er ist nicht da. (あの人は留守です) Was sagst du da für dummes Zeug? (君はまた何とした馬鹿な事をいふのだ) Da! (そら! ほら! それ見ろ!)

つまり da (其處に) といふのは、空間關係にはさう大した關係はないので、むしろ心理的接近を指すのです。從つて、dort (彼處に) よりも反つて遠い所にあるものを指し得ます。一たい人間の距離意識と云ふ奴は必ずしも形式的數學的には判斷できないもので、たとへば、今私が斯うして原稿を書いてゐる書齋は、ぶの厚い壁によつて妻子の部屋から距てられてゐます。それは子供が六人もゐて、往々にして天人ともに怨さざる暴虐非道の音響を發するから故意とさうしてあるのです。ところが實はほんの背中合せで、二三尺距たつた向ふで彼等は猛威を振つてゐるのです。けれども、壁のおかげで、私は別に彼等が da (其處) に居るとは感じません。それよりは、二間ばかり距たつた、同じ書齋の中にある本棚の方が da として考へられます。即ち私に取つては die Bücher sind da (書物は其處にある) ですが die Kinder sind dort (子供たちはあちらにゐる) と云ふわけです。二三尺先きにゐる者をさして「あちら」とは妙な話ですが、其處まで行くのには相當廻り路をするのだから仕方がありません。

これは、距離と「道の長さ」とが相反する際ですが、それすらも相反しない際の例をあげると、da の用ひ方が益々明瞭になります。たとへば、味方の艦隊が何處かに碇泊してゐるとしませう。甲の軍艦と乙の軍艦とは、二三丁の距離を置いてゐます。すると甲の水兵は乙の軍艦を指して、我々の味方は彼處にゐる (Unser Freund ist dort) と云ふ事が出來ます。ところが、水平線の彼方に出張してゐる通報艦から無電で「敵艦見ゆ」との報告が到著します。すると兵士たちは何といふでせう？ Der Feind ist da! (敵が來た!) と云

ふでせう。此の場合は、數丁彼方にゐる友艦を指しては dort と云ひ、恐らくは數十哩も彼方にゐる敵艦を指して da と云ふわけです。(敵艦襲來は只事ぢやありませんからね。)

約言すると、hier は空間的に近き事を意味し、da は意識的に近きことを意味します。そして dort は、空間的か意識的か、いづれかの意味に於て多少の距りがある時に用ひると云ふわけです。

〔註〕 近頃の哲學者ですが、Heidegger と云ふ一寸變つた人がゐます。その主著 Sein und Zeit (實在と時間) は語法と思想の難解なのを以て有名です。それは、荒つぽく云ふと、da と云ふ一字の持つてゐる內容を繰りひろげて其處から「人生とは何ぞや」と云ふ問に一つの解決を與へたもので、言語と思想との關係を考へるには好個の材料です。勿論よほどドイツ語の語感のしつかりした人でなければ、たとへ哲學者と雖も容易には讀めない本です。

316. 名詞の附加語になる場合

副詞が名詞を形容する、これはざらにある現象で、その口調に慣れなければなりません。

Der Mann hier.	此處にゐる男
Der Park dort.	彼處に見える公園
Das Buch da	その本
Die Stadt unten	下の町
Das Zimmer oben	上の部屋
Die Frau daheim	家に殘した妻、留守居の妻君

317. 空間概念の副詞の序列

「お前の帽子は何處に置き忘れたか？」——「えゝと、二階の、寢室の、這入つて左側の、煖爐の傍の長椅子の上でした。」

かう云ふ場合には、空間概念の副詞的規定が五個もありますから、先づ其の序列が問題になります。これには方法が二通りありますが、ドイツ語の癖として、次にあげる第一の場合だけしか使ひません。

(1) 日本語の通り、廣き規定から狹き規定へと順々に連ねて行く方法。(直譯すれば、「二階に、寢室の中に、左側に、煖爐の傍に、長椅子の上に」と

云つたやうに、みんながばらばらになる。）これが最もよく使はれる方法です。

A. Wo hast du deinen Hut gelassen?

B. Nun.....oben im Schlafzimmer links neben dem Kamin auf dem Sofa.

(2) 第二の方法といふのは、全部を一個の副詞句にまとめてしまふ方法です。これはドイツ語では餘りやりません。卽ち直譯すると、「二階の寢室の左側の煖爐の側にある長椅子の上に。」

Auf dem Sofa neben dem Kamin links, im Schlafzimmer oben.

links の次にコンマを打つたのは、links im Schlafzimmer (左側で寢室の中) と讀ませないためです。

これは假に規定の多い場合を例に取つたのですが、二個位の簡單な場合には此の法則に特に注意しなければなりません。二個のうちどちらの方が廣い概念であるかに依つて、一句に結びつくか二句に分れるかが決まるのです。

——一句に結ばれる際——

(廣い概念が後に來る)

Auf dem Baume dort	彼處にある樹の上に
Auf der Bank vor dem Hause	家の前のベンチの上に
In der Schublade hier	此處の抽斗の中に
Am Brunnen neben dem Lindenbaum	菩提樹の傍の井戸端に

——二句に分れる際——

(廣い概念が前に來る)

Dort auf dem Baum	彼處に、樹の上に
Vor dem Hause auf der Bank	[ベンチの上の家の前に、に非ず]

細かい事の樣ですが、斯う云ふ事を嚴密に知らないと、學者になつては誤譯をし、外交官になつては國際問題を惹起します。

318. unter と **unten**, etc.

前置詞と、それに相當する副詞との關係は、既に第二卷 188 で述べた通り、auf に對するものは darauf (その上に) in に對するものは darin (その中に) darein (その中へ) 等々で、da をつけて一語にしますが、それ以外に -en といふ語尾を持つた凝結形式が數個あります。(前置詞との區別に注意)

副詞		前置詞	副詞		前置詞
innen	內部に	[in]	oben	上部に	[ob, über]
außen	外部に	[aus]	unten	下方に	[unter]
vorn	前方に	[vor]	von hinnen	此處から	[hier]*
hinten	後方に	[hinter]	von dannen	其處から	[da]*
dorten	彼處に	(詩語)	mitten	眞中に	

註。——* 印をつけたものは前置詞ではないが、平行した現象。

319. draußen, etc.

上の各副詞に da- をつけて指示詞に化すると、darinnen, または drinnen 等の形を生じます。これらもすべて凝結形です。

drinnen (darinnen)	その中に、家の中に
draußen (daraußen)	表に、戶外に
droben, daoben	天に、(hienieden 現世に、の反對)
dahinten	あの後方に
drunten (darunten)	あの下の方に

hier と結合した hierinnen, hieraußen 等はあまり普通には用ひられません。

320. dran, drauf, etc.

前述の darauf, darin 等の省略形 dran, 等がありますが、これらはすべて熟語に結成して抽象的な意味をなすにとどまり、あまり——少くとも上品なドイツ語では——空間的な意味には用ひられません。

dran müssen	活動を開始せねばならぬ。
drauf gehen	費えてしまふ、犧牲になる。

drein ſchauen ……に見える、……な顔附きをしてゐる。

要するに dran, drauf 等は daran, darauf よりも疎略な形です。俗語と云ふ程ではないが、初學者は用ひる事は危險です。

321. rein, raus, etc.

近來段々と市民權 (Bürgerrecht) を獲得して來たのは herein, heraus 等を rein, raus にする癖です。文語體には用ひませんが、普通の會話はよく之れを用ひて親しみを出し、モダーンを衒ひます。herein 等は、後の方にアクセントがあるからさうなるのです。暫く前までは 'rein 等に書いてゐましたが、近頃はもうそれも野暮になつて、すべて rein, raus, runter と書きます。

322. -wärts の語尾

英語にも方向を示す -ward といふ語尾があります。himmelwärts (天に向つて) nordwärts (北に向つて) ſeitwärts (わき寄りに) vorwärts (前へ) 等。

323. treppauf, treppab 等

名詞に、前置詞形をした副詞を附した凝結形があります。空間概念のものばかりでなく、時間に關するものもありますから注意。(アクセントはすべて ab, aus, auf の部分に置く)

bergab	山を下へ	bergauf	山を上へ
treppab	階段を下へ	treppauf	階段を上へ
himmelab	天から	himmelauf	天に向つて
ſtromab	流れを下へ	ſtromauf	流れを上へ
talab	谷を下へ	talauf	谷を上へ
talaus	谷を出て	talein	谷へ入つて
waldaus	森を出て	waldein	森の中へ

landaus landein 何處の國でも
tagaus tagein 毎日毎日
jahraus jahrein 年々歳々

querfeldein まつしぐらに
himmelan 天に冲して、九天の彼方に向つて

324. 副詞化する傾向のある「名詞の四格」(空間概念の部)

日本語でも、谷「を」下る、階段「を」登る等と云つて、別に下る、登る、等が他動詞でもないのに「を」の附く名詞を補足語として伴ひます。それらの「を」は、移動狀態を表現するもので、或物の「一端から一端まで動き乍ら」といふ意味です。或る俳句の師匠が「米洗ふ前に螢の二つ三つ」といふのを、「米洗ふ前を螢の二つ三つ」と訂正してやつて、それでやつと螢が動いてゐる事になつたと云ふ逸話が名高いやうですが、そんな事は單なる文法の問題で、「に」と云つた男はよつぽど低能兒で、ほとんど日本語の語感が無かつたと云つても好い程です。

獨逸語が丁度その通りの言ひ方をします。

Er fährt das Tal hinab. 彼は谷を下へと車で降る。
Er geht die Treppe hinauf. 彼は階段を登る。
Er wandert den Fluß entlang. 彼は河添ひに歩む。

時間概念の副詞にも之れに平行した現象があります。(少し後の 326 參照。)

325. 時間概念の副詞

これも單に主な單語を紹介するに止めます。

immer	常に	nimmer	決して
jemals	何時か	niemals	決して
je	何時か	nie	決して
heute	今日	ſchon	既に
geſtern	昨日	noch	まだ
morgen	明日	einmal	一度、ある時
erſt	やつと	zuerſt	始めて

nochmal[s]	もう一度	zuweilen	時々
jetzt	今	bisweilen	時々
nun	今、(さて)	einst	いつか [過去及び未來]
dann	然る後	dereinst	いつか
bereits	既に	stets	いつも
gleich	直ぐ	beständig	いつも、不斷に
sofort	直ぐ	oft	屢々、往々にして
sogleich	直ぐ	öfters	頻々として
eben	たつた今	indessen	さる程に
soeben	たつた今	inzwischen	さる程に
bald	程なく、その內	vorhin	先刻
kürzlich	最近	damals	當時は
neulich	最近	ehemals	以前は
jüngst	最近	vorher	豫め
vor kurzem	最近	von vorn herein	豫め
nachher	後刻	im voraus	豫め
hernach	後刻、その後	darauf	その次に
zuletzt	遂に	anfangs	始めに
schließlich	遂に、結局	früh	早く
endlich	遂に	spät	晩く
am Ende	遂に、結局	früher	以前は
ehedem	以前は	später	後刻、後日
seitdem	それ以後	nachts	夜間
seither	それ以後	abends	晩に
mittags	正午	morgens	朝
vormittags	午前	vorgestern	一昨日

nachmittags	午后	übermorgen	明後日
heutzutage	現今	währenddessen	其の間
einstweilen	當分は、當座は	augenblicklich	目下は、卽坐に
zeitweilig	當分は	fürs erste	さしづめ
jeweilig	その都度	nunmehr	今や
auf einmal	忽ち	zunächst	さしづめは、さし當り
solange	それまで	einen Augenblick	しばらく
wieder	再び	immer wieder	又しても
schon wieder	又候	von neuem	改めて、また
tagsüber	日がな一日	tags zuvor	その前日
täglich	毎日	tags darauf	その翌日
tagtäglich	毎日毎日	auf der Stelle	立所に
erst	やつと	alsbald [稀]	直ちに
von Zeit zu Zeit	時々	verschiedentlich	ちよいちよい
lange	長い間	längst	とつくに

326. 副詞化した「名詞の四格」(時間概念の部)

或る長さの端から端まで、卽ちその全長に亘つて、と云ふ際に四格を用ひる事は既に空間概念について 324 で說明しましたが、それと同じ事が時間の方にもあります。

dieses Jahr	今年は	voriges Jahr	去年は
diesen Winter	此の冬は	diesen Morgen	今朝は
diese Zeit	その間	den ganzen Tag	一日中
die letzte Nacht	昨夜、今朝	das letzte Jahr	去年
die ganze Weile	その間始終	zwei Stunden	二時間

普通後に lang といふ字をつけて zwei Stunden lang, drei Jahre lang 等と云ひます。また、eine Zeitlang（しばらく）等、一字を造ることもあり、stundenlang（數時間）wochenlang（數週）等の合成語を作ります。

全長に亘る、の意を强めんがためには Ferien über（休暇中ぶつ通しに）zwei Tage hindurch（二日連續して）等の副詞句を作ります。

327. **morgen früh**

der Morgen は「朝」と云ふ名詞、morgens は「朝」といふ副詞、ところが morgen は「明日」です。日本語の「アス」「アサ」が似てゐるやうに、よく似てゐます。

すると「明日の朝」は morgen Morgen か？ morgen morgens か？ さうは云ひません。morgen früh と云ひます。此の früh は別に「早い」の意ではありません。十時でも十一時でも morgen früh です。堂々たる飜譯家がよく「明朝早く」なぞと譯してすまし込んでゐる樣ですから、つまらない事だが一寸斷はつて置きたくなつたのです。

328. **方法の副詞**

これが最も副詞らしい副詞……も變だが、つまり人が副詞と云つて直ぐに思ひ泛かべるのが此の「方法」の副詞です。抑も副詞といふのは、その拉丁名 Adverb の示す通り、動詞（Verb）に附ける（ad）ものです。（もつとも形容詞にもつけますが）動詞につけると云へば、動作の樣子、程度、を規定するのが一番わかり易い筈です。一言にして云ふと Wie？（如何に）の問に答へるのが方法の副詞です。

sehr	非常に	ziemlich	隨分
höchst	〃	so	そんなに
äußerst	〃	beinah (-e)	殆んど
überaus	〃	fast	〃
außerordentlich	〃	mehr	もつと
ganz	全く	minder	より少く
durchaus	〃	weniger	〃
wohl	良く、恐らくは	freilich	勿論（云々ではあるが）

vielleicht	恐らくは	natürlich	勿論
gewiß	確かに	allerdings	〃
übel	惡く	gern	好んで
selbst	自分で	allein	獨りで
zusammen	一緒に	mit	一緒に
insgeheim	密と	besonders	特に
nur	ただ	deutlich	明らかに
bloß	〃	eigentlich	元來
einfach	〃	einander	お互ひに

これこそほんの一斑で、方法、程度、樣式を示すものこそは、あらゆる形容詞から轉用し得るのですから、形容詞はみんな方法の副詞だと云つても構はない位です。上例の中でも、deutlich, natürlich, übel, außerordentlich 等は形容詞です。（此點に關しては 312 を見よ。）

329. **Genetivus absolutus の副詞化**

英語に、たとへば現在分詞の獨立句といふものがあります。

……and [all her old love returning with the sting of jealousy], she sought to draw him back to her side once more.

……そして、嫉妬の刺戟とともに昔日の戀が復活し、彼女は彼をもう一度己が許に引戻さうと試みた。

これは一寸文章の途中に挿入して、原因を述べたり、註解を加へたりするのに非常に便利です。此の文は古くは梵語の locativus absolutus〔絕緣場所格〕希臘語の Genetivus absolutus〔絕緣二格〕拉丁語の ablativus absolutus〔絕緣離格〕等から筋を引いてゐる語法ですが、獨逸語ではそれが餘り發展しないで、辛くも數個の凝結形式として餘命をつないでゐます。獨逸語では希臘語と同じ二格ゆえ、Genetivus absolutus と呼ぶ事が出來ます。——即ち、名詞に形容詞をつけて、それを二格にして、獨立して用ひ、副詞的規定の役をつとめさせるのです。（英語佛語の獨立分詞句の樣に長く延ばす事は許されません。）

schweren Herzens	苦しき心を抱いて
geschlossenen Auges	瞑目して
festen Schrittes	足取りも確かに
guten Mutes, gutes Mutes	上機嫌で
entblößten Hauptes	脱帽して
stehendes Fußes	起立した儘、即坐に
eiligen Laufes	一目散に
starren Blickes	凝と、どろんと眼を据ゑて

其他、人間及び生物の身體、機能、動作を示す名詞は、所謂類造（Analogiebildung）に依つて上の樣なのを隨意に造る事は出來ますが、結局は「人間の動作、狀態」といふ制限があつて、高が知れてゐます。

けれども完全に凝結し切つた副詞には、かなり多くの Genetivus absolutus があります。

eines Tages	ある日のこと
meines Wissens	私の知る所では
meines Erachtens	私見に據れば
allen Ernstes	大眞面目で
allenfalls	いづれにせよ、どつちみち
jedenfalls	〃
keinesfalls	決して
keineswegs	〃 (in no way)
halbwegs	中途で
folgendermaßen	次の如く
einigermaßen	多少
dermaßen	そんなに、それ程
dergestalt	左樣に（さう云つた樣式に）

gewissermaßen	多少、或種の意味に於ては
allerdings*	勿論
glücklicherweise	幸にも
unverrichteterdinge	無駄骨折つて、手を空しうして
diesseits, jenseits*	こちら側に、あちら側に
beiderseits*	兩側で、雙方とも
dieser Tage	最近、その内に
geradeswegs	まつすぐに

中には、形容詞をつけないで名詞だけを二格にしたものがあります。主として時の副詞です。（斯うなるともう二格は形式だけの問題になつて、-s さへつければ好いといふわけです。女性にまで s をつけます——nachts, des Nachts.）上表の＊も文法的に正しい二格ではありません。

morgens	朝に	abends	晩に	damals	當時は
mittags	正午に	sonnabends	土曜に	sonntags	日曜に
nachts	夜間は	des Nachts	夜間は	des Abends	晩に
tags	日中	rings	ぐるりに	anfangs	初めは
nochmals	もう一度	des Wegs	路を通つて	flugs	速かに
blindlings	盲目に	rittlings	跨がつて	rücklings	仰のけに
namens	名を云へば				

名詞の方が省かれて形容詞だけが殘つたやうな形のもあります。

rechts	右に	links	左に	bestens	よろしく
stets	いつも	bereits	既に	öfters	屢々
eilends	急いで	zusehends	著しく	nachgehends	後から
unversehens	不知不識の間に			vergebens	徒らに

330. **批評の副詞**

抑も西洋語なるものに慣れない初心者によくあることですが、たとへば Er sucht sie vergebens（彼が彼女を探すのは結局無駄だ）の vergebens を方法の副詞だと考へて、「彼が彼女を無駄に探す」と譯して考へるから、さあ意味がわからない。探し方が無駄だとすれば、わざわざ無駄な探し方をする奴はよつぽど間抜けでせうからね。そんな話のあらう筈がありません。

此の際「vergebens」（無駄に）といふ副詞は、問題の當人から見て無駄なのではない、それを傍觀する我々から見て無駄なんです。故に客觀的副詞、または批評の副詞とも稱すべき一範疇が存する事に注目しなければなりません。（英語學の方に丁抹人の Jespersen といふ文法學者がありますが、氏は、文の中の人物を中心に見ず、筆者を中心に見て、かういふ副詞を subjektive adverb（主觀的副詞）と呼んでゐます。筆者か、文中の人物か、その孰れを中心にするかによつて術語が反對になる譯です。名稱はまあどうでも好いでせう。

1. Er bleibt **billig** sitzen. 彼の落第は當然だ。
2. Er tut es **mit Recht.** 彼がさうするのは當然だ。
3. Er tut es **mit Unrecht.** 彼がさうするのは不當だ。
4. Er sucht mich **vergeblich.** 彼が私を探したつて見つかるもんか。
5. Er ist **glücklicherweise** da. 彼は幸にもやつて來た。
6. Er kommt **sonderbarerweise** nicht.
   彼は不思議にもやつて來ない。

つまり日本語の「……にも」といふ表現が批評の副詞です。billig を「正當にも」mit Unrecht を「不當にも」vergebens, vergeblich を「無駄にも」、「御苦勞樣にも」とも謂へませう。それとも Es ist vergeblich, daß er mich sucht と云つたやうな構造に解釋（auslegen）即ち分解（auseinanderlegen）して考へればわかります。

331. **結果の副詞**

批評の副詞と殆んど同じだが、少し違ふのが結果（Ergebnis）を指す副詞です。これも日本語では、「……には」と言へば、少し變だが、ほぼ意的形態の表現が出來ます。（大抵 zu を伴ふ副詞句です。）

1. Zu meiner Freude kam er heim.
   （私にとつて嬉しいことには彼が歸つてきた。）
2. Zu meinem Schaden hat er gesiegt.
   （私に取つて損なことには、彼が勝利を得た。）
3. Zu meinem Ärgernis war es schon aus.
   （癪なことには、もうすんだ後だつた。）
4. Zu meinem größten Leidwesen muß ich Ihnen die Freundschaft kündigen.[30]
   （まことに殘念なことながら、あなたに絶交の申し渡しを致さねばなりませぬ。）

zu といふ前置詞のために、よく「目的」と誤り勝ちです。「私を喜ばせようと思つて彼が歸つて來る」のではない。彼は何も知らずに歸つて來るのだが、それが私の立場からは喜ばしいといふ結果になる。故に結果の副詞といふのです。

332. **副詞句、又は副詞的規定**
Das Adverbiale od. die Umstandsbestimmung

今までに澤山ありましたが、たとへば zu meinem größten Leidwesen（遺憾乍ら）は一つの句であつて、同意の leider（遺憾乍ら）のやうに一字ではないから、副詞とは云はず、副詞句（das Adverbiale）と云ひます。それから兩者を一括して、狀況規定（die Umstandsbestimmung）または副詞句と云ひます。副詞句には diesen Morgen（今朝）die Treppe（階段を）等の四格句、des Wegs（道を）des Nachts（夜に）等の二格、もしくは二格に似せた句、及び mit Vergnügen（喜んで）等前置詞を伴ふもの、及び下の如き熟字があります。（これもほんの一例。）

nach und nach	段々	ab und zu	時々
in einem fort	立て續けに	mir nichts dir nichts	一切お構ひなく

333. **副詞句の假定强調用法** たとへば ohne (without) といふ前置詞に二つの意味がある事を述べて置きました。(第三卷 239, 2 を見よ。) ohne ihn と云へば、それは「彼なしに」「彼をほつたらかして」といふ意になるか、または「彼なかりせば」の意になるかです。前者は方法の副詞句であると云ひ、後者は假定强調の副詞句であると謂ひます。(——ならば、といふ日本語に相當す。)

ohne はほんの一例ですが、假定强調用法なるものは副詞全部に亘る一般的形態です。否、副詞以外にも應用される、意學上非常に重大な範疇であると同時に、實地に甚だ適用範圍の廣い「定石」です。(故に次はほんの一例で、決して凝結形態ではありません。)

1. **Ohne ihn** hätte ich umkommen müssen.
   (彼がゐなかつたら私は死んだかも知れぬ。)——「私は彼なしに一人で死なねばならなかつたらう」に非ず!
2. **An seiner Stelle** hätte ich so etwas nicht getan.
   (私が彼の立場にゐたら、——卽ち、私ならば——あんなことはしなかつたらう。)——「私は彼の立場でそんな事はしなかつたらう」に非ず!
3. **Selbst** könnte er nicht kommen.
   (一人でならどうして來られた譯のものぢやない。)
4. **In diesem Falle** habe ich mich getäuscht.
   (さういふ譯なら私の思ひ違ひだつたかも知れません。) もしくは假定强調でなく考へると (私は此の場合思ひ違ひをしてゐました。)

最後の例でわかる通り、約束法 (接續法第二式) を用ひず直接法を用ひると、普通の副詞か假定强調の副詞か見當がつかなくなり、專ら前後の文脈によつて判斷するの外はありません。ドイツ語には日本語のやうに「ならば」とか云々「は」といふ微妙な助詞がありませんから、その代りになるべく文章の先頭に置いて假定强調を行ひます。どちらかと云ふと、その次には、例

の約束法といふ語法を用ひる事が多いと云へます。つまり副詞規定が約束法的語法の假定部に相當するわけです。(第三卷 212, 213, 214 參照。)

また zu を伴ふ不定法の um……zu＋**不定法**といふ形式を um ehrlich zu gestehen (正直に告白すれば) 等に用ひるのも、それは目的文を假定强調的に用ひたのです。(第四卷 288 參照)。

第三十八講

數　　詞

334. 基數 Kardinalzahlen　基數とは、1, 2, 3 等、物を「算へる」時に用ひる數のことで、第一とか第二とか云つたやうに、物を其の順番によつて「名附ける」ところの「序數」から區別せんが爲めにそんな名が必要になつて來るのです。一たい物の名稱といふものは、みんなそんなもので、他と區別せんが爲めに、極くあたりまへのものに改めて名をつける必要が起ります。たとへば形容詞にも、比較級、最高級といふものが問題になると、あたりまへの形のことを原級(Positiv)と名づけざるを得なくなる、と云つたやうな例が澤山あります。

0	null (die Null)	10	zehn
1	eins	11	elf
2	zwei	12	zwölf
3	drei	13	dreizehn
4	vier	14	vierzehn
5	fünf	15	fünfzehn
6	sechs (發音＝セックス)	16	sechzehn (sechszehn に非ず)
7	sieben	17	siebzehn
8	acht	18	achtzehn (t を讀まず)
9	neun	19	neunzehn

20	zwanzig	100	hundert
30	dreißig (dreizig に非ず)	1,000	tausend
40	vierzig	1,000,000	eine Million
50	fünfzig	1,000,000,000	eine Milliarde

60	sechzig	(零を十二個)	eine Billion
70	siebzig	(零を十八個)	eine Trillion
80	achtzig	(零を二十四個)	eine Quadrillion
90	neunzig	(零を三十個)	eine Quinquillion

註。——Billion と Trillion の中間(零十五個)は tausend Billionen 等々。

335. 20 から 99 までの算へ方　ヨーロッパ語の大部分は、1 から 12 までに對しては各々一語があり、それから上になると、二つ以上の部分から成つた複合詞を用ひます。19 までは上の表の單語をその儘覺える可きですが、21, 22, 23 等に就いては、その構成法を會得しなければなりません。

まづ、通則を看取するために、少しばかり實例を擧げて、英語と比較して見ませう。

數字	獨	英
21	einundzwanzig	twenty-one
22	zweiundzwanzig	twenty-two
23	dreiundzwanzig	twenty-three
24	vierundzwanzig	twenty-four
25	fünfundzwanzig	twenty-five
26	sechsundzwanzig	twenty-six
27	siebenundzwanzig	twenty-seven
28	achtundzwanzig	twenty-eight
29	neunundzwanzig	twenty-nine
30	dreißig	thirty

通則はおのづから出來上ります。即ち、英語は日本語の通りの順に「二十一」「二十三」と云ふが、獨逸語は「單位」を先に云つて、其の次に十位を云ふ、即ち、21 ならば、「1 と 20」、27 ならは「7 と 20」と云つた譯です。おまけに「と」に相當する und を入れて、一字に書いてしまひます。(三字

を別々に書いて sieben und zwanzig としても別に誤ではありませんが、あまり用ひないのです。)

31 以上も同じ構造になります。次はほんの一例です。(30 だけが dreißig と -ßig の語尾がついて、-zig でない點には特に注意して頂きたい。)

數字	獨	英
37	siebenunddreißig	thirty-seven
68	achtundsechzig	sixty-eight
95	fünfundneunzig	ninety-five

336. **三單位が讀めれば後はみな讀める**

333 dreihundert dreiunddreißig
584 fünfhundert vierundachtzig
237 zweihundert siebenunddreißig
951 neunhundert einundfünfzig
601 sechshundert **und** eins
203 zweihundert **und** drei

以上の形式が呑み込めれば後は次の法則で構成します。

1. 三單位毎に仕切り、その單位の名稱を附加す。
2. eine Million 以上の單位は zwei 以上が直接前に來れば Millionen, *pl.* 等の複數形を取る。
3. tausend Billionen 等の單位は、次に數が續けばその Billionen 等を略す。(どうせ次にもう一度 Billionen 等が繰り返される故。)
4. 三單位內には必ず一個所に und あり。

—— 例 ——

數字。 5,824,036,401,330,891,072,223,400,821,783.

讀方。 fünf Quinquillionen achthundertvierundzwanzigtausendsechsunddreißig Quadrillionen vierhundertundeintausend dreihundert-

unddreißig Trillionen achthunderteinundneunzigtausend zweiundsiebzig Billionen zweihundert dreiundzwanzig Milliarden vierhundert Millionen achthundert einundzwanzig tausend siebenhundert dreiundachtzig.

(これはほんの冗談で、まあ斯う云ふ譯になるといふ例だと思つて下さい。)

337. **1926=19 hundert sechsundzwanzig**

千代までの數——主として西暦の年數ですが——は、たとへば 1900 は (ein)tausend neunhundert と讀はず 19 を一緒に讀んで neunzehn hundert とよみます。(英語其他の西洋語もみなさうです。)

338. **數詞 ein- と不定冠詞 ein- との區別**

數詞 eins は、算へる時は eins, zwei, drei と s を附けますが、名詞に附ける時は不定冠詞と同形になります。そこで區別するために、數詞の時には、ずつと前に述べた例の Sperrschrift〔隔字法〕を用ひます。(第二卷 176 參照)

ein Kind　ある子供　　ein Kind　一人の子供

それから發音も「あイン」と「あ」の部を音階的に高めます。昔は不定冠詞と區別するために大文字を使つたものです。

Ich habe nur Ein Kind　私は只一人の子を持つ

また das eine Kind (一人の兒) mit dreien (三人で) 等、形容詞と同樣に扱ふ點も不定冠詞と異つてゐます。

339. **數字は女性なり。die Acht=8**

數字 (Ziffer) は女性の名詞として扱ひます。

Die Tänzerin beschrieb eine Acht.

踊り子は 8 の字を描いて動いた。

340. Tausende von Menschen

Tausend, *n. pl.* ——e (1000)
Hundert, *n. pl.* ——e (100)

及び前述の Million 等の單位は名詞として扱ひます。そして、たとへば數千人の人間と云ふやうな際には viele tausend Menschen の代りに Tausende von Menschen とも云ひます。決して人間の「うち」の數千人と云ふ事ではないのです。drei von diesen Menschen (此の人間たちの中の三人は) 等とは譯が違ふのです。

341. 序數 Ordinalzahlen

erst	最初の	viert	第四の
zweit	第二の	fünft	第五の
dritt	第三の	acht	第八の

以上は一例で、外はみな一定の規則によつて基數から作ります。即ち 19 までは基數の後に -t を、20 以上は -st を加へます。1001 番は、tausend und erst でも tausendundeint でもよろしい。125 番は (ein) hundert fünfund-zwanzigst, 等々。

342. 名詞の後の序數は基數を用ふ

Nr. 31＝Nummer einunddreißig (三十一番)
第三卷＝Band drei
第四章＝Kapitel vier
第五項＝Paragraph fünf
第六條＝Artikel sechs
第七頁＝Seite sieben
第八行＝Zeile acht

343. Karl V.＝Karl der Fünfte

帝王にはよく第何世といふ稱號が附きます。文字に書くと Karl V. とか Heinrich IV. とか云つたやうに序數を羅馬數字で表はしますが、讀む時には、一格ならば Karl der Fünfte, Heinrich der Vierte, 二格ならば Karls des Fünften, Heinrichs des Vierten と云つた樣に、名も番號も共に格變化をさせます。

かういふ風に、既に前にある字の說明ともなる可きものを後に附加したもの、即ち der Fünfte 等を稱して Apposition (同格) と謂ひます。Schulze, sein Freund, kam zu mir, (彼の友人シュルツェが僕の所へ來た) の sein Freund は Schulze の Apposition であると謂ひます。

344. erstens, zweitens, etc.

序數を副詞に用ひる際、(まづ第一に、第二に、等) は、序數に -ens の語尾を附けます。erstens (先づ第一には) zweitens (第二には、其の次には) drittens (第三には) 等々。

345. 分數 ein drittel, ein viertel, etc.

分數は、分子を先に云ひ、分母を後から附けます。分子は基數 ein (eins を用ひず) zwei, drei 等を用ひ、分母は、序數に -el の語尾をつけたものを用ひます。

—— 例 ——

數字	形容詞的用法 (附加詞)	名詞的用法
$\frac{1}{2}$	halb-[語尾を取る]	die Hälfte [半分]
$\frac{1}{3}$	ein drittel	ein Drittel, *n.*
$\frac{1}{4}$	ein viertel	ein Viertel, *n.*
$\frac{7}{23}$	sieben dreiundzwanzigstel	s. Dr.
$\frac{1}{100}$	ein hundertstel	ein Hundertstel

次の樣な特殊の讀み方は凝結形式として覺える事。

$1\frac{1}{2}$＝anderthalb　　$2\frac{1}{2}$＝drittehalb
$3\frac{1}{2}$＝viertehalb　　$4\frac{1}{2}$＝fünftehalb

つまり、viertehalb は 4−½ と考へれば好いわけです。然しこんな讀み方は斯う云ふ簡單な場合に限つて行はれるので、何箇何分の一と正式に云ふ際には——

$4\frac{1}{5}$=vier [und] ein fünftel

$13\frac{7}{12}$=dreizehn [und] sieben zwölftel

$1\frac{1}{2}$=ein [und] ein halb

346. **回數 einmal, zweimal**

一回、二回と云ふ回數は、基數の後に -mal を附けます。das Mal は英語の time です。

形容詞になれば語尾は -malig です。

Er besuchte mich nur einmal. 彼は私を一度だけ訪問した。

Der einmalige Besuch. 一度の訪問。

347. **倍數 einmal, zweimal**

何「倍」もやはり -mal です。zweimal (二倍) と同じ意に doppelt (英語の double) も使ひます。

Er ist hundertmal so reich wie ich.

彼は私の百倍も金持だ。

348. **重數 einfach, zweifach**

何「重」は -fach 又は -fältig の語尾を基數に附けます。但し zweifach は zwiefach, doppelt とも云ひます。

349. **種數 einerlei, zweierlei**

幾「種類」の、は基數に -erlei の語尾をつけます。種數は、附加語になる時に、格語尾を取りません。また -erlei の語尾は數詞以外の字にも附けて、allerlei (種々の) vielerlei (多種の) 等を造ります。

Man unterscheidet dreierlei Richtungen.

人は三種の傾向を區別する。

Er hat allerlei Sorgen.

彼は諸種の心配を持つ。

350. **日附の書き方**

紙手の日附等は次のやうに書きます。(日が四格になる所に注意)

Tokio, den 1. Januar 1926.

讀むと、Tokio, den ersten Januar neunzehnhundert sechsundzwanzig です。(Tokio は發信地です) 日を四格にしないで am 1. 等に書くこともあります。すると am ersten と讀みます。要するに、四格であらうと、am であらうと、序數には -en といふ語尾をつけなければなりません。それからもう一つ注意を要するのは、序數を數字で書く時には、謂はば -ten, -sten 等を省略したやうなもの故、必ず省略の印に點を打ちます。

—— 月の名 ——

Januar, *m.*	一月	Mai, *m.*	五月	September, *m.*	九月
Februar, *m.*	二月	Juni, *m.*	六月	Oktober, *m.*	十月
März, *m.*	三月	Juli, *m.*	七月	November, *m.*	十一月
April, *m.*	四月	August, *m.*	八月	Dezember, *m.*	十二月

—— 曜日 ——

Sonntag, *m.*	日曜	Donnerstag, *m.*	木曜
Montag, *m.*	月曜	Freitag, *m.*	金曜
Dienstag, *m.*	火曜	Sonnabend, *m.* / Samstag, *m.*	土曜
Mittwoch, *m.*	水曜		

Den wievielten [wievielsten] haben wir heute?

今日は何日ですか?

Heute haben wir den zwölften August.*

今日は八月十二日です。

註。*——August の發音は「アウグスト」です。「あウグスト」と發音すると人名になります。

351. **時刻の唱へ方** 時刻の唱へ方には大分獨逸語の特有性があります。Wie spät ist es? (何時頃でせう) または Wieviel Uhr ist es? といふ問ひに對しては、一時ならば Es ist ein Uhr と云ひます。Uhr には「時計」といふ意味もありますから eine Uhr と云へば「一つの時計」ein Uhr といへば「一時」です。また Es ist eins または es ist Punkt eins と云つも宜しい。二時、三時等は各々 zwei Uhr, drei Uhr または單に zwei, drei です。(zwei Stunden〔二時間〕とは違ふわけです。)

次に「半」と十五分、四十五分、が附く時には、ドイツ一流の奇々怪々なる唱へ方があります。或る日本人が halb sieben に晩餐に來いと招待されて halb (半) sieben (七) だから七時半だらうと思つて出掛けたら相手を一時間も待たせて恥を掻いたさうですが、無理もない話ですね。halb sieben は六時半です。

それから十五分を ein Viertel (eine Viertelstunde) 即ち四分の一時間と云ひます。そして、たとへば五時十五分ならば、「六時に向つて十五分」と云ひます。

ein Viertel auf 6.	五時十五分
ein Viertel auf 1.	十二時十五分
drei Viertel auf 12.	十一時四十五分

それ以外の半端な數になると次の樣な形式によります。

Es ist zwölf Minuten über (nach) eins.	一時十二分過ぎ
Es ist fünf Minuten vor zwei.	二時五分前
Es ist in drei Minuten fünf.	あと三分で五時になる
Neun Uhr zwanzig.	九時二十分
um neun Uhr zwanzig.	九時二十分に
gegen zwei Uhr.	二時頃

352. **量詞** 數ではなく、單に量 (Quantität) を意味する詞があります。

all	凡ての	mehrer-(e)	數個の
ganz	全部の	einig-(e)	二三の
viel	多くの	etlich-(e)	(同上)
wenig	少き	manch	夥しき
ein wenig	少しの	ein paar	二三の
ein bißchen	少しの	etwas	いくらか
genug	充分	nichts	少しも (nothing)
kein	何等の (否定)		

既知の單語もかなり多い事でせうから、以下、一字について一つづつ應用例を示すに止めませう。詳しい用法や、語尾の問題になるとかなり厄介で、混亂を來たす虞れがありますから。

1. [all-] Diese Bücher habe ich **alle** gelesen.
(これらの書物を私は全部讀んでしまつた。)

2. [ganz] Das **ganze**[31] Buch ist ein Schwindel.
(書物全體がペテンだ。)

3. [viel] Lies nicht **vieles**, sondern **viel.**[32]
(色んなものを讀むな、[一つの物を] うんと讀め。]

4. [wenig] Nur **wenige** dieser Bücher sind lesenswert.
(これらの本の中で讀む價値のあるのはほんの僅かだ。)

5. [ein wenig] Ich habe nur **ein wenig** in diesem Buche gelesen.
(私はただ一寸此の書物を讀んで見たきりだ。)——量詞は斯う云ふ風に副詞としても用ひられます。

6. [ein bißchen] Es gehört[33] **ein bißchen** Urteil dazu, sich wohlgeschriebene Bücher anzuschaffen.
(好く書かれた書物を仕入れるには相當の頭が要る。)

7. [genug] Bücher hat er schon **genug**, es fehlt ihm nur noch an Zeit.

(本はもう充分持つてゐる、あとは時間だけの問題だ。)——後半部を直譯すると、「彼はただもはや時間に於て缺くる所あるのみ。」

8. [kein] Es gibt Dinge auf der Welt, die wir aus **keinem** Buche lernen können.

(世には書物なぞでは學び得ない事柄がある。)

9. [mehrer-] An diesem Buche bewundert[34] man **mehrere** Verdienste, die die andern nicht haben.

(此の書物には、他の書物にない幾多の美點が見受けられる。)——意譯ですからよく原文を判斷して考へて下さい。

10. [einig-] An **einigen** Stellen dieser Briefe habe ich Druckfehler gefunden.

(此の講座の二三の個所に私は誤植を發見した。)——「講座」のことをよく Briefe と云ひます。つまり「通信」講義のことです。

11. [etlich-] Ich habe auf **etliche** sogenannte „Kurse" abonniert, aber keiner hat mich noch befriedigt.

(僕は所謂講座つてえ奴を二三豫約してみたが、どれもあきたらなかつた。)

12. [manch] **Manche** Sprachbriefe heißen methodisch, sind jedoch[35] nur Stück- und Flickwerke.

(系統的と稱しながら其の實單なる寄せ集めの繼ぎはぎに過ぎない語學講座が隨分ある。)

13. [ein paar] Deutsch in **ein paar** Wochen? Das geht doch wohl nicht.[36]

(ドイツ語を數週間で? さうは行くまい。)

14. [etwas] „**Etwas** von allem!" Schon gut, aber dabei verliert man zu viel Zeit.[37]

(「色んなことを少しづつ!」——それもよからう、併しさうすると時間の損失が大變だ。)

15. [nichts] Alles im Ernst nehmen heißt[38] **nichts** im Ernst nehmen.

(凡てを眞面目に取るといふ事は何をも眞面目に取らないと云ふ事である。)

第三十九講

固有名詞

353. 人名に就て　人名は名 (Vorname, Taufname) と姓 (Familienname) とから成ります。例へば Martin Luther〔まルティン・るッテル〕等。

後に來る姓の方は、色々と變つたものもあり、またよくあるものもあつて、その有樣は先づ日本人の姓と大して相違ありませんが、呼び名の方は大體決まつてゐて、普通に用ひられるのは男女とも各々ほんの百位しかありません。その內でも最も主なのを擧げると（アクセントに注意して下さい。いやに澤山ありますが、まあ好い加減にサッと見渡せば好いでせう。）

—— 男名 ——

Ge'org [Geo'rg]	Karl	Hei'nrich	Franz
Friedrich	Fritz	Lu'dwig	Hans
Jo'hann	A'nton	Au'guſt	Hu'go
Max	Ro'bert	Kurt	Paul
Ste'phan	O'ſkar	O'ſwald	Mo'ritz
Mi'chael	Mi'chel	U'lrich	Ru'dolf
Le'opold	Ma'rtin	Ku'no	O'liver
Veit	Vi'ktor	We'rner	Wi'lhelm
Jo'ſef	Chri'ſtian	Maximi'lian	Tobi'as
Klaus	O'tto	Tho'mas	Si'mon
Da'niel	Die'trich	Fe'rdinand	Fe'lix
Ba'ſtian	Juſt	E'mil	E'rwin
E'dgar	Eu'gen	E'wald	Ko'nrad

Ge'rhard	E'duard	E'dmund	Gu'ſtav
Kle'mens	Hube'rt(us)	Ju'lius	Le'o
Le'onhard	Sie'gmund	Sie'gfried	Si'gismund
Wa'ldemar	Seba'ſtian	Sta'nislas	Ri'chard
E'rnſt	Phi'lipp	Zachari'as	

—— 女名 ——

Marie' (Mari'a)	A'gnes	Lui'ſe	Eli'ſe	J'da
A'nna	Ba'rbara	Be'rt(h)a	E'mma	J'lſe
Lau'ra	E'va	Mi'nna	Ma'rtha	Maria'nne
Pauli'ne	Ro'ſa	Regi'ne	Ulri'ke	Sophie'
Suſa'nna	There'ſe	Ra'hel	Ama'lie	Otti'lie
Augu'ſte	Betti'na	Alberti'ne	Leono're	Hi'lde
Henrie'tte	Ju'lie	Karoli'ne	Kathari'ne	Kloti'lde
Korne'lie	Ge'rtrud	He'dwig	Charlo'tte	Dorothe'a
Ade'le	Meluſi'ne	Hele'ne	J'rmgard	Iſabe'lla
Erneſti'ne	Pauli'ne	Friederi'ke	Euge'nie	Natha'lie
The'kla	Roſali'nde	Roſamu'nde	Oli'via	Sa'rah
Ha'nna	Margare'the	Magdale'na	Mathi'lde	Anaſta'ſie

呼名には、元來同名でありながら、異形のあるものが澤山あります。たとへば Minna, Mina, Minne, Mine は Wilhelmine の略形、Hans は Johann の略形であるやうに。——けれども其の人によつて Hans と云ふのもあれば Johann といふのもあります。つまり略形によつて名の選擇範圍が廣まつたわけです。

354. 强音の法則　固有名詞ばかりではなく、强音が何處にあるかは常に注意しなければなりません。固有名詞に關して云ふと、人名のアクセントは、辭書を引いて見て、後の方にあ

るのと前の方にあるのと二つとも登錄してあつた際に、どちらを取つたら好いかと云へば、それは大抵前にある方を取つた方が近頃のドイツ語らしくなります。即ち、最近のドイツ語の傾向は、固有名詞のアクセントはなる可く前に、といふ事になつてゐます。Georg ならば、「げオルク」と「ゲおルク」と二つ讀方がありますが、その時は「げオルク」の方が新しいのだと思へば好い譯です。

一つ注意すべきは Augu'st は八月、Au'gust は人名です。また Anton なぞは、實はラテン名の Anto'nius ですが、それが獨逸化 (eindeutschen) される時には、强聲のある所で切れて、先づ Anton' になり、次に A'nton になつたわけで、これでもその傾向がわかると思ひます。

次に女の名で注意しなければならないのは、Amalie, Ottilie, Julie 等 -ie の語尾は、强聲がそれよりも前に行つてしまふと i-e (イエ) と分けて發音します。即ち Amalie は「アまーリエ」で、「アまーリー」ではありません。(但し Marie', Sophie' は例外で、「マりー」「ゾフぃー」)

强音の在り場所を知つてゐると、略形が見分けられます。たとへば Lenchen (れーンヒェン) といふのがあつたら、それは Magdale'ne の略形 Le'ne に縮小語尾 -chen が附いたのだ、と云つたやうに。

355. **人名の格變化**
二格 -s

人名の格は、大抵の場合ただ二格に -s が附くだけで、おまけに冠詞が附きませんから、前後の文脈によつて理解しなければならぬ場合が多いのです。たとへば Emma war zumute, als müßte sie zusammenbrechen (エンマは、何だかがくりと倒れさうな氣がした。) と云ふと、Emma が主語で一格のやうに思はれますが、假に Emma の代りに「彼女」として見ると本當の構造がわかります。また同時に省略されてゐる非人稱主語の es を、倒置された位置に置いて考へて見るとよろしい。(es の省略については第三卷 277 參照)

Ihr war [es] zu Mute, als müßte sie zusammenbrechen.

つまり Es ist mir zumute〔それは、私に、氣持に、斯くの如くある＝私には云々の氣持がする〕といふ非人稱句の應用です。それを知つてゐないと Emma の格がわかりません。

(1) 大抵の場合は二格に -s を附けるだけの變化です。

1.	Karl	1.	Emma
2.	Karls	2.	Emmas
3.	Karl	3.	Emma
4.	Karl	4.	Emma

(2) s, ß, z, tz, sch, 等、所謂 Zischlaut〔飛箭音＝第二卷 120 の 2 參照〕に終る人名は、二格を -ens にします。そして三格四格を -en で表現することが極く稀にあります。

1.	Hans	1.	Fritz
2.	Hansens	2.	Fritzens
3.	Hans[-en]	3.	Fritz[-en]
4.	Hans[-en]	4.	Fritz[-en]

(3) -e に終る人名 (姓も名も) にも上例を適用することがあります。けれども、現今のドイツ語では、女性二格の外は〔 〕の中を省きます。

1.	Goethe	1.	Regine
2.	Goethe[n]s	2.	Regine[n]s
3.	Goethe[n]	3.	Regine[n]
4.	Goethe[n]	4.	Regine[n]

(4) 人名等にあつては、二格にはよく定冠詞を附します。それは語尾が -s に終るから s が附けられない所から來たらしいが、別に s で終らない人名にも附けるやうになりました。その際二格語尾の s は必ず省きます。

des Sophokles	ソフォクレスの	des Faust	ファウストの
des Cicero	シセロの	des Hamlet	ハムレットの

(5) 近頃流行り出したのは、これを、人名ばかりでなく、凡ゆる固有名詞に適用する傾向です。外國名はやむを得ないとしても、des Rhein, (ライン河の) des Vesuv (ヴエスヴイヤ山の) 等は -s を附ける方が本當なのですが、近來は附けない方がむしろ普通になつて來ました。

356. **人名を附加語にする 'sch=**　先づ二格と同じ事になりますが、「誰それの」といふ附加語を作るには 'sch の語尾を用ひます。

Der Goethe'sche Faust	ゲーテのファウスト
Die Tieck'sche Übersetzung	ティーク譯

357. **地名を附加語にする =er**　地名を附加語にする時は、勿論二格 (=s) も時には用ひますが、もつと名詞と密接な關係を生ぜしめるのは =er の語尾です。これは形容詞の如くであつて、その辭格語尾の變化をしません。

Berliner Akademie	伯林翰林院
Münchner Bier	ミュンヒェン麥酒
Straßburger Münster	シュトラスブルクの大寺院

〔備考〕—— =er の語尾の地名附加語は、上例の如く、必ず名詞の前に置かれます。名詞の後へ來る時には Berlins でなければなりません。Berliner と Berlins との間には一寸した區別があつて、前者は「伯林云々」後者は「伯林の」です。前者は句そのものを固有名詞化し、後者は普通名詞であつてもよろしい。伯林の街道は Die Straßen Berlins または Die Straßen von Berlin ですが、もし Berliner Straße と云へば「伯林街」といふことになります。

358. **稱呼 (die Anrede)**　人を呼ぶ時の稱呼の主なものは、

Herr Müller	ミュルレル氏 [英語 Mister Müller]
Frau Müller	ミュルレル夫人 [英語 Mrs. Müller]
Fräulein Müller	ミュルレル孃 [英語 Miss Müller]
Ihr Herr Vater	あなたのお父樣
Ihre Frau Mutter	あなたのお母樣
Ihre Fräulein Tochter	あなたのお孃さん
Ihr Herr Sohn	あなたの御子息

Herr といふ字は、次の樣な特別な變化をします。

1.	Herr	Herren
2.	Herrn	Herren
3.	Herrn	Herren
4.	Herrn	Herren

359. **國名の形容詞は小文字に書く**　國名が附加語になる時には形容詞を用ひます。その時は、英語とは違つて、小文字で書きます。

die japanische Sprache	日本語
der deutsche Fleiß	ドイツ人の勤勉
die französische Jugend	フランスの青年達

360. **國名、形容詞、國人名**　國名と、その形容詞（その國語にも用ひます）及びその國人を表はす言葉には、絶對的に通用する規則がありませんから、主なるものに就て一應眼を通しておく必要があります。

國名		形容詞(國語)	國人
Deutschland	ドイツ	deutsch	der Deutsche [形]
Ja'pan	日本	japanisch	Japaner
England	英國	englisch	Engländer
Frankreich	佛國	französisch	Franzose [弱]
Rußland	露國	russisch	Russe [弱]
China	支那	chinesisch	Chinese [弱]
Italien	伊太利	itali=enisch	Itali=ener
Spanien	西班牙	spanisch	Spani=er
Portugal	葡萄牙	portugiesisch	Portugiese [弱]
Holland	和蘭陀	holländisch	Holländer
Be'lgien	白耳義	belgisch	Belgi=er
Polen	波蘭土	polnisch	Pole [弱]

Ame'rika	亞米利加	amerikanisch	Amerikaner
Türkei', *f.*	土耳古	türkisch	Türke [弱]
Ungarn	匈牙利	ungarisch	Ungar [弱]
Dänemark	丁抹	dänisch	Däne [弱]
Schweden	瑞典	schwedisch	Schwede [弱]
Norwegen	諾威	norwegisch	Norweger
Griechenland	希臘	griechisch	Grieche [弱]
Rom	羅馬	römisch (*)	Römer
Schweiz, *f.*	瑞西	schweizerisch	Schweizer

【註】 (1) 羅馬だけは、拉丁語 (Latein, Lateinisch) と謂ひます。(2) 國名で -ien に終るものは必ず i-en と二つに分けて發音します。そしてアクセントはそのも一つ前にあります。(Spanien シュパーニエン) (3) 人名の -ier に終るものも同樣。(Spanier シュパーニエル、Belgier ベルギエル等) (4) 土耳古、瑞西以外の國名はすべて中性。(5) チエコスロワキヤは Tschechoslowakei', tschechoslowakisch, Tschechoslowak〔弱〕が本當ですが ch を k とも書きます。(6) 女性、男性の國名地名河名、山名等は殆んど普通名詞として扱ひ、定冠詞を附けます。die Schweiz, der Rhein, der Brocken, die Alpen, *pl.* 等。(7) der Deutsche に關しては第二卷 192 の最後を見よ。

361. Die **Müllers** sind verreist

固有人名に複數の s を附して家族全部を指すことがあります。その際、前置詞がつかないと定冠詞をつけます。

Die Müllers sind verreist. ミュルレル一家は旅行中で不在。

Ich wohne bei Webers. 私はヱーベル氏宅に住んでゐる。

此の -s は、本當は二格の s なんで、——英語の方で云ふ saxon genitive——俗に Doktors Nestchäkchen (ドクトルの所のネストヘークヒエン=最近の少女小說の主人公) とか、Kellers Ännchen (ケルラーの所のアンナさん) とか云ふのと同じで、「誰それの所の」といふ意味なのです。本當の複數の -s は次のやうな時に用ひます。

Die Luthers von diesem Jahrhundert.

今世紀のルッテル達

つまり、ルッテルにも比較すべき人達の意です。

第四十講

命令法

362. 命令法に關する一般的規則

命令法といへば、人稱は第二人稱が問題になる譯ですが、その二人稱が單複二形あり、その他になほ Sie といふ尊稱がありますから、結局次のやうなことになります。(線で現はしたのは不定法の語幹です。)

命令法の語尾 (不定法の語幹に附す)		
du に對するもの	ihr に對するもの	Sie に對するもの
——e!	——(e)t!	——en Sie!

適用例 sagen		
du	ihr	Sie
sage!	sagt!	sagen Sie!

注意。(1) sein のみは sei! seid! seien Sie!——(2) du に對する (e)! は省かれる事もあります。來れ! は komme! または komm!——(3) tun, wandern 等、不定法の語尾が -en でなく -n のときは、尊稱命令形も tun Sie! wandern Sie! 等。

363. Gib! =geben の命令法

ところが、ある種の不規則動詞には例外があります。それは、(第二卷 121 參照) 現在の人稱變化に於て、du と er との所で、不定法語幹 e を i 又は ie に變ずる動詞です。たとへば geben は ich gebe, du gibst, er gibt と變化します。さう云ふ動詞にあつては、du に對する命令形は、母音が i に變じ、且つ -e の語尾を決して附けません。たとへば、geben ならば gib! で、362 項の表の通りに考へて gebe! と云つてはいけないのです。

命令法の不規則				
不定法		〔汝〕	〔汝等〕	〔あなた〕
geben	與へる	**gib!**	gebt!	geben Sie!
essen	食ふ	**iß!**	eßt!	essen Sie!
nehmen	取る	**nimm!**	nehmt!	nehmen Sie!
stehlen	盜む	**stiehl!**	stehlt!	stehlen Sie!

これは別に澤山の例をあげるまでもなく、第二卷末に附した不規則動詞の表に親しんで下されば、各々その動詞について擧げてあります。

此の機會に一寸 Orthographie (正字法) といふものが如何に獨斷的なものかと云ふ點に注意して頂きたい。それは geben です。ich gebe〔イヒ・ゲーベ〕はまづ宜しいとして、du gibst, er gibt の gib- は「ギブ」ではなく、「ギーブ」です。かういふ時には、他でならば決して i は用ひないで、ie を用ひることに統一されてゐます。(例へば Sieb 篩 Lied 歌 hier 此處 lieb-en 愛する)、i だけでも構はないのだが、其處は習慣といふものです。故に暫く前までは du giebst, er giebt, 命令法は gieb! と書いてゐたのですが、近頃は、どういふ譯だか i と書くやうになつてしまひました。gibt よりも giebt の方が他の類例に合つてゐて眼ざはりが好いのですがね。

その辯、おゝ我儘なる正字法よ、既に h が母音を延ばして呉れて、e の必要なぞは一向ない所に於て、わざわざ e を入れます。(stiehl! 盜め!)

もう一つ注意。幹母音 i の命令法には -e の語尾は附けないと云ひましたが、聖書口調を眞似た siehe! (見よ! 英語ならば behold!) だけは例外です。ルッテルが獨譯した聖書は獨逸人には昔から非常に親しいものになつてゐて、ちよいちよい斯うした古形を傳へてゐます。

364. **Geben wir!＝複數一人稱の命令法**

複數一人稱にも、命令法に相當するものがあります。英語でも let us give! は或種の意味に於て複數一人稱の命令法です。

獨逸語でも let us give と同じ樣に Laß (又は Laßt) uns geben と云ふ事もありますが、助動詞を用ひないで云ふと、尊稱の場合と同じ樣に主語を入れて、Geben wir! 等になります。

Seien wir aufrichtig! 我々をして正直ならしめよ。
Gehen wir fort! さあ往かう。

365. **Er gebe!＝單數三人稱の命令法**

第三卷 209 で述べた通り、三人稱の命令法には、接續法第一式を用ひます。geben ならば du の gib! に對して er gebe! になる所に注目を要します。

念のために文例を擧げませう。

1. Der Herr hat's gegeben, der Herr hat's genommen; der Name des Herrn **sei** gelobt! (Hiob 1. 21.)

エホバ與へエホバ取り給ふなり、エホバの御名は讃むべきかな。——〔即ち、讃へられてあれ!〕(約百記第一章二十一節。)

2. Unser Vater in dem Himmel, dein Name **werde** geheiligt, dein Reich **komme**, dein Wille **geschehe** auf Erden wie im Himmel.

(Matthäus, 6. 9.)

天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を、御國の來らんことを、御意の、天のごとく、地にも行はれん事を。(馬太傳第六章第九節)

366. **命令文の諸種の形態**

然らば命令文には必ず以上に擧げた樣な命令形の動詞を用ひるかと云ふに、そんな窮屈なものではありません。むしろさうでない場合が多いと云つた方が事實に忠實なる所以でせう。その一例をあげて見ると——

(1) 過去分詞を用ひる方法。(本卷 373 參照)。

(2) 副詞的規定 (332 參照) を用ひる方法。たとへば aufs Pferd! (馬に乘れ!) nach Paris! (巴里を突け!) hinweg! (失せろ!) aus meinen Augen! (出て行け!) Ins Gefängnis mit ihm! (此奴を投獄しろ!)——mit ihm の mit に關しては第三卷 271.

(3) 不定法を用ひる場合。——これは、同じ命令の意味でも、例のニュアンス〔nuance; Schattierung; Abschattung;＝濃淡、色合ひ、潤色〕が一寸ちがつてきます。譯語に注意して讀んで下さい。(さう云へば過去分詞の場合も略此の場合と同樣なニュアンスを帶びてゐると思つて構ひません。)

Nur nicht gleich **weinen,** ja?

そんなに直ぐ泣いちやあ駄目、ね？

Lieber[39] eine Sache ganz **tun,** als mehrere Dinge nur halb.

色んな事を中途半端にやるよりはむしろ一つの事を完成するに如かず。

Was bereuen! Luft muß man sich machen! drauf **losschlagen!** Dann liegt alles hinter einem, dann ist alles vorbei, Angst und alles.[40]

[A. Döblin, Berlin Alexanderplatz.] (少々雛文です)

後悔もへつたくれもあつたもんか！溜飲を下げなくつちやあ！えらい勢でやつつけりやあ好いんだ。さうすりやあ、何もかも片がつくよ、きれいに無くなつちやふよ、怯氣だつて何だつて。

〔ア・デープリーン、「伯林アレキサンデル廣場」〕

斯う云ふ風に、不定形を用ひる時は、命令〔Befehl〕といふよりはむしろ助言〔Rat〕です。

(4) 妙に意地悪く、しかも高飛車に出て命ずる時には、werden を用ひた未來形を使ひます。

Du **wirst** es **tun,** sonst **kriegst**[41] du nichts zu essen.

しろと云つたらするんだ、しなけりやあ食はさぬからさう思へ。

(5) それがもつと強くなると、直接法の普通の現在になります。

Du **bleibst** bei mir, das ist klar.

お前は私の所にゐるんだといふに、わからない兒だよ此の兒は。

註。——このところ、譯はすべて思ひ切つた意譯です。

第四十一講

過去分詞と現在分詞

分詞に就ては最早機會ある毎に充分說明しましたから、以下に一寸之れまでに述べる機會のなかつた不規則的な、または特有な現象を一括します。

普通の現象に就ては次の各項を參照して下さい。

—— 過去分詞 ——

第二卷	107	規則動詞の三要形
	108	不規則動詞の三要形
	112	各時稱の組立方
	115	受働形は werden と過去分詞
	150	分離動詞の三要形
	193	過去分詞の名詞化
第三卷	208	接續法の過去
	256	Ich habe es nicht verstehen **können.**
	257	Ich habe es nicht **gekonnt.**
第四卷	295	過去の不定法
	366	命令法の諸種の形態

—— 現在分詞 ——

第二卷	114	獨逸語に進行形なし
	118	受働形の形容詞化
	194	現在分詞の名詞化
第四卷	292	zu erklärend 等

367. **現在分詞** 獨逸語には、英語の所謂進行形 (progressive form) なるものがありません。それは 114 に於て述べて置きました。その時に英語の -ing に相當する語尾が -end である事を一寸注意して置きましたが、玆で改めて其の用法を述べる事にします。

現在分詞は、形容詞または副詞句として用ひられます。決して英語の樣に名詞としては用ひません。名詞として用ひる英語の -ing に相當するのは、獨

逸語では不定法 (282) または動詞の語幹に -ung の語尾を加へた女性名詞です。または全然獨立した一つの名詞です。

dancing=Tanz, *m.* Tanzen, *n.*	舞踏
skating=Schlittschuhlaufen, *n.*	スケーテング
meaning=Bedeutung, *f.*	意味

たとへば sleeping car (寢臺車) なぞをその儘現在分詞で獨逸化すると、「眠れる車」といふ事になつてしまひます。(schlafender Waggon! schlafender Wagen!) 獨逸語では斯う云ふ際には大抵複合名詞を作つて Schlafwagen と云ひます。

次に現在分詞の本當の使ひ方の簡單な場合を示します。

(1) 形容詞として用ひる場合。

der bleibende Zustand	繼續的狀態
ein rasender Hund	狂へる犬
die fliehende Zeit	過ぎ行く時
das schlafende Kind	眠れる小兒

(2) 副詞として用ひる場合。

abwechselnd, *adv.*	交々
entsprechend, *adv.*	それに準じて
eingehend, *adv.*	詳しく
erschöpfend, *adv.*	遺漏なく、餘す所なく

形容詞として用ひる場合は勿論客語〔述語〕にもなります。たとへば Er ist vaterlandsliebend (彼は愛國的である) けれども動詞の進行形とは譯が違ひます。彼は今祖國を愛しつつあると云ふ、「狀態」を指すのではなくて、抑々彼なるものの「性質」一般を指すのです。

368. **現在分詞を基礎とする附加句** 名詞の前に附加される詞を附加語と呼んで來ましたが、それが二語以上になつて、句としての構造を持つてゐると、

語は變だから、句と云はざるを得ません。次の文例に就て、分詞の附加的用法を研究して下さい。附加句そのものの內部の構造は、副文章と同樣、即ち日本語と同樣の配語をする所に眼をとめて下さい。

1. Die lustig durcheinander singenden Vögel.
   愉快に入り亂れて歌つてゐる小鳥たち。
2. Die von weitem über das Kornfeld herüberrauschende Donau.
   遠くから穀物畑の上をこちらへとざわめき響いて來るドーナウ河。
3. Das vom Fenster in dem Garten hinunterschauende Kind.
   窓から庭の中を見下ろしてゐる小供。
4. Ein auf der breiten Straße dahinfahrender Wagen.
   廣い街道の上を彼方へと馳せて行く馬車。

此等の場合、現在分詞は勿論純然たる形容詞として扱ふのですから、すつと前に離れて立つてゐる冠詞屬に相當する如く、形容詞變化の規則に從つて、或ひは强、或ひは弱の格語尾を採ります。上例は一格の場合のみですが、二格三格四格になればまた從つて分詞の語尾も變つて來ます。

369. **過去分詞の意味** 既に完了時稱の構成法の時に述べた如く (第二卷 113 haben か sein か?) 過去分詞は、その動詞が他動詞であるか自働詞であるかに從つて、意味が二つに分れます。

(1) **他働詞の過去分詞は受働の意を持つ。**—— 但しそれが過去の受働か現在の受働か(云々された所の、か、云々される所の、か)は一定しません。

die **aufgemachte** Tür	開けられた扉 (完了の意)
der **gestrafte** Schulknabe	罰せられた學童 (完了の意)
der **gefürchtete** Lehrer	恐れられてゐる教師 (狀態、現在)
mein **geliebtes** Vaterland	我が愛せられたる祖國 (狀態、現在)

現在の意か過去の意かは、やはり第二卷の 113 で述べた區別に從つて、そ

の動詞が狀態動詞 (Durativa) に屬すれば現在の意、時間の或る長さを要しない動作の動詞であれば過去の意になるわけですが、それはほんの概括的な規則で、むしろ日本語の「られた」と同樣、場合によつて色々な意味になると思つた方が事實に副ひます。

(2) **自働詞** (純自働詞) **の過去分詞**は、受働の意は持たず、能動の過去の意を持つてゐます。過去分詞といふ名はむしろ此の方にのみ文字通りあてはまるわけです。「完了分詞」とも謂へませう。

der **verstorbene** Vater	死んだ父
das **eingeschlafene** Kind	眠り込んだ小供
ein **gefallenes** Mädchen	墮落した少女
der **aufgewachte** Wald	目ざめた森

純自働詞に限るといふ但書を附したのは、獨逸語では、凡そ四格の補足語を取らないものの事を凡て自働詞と云ひますから、さうすると helfen 助ける、は einem helfen (或人に助ける) ですから、自働詞だといふ事になつて、過去分詞 geholfen は能動の意になるか、といふ疑問が生じますから、さう云ふ場合を除外したのです。要するに玆に純自働詞と名づけたのは、完了形を作る時に sein の助動詞を採るものの意です。詳しくは 113 を見て下さい。

370. 過去分詞を基礎とする附加句

過去分詞の意味が二つに分れる故、それを基礎とする附加句も亦「受働」の意の場合と「完了」の意の場合との二種類に分れる譯です。

(1) 受働の意になる場合。(他働詞の過去分詞)

1. Die längst erwartete Befreiung.
   長らく待たれてゐた解放。
2. Der wegen eines Vergehens bestrafte Soldat.
   ある過失のために罰を受けた兵士。
3. Eine vom feindlichen Heer geplünderte Stadt.
   敵軍のために掠奪を蒙つた某市街。

4. Ein von allen seinen Schülern gefürchteter Lehrer.
   自分の受持ちの凡ての生徒から恐れられてゐる某教師。
5. Ein kleiner, wenig betretener Felsweg.
   一つの小さな、あまり人の通らぬ岩道。

(2) 完了、即ち過去の意になる場合。(純粹の自働詞)

1. In einem völlig dunkel gewordenen[43] Zimmer.
   一つの全く暗くなつてしまつた部屋の中で。
2. Statt der in ihrem Sessel eingeschlafenen Großmutter.
   自分の肘掛椅子の中で眠り込んでしまつた祖母の代りに。
3. Aus dem gerade vor mir stehen gebliebenen Wagen.
   丁度私の前で立ちどまつた馬車の中から。
4. Ein von seiner Mutter fortgelaufenes Kind.
   自分の母の許をとび出して來た子供。
5. Wie ein aus einem bösen Traume aufgewachter Knabe.
   惡夢から目ざめた少年の如くに。

斯う云ふ區別がありますが、動詞によると、他働詞と自働詞との兩意を持つてゐる事があります。(brennen, 燒く、燒ける、zerbrechen 碎く、碎ける) ところが、面白い事には、その過去分詞は期せずして事實的 (sachlich) に一致するものです。Der zerbrochene Krug は、「碎かれた甕」であらうと、「碎けた甕」であらうと、結果はちつとも變りません。けれどもさう云ふ際は、他の何の規定もなければ「碎けた甕」と考へるのが至當です。

371. 分詞を基礎とする客語的[述語的]副詞句

現在分詞、または過去分詞の前に色んな規定を附けると、副詞句ができます。その際特に注意して貰ひたいのは、次の (3) に述べる、補足語を有する他働詞の過去分詞句です。

(1) 現在分詞を基礎とする客語的副詞句。

Die Kammerjungfer steckte ihr kleines Gesichtchen, sich nach allen Seiten umsehend, zwischen der Laube hindurch. (Eichendorff, Taugenichts.)

侍女はあたりの様子を窺ひながら、その小さな顔を［窃と］薬棚の中から突き出した。（アイヒエンドルフ、怠惰日記）

(2) **過去分詞を基礎とする客語的副詞句。（受働の意）**

Rechts und bei weitem[44] näher, als Albert gedacht hatte, lag die Burg, durch eine breite Waldschlucht von dieser Stelle getrennt.

(Hauff, das Bild des Kaisers.)

右の方に、そしてアルベルトが考へてゐたよりはずつと近く、城は幅の廣い森の峡谷によつて此の場所から距てられて横たはつてゐるのであつた。（ハウフ、皇帝の肖像）

(3) **過去分詞を基礎とする客語的副詞句**
（補足語を伴へば能働の意）

Er riß ihr mit verstörter Beeiferung ein Bund Schlüssel von der Hüfte, das sie bei sich trug, und, **einen gefunden,** der paßte, warf er den Bund in den Saal zurück und verschwand.[45]

(Kleist, Der Findling.)

彼は（氣絶した）彼女が携へてゐた一束の鍵を、あはただしく彼女の腰からもぎ取つて、その中から丁度合ふのを見出すと、束を部屋の中へ投げ戻して、姿を消した。

（クライスト、拾ひ子）

【註】これは、言ひ換へれば nachdem er einen gefunden hatte です。斯ういふ形式に似てゐるのは、たとへば den Blick auf mich gerichtet（視線を私に向けて）die Hand auf die Stuhllehne gestützt.（手を椅子の背に凭せかけて）等の言ひ廻しです。よくある間違ひは（恐らくは英語や佛語の語法から來るのでせうが）此の際 die Hand 等の補足語を一格と考へ違ひすることです。それが一格でない事は、その言葉が男性の時にはつきりと解ります。die Hand では疑問が起るが、den Kopf なら異議はないでせう。念のために引用します。

Beim Aufziehen des Vorhangs steht Hero in der Mitte der Bühne, **den** herabgesunkenen **Kopf** in die Hand gestützt, vor sich hinstarrend. (Grillparzer, Des Meeres und der Liebe Wellen.)

幕が上つた瞬間、ヘーローは、だらりとうなだれた頭を手に凭せ、前方を凝視したまゝ舞臺の中央に立つてゐる。

（グリルパルツエル「海の波瀾の波」。）

此の語法は必ずしも過去分詞の場合ばかりではなく、たとへば die Pfeife im Mund（パイプを口にくはへて）等の副詞句に於ても同じで、die Pfeife は四格です。「パイプは口に」、ではなく「パイプを口に」、です。

(4) **過去分詞を基礎とする客語的副詞句。（純粋自働詞の場合は意味は完了過去。）**——次項 372 參照。

in seine Gedanken verloren.	考へにふけりつつ
in seinem Zimmer geblieben	自分の部屋にとどまつて

以上四種の副詞句は、勿論副詞なのではなくて、述語（客語）なのですが、その述語が副詞的に使はれるといふ意味です。述語は諸種の形を取つて現れます。

372. Eine Kugel **kam geflogen**

純粋自働詞の過去分詞は、受働の意味を持たず、むしろ能動の意味ですから、或る場合には現在分詞と全く同じ意になります。「飛んで來る」、「乘つて來る」、「やつて來る」、「出掛けて來る」、等、「來る」、といふ kommen と共に用ひる動詞を過去分詞にするのはそのためです。

Eine Kugel **kam geflogen.**

一つの彈丸が飛んで來た。

Ein Jäger **kommt geritten.**

一人の狩人が馬に乘つて來る。

Ein Trupp Arbeiter **kommen gezogen.**

一群の勞働者がやつて來る。

Ein Kind kam herbeigetrippelt.

一人の子供がちょこちょこと駈け寄つて來た。

373. **過去分詞の命令的用法**

人を勵ますやうな時の命令形として過去分詞を用ひるのは極く普通の現象に屬します。

Vorgesehen!	注意しろ！危ない！
Stillgestanden!	氣をつけ！
Die rechte Hand vorgestreckt!	右手を前に延ばせ！
Frisch getrunken!	さあ、ぐいと飲んだ！
Nicht gezagt!	恐れをなすな！
Mut gefaßt!	勇氣を出せ！

此の際の Mut, die rechte Hand 等も補足語ですから、四格です。男性ならばそれが形に現れます。Wohlauf, noch getrunken den funkelnden Wein! (いざ、今はの際に輝く酒を飲み乾さむ。)

374. **過去分詞の次の haben, sein の省略**

副文章に於て過去分詞の次に haben または sein の定形が置かれて完了時稱（第二卷 112）を構成するのは定形後置の結果當然起つて來る現象ですが、その際後置されるべき助動詞（hat; ist; hätte; wäre 等々）の方は往々にして省略されます。それは、前から文脈が續いて來てゐれば、意味の上から直ぐわかるからです。

Er ging, nachdem er von seinem Vater Abschied genommen [hatte], zum[46] Tore hinaus.

彼は父に暇を乞うた後、門を出て行つた。

此の文例でもわかる通り、助動詞定形の省略は、主として途中にある時、即ちその次になほ文が續く時に行はれます。

375. **過去分詞の純形容詞化**
（又は純副詞化）

これも凝結現象に屬します。過去分詞はそれ自身既に形容詞のやうなものではありますが、前にも述べた通り、やはり元の動詞と密接な關係があつて、或ひは受働狀態を意味し、或ひは完了した能動の動作を意味するのが普通です。ところが、或種の過去分詞は、年月の經つ中に、元の動詞とは大した關係がなくなり、その元の動詞も或るものは全然用ひられなくなつたりなぞして、もはや過去分詞といふのは其の形だけで、意味の方は全然形容詞に成り切つてしまつたのがかなり多數あります。文法上の疑義が生じない樣に、特に斷はつて置く次第です。以下はそのほんの一例。

gelehrt	學識ある	geeignet	適當な
geschickt	巧みな	gelassen	悠々たる
verrückt	氣の狂つた	verliebt	戀にやつれた
verstohlen	窃と	verlegen	困つた
erfahren	經驗ある	bewandert	通曉せる
unverhofft	不意に	ungehalten	感情を害した

第四十二講

間　投　詞

間投詞 (Interjektion) といふ術語も、拉丁語の術語の直譯なので、現在の各國語には餘り向きません。古典語に於ては o! とか ah! とか云つたやうな叫びの言葉は主として文章の間、即ち語と語の間に投ぜられたものですが、現在はむしろさうでない場合が多いやうです。さうかと云つて感嘆詞と云ふのもおかしい。必ずしも感嘆ばかりはしません。冷やかす叫びもあれば怒りの叫びもありますからね。要するに叫びです。獨逸語では Ausrufungswort (叫びの詞) と云ひます。

間投詞はあらゆる種類の叫びを包含しますから、廣い意味では Guten Tag! (今日は) の挨拶から、Hilfe! (助け舟!) の悲鳴まで此の部門に入れなければならない理屈です。以下はそれらのほんの概觀です。

376. 間投詞の主なるもの

(1) 最も純粹な間投詞。

o!	おゝ!
oh!	なあに! いやなに!
ei!	おやおや。なあんだ。ひやあ! これはこれは!
oho!	いよう! これはこれは! [oho の方にアクセント]
aha!	ははあ! 解せた! わかつたぞ! なるほど! 道理で!
hm!	うむ! さうか! さう云ふ譯か。[口を塞いだ儘發音す]
hem!	えへん。
hu!	大變! こいつはいかん! あらあら! どうでせう!

ha!	こは何事ぞ! や、や、何と? よくもよくも!
he!	おーい! やい! こらこら!
holla!	やい! 待て!
hallo!	もしもし! [電話の呼出し]
na! [「ナア」より「ナ」の方がよし]	さてと。[na は微妙で一口では説明できませんが、要するに nun に對する「碎けた」ものです。]
au!	あ痛たッ! [時には] さあ大變! あらいやだ!
o weh!	さあ大變! あゝ痛い! あら可哀さうに!
hurra(h)!	萬歳! わアーッ!
hei!	萬歳! [欣びの表情]
pfui!	あら厭だ! 厭だ厭だ。チェだ。
ahoi!	おーい! [遠方から舟を呼んだりする時]
hussa!	はッけよッし! [使嗾の掛聲]
st! scht! pst! bst!	しッ! [沈默を命ずる時]
nanu!	何だと? [これは聞き捨てならぬ、等の意]
ach!	あゝ! [多少センチメンタルな間投詞]
i! (俗)	[ei! と同樣]
ä!	なあに! 畜生め! 何のその! [輕侮の意]
ätsch!	ざまを見ろ! 好い氣持だ!
hopp!	飛べ! 飛べ! それッ! そらやれ!
brrrr!	あゝ恐ろしい! おゝ寒い!
kusch!	[犬を坐らせる掛聲]
na?	おい、どうした? どうした、大將。
ja?	は? 何ですか? え? ね?
hm! hm!	成程々々。[「フンフン」と、間を離さずに發音し、アクセントは後の hm に置く。]

juchhe!	占めた！萬歳！愉快々々！
juchhei!	〃
juchheisa!	〃
puh!	厭だ厭だ！ちえ！たまらねえ！
ja!	然り。さうです。えゝ。確かに。
nein!	否。いゝえ。
nee! (俗)	いゝや。
ach nee!	おやおや。それはどうも。へーえ。さうですかねえ。
hott!	右へ！ [馬に向つて]
hist (hü!)	左へ！ [馬に向つて]

(2) 間投詞「的」なもの。

da!	それ！ [これを見ろ、の意] どうだ！ほら！
hier!	はい！ [出席してゐます、の意]
Hilfe!	助けてくれ！
mordio!	人殺し！
diebio!	泥坊！
Feuer!	火事だ！
feurio!	[同上]
hoch!	萬歳！
vivat!	[同上]
pereat!	[萬歳の反對] やつつけろ！くたばつちまへ！
heil (dir)!	萬歳！ [個人を歡迎して]
willkommen!	[welcome]
weh (dir)	おぼえて見ろ！今に見ろ！ [苦い目に遭ふぞ]

wohl (dir)	幸なる哉。
leider!	遺憾ながら。已むを得ぬ。
schade!	お氣の毒さま！惜しい哉。
bravo!	素敵！でかした！その調子！
halt!	待つた！とまれ！
gelt?	さうだらう？ [方言]
nicht wahr?	さうでせう？ね？
siehst du?	ね？さうだらう？いゝかい？
Jesus!	さあ大變！冗談ぢやない。
Gott!	[同上]
ach mein Gott!	やれやれ。まつたくねえ。いやはやどうも。
Himmel!	ひやあ！さあ大變！
Unsinn!	馬鹿な！つまらねえ事をぬかしやがつて！
hört, hört!	謹聽々々！
larifari!	駄目だよ！止せ止せ！知らないよ！止しやがれ。
Possen!	構ふもんか！平氣々々！おどろかねえ。
um Gottes willen!	あらう事かあるまい事か！どうぞ！後生ですから！
verdammt!	けしからん！失敗つた！しまつた！畜生！
verflucht!	[同上]
Donnerwetter!	冗談ぢやない！
Potztausend!	[同上]
Teufel!	[同上]
zum Teufel!	[同上]
zum Henker!	[同上]

ja, Kuchen!	えゝえゝ、さうでせうよ。[馬鹿にした返事]
Mahlzeit!	どう仕りまして！滅相もない！
getroffen!	その通り！當つた！
schön!	よし！よろしい！畏りました！
jawol! jawoll!	はい。はいはい。はッ！
stimmt!	然り！その通り！
eben!	然り！その通り！それだよつまり。
danke!	有りがたう。
nein, danke!	いえもう結構です。いえもう澤山。眞平々々！
wieso?	どうしてさ。何故。それは又どうした譯で。
auf Wiedersehen!	ではまた！さよなら！
adieu! [發音 adiö]	さよなら！
adjes!	あばよ！ぢやまた！
guten Tag!	今日は。[時には「さようなら」]
Tag! (俗)	こんちや！
guten Morgen!	お早よう！
Morgen!	[同上]
guten Abend!	今晩は [時には「さようなら」]
Abend! 'nabe.,o!	[同上]
gute Nacht!	おやすみ！
leb wohl!	あばよ！いざさらば。さらば。
leben Sie wohl!	御機嫌よう！
ade!	おさらば！あばよ！さらばでござる。
[gesegnete] Mahlzeit!	よろしく召し上れ！ [食べてしまつた後でも言ふ]
bitte!	どうぞ。

ei was!	なあに！
wie beliebt?	は？何ですか？何ですつて？え？
zum Wohl!	健康を祝す！
prosit!	おめでたう！健康を祝す！
papperlapapp!	うるさい！默れ！何をぬかすか！
nun, nun!	好いよ好いよ。[怒るな、の意] まあまあ。

(3) 擬音詞。(Onomatopöie, Onomatopoesie) 擬音詞は普通文章の中間に挿んで使用しますから、間投詞と云ふ名稱にはこれが一番相當するかも知れません。擬音詞こそは實に無限ですから、ほんの數例を示すに止めます。

poch! poch!	とんとん！かちかち！
bauz!	どたん！ばたり！すつてんころり！
klapperadatsch!	がたがたぴしやん！[碎け崩れる音]
hui!	さつと。ひよいと。すつと。[迅速に]
husch!	さつと。
piff! paff!	ぽんぽん！ずどん！[鐵砲]
hatsch!	はつくしよい！
klinglingling!	ちりんちりん！がらんがらん！
klipp! klapp!	がたん、がたん。[水車の音]
kikeriki!	コケコッコー
pick!	チカッ！[刺す時]
piep! pieps!	ピヨピヨ！

間投詞ではなくても、擬音はよく i.a の母音で表はされます。(Wirrwarr ごつちや、Mischmasch ごつたまぜ、Ticktack! カチカチ (時計の音) Zickzack ギザギザ Bimbam ガンガン、ゴンゴン (鐘) 等)

377. **ja と nein の使ひ分け** これは獨逸語だけの問題ではなく、抑々西洋語その者に關する事ですが、ja! と nein! との使ひ分けは日本人に取つては一寸困難です。

俺はドイツ語は大して出來ないが、ja 位なら言へる、なんてのは飛んでもない嘘で、たとへ十年間ドイツ語を勉強してゐる人でも、ja と nein とは間違へる事があります。

Sie sind doch nicht krank?

あなたはまさか病氣ではないでせうね？

Ja, ich bin nicht krank. [誤!]

えゝ、私は病氣ではありません。

これは立派に落第です。Ja ではない。かう云ふ時は Nein です。その次に自分の云ふ事が nicht krank と否定になるのですから、Nein, ich bin nicht krank です。だから會話の際は、相手の云つた文章に對して「然り」、「否」の批評を加へるのではなくて、自己の側から答へんとする事實の先驅として ja, nein を云ふのです。それとも相手の云つた文に對してではなく、krank といふ一字だけを眼中に置いて答へると思つたら好いわけです。

相手が今のやうに否定で問うた際、肯定で答へる時には、ja でもよろしいが、なほそれを強めて doch といふ事があります。

Sie sind doch nicht krank?

あなたはまさか病氣ではありますまいね？

Doch, ich bin krank.

いゝえ、僕は病氣です。

「獨逸語の會話といふ程はできないが、ja と nein ぐらゐなら云へる」……なんて事は言ひつこなしです。

第四十三講

疑問詞と疑問文に就て

378. **was と其の複合形**　英語の疑問詞の殆ど凡てが wh- で始まつてゐるやうに、獨逸語のは凡て w- で始まつてゐます。たとへば英語の what は was です。

此の was は、殆んど一格と四格とにしか使ひません。二格に wessen といふ形がある事にはなつてゐますが、wer (who) の二格の wessen と混同する恐れがあるから、餘り用ひられません。was の變化に就ては既に關係代名詞を述べる際 (第二卷 169) に話して置きました。

また was と前置詞との結合形 (たとへば worin 等) の事も述べました。(第二卷 170)

それから was für ein といふ疑問句は、第一卷の最初から用ひて來た筈です。(第一卷 61) たとへば was für ein Mensch? は英語の what sort of a man? what manner of man?

379. **welcher; welch ein.**　疑問詞に welcher (英語の which) といふのがある事も第一卷の 54 でやりました。玆では單に其の時に言ひ落した一種の形を説明して置きます。

welcher を welch といふ形で用ひる事があります。その時は勿論 ein のみを變化して、welch の方に格語尾はつけません。Welch eine Blume? (どんな花が?) Welch ein Kind? (どんな子供が?) Welch einem Menschen? (どんな人間に?)

また、複數で形容詞がつく時には welch gute Menschen? (どんな良き人々が、を?) 等になつて、勿論 ein と云ふ不定冠詞はなくなり、格變化は形容詞の方で受持つ事になります。

380. **wer**　英語の who に相當する wer の事も既に不定關係代名詞の際に、同時に疑問詞として紹介して置きました。(第二卷 168 と 169)

381. **其他の疑問詞**　其他の疑問詞も、實地では既にどしどし用ひて來ましたが、今それをまとめて表にして置きませう。

wie?	如何に、どういふ風にして？
wo?	何處に？
wann?	何時？ [wenn と混同すべからず]
warum?	何故に？
weshalb?	〃
weswegen?	〃
wozu?	何のために、何の目的で？
woher?	何處から？
wohin?	何處へ？
was?	何故？ [was stehst du da? 何をそんな所に立つてゐるか?]

(1) 其他 womit, wodurch, worin, worein, woran, worauf, worüber, wovon, wonach, wofür, wogegen, worunter 等。

(2) wohin と woher とは、wo と hin, wo と her とに分けて用ひる事があります。Wohin gehen Sie? (貴郎は何處へ行きますか) を Wo gehen Sie hin? と云ひ、Woher kommen Sie? (貴郎はどこからおいでですか) を Wo kommen Sie her? と云ふ等。

これは必ずしも疑問詞のみに限られた現象ではなく、場所を意味する言葉全部に通じます。次の數例をよく考へて、ドイツ語の癖を會得して下さい。

1. Gott weiß, **wo** all das Geld **hin**kommt.
   (それらすべての金額が何處へ出てしまふかは神ぞ知る、卽ち、あんなに澤山あつたお金が一たい何に出てしまふのかしら。)
2. Ich begreife nicht, **wo** Sie all das Geld **her**kriegen.
   (あなたは何處からそんなに澤山なお金を持つていらつしやるのでせう、私には合點が行かない。)

3. Wie komme ich **hier** wieder **hinaus?**
   (此處からはどう云ふ風にして再び表へ出たものだらう？
   Wie komme ich wieder aus hier? とは言ひません。
4. Wer sind Sie denn? **wo** kommen Sie eigentlich **hier herein?**
   (君は一たい誰だ、一たい何處から這入つて來たんだ。)
   von wo in hier 〔何處から此の中へ〕 とは言ひません。
5. Höre, Franz! Es ist meine Pflicht, dir zu raten: Bleib **dort weg!**
   (フランツ、僕の云ふ事を聽き給へ、僕は義理として君に忠告する、あゝいふ場所へは近づかない方が好いぜ。)
   Bleib von dort! とは云ひません。
6. Stecken Sie einen Faden **hier durch.**
   (此處へ糸をお通しなさい。) durch hier とは云ひません。

備考。——複合詞 wodurch, worin, davon, darein, hieran, hiermit 等はすべて斯う云ふ語法から生じて來たのです。つまり、二字に書く筈のものを一字に書くだけの差です。

382. **疑問文と感嘆文との配語法の相違**　疑問文では定形倒置、感嘆文では定形後置です。(倒置、後置といふ術語の意味に就ては第一卷 72 第二卷第十八講、第一卷 89 等參照)

——疑問文——　(倒置)

Was für ein schönes Buch **hast du?**

Was **hast du** für ein schönes Buch?

汝はどんな美しい書物を持つてゐるか？

——感嘆文——　(後置)

Was du [doch] für ein schönes Buch **hast!**

汝は [まあ] 何といふ美しい書物を持つてゐる事よ！

後置法は、感嘆文ばかりではなく、元來は次項で述べる從屬文に用ひられるのです。感嘆文はその一種にすぎません。

383. 疑問詞を先に立てた副文章

疑問詞は、時には接續詞の代りを勤める事があります。たとへば——

Ich weiß, **wo** er wohnt.

私は彼が何處に住むかを知る。

に於ける wo です。斯う云ふ際には、wo の次に來る文章は所謂副文章(または從屬主章)になりますから、動詞の定形は後置されます。上例をもつと複雜にして見ると——

Ich weiß, wo er in diesem Augenblick mit seiner Familie wohnt.

(私は彼が此の瞬間彼の一家と共に何處に住んでゐるかを知つてゐる。)

また別な場合の例を示すと——

Er fragte sie, mit was für einem Manne sie sich am liebsten verheiraten möchte.

(どんな種類の男と彼女は最も好んで結婚しようと思ふか、と彼は彼女に問うた。)

註。——この際は間接話法になるから接續法第一式 wolle を定形に用ひます。am liebsten は gern (好んで) の最高級。

384. 疑問文に諸種の色彩を附ける助詞 nur, doch, denn 等

助詞 (Partikel) なるものは、別に形容詞、動詞等と並んで一つの品詞であるとは謂へないもので、或ひは副詞、或ひは接續詞に配屬すべきものですが、假に助詞といふものを一つ設けるとすれば、その使命は、一つの文章に其の色彩を附與するに在ります。たとへば疑問文章は、一寸した、それ自身では殆んど譯しやうのない助詞、或ひは助詞句を用ひて、諸種の色彩を出すことが出來ます。

(1) 「どうも不思議で仕樣がないが」、「一寸氣に懸かるが」と云つた樣な際には nur, または、もつと碎けた形では bloß を用ひます。日本語の「一たい」です。但し極く輕い意味です。

Wovon lebt er **nur** in diesen schwierigen Zeiten?

あいつは此の不景氣な時節に一たい何をして食つてゐるんだらう?

Was machst du **bloß** für[47] ein sonderbares Gesicht?

君は一たい何といふ變な顏をするんだよ。

(2) denn.——これは nur, bloß よりもいくらか强く、nur, bloß は單に一寸訊ねて見ると云つたやうな色彩ですが、denn は斷然解答を迫る時に用ひます。「一たい」の强いもの、たまは「一たい全たい」位だと思へばよろしい。

Warum gehst du **denn** nicht in die Schule?

君は一たいどうして學校へ行かないのか?

Was hat er **denn** gesagt?

ではあの人はどんな事を言つた?

(3) doch.——これはもつと强い故、動ともすれば文章全體が反語的になります。または感嘆文になります。(本當に、實際、まつたく、等)

Was habe ich **doch** gesagt?

だから俺が何と云つた? [云はない事ぢやない、の意]

Wie groß er **doch** geworden ist?

あいつは全く大きくなつたもんだなあ!

(4) wohl (恐らくは) vielleicht (恐らくは) etwa (ひよつと)

Ist er **wohl** krank? 彼は病氣なんだらうか?

Bin ich **vielleicht** ein Dieb? すると私が泥坊だといふ譯ですか?

Bist du **etwa** krank? 君はひよつと病氣ではないかね?

(5) doch nicht (まさか) doch wohl nicht (まさか)

Du bist doch wohl nicht mein Vorgesetzter?

君はまさか我輩の上官ぢやあるまいね。 [皮肉]

(6) zum Teufel, zum Henker, in aller Welt 等は、謂はば我慢が切れたといふ問ひ方の助詞句です。これこそ正に「一たい全體」です。[48]

Was zum Teufel sagst du da?

君は一たい全たい何とした事を云ふのか。

Was in aller Welt fürchtest du?

君は一たい何が恐ろしいんだ。

385. 肯定形の疑問文 斯々でせうね? と頭から相手の答を肯定または否定に決めてかかる時には、肯定文の儘で問ひます。その際にはよく doch (勿論) doch nicht (まさか) を助詞として挿入します。

Sie kommen **doch** morgen früh zu uns?

あなたは勿論明朝私たちの所へいらつしやるでせうね?

斯う云ふ種類の疑問文のうしろ (または前) にはよく nicht wahr? nicht? 碎けた會話では ja? gelt? 等を追加します。英語なら is it not? do you? are you not? 等、その文によつて違ふわけですが、ドイツ語では前に立つ文によつて變るといふ事はありません。何時でも nicht wahr? です。

Sie entschuldigen mich, nicht wahr?

勘辨して下さるでせうね?

Du kommst mit mir? Ja?

一緒に行かうよ、ね?

386. Ich weiß nicht was 等 「何をだか知らないが」とか「何處でだか知らないが」と云つた樣な種類の句が、他の一つの文章の中へ組み入れられて、その文章内に於ける單なる一部分と化し、別に文章全體の意の歸結を疑問文にはしないと云ふ場合があります。

Er bildet sich **wunder was** ein.

彼奴は變な自惚れを持つてゐる。

卽ち ich wundere mich: was? (何を? それが不思議でならない) といふのが一寸間に挿まつてゐるのだと思へばよろしい。

Er ist **Gott weiß wie** ein Staatsmann geworden.

彼奴はどうした機みか [風の吹き廻しか] 政治家になつた。

Er hat es **ich weiß nicht welchem** Pfuscher anvertraut.

彼奴はそれを何だか好い加減な男に任せてしまつた。

Pfuscher といふのは、pfuschen (拙い仕事振りをするばかりでなく、同時に世間に迷惑を掛ける、といふのが現今盛に用ひられる意味です) から來た名詞で、たとへば病人を殺す事を商賣にしてゐる無免許醫つてなものや、惡い飜譯を濫造して良い飜譯の出るのを邪魔してゐる現今の飜譯家なんてのが Pfuscher です。當今は Pfuscherei の時代でせうね。Die Pfuscherei lebe hoch! (惡作萬歲!)

387. 副文章が疑問詞を含む際の配語 (既出)

第四卷 294 參照。——同時に 293 をも研究すればなほよく分ります。

388. 文章の途中に挿入される感嘆文 文章の進行を一瞬間止めて、一寸感嘆文を挿入する事があります。

Damals wohnte er, **wie lange!** bei mir.

當時彼は僕の處で——しかも隨分長い間!——暮してゐた。

Das alles hat sie mir —— **und mit welch einer Geistesgegenwart!** —— gestanden.

それら凡てを彼女は私に —— しかも愕く可き度胸を以て! —— 白狀した。

389. **was, welche の不定指示詞的用法** was を etwas の意に用ひ、welche を einige の意に用ひる事があります。

Du hast mir vorhin **was** gesagt; was war das?

君は僕にさつき何だか云つたね。あれは何だ。

Was die deutschen Bleistifte betrifft,[49] ich will auch **welche** haben.

ところで例のドイツ製の鉛筆の話だが、僕も少しばかり欲しいな。

390. **Wissen Sie was?** Wissen Sie was? 又は Weißt du was? と云ふ文句がよく用ひられます。それは一種の成句で、相手に何か新しい事を敎へてやらうと云ふ時に文章の先頭に据ゑるので、別に質疑の意味ではありません。「時に君……」と云つたやうな所です。

Wissen Sie was? Sie sind doch ein unbegreiflicher Mensch.

ねえ君、君は實に不可解な男だぜ。

391. **ja の一用法** ja と nein との使ひ分けて就ては既に 377 で說明しました。質疑文に對して答へる時の一種特別な方式を一つ說明して置きます。たとへば相手が Gehen Sie heute abend irgendwohin? (今晩は何處かへお出掛けになりますか?) と問うた場合に、「えゝ、芝居を見に行きます」と答へようと思ふと、ja, ins Theater と云つても宜しいが、ins Theater, ja. とも云ひます。此の樣式が極端になると、たとへば簡單な力强い會話を好む表現派の Georg Kaiser なぞは、次のやうな應答をさせます。

—— Kennst du? 知つてゐるか?

—— Genau. 詳しく。

つまり genau, ja. うん、詳しく知つてゐる、といふ ja を省いたのです。現代物の戲曲を讀む際には知つて置く必要があります。

392. **反語** 一見疑問文の樣であつて、眞意はむしろ一つの事をはつきりと主張してゐる文のことを反語と云ひます。西洋人は一たいに非常に反語を好みます。それを一々日本語で反語に譯するのは變です。つまり神經的な西洋人の癖だと思つて眞面目に相手にしない方が宜しい。

Ist das nicht herrlich?

とても素敵ぢやないか!

Bin ich nicht arm?

僕は貧乏なんだぜ君!

Kommt er nicht zu mir?

彼が現に僕の所へ來るぢやないか!

Kommt er nur[50] zu mir?

彼は僕の所へ姿すら見せないぢやないか!

第四十四講

否定詞と否定文

393. **否定詞の主なるもの**

nicht	(英語の not)	
nichts	(英語の nothing)	
kein	(形容詞的に用ひる英語の no)	
nie, nimmer, niemals, nimmermehr		決して
nirgend, nirgends, nirgend(s)wo		何處にも
keineswegs	(英語の in no way)	決して
keinesfalls	(英語の in no case)	決して
nicht immer	(英語の not always)	必ずしも
doch nicht		まさか
nicht mehr		もはや
um keinen Preis		どんな事があつても
niemand, keiner		誰も (nobody)

394. **mehr の用法**　mehr を否定詞と共に用ひると、「もはや……でない」の意になります。但し nimmermehr だけは例外で、これは「決して」「どんな事があつても」の意で、特に mehr (もはや) の意を考へない方が宜しい。

Er ist **nicht mehr** jung.　彼はもはや若くはない。

Er hat **kein** Kind **mehr**.　彼はもはや子供を持たない。

Er besitzt **nichts** mehr.　彼はもはや何物も所有しない。

Er ist **nirgend mehr** zu sehen. 彼はもはや何處にも姿が見えぬ

So etwas tue ich **nimmermehr**. 私はそんな事は決してしない。

395. **kein の用法**　英語の no の用法がわかつてゐる方には改めて説明を要しませんが、kein を用ひるとそれ以外に nicht を用ひなくても文章全體が否定になります。「私は珈琲は飲まない」は Ich trinke keinen Kaffee. で、Ich trinke keinen Kaffee nicht なぞとは、ドイツの田舍訛にはそんなのもありますが、普通は決して云ひません。もし Kein Mensch ist da が、「何等の人間が其處にゐる」もしくは「零人の人間が其處にゐる」だとしたら變なものです。それを應用した次のやうな一口噺があります。一匹の猫が三本の尾を持つてゐると云ふ證明の三段論法。

Eine Katze hat einen Schwanz mehr als keine Katze; keine Katze hat zwei Schwänze: also hat eine Katze drei Schwänze.

譯。——猫一匹は猫零匹よりも尾を一本多く有す。猫零匹は二本の尾を有す〔?〕かるが故に猫一匹は三本の尾を有す。

「猫零匹は二本の尾を有す」なんて事はない筈です。それはつまり Keine Katze hat zwei Schwänze (No cat has two tails)「如何なる猫も尾を二本有せず」を誤つて文字通りに解したわけです。文字通りに解すると飛んでもない結論が生じます。詭辯 (Sophisterei) といふのがこれです。

(1) kein をなほ强めて「一つも」と云ひたい時には nicht ein を用ひます。

1. Mutti[51] gab gar **keine** Nachricht. **Nicht eine** Zeile kam von ihr.

(母さんからはちつともたよりが無かつた。一行の通信も來なかつた。)

2. **Nicht einen** Kreuzer haben wir uns zurückgelegt.

(我々には一文の蓄へもない。)

つまり、「一つも」とか、「一人も」とか云つた樣に、日本語でもわざわざ一と云ふ數字を用ひる時には矢張り nicht ein を使つた方が念が通るのです。と云ふのは、kein といふ否定冠詞は、もはや ein と云ふ概念が全然なくな

つてゐて、要するに單なる「否定詞」に過ぎないからです。それが證據に、その次に 2, または 3, 4, 5 等の數詞を持つて來ることすらできます。これは特に注意を要します。その際の kein は、勿論複數の語尾變化をするわけです。

1. Sie war noch **keine zwanzig** Jahre alt, aber ohne Illusionen.
(彼女はまだ廿歳にも達してゐなかつたが、イルージョンは持つてゐなかつた。——即ち、世の中をバラ色には見てゐなかつた。)

2. Es gibt außerhalb des Regierungskreises noch **keine fünf** Leute, die darum wissen.
(政府方面以外には、それに就て關知してゐる人はまだ五人とはゐない。)

馬鹿の一つ覺えの時は kein は「一つも」でもよろしいが、多少たりとも二つ覺えの時期に這入つた方々は、段々と斯ういふ細かい方面にも御注意下さい。

396. 二重の否定は肯定に歸る

否定を否定すればまた元の肯定に歸る、これはたとへば「あの人はまんざら賢くなくもない」と云つた樣な形式を取つて現れますが、ドイツ語にもそれが盛に用ひられます。時とすると一種の皮肉になつたり、時とすると「全稱肯定」の意を强めんがために用ひます。

nicht ohne Zögerung	躊躇なしにではなく。
nicht unmöglich	不可能には非ず。

(2) 全稱肯定。

Ich kenne **keinen**, der ihn **nicht** haßte.
私は彼を憎まない何人をも知らない。

Er sagt **nichts**, was **nicht** von Wert wäre.
苟くも彼が口にする事にして無價値なる事は一つもない。

397. 準否定詞 kaum, wenig 等

文章全體の意を否定的にする言葉に、selten (稀にしか) kaum (殆んど……しない) wenig (大して……でない) unmöglich, schwerlich (とても……しない) 等があります。kaum を「辛くも」とか wenig を「少し」なぞと譯してはいけません。

Er konnte **kaum** atmen.	彼は殆んど息が出來なかつた。
Ich bin **wenig** froh.	私は大して嬉しくない。
Ich kann **unmöglich** arbeiten.	私はとても働けない。
Das kann **schwerlich** wahr sein.	それはとても眞に受けられぬ。

Ich bin wenig froh を「私は少し嬉しい」なぞと譯したら、それは反對の意になります。「少し」は ein wenig です。

その次に、特に注意を要するのは nur (ただ) が一種の輕い準否定詞だと云ふ事です。これは、たとへば Ich habe nur ein Leben zu verlieren. (命に懸け替へはないからね) 等を直譯する時に、「私はただ一つの命を失ふ可く所有する」では少し解釋が足りないので、むしろ「私は失ふ可くただ一つの命しか持たない」または「失へる命がたつた一つしかない」と、文全體を否定にした方が原意の本來の面目を傳へる所以です。これは決して日本語だけの癖ではありません。佛語では、ドイツ語で nur を使ふ時には大抵 ne……que「……しか……しない、……きり……ない」を用ひます。(Je n'ai qu'une vie à perdre.) 日本語では必ずしもさう云はない時、たとへば Er liebt mich nur zu sehr. 〔佛 Il ne m'aime que trop.〕(彼は私を餘りにも愛しすぎる) 等に至るまで此の平行が見受けられます。

扨て英語はどうかと云ふに、英語には nur に相當する but といふのがありますが、これも純粹に肯定的な nur とはちがつて、たとへば nothing but, no one but と云つたやうに、否定詞と共にしか用ひません。つまり「否定詞」＋but がドイツ語の nur です。

but との比較は、なほ少し後の 401 にも出て來ますが、一寸語學史的な註釋を加へておきます。

まづ nur と云ふ字は、中世紀以前の所謂 althochdeutsch (古高獨逸語) では ni-wari です。即ち現在の neuhochdeutsch (新高獨逸語) の nicht wäre または wenn es nicht…… wäre. (もし……でないとすれば) です。それが niwari, naere, naer, neur, niur, nour 等の形で古籍に殘つてゐる所を以て見ると、這般の消息は明瞭で、nur は否定詞なのです。Ich habe nur einen Wunsch と云へば、それはつまり Ich habe keine

Wünsche, wäre es nicht ein einziger. (私は、ただ一つでなければ、何の望みも持つてゐない) といふことだつたのです。

英語の but は、nur とはちがつて、語源的に云つてもその中に否定詞が混入つてゐません。古代英語のアングロサクソンでは butan と云つて居ました。それは be-utan (現代英語に直譯すれば by out または be-out) 即ち「以外に於て」です、これは現在のオランダ語にも傳はつてゐます。buiten (ボイテン) はドイツ語の außen (外に) で、分解すると bij (bei) uiten (außen) となります。つまりアングロサクソンの butan と同じです。(be- といふ前綴は要するに bei といふ前置詞です。) 副詞や前置詞に、如何に此の殆んど無意味な be- をつけるかといふ事は次の表を見てもわかります。

獨逸語	オランダ語	英語
binnen〔前〕以内に	binnen〔前〕〔副〕以内に	
benebst〔前〕共に	benevens〔前〕共に	
		between〔前〕間に
(zwischen)〔副〕間に		betwixt〔前〕間に
(nieden)〔副〕下に	beneden〔前〕〔副〕下に	below〔前〕〔副〕下に
(oben)〔副〕上に	boven〔前〕〔副〕上に	a-bove〔前〕〔副〕上に
(außen)〔副〕外に	buiten〔前〕〔副〕外に	a-bout〔前〕〔副〕周圍に

要するに but は out です。マタイ傳の 13. (17.) に「われらが此處に持てるはただ五つのパンと二つの魚とのみ」といふ句がありますが、それを昔のアングロサクソン語の譯では We nabbad her buton fif hlafas und twegen fiscas とやつてゐます。nabbad は ne habbad がつまつたもので、直譯すれば We (wir) nabbad (nicht haben) her (hier) buton (außer 外には) fif hlafas (fünf Laibe) und (und) twegen fiscas (zwei Fische) です。要するに but の外に ne といふ否定詞が動詞についてゐます。

現今の英語でも、否定の次に but の來る構造が非常に澤山あつて、たとへば There is nothing so secret but it comes to light. (たとへどんな秘密と雖も遂には日の眼にさらけ出される) なぞと云ひますが、(詳細は 404) そのうちには矢張りドイツ語の nur と同じやうになつて來て、否定詞が要らなくなつてしまひました。たとへば今引用した聖書の句を見ると、現代英語の譯では We have here but five loaves and two fishes となつてゐます。これで but は完全にドイツ語の nur と等しくなつてしまひました。

結論を云ふと、昔は ne とか ni とか、兩方とも否定詞があつたのですが、英語の but の方は ne を追ひ出してしまひ、ドイツ語の nur は ni を己自身の腹中へ嚥み込んでしまつたと云ふわけです。

これは一寸、折に觸れて、Germanistik (ゲルマン古學) の中へ散歩をしたわけですが、

凡そ historische Grammatik (史的文法) なるものへの展望を得るには充分だらうと思ひます。

398. 否定前綴 un- に就て

形容詞を、それの反對の意にする時には否定前綴 un- をつけます。たとへば möglich (可能なる) に對する unmöglich (不可能なる) のやうに。ところが、よく考へて見ると un- の否定には意味が二つあつて、それが實際上非常に重要ですから、そこでドイツ人の語感が無意識に働いて、ある場合には un- に强音 (アクセント) を置かせ、ある時には un- を be- や ver- と同じやうに、アクセントなしに發音させます。次の例を見ればわかりますが、普通、概念の否定と云つてゐる現象は、たしかに此の二つの區別を設けた方が意味がはつきりするのです。

Esperanto を發明したザメンホフ氏は此の點に注目して、mal- といふ前綴と ne- といふ前綴とを設けて、積極否定と消極否定とを區別してゐます。試みに Esperanto の形容詞と、それに對する二つの否定形を表示して見ると——

肯定的		消極的否定(反對)		積極的否定(逆)	
granda	大なる	negranda	大ならざる	malgranda	小なる
feliĉa	幸福なる	nefeliĉa	幸福ならざる	malfeliĉa	不幸なる
longa	長き	nelonga	長からざる	mallonga	短き
varma	暖き	nevarma	暖かからざる	malvarma	冷たき

つまり、大ならざるものが必ずしも小だとは云へない。ある概念の逆 (他極) と、その反對 (他の範圍) とは論理的に別物だと云へます。ある日本人が、西洋人に、「猫」といふ事が云へないので「犬の反對」だと云つた笑話がありますが、「反對」といふのには色々な場合があつて、猫と犬とは聯想上の一對 (Gepaartes) 富と名譽とは對稱 (Gegensatz) または照應概念 (Kontrast) 富と貧とは兩極 (Pole) 富と、富ならざるものとが肯定否定 (Bejahung und Verneinung) 靈と肉、主觀と客觀、等は相關概念 (Korrelat) です。ところが反對 (Gegenteil) といふと、最後にのべた三つの場合がみんな含まれてしまふわけです。

純粹の否定の場合、即ち消極的な場合には un- の前綴にアクセントがあ

り、積極的な時には un- にアクセントがありません。微妙な區別ですが非常に重要です。

積極的（肯定）	消極的（否定）	積極的（否定）
möglich 可能なる	u'nmöglich 可能ならざる	unmö'glich 不可能な
schuldig 罪ある	u'nschuldig 罪なき	unschu'ldig 天眞爛漫な
endlich 限ある	u'nendlich 限なき	une'ndlich 曠大無邊の
geteilt 分たれた	u'ngeteilt 分たれざる	ungetei'lt 全き、單一の
gewohnt 慣れた	u'ngewohnt 慣れぬ	ungewo'hnt 奇拔な、稀な

此の法則は、-lich, -ig, -bar 等で終る少し長い字にのみ當てはまり、unschön（醜き）等の簡單な形容詞には適用できません。unschön は積極概念であるに拘らず un にアクセントがありますから。また色々と例外があるにはありますが、全體としてさう云ふ要求がドイツ語の語感の中に强まつて來てゐる事は疑ふ可からざる事實です。だから其の意味に於て心得ておく必要があるでせう。

例外の生ずる理由は、たとへば「美しくない」と云ふ純粹消極的否定の際には nicht schön と云つて、nicht を用ひる事ができるから、un- は專ら積極的否定にのみ使はうと云ふ傾向があり、そのために、un- にアクセントがあらうとなからうと積極概念に結成し、一寸生じかゝつた概念上の規則を亂してしまつた觀があるのです。

399. その他の否定的造語

un- の外に、miß-（英語の mis-）ent- ver- 等の否定的前綴、及び -los（英語の -less）といふ否定語尾があります。

gefallen	氣に入る	mißfallen	氣に入らぬ
gelingen	成就する	mißlingen	失敗する
billigen	是認する	mißbilligen	否認する
decken	掩ふ	entdecken	あばく
binden	束縛する	entbinden	解放する。（分娩する）
Last, *f.*	重荷	entlasten	重荷を除く

Haupt, *n.*	頭	enthaupten	馘首する
kaufen	買ふ	verkaufen	賣る
gebieten	命ずる	verbieten	禁ずる
kennen	知る	verkennen	知らない
raten	忠告する、（爲めを計る）	verraten	裏切る
das Kind	子供	kindlos, *a.*	子供なき
Heimat, *f.*	故里	heimatlos, *a.*	故里なき

これらの否定は、否定と一口では云つても、各々その特有性を持つてゐる事がわかりませう。

400. 定形を打消す nicht の位置

名詞、形容詞、または定形以外の動詞を打消す時の nicht は、すべて前置的接續詞と見る可きですから、必ず打消さうとする言葉の前に置きます。(310, 311 參照)

Nicht ich habe es getan.
　それをしたのは私で「は」ない。

Er ist **nicht** reich, sondern arm.
　彼は金持で「は」ない。貧乏だ。

Ich habe es **nicht** bemerkt.
　私はそれを認めなかつた。

Ich lebe **nicht** in Japan.
　私は日本に「は」住まない。

ところが定形を打ち消すときには、最後に位置します。（これが一寸英語と違ふわけです。）

Ich kenne diesen Herrn **nicht**.
　私は此の人を知らない。

Er liest den Roman, den ich ihm geliehen (habe), **nicht**.
　彼は私が貸してやつた小說を讀まない。

もし ich kenne nicht diesen Herrn といふと、他の人なら知つてるが……と云つたやうにきこえます。つまり nicht が定形を打消さないで、diesen Herrn だけを打ち消してゐるからです。また他の例をあげると——

Er kommt immer **nicht**. 彼は何時も來ない。

Er kommt **nicht** immer. 彼は必ずしも來ない。

此の nicht の後置は非常にドイツ的で、他の國語にはあまり例がありません。たとへば次のやうに、長い文の時にでもやはり一番おしまひに來なければいけないのです。

Sein Betragen gefiel seinem Vorgesetzten, der als sehr strenger Beamter bekannt war und auf eine tadellose Disziplin hielt, **nicht**.

彼の擧動は、非常に嚴格なる官吏として知られ、完全無缺なる統制を心がけてゐた彼の上官には氣に入らなかつた。

ところが、斯ういふ文章を、nicht だけ殘して、他をすつかり省く事があります。所謂 Ellipse (省略形) です。その際には一見 nicht が他の語の次に來て、前に云つた「nicht は必ず打消さうとする言葉の前に來る」といふ規則の第二の例外のやうに思へますが、さうではありません。たとへば Verachten Sie ihn? (貴君は彼を輕蔑しますか?) といふ問に對して、Ich nicht. と答へますが、それは「私ではない」ではなく、「私は輕蔑しない」です。(ich verachte ihn nicht の省略) 同樣に、Wird er kommen? (彼は來るでせうか?) といふ問に對して、Ich glaube nicht と答へますが、それは「私は信じません」ではなく、私は nicht であると信ずるといふことです。卽ち ich glaube: nicht です。勿論「私は信じない」と云ふ意味で云へない事はありませんが、微妙な會話神經は前者の方を選ぶのです。少くとも兩者の間に差別のある事はわかるだらうと思ひます。

401. 一局部を强調する目的のための nicht の後置

「まさかさう云ふ譯のものではない」——「さうひどいと云ふ譯でもない」と云つたやうな文句を實際口に出して發音する時には、我々は思はず知らず「さう云ふ……」「さう甚い」といふ個所に力を入れます。これを强調する

(Nachdruck legen) と云ひます。しかもそれは文全體を强調するのではなくて、一局部を强調する、卽ち一つの文句にだけ力を入れるのです。さういふ際に、力の這入る文句だけを特に文の先頭に持つて來ることは倒置法の時に說明して置きましたが (第一卷 74, 第二卷 127) もしそれに否定詞 nicht がついて、しかもその否定が前述の局部だけに制限されると云ふ際には、その nicht を、前に持つて來ないで、むしろ最後に置きます。(動詞以外の要素の最後位に) これも獨逸語特有の配語法です。

1. **So schlau** war er trotz seiner langjährigen Praxis **nicht**.
   (多年の經驗を積んでゐるとは云ふものの、それほどの狡猾さは彼にはなかつた。)
2. **So schlimm** liegt[52] hier also die Sache noch **nicht**.
   (だからまだ此の際はそれほど甚い狀態になつてゐると云ふ程でもないのだ。)
3. **So leicht** kann man auf einem Gebiete, wo man es mit unzähligen Nebenbuhlern zu tun[53] hat, **nicht** zum Ziele gelangen.
   (多數の競爭者を相手にする方面の事であつて見れば、まさかさう簡單に目的を達する事もできまい。)
4. **Künstlerisch** ist das Werk trotz[54] seiner verschiedenen Vorzüge **kaum** zu nennen.
   (此の作品は、なるほど諸種の長所を有つてはゐるが、藝術的とはどうも一寸名附けにくい。)

402. 稍用法の困難な否定形式

(1) nichts weniger als. (第三卷 225 の 5 に詳解)

(2) nichts als. (……より以外のものは何も) 等。

Ich habe **nichts als** mein Leben.

私は命より外に何も持たぬ。

Er besucht **keinen** andern **als** mich.

彼は私以外の誰をも訪問しない。

特に注意を要するのは nichts Geringeres als 等です。gering は「以下」「より劣つたもの」の意で、此の熟語は好んで皮肉に用ひられます。たとへば Er beging nichts Geringeres als einen Diebstahl. (彼は泥坊以下のことは犯さなかつた、即ち、愕く勿れ泥坊をやつたのだ、の意。)

(3) umsoweniger als…… (況んや……なるに於てをや) は必ず否定文の次に置かれ、同意の umsomehr als は肯定文の次に來ます。(um so mehr 等に離して書いても宜しい。)

Er wurde schuldig erklärt, **umsomehr als** er sich mit keinem Wort zu verteidigen suchte.

(彼は有罪の判決を受けた、況んや一言も辯護を試みなかつたに於てをや。)

Er wurde nicht freigesprochen, umsoweniger als er sich mit keinem Wort zu verteidigen suchte.

(彼は無罪放免にならなかつた、況んや一言の辯護も試みなかつたに於てをや。)

(4) ebensowenig als または ebensowenig wie (……も同様に) と、同意の ebenso (gut) wie との關係も前項のそれに似てゐます。

Ich bin ein Adliger **ebensogut wie** er.

(私も彼同様貴族だ。)

Ich bin kein Adliger, **ebensowenig wie** er.

(私も彼同様貴族ではない。)

403. nicht……sondern

これは對立的接續詞の時に掲げておきました。(307 參照) 此の sondern も、少し前に述べた英語の but に相當するもので、日本語にはそれにすつかりあてはまる文字がありません。「かへつて」なぞと云ふと、かへつて變です。「むしろ」もむしろ言はない方が好い。Ich bin kein Japaner, sondern ein Deutscher. (私は日本人ではなく、ドイツ人だ。)

404. kein……doch

396 に述べた二重の否定には一つの變態があります。それは kein……doch と云ふ云ひ廻しです。これは主として俗諺乃至格言的な口調になります。英語の no……but です。獨逸の海岸に近い方の方言を plattdeutsch といひますが、その plattdeutsch (低地獨逸語) に 't is keen Putt so scheef, paßt doch 'n Deckl uff. (Es ist kein Topf so schief, paßt doch ein Deckel drauf. (どんな曲つた壺にも、適合する蓋はあるものだ) と云ふ諺があります。どんな醜い男にでも嫁いで來る女はある、と云つたやうな時に用ひますが、これは文字通りに譯すると、「如何なる壺もそれ程斜ではない、やつぱり一つの蓋がそれにあてがはれる」と云ふ事になります。これは「適合する蓋が絶對にないと云ふ程曲つた壺はないとしたものだ」といふ文と、「どんな曲つた壺にも必ず一つの蓋があてはまる」といふ文とが交叉して出來た混血兒です。かういふ交叉文章の、前後がちぐはぐになつたものを稱して Kreuzung (交叉) または Kontamination (相互浸潤) と云ひます。

(1) No beast so fierce but knows some touch of pity.

(Shakespeare, King Richard III.)

如何に獰猛なる野獸と雖も若干の惻隱の情は知つてゐる。

(沙翁「リチヤード三世」)

此の沙翁の句を、獨逸に於ける沙翁譯の古典的權威である Schlegel (1767—1845) は次の如く譯してゐます。

Das wildste Tier kennt doch des Mitleids Regung.

No beast so fierce but 云々は、すつかり全文の構造をかへるとすれば、その前に There is を附けても好いわけです。故に散文だつたら Kein Tier ist so wild, kennt doch einen leisen Zug von Mitleid とでも云ふ可きなのでせうが、それでは概念的に過ぎるし、韻脚數の制限もあるから、Das wildste Tier としたのです。また前に一度あげた例を引くと。(395)

There is nothing so secret but it comes to light.

如何なる秘密と雖も遂には明るみに出る。

獨譯すれば Es gibt nichts noch so Verborgenes, es tritt doch an den Tag となります。けれども、そんな事を云はなくても、ちやんとドイツの諺に次のやうなのがあります。

Es ist nichts so fein gesponnen,
Es kommt endlich an die Sonnen.[85]
芝居仕組んで筋書書いて、
ばれた樂屋の間の惡さ。

たとへ如何に細かく巧者にたくらんだからくりでも、そのうちには必ず天日の前に己が醜き姿を曝す時が來る、といふことです。-onnen といふ脚韻が合はせてあるところに注意。

405. **wie nie, wie je 等** 「およそ他に例のない程」とか、「およそ今までに例がなかつた程」等の言ひ廻しには、wie の次に否定詞 (keiner, nie, nirgends, nichts) を持つて來ても、不定詞 (einer 誰か je 何時か irgendwo 何處か etwas 何か) を持つて來ても、結局の意味は同じ事になります。

Es regnet wie **nie** (je).
空前絶後の大雨だ。
Er singt wie **keiner** (wie je einer) in der Welt.
彼は比類なき歌ひ手である。
Es regnet hier wie **nirgends** (je irgendwo sonst) in der Welt.
こゝは世界中の何處よりも雨がひどい。

不定詞の方はつまり mehr als irgendwo (どこよりも以上に) のつもりで、例の相互浸潤 (Kontamination) の一種です。

第四十五講

補　追

今までに述べる機會のなかつた、もしくは述べ落した個々の規則と法則の説明を玆に一括します。拙著「準備本位獨逸語文法」の後半を成す雜則からの抜萃ですが、それよりもずつと詳しく説明します。

——語尾變化に關するもの——

406. **der Name oder der Namen.** 「名」と云ふ字は、一格の形が二つあつて、Name でも Namen でも好い譯です。但し二格以下は Namen の方を語幹と見て變化します。

	S.	*pl.*
1.	der Name (又は Namen)	die Namen
2.	des Namens	der Namen
3.	dem Namen	den Namen
4.	den Namen	die Namen

斯う云ふ變化をするものが他に八個あります。すべて男性です。

Schade, *m.* 損害	Friede, *m.* 平和	Wille, *m.* 意志
Gedanke, *m.* 考	Glaube, *m.* 信仰	Same, *m.* 種子
Haufe *m.* 群	Funke, *m.* 火花	

それから Herz, *n.* (心、心臟) もそれに似た例外變化をします。

	S.	*pl.*
1.	das Herz	die Herzen
2.	des Herzens	der Herzen

3.	dem Herzen	den Herzen
4.	das Herz	die Herzen

407. **des Naturalismus** -ismus の語尾に終る名詞は、希臘語の -ismos で、拉丁に移つて ismus となり、ドイツ語は拉丁語の儘を採用してゐるわけですが、二格の s が附けられないから、冠詞その他の語尾で二格を示し、ismus には語尾をつけません。何故語尾が附けられないかと云ふと、アクセントが is の方にあるからです。(-us の語尾もこれに從ひます。)

Des Auguſtinus	アウグスチーヌスの
Die Überwindung des Naturalismus	自然主義の征服
Eine Spielart des Nihilismus	虛無主義の一變態
Die Theſe des Kommunismus	共產主義の信條

408. **Ein gut Ding** 諺言、古めかしい口調、詩文、洒落れた文句なぞでは、よく形容詞の强變化語尾を省くことがあります。嚴重にいふと、中性の名詞の前に限つてと云ふ事になつてゐますが、男性女性にも例がないではありません。

Gut Ding will Weile haben.[56]

(善は急ぐべからず)

Unmöglich Ding verbietet ſich von ſelbſt.

(出來ぬ相談はおのづから立ち消えになる)

Zufrieden Herz iſt ein reicher Schatz.

(滿足は無盡藏の寶)

Kein zaghaft Herz gewinnt den Preis.

(狐疑逡巡は成功の碍げ)

Das iſt mein **eigen** Blut.

(之れわが血を分けたる者なり)

Groß Haus, große Unruh.

(家大なれば閑日なし)

Ein **ungeraten** Kind iſt ein Nagel zum Sarg der Mutter.

(子供の不出來は母親の命取り)

以上は中性の例ですが、男性では、たとへば Gut Freund! といふ成句があります。これは歩哨が Wer da? または Qui vive〔キギーヴ〕(誰か?) と誰何するに對して「味方!」と答へる文句です。また女性では、Schön Hedwig, なぞと、固有名詞の前で語尾を省くと、洒落れた口調ができます。また、地名の前に ganz (全き) halb (半ば) をつけると、語尾を省く事になつてゐます。

Ganz Berlin geriet in einen anarchiſchen Zuſtand.

(全伯林が無政府狀態に陷入つた)

Halb Tokio ſtieg auf ſeine Dächer, Schornſteine, ja Telegraphenſtangen.

(東京中の半分位が或ひは屋根に、或ひは煙突に、遂には電柱にすらも登つた。) (勿論 Graf Zeppelin でも見ようと思つてですね。)

409. **Ihr armen Menſchen!** 曾て Bismarck が議會で Wir Deutſche fürchten Gott, ſonſt nichts auf der Welt! (我々獨逸人は神を畏れる、それ以外世の何物をも怖れない) と云ふ名句を吐きました。名句は大變結構だが、文法的に少し習慣に外れてゐると云ふので大變問題になつた事があるさうです。(Deutſche は形容詞 deutſch から造つた名詞ですから、語尾は形容詞として變化します。變化表は第二卷の 200 頁〔192 項〕の上半部に詳しく出てゐます。) 即ち「我々ドイツ人は」と云ふ時には普通 wir Deutſchen と云つて弱語尾を用ひるのです。wir は別に定冠詞ではないから、杓子定規に行けば -e の方が勿論正しいので、Bismarck も或ひはさう考へたのかも知れませんが、習慣だけは已むを得ない。Trotz Bismarck (ビスマルクにも拘らず) 今日はやはり wir Deutſchen が正しいとされてゐます。(單數の時には ich Deutſcher と云ひ、また四格の、我々ドイツ人を、の時には正しく wir Deutſche と云ふにも拘らず、習慣といふものは變なもの

です。即ち此の異例は、wir, ihr の次に Apposition（同格追加詞）がつけられる時に限るのです。）

wir **Unterzeichneten** 下名の我々は

ihr **armen** Leute 汝等憐れなる人たちよ

am Golde hängt,

nach Golde drängt

doch alles, ach wir **Armen**! (Faust)

何事にまれ世の中は

金が先立ち、金がせく、

ほんに貧乏はつらいものぢやなあ。（ファウスト）

Apposition でなくても、lieb（親愛なる）といふ形容詞に限つて、呼びかけ（direkte Anrede, Vokativ）の時には lieben Freunde!（親愛なる友たちよ）と云ふ事があります。さうすると liebe Freunde! といふよりは莊重に聞こえ、古めかしくなるわけです。

410. **無語尾の形容詞** -erlei の語尾は必ず無語尾の儘用ひます。（349「種數」の項參照）また lauter, eitel（……づくめ、……だらけ、……のみ）及び dergleichen（等々の）は無語尾で用ひます。lauter, eitel は實は形容詞ではなく、嚴密に云ふと前置的接續詞といふ部に屬するのです。（310 參照）。

allerlei Dinge waren dort zu sehen.

其處ではいろいろなものが見受けられるのであつた。

Seine Krone war von **lauter** Gold.

彼の王冠は金づくめであつた。

Der schöne Plan ist jetzt **eitel** Rauch geworden.

切角の計畫が一條の煙と化した。（水の泡になつた）

Mit **dergleichen** Dingen gebe ich mich nicht ab.[57]

おれはそんな事には關與しない。

Von **derlei** Leuten ist eigentlich nichts zu erwarten.[58]

本當はそんな人々を頼りにしてゐたのではどうにもならぬ。

註。——lauter, eitel を本當に形容詞にして用ひると、nur（ただ……のみ）の意はなくなつて、lauter は rein（清らかな）eitel は leer（空虛な）または浮薄な、虛榮なの意になります。ein lautrer Quell（清らかな泉）ein eitler Geck（輕薄漢）

411. **Die Sofas** 英佛其他の外國語から轉來した字は複數に於て -s を附けます。

das Sofa	長椅子	*pl.*	die Sofas
Genie, *n.*	天才	*pl.*	die Genies［ジェにース］
Portefeuille, *n.*	皮かばん	*pl.*	die Portefeuilles［ポルトフいユス］
Villa, *f.*	別莊	*pl.*	Villen 又は Villas
Restaurant, *n.*	［レストーらン］料理店		
		pl.	Restaurants ［レストーらンス］
Kino, *n.*	活動寫眞	*pl.*	Kinos
Radio, *n.*	ラヂオ	*pl.*	Radios
Echo, *n.*	谺、山彥	*pl.*	Echos

412. **Die Fräuleins** Fräulein 等を多少固有名詞と考へて使ふ時には、どうしても固有名詞扱ひにせざるを得ませんから、複數に -s をつけます。それはまだ心理の必然性がありますが、その他何の理由もなく、切角のドイツ國粹の字に -s を濫用する傾きが近來殊に見受けられます。この現象は、Mutter, Mama 等、女性の字の二格にまで -s を附けて、全然固有名詞扱ひにして、冠詞を省いて、Mutters Schirm ist rechts in der Ecke!（お母さんの傘は右手の隅にあるよ！）なぞと云ふのと平行した現象で、俗語になるほどはげしくなります。

Fräuleins 令孃たち

Mädels, Mädchens 娘たち

Jungens 小僧たち

Kerls	野郎ども
Schlingels	茶目ども
Stelldicheins	ランデヴー
Tingeltangels	いんちきダンスホール
Trupps	グループ、集團、(これは外來語)
Kollegs (Kollegen が本當)	同僚たち (これも外來語)
Krachs	泡沫會社の倒壞
Hochs	萬歳、トースト

413. ein Mägdlein schön und hold

詩文では名詞の後に形容詞を持つて來る事がありますが、さういふ際には形容詞に格語尾をつけません。

ein Mägdlein schön und hold	美しくやさしき少女
Annchen schön, Annchen fein	美しのアンナ、可愛のアンナ
Ein Schloß so hoch und hehr	高くいかめしき一つの城砦
Sonnenschein, klar und rein	清く澄みたる日の光

——格に關するもの——

414. 主語二格と補足語二格

二格といふ奴は曖昧な事があつて、殊にそれが動作を意味する名詞 (nomen actionis) に附加される時には、ともすれば zweideutig (あいまい、兩意) になります。ところが此の曖昧は Zweideutigkeit (兩意) であつて、決して Vieldeutigkeit (多意) ではありません。其處をはつきりと區別して置くのが Semantik (意學) の任務です。

たとへば Die Analyse des menschlichen Geistes (人間精神の分析) といふ句があるとします。問題は、人間精神「が」行ふ分析か、人間精神「を」分析するのかといふ點に存します。前者ならば des menschlichen Geistes は Subjektgenitiv (主語二格) 後者ならば Objektgenitiv (補足語二格、目的二格) と謂ひます。

大抵の場合は勿論常識と語感で判斷して行くから困難は起らないのですが、その語感を一歩突つ込んで分解して置かないと、いざと云ふ時の判斷の根據になりません。これはドイツ語ばかりでなく、凡ゆる國語に共通なる問題です。

一般的に云ふと、他働詞から來た nomen actionis に附く二格は補足語二格になり、自働詞から來たものに附くのは主語二格になります。analysieren (分析する) は他働詞ですから、前にあげた句は補足語二格に解釋する方がより自然であり、且つ、さう讀ませるやうに作るのが處置の當を得たものだと云ふ事が出來ます。

——主語二格の場合——

der Sieg des Naturalismus	自然主義の勝利
der Tod des Sokrates	ソクラテスの死
die Eröffnungsrede des Rektors	總長の開會の辭
das Steigen der Aktien	相場の昇騰
der Abfall der Kolonien	植民地の離叛 (獨立)

——補足語二格の場合——

die Überwindung des Naturalismus	自然主義の征服
die Errichtung des Denkmals	記念碑の建立
das Wegschaffen der Hindernisse	障害の除去
die Verfassung der Gesetze	法律の制定
die Vergebung der Sünde	罪障の免除

ところが die Liebe Gottes または Gottesliebe 等になると、いづれも判然しません。前後の意を見ないとわからないわけです。Die Liebe Gottes ist unendlich (神の愛は無限なり) といへば主語二格、Die Liebe Gottes regt sich nun (今や神の愛ぞ動くなる) と Faust にあるのは補足語二格です。但し Gottesfurcht (神を畏るるの念) は成語としてきまつてゐます。

それに國語の癖といふものは變なもので、ギリシヤ語では、たとへば「王たちの憎しみ」と云ふと、人々の王達に對する憎しみになるなぞ、いろんな面白い現象があります。

だから、日本語から譯するときには、なるべく二格を避けて、補足語二格の時には出來るだけ前置詞を支配する云ひ廻しの成句に依つた方が明瞭になります。

——補足語二格の避け方——

生存競爭	der Kampf **ums** Leben
論理學入門	die Einleitung **in** die Logik
自由への努力	das Streben **nach** der Freiheit
神への信仰	der Glaube **an** Gott

けれども近頃の日本人には、斯ういふ注意は不必要らしい。數日前の朝日新聞を見ると、「議會への懷疑」とか何とか云つてゐましたが、さてはいよいよ濫用が始まりましたかね。濫用でも、こんな濫用は好いうちです。「議會の懷疑」ぢやあ、議會が主語二格だか目的二格だかわかりませんからね。

415. Das Prinzip der Voraussetzungslosigkeit これは、「無前提の主義」といふと一寸曖昧になりますが、「無前提といふ主義」と解釋すればよくわかります。同時に此の際の二格が一種特別な二格である事も明瞭になります。Das Haus des Onkels (伯父の家) と云ふ場合は、伯父は即ち家であるとは云へませんが、此の際は「無前提が主義である」と云へます。兩方とも同じものを指したことになるのです。Das Prinzip heißt: „Voraussetzungslosigkeit" と、heißen (稱する) といふ動詞で結びつけることが出來ますから。

これを Identitätsgenitiv (同一物を指す二格) と謂ひます。この二格はまた von (of) で置き換へることもあります。

das Maßstab des Nutzens	實利といふ尺度[で計る、等]
das große Wort der Freiheit	「自由」といふ豪勢な言葉
die Stadt von Tokio	東京の町
der Schurke vom Wirt	亭主の奴
der Schlingel von Karl	カルルの奴め (腕白の意)

416. Er küßte mir die Hand これは、「彼が私の手にキツスした」の意です。分解すると「私に、手を」ですが、つまり meine Hand (私の手を) といふ代りです。これも獨逸語だけではなく、大陸ヨーロッパ諸國に例の多い特殊な言ひ廻しです。簡單に定義すると、人間の肉體の一部、または人間に最も近しい間柄の所有物には、物主代名詞を附けないで、人代名詞の三格と定冠詞とに分解して言ひ廻す、といふ事になります。

Ich nahm **ihm** die Last von **der** Schulter.
私は彼の肩から荷物を取つてやつた。

Sie warf es **mir** auf **den** Schoß.
彼女はそれを私の膝の上へ投げてよこした。

Er steckte es **sich** (三格) in **die** Tasche.
彼はそれを自分のポケットへ押し込んだ。

Wir drangen **ihm ins** Zimmer hinein.
我々は彼の部屋へまで乘り込んで行つた。

勿論 küssen は、或人「を」キスするとも云ひますから、人を四格にする事もできます。すると詳しい個所の方には auf がつきます。er küßte mich auf die Stirn 彼は私の額にキスした。

ついでにさう云ふ例も紹介して置きませう。こんどは、動詞の意味からして、人間が四格にならざるを得ないのです。文意は明瞭ですから、わざと文字通りに滑稽な直譯をしておきます。

Ich ergriff sie bei **der** Hand.
私は彼女を手のところで掴んだ。

Ich schlug **ihn** auf **den** Kopf.
私は彼奴を頭をめがけて打つた。

Er klopfte **mich** auf **den** Rücken.
彼奴は私を背中の上を叩いた。

Tell zielte und schoß **den Apfel** durch **die** Mitte.

テルは狙つた、そして林檎を眞只中を貫いて射た。

要するに、前置詞の附いてゐる方の名詞は、必ず前に立つてゐる四格名詞の一局所を意味しなければなりません。この點で三格の場合と似てゐるわけです。最後に兩者を同一文の中で順々に使ひ分けて見ると。

Das ist **mir** ein Faustschlag **ins** Gesicht! Du trifft **mich** damit **ins** Innerste meines Wesens!

それは僕に取つては顔を拳で殴られたも同然だ！ 君は此の仕打ちに依つて僕の本質の至奥を撃つたのだ！[＝人間としての僕の一番痛い所に觸れたのだ、人格の御本尊様にさはつたのだ、の意。]

此の文の mir は、既に「僕にとつては」の解釋を許しますから、むしろ 418 項の關心の三格に近づきます。

417. **Er trinkt seinen Kaffee**

上述の如く、日本語や英語の感じから考へると當然物主代名詞を使ひさうな所では物主代名詞を使はず、それに反して（こんどは英語と一致しますが）日本語から考へると別に物主代名詞の必要もなささうな時に物主代名詞を使ひます。その最も普通な例は、たとへば「彼は彼のコーヒーを飲んでゐる」等の句で、此の「彼の」には、「彼のおきまりの」「何時もの」または彼獨特のといふ習慣乃至性癖を指す意味が附隨概念（Nebenbegriff）として含まれてゐます。これは佛語に於て最も濫用される語法ですが、ドイツ語でもかなり用ひられます。

Ich habe **meine** Geschäfte. 私には仕事といふものがある。

Er ist auf **seiner** Reise. 彼はいつもの旅行に出てゐる。

Er raucht **sein** Pfeifchen. 彼は例の如くパイプで喫烟してゐる。

Er will sich **sein** Mittagsschläfchen nicht stören lassen.

彼は習慣の午睡を妨げられることを厭がる。

Da kommt der Herr Professor mit **seiner** Erkenntnistheorie herbei und beweist, daß es erkenntnistheoretisch falsch sei.

すると教授といふ厄介な代物が例の認識論とやらを提げて立現はれ、それは認識論的に誤つてゐると云つて御證明になる。

Sie hat **ihren** Mäßigkeitsverein, **ihren** Mittwoch, **ihre** Besuche, **ihr** ich weiß nicht was alles, ich aber habe rein gar nichts, höchstens **meine** Langeweile.

彼女には彼女の禁酒宣傳會や、水曜の例會や、訪問や、その外なんだか變なものが澤山あるが、僕には全然なんにも無い、高々退屈がある位なもんだ。

Ein jeder hat **seine** eigene Weise, betrogen zu werden, wie er **seine** eigene Weise hat, sich einen Schnupfen wegzuholen.[59] (原文、佛語 chacun a sa manière propre d'être trahi, comme il a sa manière de s'enrhumer—Marcel Proust, Albertine Disparue I, 18.)

[女に]だまされるのにも、人によつてその人獨特のだまされ方がある、それは風を引くのにも人によつて各々引き方があるのと同樣である。（マルセル・プルースト）

418. **Ethischer Dativ 關心の三格**

一名 Dativ des Interesses 利害關係の三格とも謂ひます。關心、利害關係といふのは頗る曖昧な言葉で、廣義に解すれば 416 に述べた物主代名詞代りの三格もこのうちに這入つてしまひます。

先づ日本語に類似現象を求めると、さういふ事をして「呉れ」ては困るとか、ではもう教へて「やらない」とか云ふ、片言隻語の内に自己、相手の關心、情實、利害の關係を仄めかす言葉がありますが、正にこれがドイツ語の ethischer Dativ の使ひ場所です。夏目漱石の「坊ちやん」が、增俸の事が問題になつた時に、「なあに、月給なんか上つてやるもんか」と强味を云ふのなぞは、此の「やる」をうまく利用した滑稽です。「こんな所で小便をして呉れちやあ困る」と云ひますが、小便をなにも「自分に」呉れるわけではな

いので、小便をするのを目のあたりに見るといふ氣づつなさが自分「に」與れられるわけです。此の「に」を稱して關心の三格と云ひます。(Du willst mir doch nicht hier Wasser abschlagen?)

Japan! oh, das ist **dir** ein Land, wo alles märchenhaft schön ist.

日本！日本といへば「君」、すべてがまるでお伽噺のやうに美しい國だせ。

Siehst du? der lange Peter ist **dir** ein Advokat geworden.

どうだい、のつぽのペーテルが「君」、辯護士になつちやつたよ。

Lieber Freund, was schreibst du **mir** bloß für ein sonderbares Buch?

おいおい、變な本を書いて「吳れ」ちやあ困るせ。

Na! du weißt, ich bin ein Übermensch; Darum schreibe ich **dir** nur Überbücher.

へ！我輩は御存じの通り超人だからね。だから超書しかお書き遊ばさないんだ。(または「書いてやらねえんだ」)

註。——超書といふのは、ドイツあたりの貧乏で鼻の高い詩人、哲學者を皮肉つて作られた奇拔な言葉で、つまり、計畫ばかり大したもので、頭の中だけで書かれて紙には遂に書かれないでしまふ書物といふことです。言葉といふ奴は、時代によつて、よく其の時代の特色をエッキスにして後世に殘します。軍縮 (Abrüstung) の事を軍擴 (Aufrüstung) と云ふのなぞもその一例でせう。

これに似た現象に關して一つ斷はつて置きたいのは、英語や佛語にある「あなた」「皆さま」と云ふ代名詞の關心的用法がドイツ語にない事です。たとへば「近頃は不景氣で困る」と云つたやうな話をしてゐる時に、英語や佛語では「職を求めりやあ職がなし、ぢつとして居ようつたつてぢつとして居られず」と云つたやうな具體的な例を擧げる時に、「あなたは職を求める、すると職はない、あなたはぢつとしてゐようと思ふ、するとぢつとしてゐられない」等と、「あなた」といふ代名詞を用ひます。ドイツ語はさういふ時には Sie を使はないで man を使ひます。この點は英佛よりも直接さが足りな

いと云はれてもドイツ語として辯護の餘地はない譯です。極く最近のものには使つてありますが、どうも矢張りフランスあたりの眞似だといふ氣がして、多少氣取つたやうな感じを與へます。

419. **離格 (Ablativ) の意になる三格** 三格は日本語の「……に」に相當しますから、或物を或人「に」與へる、と云ふ場合を念頭において、普通、與格 (Dativ) と云つてゐますが、時には此の名稱が非常に妥當を缺く事があります。たとへば日本語でも、此の書物を誰それ「に」借りたと云ひますが、此の際の「に」は決して書物の移動して行く方向を指したのではなく、むしろ正反對に、「から」といふのと同意になります。ドイツ語の三格も、斯う云ふ意味に用ひられる事があります。古典語の例に倣つて之れを Ablativ (離格、奪格) と名づけておきます。(等一卷 50 參照) 三格が離格の意になるのは次の樣な動詞に限ります。

(1) 「……し去る」といふ意の ent- の前綴を有する動詞は上述の如き三格を支配します。entkommen のがれる entgehen のがれる entlaufen 脫走する entfallen 落ち去る、脫する entgleiten 滑り落ちる entrücken 遠のける entrinnen 流れ出る entspringen 源を發する entschlüpfen 滑り脫ける entsprießen 生えて出る entwachsen 生えて出る。

Er ist **dem** Feinde entgangen.	彼は敵手を逃れた。
Er ist **der** Gefahr entkommen.	彼は危險を逃れた。
Die Zügel entfielen **seinen** Händen.	手綱が彼の手裡を脫した。
Dem Felsen entrinnt der Quell.	岩から泉が涌く。
Die Pflanzen entwachsen **dem** Boden.	植物は地から生えて出る。
Er ist **adligem** Geblüte entsprossen.	彼は貴族の血統から生れ出た。

(2) ent- と殆んど同意の ab- 〔……云々し取る〕は、「取る」「奪ふ」「搾り出す」「骨を折つて取る」と云つたやうな意の時に限つて奪格を支配します。

Auch **seinen** Leuten ließ sich keine Auskunft über ihn abgewinnen.[60]

(また彼れの使用人たち「から」も、何等彼れに關しての消息を摑み「出す」事ができなかつた。)

Wir haben einen riesigen Vorsprung,[61] den lassen wir **uns** um keinen Preis abkaufen.

(我々は非常な優先的地位を占めてゐる。こいつばかりは假令どんな値に引替へても我々から買ひ取らせはしないぞ。)

Die ganze Geschichte hatte **ihm** nur ein mitleidiges Lächeln abgenötigt.

(此の件全體は彼から只一つの憐憫の苦笑を强要し取つたのみであつた。——伍一什を聞いて、彼はただ一寸苦笑したきりで、それ以上取り合はなかつた。)

(3) ansehen, anmerken (看取する) も「摑得する」といふ意味で上例の ab- と同じ取り扱ひになります。たとへば ich sehe an deinen Augen, daß du verliebt bist (君が戀をしてゐると云ふ事實は君の眼に現れてゐる) と云つたのを、前置詞の an を sehen の前綴に變へて Ich sehe deinen Augen an, daß du verliebt bist. (私は君が戀してゐることを君の眼から看て取る) と云ふやうになつたのです。

(4) その他には nehmen 取る stehlen 盜む rauben 奪ふ weichen 避ける。

Er hat **mir** alles genommen.	彼は私から凡てを取り上げた。
Er stahl es **mir** vor kurzem.	彼はそれを此間僕から盜んだ。
Er weicht **mir** überall.	彼は到る處で僕を避けてゐる。

420. Das ist **dem** Bürgermeister seine Tochter

これは元來田舍訛ですが、よく面白半分に用ひられる田舍訛ですから知つて置く必要があります。本當は Das ist die Tochter des Bürgermeisters あれは市長さんの娘だよ、と云ふべき所。dem の代りに vom とも云ひます。

421. 二個の四格を支配する動詞

「或人を何とかを」どうかうすると云ふ變な言ひ廻しがあります。澤山はありません。

(1) lehren 教へる fragen 問ふ bitten ねがふの三字 (但し fragen, bitten は代名詞の場合に限る) は、人間をも事柄をも四格にします。

ich lehre dich die Mathematik.	私は汝に數學を教へる。
ich frage dich nichts.	私は汝に何も問はぬ。
ich bitte dich etwas.	ちよつと頼みたい事がある。
(ich frage dich nach deinem Befinden.	私は汝に汝の樣子を尋ねる。)
(ich bitte dich um Entschuldigung.	私は汝に宥恕を乞ふ。)

(2)「名づける」と云ふ意味の籠つた字、nennen 名づける heißen 名づける (自働詞の場合は、「名乘る」) taufen ……と命名する (洗禮する) schimpfen ……と罵り名づける schelten (同上) aufschreiben ……と題する titulieren ……と稱號を授ける schreiben (sich) ……と自からを名乘る rühmen と稱揚する、等。

Er schalt dich einen Feigling.
彼は汝を卑怯者と罵しつた。

Er nennt dich seinen Busenfreund.
彼は汝を刎頸の友と曰ふ。

Er tauft dich den modernen Cäsar.
彼は汝を今樣シーザーと綽名す。

Ich rühme mich deinen Freund.
私は汝の友たる光榮を有する。

Er schreibt sich Fritz Weiler.
彼の名はフリッツ・ヴイレルだ。

Sie läßt sich Madam titulieren.
彼女はマダムと呼ばれてゐる。

註。——lehren に、日本語と同樣、三格と四格とを支配させる例もあるにはあります。Das Leben lehret jedem, was er sei (Goethe, Tasso) 人生は各人各個に彼が何者であるかを教へる。けれども此の語法はもう古いとされてゐます。

422. 格支配が日本語と違ふ動詞

三格か四格かと云ふ問題は、大體日本語の感じで察せられるものですが、次のやうな動詞は少し違ひますから特に注意する必要があります。

einen grüßen	(直譯)	或人を挨拶する [日本語は、に]
einem helfen		或人に助ける [を]
einem trauen		或人に信ずる [を]
einen sprechen		或人を會談する [と]
einen treffen		或人を邂逅する [と]
einem verzeihen		或人に恕す [を]
einem vergeben		或人に恕す [を]
einen küssen		或人を接吻する [に]
einem drohen		或人に脅かす [を]
einem weichen		或人に避ける [を]
einen fragen		或人を問ふ [に]
einen bitten		或人を願ふ [に]

三格か四格かの問題は、たとへば代名詞の場合に於ては、伯林邊の方言では、それを全然反對に使ひます。Er liebt mir (彼は私に愛する) Er schmeichelt mich (彼は私を諛ふ) 丁度東北人のイとエの區別みたいに、伯林人にはどうしても正しく云へないのださうです。

423. 結果的客語 (Ergebnisprädikat) を伴ふ語法

これは獨特の現象で、しかも應用が廣く、隨意に造語を許す一般的規則ですから、よく呑み込む事が必要です。たとへば einen tot schlagen (或人を打ち殺す) と云ふ際の tot は英語の dead で、形容詞です。卽ち einen が tot であるやうな結果になる如く schlagen する、といふ譯です。形容詞の tot は、結果を現はす客語であると云ひます。これが形容詞の客語形にも格語尾

をつける希臘語拉丁語その他の古典語であつたら、tot を einen と同樣四格にすべきところなのです。これは前にも述べました。

「或物を、云々する事によつて、斯々の狀態にする」といふ公式に從ふ語法を、結果的客語を伴ふ語法と謂ひます。これを知らないと、ドイツ語を讀む時に非常な困難を感じます。日本語式な考へ方とは隨分違つてゐますからね。

die Hände **warm** reiben	手を擦つて暖くする
die Hände **wund** schreiben	書いて手を痛くする
die Füße **wund** gehen	足が痛くなるまで歩く
das Glas **voll** gießen	コップを波々と注ぐ
das Blatt **voll** schreiben	紙一ぱいに書く
die Augen **rot** weinen	眼を赤く泣きはらす
einen **rein** waschen	或人をきれいに洗ひ淨める。(辯護)
den Hirsch **müde** jagen	鹿を追ひ疲らす
einen **wach** küssen	或人に接吻して目を覺まさせる
den Boden **flach** treten	踏んで地面を平らにする
sich **heiser** schreien	聲が嗄れるまで叫ぶ
sich **tot** fallen	轉げて死ぬ
sich **lahm** sitzen	腰が拔けるまで坐つてゐる
die Schuhe **kaputt** treten	靴を踏みこはす

einen **krumm und lahm** schlagen

或人の身體が曲つて關節が外れるほど打ちのめす

sich **grün und gelb** ärgern

青くなつたり黃色くなつたりする程怒る

das Pferd **tot** reiten	馬を乘り殺す
sich **krank** lachen	病氣になるほど笑ひこける

sich satt essen	腹一杯食ふ
sich müde stehen	立ち草疲れる

424. 結果的補足語 (Ergebnisobjekt) を伴ふ語法

ein Haus bauen (家を建てる) と云へば別に何の不思議もない樣ですが、Wunden schlagen (傷を打つ) が打つて傷を作る事だと云ふと、隨分變に思はれるでせう。斯ういふ際の Haus, Wunden 等を結果的四格、又は結果的補足語と云ひます。「云々して何とかをこしらへる」の意です。

Schatten werfen	蔭を投げる
Pillen drehen	丸藥をひねる
Wunden schlagen	打つて傷つける
sich einen Buckel lachen	笑つて背中を曲げる
sich eine rote Nase trinken	飲んで鼻の頭を赤くする
sich Mut trinken	飲んで勇氣をつける
sich Tod trinken	飲んで死ぬ
Tränen weinen	泣いて涙を出す
Wut schnauben	鼻息を荒くして怒る
Freude atmen	悅びを發散する
Liebe lächeln	愛嬌を振り撒くやうに微笑む
Zorn blicken	怒れる眼つきをする
Verderben drohen	破滅の恐怖を抱かせる

Uhland の Des Sängers Fluch (歌手の呪) と云ふ有名な詩に、暴虐な王を形容した次の文句がありますが、正にこれに相當します。

Denn was er sinnt, ist Schrecken, und was er blickt, ist Wut,
Und was er spricht, ist Geißel, und was er schreibt, ist Blut.

げに彼が企つ所のものは凄慘、
而して彼が睨む所のものは狂暴、
而して彼が宣る所のものは鞭笞、
而して彼が認[したた]むる所のものは鮮血なり。[62]

425. 所謂 inneres Objekt (內面的補足語)

民之憂を憂ふる者は民亦其憂を憂ふ、と云ふ句が孟子にありますが、此の「憂を憂ふる」と云ふ種類の語法が、期せずして西洋の古典語に非常な發達を遂げ、希臘語の如きは、殆んど何の必要も無いのに「死を死する」「眠りを眠る」「墜落を墜落する」と云つたやうな事を言ひます。つまり、「死する」だけでは何となく淋しい、さうかと云つて別に新たな意味の附け加はる補足語を取る必要もない、そこで動詞そのものの概念の「內部」から、同じ意味の名詞を捻出して、それを四格として附け加へる事によつて、あたかも相當複雜な機構を備へた語構 (Wortgefüge) ででもあるかの如くに見せかけたのです。つまり「ふくらみ」を與へたと云ふわけです。

日本語でも、踊りを踊る、歌を歌ふ、と云ふ語法があります。故上田敏博士の詩に、譯であつたか創作であつたか、「星の踊りを一踊り」と云ふ句がありますが、俗謠の機微を捕へた好い句です。

斯う云ふ、動詞そのものの意味以外に一歩も出ない補足語を稱して、語學者は內面的補足語 (inneres Objekt, 英 internal accusative, cognate accusative) と謂つてゐます。

獨逸には、純粹な內面的補足語は餘り使はれない事になつてゐますが、何等かの形容句を伴つてならば、隨分使はれます。

einen Gang gehen [純]	行く
einen Kampf kämpfen [純]	戰を戰ふ
ein Spiel spielen [純]	遊戲をする
einen furchtbaren Tanz tanzen	怖ろしき踊りを踊る、一苦勞する
eine kuriose Sprache sprechen	變な言葉を使ふ
einen Heldentod sterben	勇敢な最期を遂げる

seinen alten Gang gehen	依然としてその歩みを續ける
sein eigenes Grab graben	我身の墓を掘る
einen seligen Schlaf schlafen	冥福なる眠を眠る
einen Namen nennen, der.....	.....云々の名を引合ひに出す
einen süßen Traum träumen	甘き夢を夢みる

426. **als (.....として) の省略** 嚴密な語學史的な立場からは、als の省略と云ふのは、たとへば原始人の弓を指して鐵砲の省略だと云ふのと同じ滑稽な事になるのですが、實用を主とする講義錄ではまあこんな名で通して置きませう。(調子の高い詩文等にのみ用ひられます。)

Ich bin willens, **ein treuer Vater** für meine armen Kinder zu sorgen.

(私は一個の忠實なる父親として私の可哀さうな子供たちの面倒を見てやるつもりだ。)

Ein heilig Pfand war sie dem Gotteshaus vertraut.

(Schiller, Braut von Messina.)

(神聖なる質として彼女は神殿に托されてあつたのだ。

(シルレル、「メッシナの花嫁」)

Ich hoffe **keines Menschen Schuldnerin** aus dieser Welt zu scheiden. (Schiller, Maria Stuart.)

(わたしは何人にも負債なき者として此の世に暇を告げたい。)

(シルレル、「マリーア・シュトゥーアルト」)

427. **客語[述語]の代名詞化** 「話し掛けられた彼はうしろを振り向いた」とか、「幼年の私にはよくその譯がわからなかつた」とか云つたやうな文章では、普通その代名詞を省いて、客語である筈の「話し掛けられた」とか「幼年の」とか云つた樣な句を名詞にして代名詞の位置に置きます。

Der Angeredete wandte sich um. [er の代り]

Das Kind konnte es nicht begreifen. [ich 等の代り]

これで、客語なるものの諸種の形態がはつきりと解ると思ひます。前項に於て als を省いて用ひてあるのも客語、此の項に於て代名詞の代理を勤めてゐるのも客語〔述語〕です。

428. **形容詞に附く數量的規定は四格** たとへば、此の子供は三歳と一ケ月だ、といふ時には Dieses Kind ist drei Jahre und einen Monat alt と云ひます。Monat は男性で、einen といふ不定冠詞の語尾でわかる通り、三年一ケ月は四格です。これはあらゆる數量的規定に適用されます。(女性、中性、複數の時には、一格と四格とが偶然見分けられないきりで、それが四格である事を知つておく必要があります。)

zwanzig Jahre alt	二十才の
10000 Mann stark	兵數一萬の
drei Meilen lang	長さ三哩の
einen Monat lang	一個月間の
100 Mark wert	價百馬克の
zwei Fuß breit	幅二呎の
zwei Fuß hoch	高さ二呎の
zwei Fuß tief	深さ二呎の

429. **二格支配の動詞** 二格は日本語の「の」だと云ふ形式的な初步概念は、或種の場合に於ては全然用をなさないので、たとへば二格支配の動詞なぞは、獨逸語を學ぶ日本人が必ず一度は奇異の感を抱くとしたものです。何とかして理屈でわかる方法は無いか、と云ふ問題は、これまでの人たちがみんな頭を惱して來た難問なのですが、これは矢張り西洋語一般に亘る傳統的な形式ですから、その形式がわかるためには過去に溯つて印歐語系全般に亘つて比較研究をしなけれ

ばならないと云ふ厄介な事になつて來ます。だから、説明は一口では出來ませんが、實際的にはやはりよく慣れ親しむのが一番好い方法です。

(1) 「人」の四格の外に「物」の二格を支配する動詞。(その際二格は英語の of または off で、「に就て」または「……から」の意になります。)

einen eines Dinges anklagen	或人を或事で訴へる
einen eines Dinges berauben	或人から或物を取り上げる
einen eines Dinges beschuldigen	或人に或事の責任を嫁する
einen eines Dinges entheben	或人から或物を除いてやる
einen eines Dinges entlassen	或人を或事から解放する
einen eines Dinges überführen	或人をして或事を自認せしめる

例.—Er hat mich des Diebstahls beschuldigt. 彼は私に盗人の罪を着せた.——Er hat sie ihres Heims beraubt. 彼は彼女からそのホームを奪つた.——Der Herr hat seinen Bedienten des Dienstes entlassen. 主人が召使を解雇した.——(受働形) Er ist seiner Macht enthoben worden. 彼は彼の權力を取り上げられた.

(2) 非人稱動詞にも「人」の四格と「物」の二格を支配するものあり。

Mich erbarmt seines Elends.	私は彼の悲運を憫れむ.
Mich gelüstet fremden Guts.	彼は他人の財産に慾をわかす.
Mich reut meiner Tat.	私は私の行を後悔する.
Mich jammert seines Unglücks.	私は彼の不幸を悼む.
Laß dich deiner Tat nicht gereuen!	汝の行ひを悔いるな.

(3) 再歸動詞には二格支配多し。その二格は大抵日本語の「を」に相當す。(第二卷 161 に出づ)。

sich jemandes annehmen.	或人を引取つて世話する
sich eines Dinges enthalten.	或事をさしひかへる

sich eines D. entschlagen.	或物をかなぐり捨てる
sich eines D. entsinnen.	或事を想ひ出す
sich eines D. freuen.	或事を欣ぶ
sich eines D. bedienen.	或物を使用する
sich eines D. befleißen.	或事に精進する
sich eines D. schämen.	或事を恥ぢる
sich eines D. entäußern.	或物を手離す
sich eines D. begeben.	或物を放棄する
sich eines D. vermessen.	或事を敢てする
sich eines D. weigern.	或事を拒否する

430. **Lativa (搬動語法)** 文法學者は 423 項の結果的客語を伴ふ動詞、424 項の結果的補足語を伴ふ動詞、及び此の Lativa (搬動語法) 又は結果的副詞規定を伴ふ動詞を總括して Verben mit Angabe der Wirkung. (效果擧述を伴ふ動詞) と名づけてゐます。これは主として獨逸語に特有な現象ですが、特に此の今から述べんとする搬動語法なるものは全くドイツ式で、凡てのものを dynamisch (力學的) kinetisch (動的) に、且つ Werden (生成變移) として考へんとするドイツの國民性が現はれてゐて、民族心理學の上から見ても多大の興味があります。一國民の魂は一寸した所にその片影を投ずるものです。

Lativum といふのは私の命名で、斯くの如き重要なる現象に一の具體的な名稱がないのを遺憾に思つて發明したまでの事です。それは物を「運ぶ」と云ふ希羅兩語の fero といふ字から出發して造つたのです。

たとへば trinken (飲む) といふ動詞があります。するとこれを「飲酒する」と云ふ意味に用ひて、それに四格を配して暴力的に一つの他働詞を作り、同時に運搬の方向を規定する副詞的規定を附して、その場合場合に應じて、何でも勝手な事實を言ひ現はす事が出來るのです。たとへば、「あんまり酒を飲んだために、よつぱらつて道ばたの泥溝の中へ轉げ込んだ」といふ複雜な事實を ich habe mich in eine Kloake am Wege hineingetrunken (私は私自身を路端の下水溝の中へと飲み入れてしまつた) と云ひます。また「人間は酒な

んぞ飲むから病氣にも罹り早死もするのだ」を man trinkt sich Krankheit und Tod in den Leib hinein（人は己が身の中へ病氣と死とを飲み入れる）——「彼は酒を飲んだために切角の藝術的天才を沒却してしまつた」を er hat sich aus seinem Genie herausgetrunken（彼は彼自身を天分の中から飲み出してしまつた）また成句としては jeden Trinkgenossen zu Boden niedertrinken（あらゆる飲友達を床の上へと飲み倒す）つまり相手が卓子の下に倒れてゲーゲーやつてゐても、まだ平然として飲んでゐることを面白くさう云ふのです。

上例でわかるでせうが、これらの語法には凡て共通の考へ方があり、共通の形式があつて、いくらでも勝手に製造して構はないのですから、これはもはや明らかに一つの文法です。共通の考へ方といふのは、「或物を、云々する事に依つて斯く斯く斯樣な結果、もしくは狀態に陷入れる、もしくは至らしめる」といふ形式です。共通の形式といふは、理屈を云ふよりは次の例で呑み込んで貰つた方が速いと思ひます。（太文字が結果擧述の副詞規定です。）

1. Er hat sich den Arm **aus dem Gelenk** gefallen.
   （彼は倒れて腕を挫いた——腕を關節から僵れはづした。）
2. Er trinkt sich den Schlummer **herbei.**
   （彼は酒を飲んで眠氣を誘ひ寄せようとする。）
3. Er trommelt sich eine Menge Kinder **herbei.**
   （彼は太鼓を鳴らして一群の子供を呼び集める。）
4. Er trompetet seine Kameraden **aus dem Schlaf.**[63]
   （彼はラッパを吹いて同僚を起す。）
5. Ich habe die Gäste **aus dem Zimmer heraus**gegeigt.[64]
   （私が提琴を彈いたらお客が愛想をつかしてみんな部屋を出てしまつた。）
6. Er hat seine Bedienten **zusammen**geklingelt.
   （彼は呼鈴を鳴らして召使を集めた。）
7. Er hat seinen Namen **in die Weltgeschichte hinein**gemordet.[65]
   （彼は暗殺をした事によつて世界史に名を殘した。）

8. Er hat mich **aus aller Fassung heraus**geschwiegen.[66]
   （彼があんまり默つてゐるので私はついに我慢の緒が切れた。）
9. Sie will sich wohl das Herz **in die Ruhe** schreiben.[67]
   （彼女は恐らくは自分の氣休めのためにこんな事を書くのだらう。）
10. Er hat seinen Vater **an den Bettelstab** musiziert.[68]
    （あいつが音樂にばかり夢中になつたので、遂にはおやぢが路頭に迷はねばならなくなつた。）
11. Kinder und Weiber schmeicheln **uns** ihren Willen **auf.**[69]
    （小供や女なんてものは、甘つたれて無理を通す。）
12. Er schwatzte **mir** den schönen Plan **ab.**[70]
    （切角の好い計畫を彼奴が何だかんだ云つて止させてしまつた。）
13. Die Philosophen haben den lieben Gott **aus der Welt hinaus**philosophiert.[71]
    （哲學者が理屈をこねて、切角の神さまを到頭存在しないことにしてしまつた。）
14. Er tastete sich **zum Eingang.**[72]
    （彼は手探りでやつと入口を發見した。）
15. Er kämpfte sich **durch die Menge hindurch.**
    （彼は奮鬪して群衆の中に一條の血路を開いた。）
16. Ich kann mich **in seine Lage hinein**fühlen.
    （私は彼の事情の中へ身を置き移して考へる事ができる。）

17. Sie hat sich noch nie **an einen Mann** verloren.

(彼女はまだ己れを忘れて男に夢中になつたことはなかつた。) 即ち、自己を一人の男に失ひ寄せたことはなかつた。

18. Die Dichter haben ein goldenes Zeitalter **in die Vergangenheit hinein**gesungen.[73]

(詩人は彼らの歌の中で過去の世に黄金時代があつたやうな事を云ふ。)

19. Der Professor hat sich manch harte Taler **in die Tasche hinein**doziert.

(教授は随分なお金を自分のポケットの中へ教授し込んだ。)

20. Diese Leute haben sich **zu einem beträchtlichen Grade von Geistlosigkeit herab**getrunken.[74]

(此の人たちは飲酒のためにかなり頭腦の程度が低下してしまつてゐる。)

431. Du, der **du** so groß bist.

關係代名詞が、三人稱ではなく、一人稱または人稱詞の代名詞を先行詞としてゐる際には特種な形を用ひます。即ち welcher, welche 等を用ひないで der, die の方を用ひ、同時に其の次に代名詞を繰り返してつけ加へます。

Du, **der du** so groß **bist,**	左樣に偉大なる汝
Ich, **die ich** so arm **bin,**	斯樣に貧しき妾
Ihr, **die ihr** so stolz **seid,**	左樣に威張つてゐる汝等
Wir, **die wir** so reich **sind,**	斯くも有富なる我等

但し、もし代名詞を繰り返さない際には、三人稱として取扱ひ、次の如くなります。

Ich, der so arm ist,	斯くも貧しき私
Du, der mich kennt,	私を識れる汝

Ihr, die hier wohnen,	當地に住ふ汝等
Wir, die gehen wollen,	行かうと欲する我等

以上は一格の關係代名詞の場合のみですが、二格三格四格等に於ては凡て第二の例に從つて、三人稱扱ひにします。たとへば Ich, dem ihr geholfen habt, 汝等が助けた此の私——等々。

432. von **dem** ich weiß, daß **er**.....

日本語から考へると關係代名詞の一格が用ひられさうな時に、一つの變則的な場合があります。それは、關係文その者がまた他の主文章の副文章になる場合です。

たとへば次の文章を飜譯して見ませう。

「病氣である事が私に判つてゐるその友達」

とにかく Der Freund が最先に來る事は誰にでもわかりますが、扨て其の次はどうなるでせう。もし單に「病氣である友達なら Der Freund, der krank ist でよろしいが、krank ist である事を「私が知つてゐる」と云ふ事を入れなければならない。すぐ考へられる一つの方法は、ich weiß を挿入的に押し込むことです。

Der Freund, der —— ich weiß —— krank ist.

斯うも言へない事はありません。一寸變に見えるかも知れませんが、實は非常に手際の好い文章です。Schiller その他の堂々たる古典作家が用ひてゐる形式ですから、勿論點の打ち所はありません。——けれども、もし ich weiß を挿入的に入れないで、der 以下の文の結構の中へ編入するとしたらどうなるでせう？これが問題です。

これで問題は明かになつたでせうから、次にその答をあげます。

Der Freund, **von** dem ich weiß, **daß er** krank ist.

即ち、von の用法に注意すれば構造はよく判ります。直譯すれば、「友達、その友達に就て私が彼が病氣である事を知つてゐるところの」となります。

斯くの如く、副文章内が二重の構造になる例は、本卷の 293 及び 294 を見れば、決して稀でない事がわかるでせう。また dem と er とが同一物を指

してゐる點も一般的特徴です。daß は必ずしも daß とは限りません、ob の事もあります。

Der Freund, von dem es unbekannt ist, ob er krank oder gesund ist.

(病氣だか達者だかよく判らない友達。)

これで、細則の補追と共に本講座の文法講座は終りました。終の方では、第五第六卷にしきりに參照が出ますから、それを考慮して、心持ち盛り澤山にしましたが、必ずしもみんな覺える必要はありません。第五第六卷で、否でも應でも復習をさせられますからね。

その代り、一般的な公式は殆んどこれで盡きてゐます。その點では只今までの他の凡ゆる文法書よりも以上に詳細であると思つてゐます。どうか疑問の起るたびに御覽下さい。それから——これが大切なんですが——斯うして愈々文法の滑走がすんで、さて愈々哲學に、思想問題に、文學に、科學に、各々その專門をめざしての飛行が始まつて稍しばらくした後に、即ち大ぶドイツ語が讀めると云ふ自負が生じた頃に「またもう一度思ひ出して」所々を讀み直して下さい。これが私の最後の希望です。

文法講座文例譯註

註 1〔327 頁〕 divide et impera〔分割せよ、而して統治せよ〕は有名な拉丁語の格言で、divide ut imperes 又は divide ut regnes〔統治せんがために分割せよ〕とも云ひます。例の Il Principe (元首論) を書いて國家統治の心理的方面を分析したマキアヴェリの言葉です。軍用語の「各個擊破」近頃の「切り崩し」なんてのも其の一種です。德川政府なぞは最もこれを心得てゐたわけでせう。

註 2〔328 頁〕 schön anzusehen は、元を糺せば勿論「美しく眺めるべくある」即ち「美しく觀られる」といふ構造だつたのですが、今ではもうその關係が反對になつて、schön の方が基礎語になつてしまつたのです。

註 3〔333 頁〕 riet は raten (すゝめる、忠告する) の過去。——im geringsten (ちつとも、決して)——sich um etwas kümmern (或事に介意する、或事を氣にかける)——wohl gedeihen (よく榮へる) は、「爲めになる」「利になる」といふ熟語。—— ob.....auch は、兩方で一つの語法と思つてよろしい。「たとへ斯うであつても」といふ ob auch とは全然別物です。auch だけを譯するとすれば「さて」それが、云々。

註 4〔336 頁〕 .....geneigt war zu glauben. の war と zu との間に Komma がありません。これは、元來は無くてはならないのですが、極く短かい不定形が後に殘る場合にはよく省略されます。たとへば「雨が降り始めた」は Es fing an, zu regnen. またはコンマなしに Es fing an zu regnen.

註 5〔339 頁〕 abholen は、weg-holen とも言ひます。たとへば、お金持の子供が學校から歸る時には、自家用の自動車が「お迎へに來て」「連れ去る」、その「連れ去る」が abholen です。日本語では「迎へに來る」と、全動作の最初の半部を以て意を通し、ドイツ語は「連れ去る」と、後半部を以て意を通じます。斯う云ふ風になつて來るから言葉といふものは厄介なんです。最も合理的な國語だつたら「迎へに來て連れ去る」とでも云ふ所でせうな。

註 6〔344 頁〕 eingehen は元來「這入る」「踏み込む」ことで、つまり「手をそめる」、或ひは喧嘩を「買ふ」、その手に「乘る」、相談に「乘る」、首を「突込む」、何々に「乘り出す」等、ちよつと一口では云ひ盡せない字です。元來自動詞であるべき筈の gehen が他動詞になつて、何々「を」と、四格を要求するところに注意。

註 7〔345 頁〕 doch nicht または doch wohl nicht が「まさか」です。どの國語にも必ず文意が否定になる助詞があります。その點では日本語が殊に面白い。「まさか彼奴が來ると思つた」から「寸々夜の眠も合はせた」り、「決してそんな事はある」と思つたが結局「到底しかたがあるだらう」と思つて斷念めたなんてのは日本語になりませんからね。ドイツ語は、その點は安心で、助詞と否定詞とは大抵一つの場所に集まつてゐます。

doch nicht	まさか
wenig, nur wenig	碌々
keineswegs	決して
kaum noch	到底
lange nicht	とても、どうして、仲々、

註 8〔345頁〕 Amen といふ教會用語は、換言すれば So sei es! (左樣にあれかし) Es bleibe dabei (さあらむことを、それに歸着せんことを) の意で、何か自分が今まで云つた事を、力强く肯定すると同時に勢よく閉ぢる時に用ひます。 禪宗の「喝!」とよく似てゐます。(キリスト敎の方では、坊さまが何か言ひ終ると、信者の方で Amen! と唱へますが、これも ja! so ist es. または so muß es bleiben. の意です。)

この外、勢よく切らうとするときには、まるで Diktat (口述) でもしてゐるやうに、Punkt! (英語の period) と云つたり、伊語で basta! と云つたり、時には猶太敎の文句を眞似て sela! と云つたりします。 basta! 又は und damit basta! は、それで「愈分だ」、わからなけりや勝手にしろ、と云ふ事で、sela は、ヘブライ語の Punkt です。

註 9〔347頁〕 einer は英語の one ですが、同じ名詞を繰りかへして客語 (名詞を形容詞的に用ひる際の用法) に用ひるときに使ひます。 時には es または das または ein solcher または dergleichen を用ひます。 たとへば、「僕は金持になつたらおまへと結婚したいと思つてるが、さうなるまでにはまだよほどの間があらう」と云ふ時の「さう」です。 Ich hoffe dich zu heiraten, wenn ich einmal ein reicher Mann sein werde, aber du wirst noch lange zu warten haben, bis ich es〔das, einer 等でもよろしい〕 geworden bin. (es や das よりは、どうしても einer の方が感じがよろしい。)

註 10〔348頁〕 此の mit は、前置詞ではなく、「一緒に」即ち mit sich (己れと共に) とも言ひ換へられる副詞です。 nach Rußland mitnahm と云つてもよろしい。 さうすれば mit は分離動詞の前綴です。 分離動詞といふものがつまり斯うした關係から生じて來るのです。

註 11〔348頁〕 vor sich hin といふのは、元來は für sich hin (自分一人のために) 誰に聞かせるともなく、ただ獨りで、つれづれに、の意です。 vor は英語の for でもわかる通り、ある時代には für と區別しなかつたので、その意が今でも殘つてゐるわけです。 vor sich hinsehen (ボカンと前方を見てゐる) vor sich hingehen (プラップラッと足の向いた方へ歩く) vor sich hinsitzen (つくねんと腰かけてゐる) 等、何でも勝手な動詞と結びつけて其の時々の意味をなす頗る便利な句です。

註 12〔348頁〕 書物「全部」を讀むといふのだつたら、書物を四格にして das Buch lesen と云ひますが、書物を開いてその中の一部を讀む、即ち、「讀書する」といふ具體的動作は in einem Buche lesen です。 Er las jeden Tag das Buch と云へば、ちよつと「彼は毎日その書物を讀み終つた」即ち同じ書物を毎日繰りかへして始めから

しまひまで讀んでゐるやうに思はれるが、er las jeden Tag in dem Buche と云へば、「毎日その書物を開けた」即ち十日も二十日もかかつて書物全體を讀んでゐたのだと云ふ氣がします。 それとも拾ひ讀みをしてゐたのでもよろしい。——in einem Buch lesen は、つまり分解すると、「一册の書をあけて」そして「讀書する」(lesen) です。「僕は電車の中で本を讀む」を譯すると、Ich lese in der Elektrischen. 四格を入れるなら、複數にして Ich lese Bücher in der Elektrischen. 「一人の中年の紳士が電車の中で大きな本を開けてよんでゐる」なら、Ein älterer Herr liest in der Elektrischen in einem großen Buch です。 in が二つ重なるのは止むを得ません。

註 13〔348頁〕 或事柄が或人に zu schaffen machen するといふのは、「働く」または「仕事す」(schaffen)「可き」(zu) 材料を「造る」(machen) ことで、厄介をかける、手を煩はせる、こと。 einen (或人を) in Anspruch nehmen (取り込む) とも云ひます。

註 14〔349頁〕 此の denn に就ては、次項 (301) を參照。

註 15〔349頁〕 überhaupt は、「抑々」「一たい」「總じて」の意。 たとへば「君は民政黨が好きか、政友會が好きか」と訊かれた際に、「どちらもきらひだ、だが別に民政黨と政友會だけが特にきらひなのではない、そもそも〔一たい、〕既成政黨なるものが嫌ひなんだ」と答へるとすれば、「個々」のものが問題になつてゐる最中に、それらを離れて、突然、それらを包含する「より大なる」概念の方へ飛び上つてしまふ時に「そもそも」(überhaupt) と云ひます。 つまり、今現に問題になつてゐるものの頭 (Haupt) の上に (über) 超越して、といふ事です。

註 16〔349頁〕 文字通りには sehr すこぶる am Herzen 心に近く liegen 横たはる schien と見えた。(am Herzen liegen は「氣にかゝる」といふ熟語。)

註 17〔351頁〕 Hafisen は Hafis と云ふ人名の四格。 Hafis はペルシヤの詩人で、ゲーテの西東詩篇では、これを典型的近東詩人として、單に「詩人」といふ概念で一人の主人公に見立ててゐます。

註 18〔352頁〕 positiv は「積極的」の意。 積極的と云ふことは、同時に「具體的」「史上の」「現存の」「既存の」の意になります。 たとへば、總裁なんて云つたやうな偉い人の就任挨拶は、なる可く積極的 (positiv) な、即ち具體的 (konkret) な政策には觸れないで、極く消極的に (negativ) 即ち抽象的に (abstrakt), 誰にも異論の出ないやうなところでお茶を濁しておく。——positive Religion とは、基敎、回々敎、佛敎その他のことで、それらが神學や哲學や、何々主義なんてものと違つてゐるのは、それが positiv な點にあります。 佛敎は「具體的」(positiv) なものだが、「佛敎主義」は「抽象的」(abstrakt) です。

註 19〔352頁〕 普通の gleichgültig は「平氣な」「無關心な」の意ですが、こゝは原意にかへつて、「同樣の價値ある」の意。

註 20〔353頁〕「約束をした」と云つたから、「また」實行「も」したといふ、その

「また」が auch です。けれども便宜上 denn auch で「果して」だと思へば好いわけです。

註 21〔354頁〕 naß (濡つた) に語尾のついた形。

註 22〔356頁〕 das, was wir sind は、直譯すると、「我々がさうである所のそのもの」——たとへば Wir sind eitel (我々は虚榮である) といへば、その eitel が was でもあり das でもあるのです。 eitel には限らず、何にでも共通なやうに、またすべての形容詞を包含するやうに云つたので、それらすべての性質が、すなはち我々の Persönlichkeit だといふわけです。「即ち」といふ概念を表現するためには普通：を用ひますが、玆ではコンマが打つてあります。

註 23〔357頁〕 逐字譯にすると＝Nun 扨て、dem Menschen 人間なるものには von außen 外部からは als man wohl meint 世人が恐らく考へるであらうよりは viel weniger ずつと少なく beizukommen ist 侮り近づく可きである〔即ち、侵し得る〕 daß といふ事が folgt hieraus 此處から從ふ (此處から推論される)。——「ずつと少く」は、文意の總體を否定にします。(本卷 397 參照)

人間は、たとへば金を取り上げられても幸福であり得る、外界からせまる不運は、人が普通思つてゐる程そんなに當人の内心を亂し得るものではない、の意。

註 24〔358頁〕 unglaublich (信じ難きほど) naiv (とぼけてゐる、天眞爛漫、無邪氣、惡氣がない)。

註 25〔359頁〕 逐字譯は＝zwar もちろん für Ihren guten Willen あなたの善良なる意志に對しては bin ich sehr dankbar 私は非常に有りがたい aber しかしながら für Ihre Absicht あなたの目論見に對しては nicht 然らず。

註 26〔359頁〕 重要な注意です。 Gott と Tier とに何の冠詞もついてゐないのは何故でせう？ (Gott には普通つけないが、それは此の際は問題外です。 Gott を Engel〔天使〕にかへても、その Engel にはやはり冠詞をつけませんから)——此の文は、Der Mensch ist teils göttlich, teils tierisch (人間は半ば神的であり半ば獸的である) といふのと同じです。 形容詞と同じ位置に用ひる名詞には決して冠詞をつけません。これは苟しくも冠詞といふものを有する凡ゆる國語に共通なる法則です。 これが第一の理由、——次には、聯句をなす二つの名詞には普通冠詞を省きます。 たとへば、「彼は帽子を取つた」ならば Er nahm den Hut 時には er nahm einen Hut 決して er nahm Hut とは云ひません。 ところが「彼は帽子とステッキとを手に取つた」は er nahm Hut und Stock です。また對照的接續詞を用ひても同じで、er nahm weder Hut noch Stock と云ひます。——この二つの理由は全然別個のものですが、對照的接續詞に附帶する事實として、殊に作文の時に必要です。

註 27〔363頁〕 Ahnung は、辭書で見ると、先づ「豫感」といふ意があげてあるのが常ですが、いはゆる「豫」感はむしろ Vorahnung, Vorgefühl で、Ahnung は、「感」

だけだと思へばよろしい。「豫め」といふ概念は不用です。「ちつとも御存じない、」「ちつとも察しない」といふ事を keine Ahnung von etwas haben (或事に就て何等の察しをも持たない) といふのです。「此の字を知つてゐますか？」と訊かれて、「さあ……」と首をかしげる時には keine Ahnung! と云ひます。

註 28〔367頁〕 Stück (英語の piece) は、「一篇」といふ事故、小說でも詩でも戲曲でも、何でも作品ならば好いわけですが、何の規定もなく單に ein Stück といふと、それは Theaterstück (脚本) のことです。これは佛語の pièce がその通りなので、芝居の本場の佛蘭西の眞似をしたのです。

註 29〔367頁〕 besetzen (充當する、塡充する) は、一つの脚本「を」俳優「で」充當するといふ使ひかたです。 一般い be- の附く動詞にはそんなのが多い。

den Weg mit Sand bestreuen 路を砂で撒き〔被ふ〕。
den Weg mit Steinplatten belegen 道を鋪石で布置する。
einen mit etwas beschenken 或人を或物で贈り〔惠む〕。

be- を取つてしまつた元の形で云ふと——

Sand auf den Weg streuen. 路に砂をまく
Steinplatten auf den Weg legen. 路に鋪石を敷く
einem etwas schenken. 或人に或物を贈る

日本語の感じでは此の方があたりまへのやうに思はれますね。

註 30〔387頁〕 kündigen だけの意は「廢棄通告する」とでも云へば好いでせう。 einem das Haus kündigen と云へば、「或人に家を廢棄通告する」すなはち「或人に店だてをくはせる」で、それと同樣、絶交の通知をすることを、「或人に友誼を廢棄通知する」と云ふのです。

註 31〔389頁〕 das ganze Buch は、「書物總體」といふことで、文意は、「隅から隅までペテンづくめだ」といふよりは、むしろ、個々の點では多少ペテンでない個所もあるかも知れぬが、これを「總體として見た際には、一つの詐欺だ」といふことです。 Das Buch ist an sich ein Schwindel 此の書物それ自身すでにペテンだ、と云つても同じことになります。

註 32〔399頁〕 viel の方は副詞として用ひたので、「たくさん」が「しつかり」の意になります。 vieles と -es の語尾を取ると、これは名詞的になつて、「多くのものを」となります。 同じ文字が語尾をつけるとつけないとで全然別な意味になるのを利用した面白い句です。

註 33〔399頁〕 最初の es は、非人稱化した文の所謂文法的有形無意の主語 (第三卷 273) で、次の Urteil (判斷) が本當の主語、即ち意味上の主語です。 何故非人稱化したかと云へば、斯々斯樣の「現象」がある、といふことを云はうとするからです。——gehören (屬する) といふ動詞は、「附屬品である」「附帶事項である」といふ概念

を通過して、つひには、現在の現象に、「必須缺くべからざる要素である」即ち「必要である」といふ意味にまでも用ひられます。 sich 〔三格〕 anschaffen は「調達する」「仕入れる」の意。 dazu は、「そのためには」。 Urteil (判斷) を「頭」と譯したのは意譯。

註 34 〔400 頁〕 bewundern「感服する」といふのは、感服そのものを指すのではなくて、玆では、感服しつつ發見することができる、即ち「見受けられる」「見あたる」或ひは「人の眼を惹く」「異彩を放つてゐる」とでも云へば好いでせう。

註 35 〔400 頁〕 jedoch (然しながら) といふ並立的接續詞が動詞の定形 sind の後に來てゐる配語法に就ては、本卷の 306.

註 36 〔400 頁〕 wohl は「恐らくは」——doch.....nicht の二字で「まさか.....まい」

註 37 〔401 頁〕 逐字譯＝Etwas von allem! 凡てのいくらかを！ Schon gut 既によろし！(わかつたわかつた) aber しかし dabei それに際しては man 吾人は zu あまりに viel 多くの Zeit 時間を verliert 失ふ。

註 38 〔401 頁〕 heißen は、普通は「名乘る」ですが、かう云ふ時には bedeuten (意味する、.....の謂である)

註 39 〔412 頁〕 lieber は副詞で、eher (むしろ) の意。—— mein lieber Freund (わが親愛なる友よ) なぞの lieber は、形容詞の lieb 〔英 dear〕 に er がついたもので、lieber (むしろ) とは全然別物。

註 40 〔412 頁〕 逐字譯＝Was 何事ぞ bereuen 後悔する〔とは〕! Luft 空氣を〔換氣を〕 man 吾人は sich 吾人自身に (三格) muß machen 行はなければならないんだ! drauf los それをめがけて、どしどしと schlagen 打ち〔かからなければ〕(ならないんだ)! Dann さうすれば alles 凡てが hinter einem 吾人の背後に liegt 横たはつてしまふさ、 dann さうすれば alles すべてが ist vorbei 通過だ〔一過するさ〕 Angst und alles 恐怖と凡てが。——「自分に換氣を行ふ」といふのは、鬱積してゐた心持を爆發させて、胸を晴々させること。——drauf losschlagen は、委細かまはず、どしどし、ぐんぐんやつつける、といふ熟語——hinter einem の einem は、man の三格。

註 41 〔412 頁〕 kriegen は bekommen (貰ふ) に對する俗語です。「戰爭をする」といふ kriegen とは全然別物。

註 42 〔412 頁〕 das ist klar (それは明瞭だ) といふのは、ヒステリカルな西洋人が發明した、すこぶる横暴な文句で、「わかり切つた事ぢやないか」「文句に及ばぬ」「だまれ」「抗言の必要なし」——佛蘭西人もかういふ時には c'est clair! と云ひます。

註 43 〔417 頁〕 こゝのところは、よく考へないと、何のためにこんなやかましい詮議立てをしてゐるのか、趣旨がわからなくなります。 geworben は werden (成る) の過去分詞だが、〔成られた〕といふ受身の意味ではないといふ、極くあたりまへの事を云つてゐるのです。 以下も同樣で、eingeschlafen は、「眠り込まれた」ではなく、常識でも大抵わかる通り、「眠り込んだ」の意です。——あたりまへの事でも、よく意識しておかないと、少し細かい問題になると、まごつきます。

註 44 〔418 頁〕 bei weitem で「はるかに」「ずつと」といふ熟語。

註 45 〔418 頁〕 逐字譯——Er 彼は ein Bund Schlüssel, das sie bei sich trug 彼女が身につけて持つてゐた一束の鍵を mit verstörter Beeiferung 氣も轉倒したる遽しさを以て riß ihr von der Hüfte 彼女から、腰から、もぎ取つた und そして einen, der paßte 丁度合つた一つを gefunden 發見して den Bund 束を in den Saal 部屋の中へ warf er zurück 投げかへした und そして verschwand 消えた。

註 46 〔420 頁〕「門から出て行く」をどうして von dem Tore と云はないで zum Tore hinaus と zu を用ひるのでせう?——忘れた人は第三卷文法 239 の (7) を參照。

註 47 〔433 頁〕 was für ein (第一卷 61 の 3) は was と für ein とを離して用ひることがあります。

註 48 〔434 頁〕 zum Teufel (惡魔に) zum Henker (刑吏に) は各々呪ひの文句で、in aller Welt は英語の who in the world なぞと云ふ時の in the world.

註 49 〔436 頁〕 was.....betrifft は「何々に關しては」、即ち英語の as to.

註 50 〔437 頁〕 此の nur は kommt の方に關係してゐるので、「ただ來るだけのことすらもするか」の意。 nur を zu mir と一緒にして「ただ私の所へだけ」と考へれば、それは全然別個のものになります。 强ひて讀めばさうも讀めないことはありません。

註 51 〔439 頁〕 Mutter を俗に Mutti, Muttchen と云ひます。

註 52 〔447 頁〕 liegen (横たはる) stehen (立つ) は、その原意を離れて、ほとんど sein と同じ用法をします。 liegt といふ代りに ist と云つてもよろしい。 steht と云つてもよろしい。——直譯すると、also かるが故に die Sache 事柄は hier 此の場合にあつては noch まだ so schlimm そんなにひどく liegt.....nicht なつてゐるといふ譯ではない。

註 53 〔447 頁〕 es mit etwas zu tun haben〔それを、あるものと共に、なす可く、持つ〕は熟語で、「或物を相手にする」「或物を相手にまわす」の意。

註 54 〔447 頁〕 trotz (.....にも拘らず) は二格支配の前置詞。

註 55 〔450 頁〕 直譯すれば

何物と雖も左樣に巧者には織りなされてゐない、それは結局日の眼に達する。

註 56 〔452 頁〕 この項の文例は、すべて意譯がしてありますから、念のため、左に直譯を附加します。

Gut Ding 善事は Weile 暇を haben 持たんことを will 欲す。——Unmöglich Ding 不可能事は von selbst おのづから verbietet sich みづからを禁ず。——Zufrieden Herz 滿足せる心は ist ein reicher Schatz 一つの豐富なる寶なり。——Kein zaghaft Herz 如何なる臆病なる心も gewinnt den Preis 賞を得ず。 Das ist mein eigen Blut これは私自身の

血である。—— Groß Haus, 大なる家、groß Unruh 大なる不安。——Ein ungeraten Kind 出來損なひの兒は zum Sarg der Mutter 母の棺への ist ein Nagel 釘である。

註 57〔454頁〕 sich mit etwas abgeben (……を相手にする、……にかかり合ふ) は sich mit etwas beschäftigen と同意。

註 58〔455頁〕 von derlei Leuten そんな人々からは eigentlich 本當は ist nichts zu erwarten 何も期待すべくない。

註 59〔461頁〕 einen Schnupfen wegholen は直譯すると、「鼻つ風を一つかつぱらつて來る」——日本語のいはゆる「しよひ込む」(卽ち感冒すること) を weg-, davon- 等の前接の動詞で表現します。

註 60〔463頁〕 abgewinnen の代りに entlocken (おびき出す) を使へば、(1) に述べたのと同じ構造になります。

註 61〔464頁〕 Vorsprung は、いはゆるハンディキャプです。

註 62〔465頁〕 決して、血で字を書くといふ意味ではありません。王が死刑の宣告に署名する、の意です。結果補足語を、大いに自由に用ひたものです。

註 63〔474頁〕 彼は彼の仲間を眠りの中からラッパ吹き出す。

註 64〔474頁〕 私は客たちを部屋から彈き出した。

註 65〔474頁〕 彼は彼の名を世界史の中へ暗殺し込んだ。

註 66〔475頁〕 彼は私を凡ゆる自制の中から沈默し出してしまつた。

註 67〔475頁〕 彼女は恐らくは自分の心を休息の中へと書き込まうとするのだ。

註 68〔475頁〕 彼は彼の父を乞食枝へ音樂し寄せてしまつた。

註 69〔475頁〕 子供と女は我々に彼等の意志を甘つたれ押付けてしまふ。

註 70〔475頁〕 彼は私から (所謂寄格) 美しき計畫を喫舌りのけた。

註 71〔475頁〕 哲學者たちが神さまを世界から哲學し出してしまつた。

註 72〔475頁〕 彼は彼自身を入口まで手探りとどけた。

註 73〔476頁〕 詩人たちは一つの黃金時代を過去の中へと歌ひ込んでしまつた。

註 74〔479頁〕 これらの人々は、おのれ自身を、俗物性のかなり甚だしき程度にまで飲み下げてしまつた。

讀本の部

譯註 河東涓

1. Der Traum.

Ein König sah in einem Traume drei Mäuse; eine fette, eine magere und eine blinde. Er wollte wissen, was dieser Traum bedeute,[1] und erhielt[2] folgende[3] Antwort: „Die fette Maus bedeutet deine Minister;[4] die magere dein Volk; und du selbst bist die blinde Maus".

【譯】 Der Traum. 夢

ein König ある王樣が in einem Traume 夢で drei Mäuse 三匹の鼠を sah 見ました eine fette 太つてゐるのと eine magere 痩せてゐるのと und そして eine blinde 盲目のとです er 彼は dieser Traum この夢が was 何を bedeute 意味してゐるかを wissen 知らうと wollte 欲しました und そして folgende Antwort 次の答を erhielt 得ました die fette Maus 太つてゐる鼠は deine Minister 汝の大臣を bedeutet 意味し die magere 痩せてゐる鼠は dein Volk 汝の人民を〔意味し〕 und そして du selbst 汝自身は die blinde Maus 盲目の鼠 bist である

【註】——1. bedeute は接續法第一式〔文法 204 參照〕。— 2. erhalten の過去。過去分詞は erhalten. — 3. folgend は folgen の現在分詞。「次に續いて現れる」といふ意味。nachstehend といふ字も同じ意味に使ふ。— 4. Minister は大臣。總理大臣は普通 Reichskanzler といふ。

2. Der reiche Bauer.

Jemand fragte einen reichen Bauer nach seinem Alter. „Das kann ich nicht genau sagen", antwortete er. „Ich weiß nicht, ob

ich vierzig oder zweiundvierzig[1] Jahre alt bin". Da sagte jemand: „Wie kommt es, daß Sie nicht wissen, wie alt Sie sind?" Der Bauer antwortete: „Ich habe meine Jahre nie gezählt.[2] Ich zähle meine Bäume, mein Vieh und mein Geld. Alles dies konnte[3] ich verlieren, aber meine Jahre kann ich nicht verlieren".

【譯】 **der reiche Bauer** 金持の百姓

jemand 或人が einen reichen Bauer ある金持の百姓に nach seinem Alter その年を fragte 尋ねた er 彼は antwortete 答へた das「それを ich 私は genau 正確に sagen 云ふことが kann 出來 nicht ない ich 私は ich 私が vierzig 四十〔歳であるか〕 oder 或は zweiundvierzig 四十二歳 bin である ob かどうかを weiß 知ら nicht ない」 da そこで jemand 或人が sagte 云つた Sie「あなたが wie alt Sie sind 幾歳であるかを wissen 知ら nicht ない daß といふ事は wie kommt es どうして起つたか」 der Bauer 百姓は antwortete 答へた ich「私は meine Jahre 私の年を nie 決して habe gezählt 數へた事は〔ない〕 ich 私は meine Bäume 私の樹木と mein Vieh 私の家畜と und mein Geld 私のお金とを zähle 數へる ich 私は alles dies これらすべてを verlieren 失ふ konnte かもしれなかつた aber 然し ich 私は meine Jahre 私の歳を verlieren 失ふことは kann 出來 nicht ない。〔失ふ心配がないから數へない〕。」

【註】——1. 數はいくら長くても續けて書くのが習慣。— 2. zählen は「數へる」、zahlen は「支拂ふ」、併し日本語で「勘定する」といふと兩方の意味を兼ねることになる。— 3. この können は可能性を表はす。〔文法三卷 248〕

3. Enttäuschung.

Ein Offizier, der nicht schwimmen konnte, fiel[1] in das Wasser.[2] Ein Matrose sah dies, sprang hinein,[3] und brachte[4] ihn an das Land. Der Offizier dankte ihm herzlich, und gab ihm etwas in die Hand. Ein Kamerad des Matrosen, der zusah, sagte: „Freund, laß mich sehen,[5] wie reich du bist". Der Matrose öffnete die Hand und fand —[6] eine Kupfermünze. Seine Enttäuschung[7] war sehr

groß. Sein Freund aber tröstete ihn mit diesen Worten: „Jeder weiß am besten selbst, wie viel sein Leben wert ist".

【譯】 **Enttäuschung** 失望

schwimmen 泳ぐことの konnte 出來 nicht なかつた der 所の ein Offizier 一人の士官が in das Wasser 水の中に fiel 落ちた ein Matrose 一人の水夫が dies これを sah 見て sprang hinein 跳び込んだ und そして ihn 彼を an das Land 陸まで brachte 運んだ der Offizier 士官は ihm 彼に herzlich 心から dankte 感謝した und そして ihm.....in die Hand 彼の手に etwas 何かを gab 與へた zusah 傍で見てゐた der 所の des Matrosen 水夫の ein Kamerad 一人の同僚が sagte 云つた Freund「友達よ wie どんなに du 君が reich 金持で bist ある〔か〕」 laß mich sehen 見せて呉れ」 der Matrose 水夫は die Hand 手を öffnete 開いた und そして—〔驚くなかれ〕 eine Kupfermünze 一個の銅貨を fand 見出した seine Enttäuschung 彼の失望は sehr 非常に groß 大で war あつた aber 然し sein Freund 彼の友達は ihn 彼を mit diesen Worten 此の如き言葉で tröstete 慰めた〔即ち〕 jeder「誰でも sein Leben 自分の生命が wie viel どの位の wert 値打が ist ある〔かといふことを〕 selbst 自分で am besten 一番よく weiß 知つてゐる

【註】——1. fallen, fiel, gefallen. — 2. 運動を表はす四格〔文法 236 參照〕。— 3. hineinspringen といふ分離動詞の過去。— 4. bringen, brachte, gebracht. — 5. laß mich sehen = let me see. — 6. — の記號は Gedankenstrich といひ、一般には「中斷」を表はすが、こゝの場合の如く次に出てくるものが意外なもの、驚くべきものであるときに氣をもたす爲にも使用する。— 7. Enttäuschung は失望・幻滅の意。たゞの Täuschung は欺瞞・錯覺の意。

4. Der neugierige Affe.

Ein Mann ging hinaus[1] in den Wald, um einen dicken Baum zu spalten. Da wurde er durstig[2] und ging an eine Quelle, um zu trinken; seine Axt ließ er zurück bei dem Baume. Da kam ein Affe, der von einem Baume zugesehen hatte und wollte auch Holz spalten. Er setzte sich auf den Baum, aber so, daß sein Schwanz in den Spalt kam. Als er dann die Axt herauszog,[3] klappte der

Baum wieder zusammen und hielt ihn so an seinem Schwanze fest. Da schrie er laut vor Schmerzen. Der Mann hörte ihn, kam gelaufen[4] und nahm ihn gefangen.[5] So verlor der Affe durch seine Neugier seine Freiheit.

【譯】 **der neugierige Affe** 物好きな猿

ein Mann ある人が einen dicken Baum 大木を um.....zu spalten 割るために in den Wald 森に ging hinaus 出掛けた da すると er 彼は wurde..... durstig 喉が渴いた und そして um zu trinken 水を飲むために an eine Quelle 泉のところまで ging 行つた er 彼は seine Axt その斧を bei dem Baum 樹のそばに ließ.....zurück 遺しておいた da すると von einem Baume 一の樹から zugesehen hatte 眺めてゐた ein Affe 一匹の猿が kam やつて來て und そして auch 自分も Holz 木を wollte..... spalten 割らうと思つた er 彼は auf den Baum 樹の上に setzte sich 腰をかけた aber がしかし sein Schwanz 彼の尻尾が in den Spalt 割目の中に kam 入る so, daß といふ風に〔腰をかけた〕 dann それから er 彼が die Axt 斧を herauszog 引き拔く als と der Baum 木は wieder 再び klappte.....zusammen ぴたりと合はさつた und そして so さう云ふ風に ihn an seinem Schwanze 彼の尻尾のところを hielt.....fest しつかりととめた da そこで er 彼は vor Schmerzen 苦痛のあまり laut 聲高く schrie 叫んだ der Mann 例の男は ihn 彼〔の聲〕を hörte 聞いて kam gelaufen 駈つてやつてきた und そして ihn 彼を nahm.....gefangen 捕へた so かくて der Affe 猿は durch seine Neugier 彼の好奇心のために seine Freiheit その自由を verlor 失つた

【註】——1. hinausgehen は分離動詞。— 2. 「渴き」といふ名詞は der Durst — 3. herausziehen 分離動詞でありながら、herauszog となつてゐる理由は文法 148 參照。— 4. gelaufen kommen (駈つてくる)〔本卷 369〕gefangen nehmen (つかまへる) は熟語。

5. Der Mann und der Esel.[1]

Ein Mann, welcher einen Esel trieb, kam einmal an ein Stadttor.[2] Der Zöllner[3] verlangte den Zoll, aber der Mann wollte nicht bezahlen, weil sein Tier, wie er sagte,[4] nicht beladen sei.[5] Der

Zöllner aber trat vor ihn in den Weg[6] und sagte, daß jedermann für einen Esel, ob er beladen sei[7] oder nicht, Zoll bezahlen müsse;[8] der Treiber aber sei[9] frei, ob er beladen sei[10] oder nicht. „Wenn das die Verordnung ist," sagte der Mann, „so sollt ihr gar nichts haben". Nun nahm er den Esel auf den Rücken und trug ihn durch das Tor.

【譯】 **der Mann und der Esel** 人と驢馬

einen Esel 一頭の驢馬を trieb 追つてゐた welcher 所の ein Mann 一人の男が einmal ある時 an ein Stadttor 町の門のところまで kam 來ました der Zöllner 稅吏は den Zoll 關稅を verlangte 要求した aber 然し der Mann その男は sein Tier 彼の動物が wie er sagte 彼の云ふ所によれば nicht beladen sei 荷を背負つてゐない weil 故に bezahlen 支拂はうとは wollte nicht 欲しなかつた aber 併し der Zöllner 稅吏は trat vor ihn in den Weg 彼のすゝむ道に立塞がり und そして jedermann 誰でも für einen Esel 驢馬に對しては er それが ob beladen sei 荷を背負つてゐても oder 或は nicht ゐなくても Zoll 關稅を bezahlen 支拂はなければ müsse ならない aber 併し der Treiber 馬を追ふ人は ob er beladen sei 彼が荷を背負つてゐても oder 或は nicht ゐなくても sei frei 無料である daß と sagte 云つた der Mann 相手の男は sagte 云つた wenn「若し das それが die Verordnung 規定で ist ある〔ならば〕 so それならば ihr お前達は gar nichts 何も haben もつ sollt べきでない (お前達には何もあげない)」 nun さて er 彼は den Esel 驢馬を nahm.....auf den Rücken 背中にのせ und そして ihn 驢馬を durch das Tor 門を通つて trug 運んだ

【註】——1. こゝでは別にさういふ意味はないが、Esel (驢馬) は鈍物・馬鹿者の意に使はれる。— 2. Stadttor とは昔町を壁でめぐらし、數ヶ所に門を設けその門より出入せしめたがその門を云ふ。支那で「母が閭門に倚つて待つ」といふその閭門は丁度 Stadttor に當る。— 3. Zöllner は二字讀いて次に出てくる Zoll (關稅) をとる役人。併し今は普通 Zollbeamte m. といふやうである。稅關は Zollamt n. 書籍などは zollfrei a. (關稅免除) である。— 4. wie er sagte は「彼が云ふが如くんば」「彼の云ふ所によれば」の意。— 5. sei は sein の接續法。— 6. vor jemanden in den Weg treten は「道を通行出來ないやうに或人の前にすゝんでゆく」の意。四格であるところに御注意。jemandem in dem Weg stehen は「道を塞いで邪魔をしてゐる」の意。— 7. 8. 9. 10. は皆接續法。

6. Das Gespenst.

Ein Pfarrer saß in seinem Studierzimmer und arbeitete an der Predigt[1] für den folgenden Sonntag. Plötzlich wurde die Türe geöffnet und ein Bauer trat mit erschrockenem Gesichte ein.[2] „Ach! Herr Pfarrer," rief er aus,[3] „ich bin des Todes![4] Ich habe ein Gespenst gesehen!" „Warum sprechen Sie so dumm?" sagte der Pfarrer, „es gibt keine Gespenster". „Ja, es gibt gewiß Gespenster," sagte der Bauer. „Ich habe eins mit meinen eigenen Augen gesehen". „Wann haben Sie es gesehen?" „Vor zwei Minuten". „Wo war es?" „An der Kirchhofmauer". „Wie sah es aus?" „Wie ein großer Esel".[5] Der Pfarrer lächelte und sagte: „Nun verstehe ich die Sache wohl. Sie haben Ihren eigenen Schatten an der Mauer gesehen und haben ihn für ein Gespenst gehalten. Gehen Sie nur[6] ruhig nach Hause, aber sagen Sie keinem Menschen etwas davon".

〔譯〕 **das Gespenst 幽靈**

ein Pfarrer 一人の牧師が in seinem Studierzimmer 彼の書齋で saß 腰掛け und て für den folgenden Sonntag 次の日曜日の arbeitete an der Predigt お說教の仕度をしてゐた plötzlich 突然 die Türe 戸が wurde.....geöffnet 開かれた und そして ein Bauer 一人の百姓が mit erschrockenem Gesichte 驚いた顏付をして trat.....ein 這入つて來た er 彼は rief..... aus 叫んだ ach「あゝ Herr Pfarrer 牧師樣 ich 私は bin des Todes 命がない ich 私は ein Gespenst 幽靈を habe.....gesehen 見ました」 der Pfarrer 牧師は sagte 云つた warum「何故 Sie 貴君は so dumm そんな馬鹿なことを sprechen 云ふのか es gibt keine Gespenster 幽靈なんてものはゐないよ」 der Bauer 百姓は sagte 云つた ja「いゝえ gewiß 確に Gespenster 幽靈は es gibt ゐます ich 私は mit meinen eigenen Augen 私自身の眼で eins 一つ habe.....gesehen 見ました」 wann「いつ Sie 貴君は es それを haben.....gesehen 見たか」 vor zwei Minuten「二分間前に」 wo「何處に es それは war ゐたか」 an der Kirchhofmauer「會堂構內の壁

に」 es「それは wie どんな風に sah.....aus 見えたか」 ein großer Esel「大きな驢馬 wie の如くに」 der Pfarrer 牧師は lächelte 微笑し und て sagte 云つた nun「そんなら ich 私は die Sache 事情が wohl よく verstehe わかる Sie あなたは an der Mauer 壁にうつつた Ihren eigenen Schatten あなた自身の影を haben.....gesehen 見 und て ihn それを für ein Gespenst 幽靈だと haben .....gehalten 思つたのだ nur まあ ruhig 心を落着けて nach Hause 家に gehen Sie お歸りなさい aber が keinem Menschen 誰にも etwas davon この事に就いて何か sagen Sie 話してはなり〔ませんぞ〕」

〔註〕——1. 「說教する」といふ動詞は predigen. — 2. eintreten は分離動詞。— 3. ausrufen も分離動詞。— 4. 「死なればならぬ者」の意。(ein Mann des Todes または ein Kind des Todes の省畧)「助かられえ！」と云ふ時に使ふ。— 5. 前の「人と驢馬」の註 1 參照。此の百姓はつまり「おいどんの正體見たり大間抜け」と云つて報告しに來た事になる、だから牧師が、あんまり觸れて歩かない方が好いと云ふのである。

7. Die Diebe.[1]

Ein armer Mann wohnte in einer kleinen Hütte.[2] Er hatte nur ein wenig Stroh und zwei Stühle. Das Stroh war sein Bett. Eines Abends war er sehr müde, ging früh zu Bette und schlief bald ein. Um Mitternacht brachen zwei Diebe in die Hütte ein,[3] um etwas zu stehlen. Die Nacht war sehr dunkel und sie hatten kein Licht. Daher waren sie gezwungen,[4] mit den Händen auf dem Boden und an den Wänden zu suchen, um etwas zu finden. Einer von ihnen warf einen Stuhl um[5] und das Geräusch weckte den armen Mann. Da hörte er die Diebe[6] und sagte: „Ihr seid große Toren. Ihr hofft[7] in der Nacht hier etwas zu finden und ich finde am Tage nichts".

〔譯〕 **die Diebe 泥棒達**

ein armer Mann ある貧乏な人が in einer kleinen Hütte 小さい小屋に wohnte 住んでゐた er 彼は ein wenig Stroh 少しの藁 und と zwei Stühle 二箇の椅子とを hatte 持つてゐるに nur すぎなかつた das Stroh その藁

は sein Bett 彼の寢床で war あつた eines Abends ある夕 er 彼は sehr müde 非常に疲れて war ゐて früh 早く ging……zu Bette 寢床に就い und て bald 間もなく schlief……ein 眠り込んだ um Mitternacht 夜中頃に zwei Diebe 二人の泥棒が etwas 何かを um……zu stehlen 盜むために in die Hütte 小屋の中に brachen……ein 押入つた die Nacht 夜は war sehr dunkel 非常に暗かつた und そして sie 彼等は hatten kein Licht 灯を持つてゐなかつた daher それ故に sie 彼等は etwas 何か um……zu finden 見つけるために mit den Händen 手で auf dem Boden 床の上 und と an den Wänden 壁とを zu suchen 探さ waren……gezwungen ざるを得なかつた von ihnen 彼等の中の einer 一人が einen Stuhl 一の椅子を warf……um ひつくり返した und そして das Geräusch その物音が den armen Mann 貧乏人を weckte 起した da すると er 彼は die Diebe 泥棒〔の物音〕を hörte 聞い und て sagte 云つた ihr「お前達は große Toren 大馬鹿者 seid だ ihr お前達は in der Nacht 夜 hier こゝで etwas 何かを zu finden 見つけようと hofft 望んでゐる und ところが ich 私は am Tage 晝間でも nichts 何も finde 見つからないがね。」

【註】——1. Dieb = thief は「ぬすびと」であるが Räuber = robber は「强盜」の意である。— 2. Hütte は小屋である。近頃日本アルプスの小屋などにも「ヒュッテ」といふ言葉が使はれてゐるやうである。— 3. einbrechen は「侵入する」「盜みに押入る」。— 4. gezwungen は zwingen の過去分詞。こゝでは「强ひられた」「せざるを得なかつた」の意となる。— 5. umwerfen〔二卷 146 の 3〕。— 6. 「泥棒を聞く」は「泥棒の物音を聞く」の意味である。die Uhr hören (時計が鳴るのを聞く)。— 7. hoffen も wünschen も「望む」意味であるが hoffen の方はむしろ期待する、あてにする、豫算用をする、「心算」だ、の意。

8. Das hölzerne Bein.

Ein Hauptmann hatte in einer Schlacht ein Bein verloren. Der General[1] dachte, er könne[2] nicht mehr dienen und gab ihm seinen Abschied. Nach vier Wochen[3] kam er wieder zurück und hatte ein hölzernes Bein. Da ging er zu dem General und sagte: „Ich kann noch dienen. Ich gehe eben so gut mit dem hölzernen Beine wie mit dem natürlichen.[4] Außerdem gehe ich in die Schlacht, um

zu fechten und nicht um davonzulaufen".[5] Endlich ließ ihn der General bleiben. Bald nachher ging der Hauptmann mutig in die Schlacht. Eine Kugel zerschmetterte das hölzerne Bein und er fiel nieder. Ein anderer Offizier, welcher in der Nähe war, rief einen Soldaten und sagte: „Geh' und hole einen Arzt". „Das ist nicht nötig", sagte der Hauptmann, „hole lieber einen Zimmermann".

【譯】 **das hölzerne Bein** 木製の脚

ein Hauptmann 一人の大尉が in einer Schlacht ある會戰で ein Bein 一本の足を hatte verloren 失つた der General 大將は er 彼が nicht mehr 最早 dienen 軍務に服することが könne 出來〔ない〕 dachte と考へ und て gab ihm seinen Abschied 彼を免官にした nach vier Wochen 一ケ月の後 er 彼は wieder また kam……zurück 戻つてきた und そして ein hölzernes Bein 木製の足を hatte つけてゐた da そこで er 彼は zu dem General 大將のところへ ging 行つ und て sagte 云つた ich「私は noch まだ dienen 軍務に服することが kann 出來る ich 私は mit dem natürlichen 普通の〔足で歩く〕 eben so gut wie のと同じ位によく mit dem hölzernen Beine 木製の足で gehe 歩く außerdem 且又 ich 私は um zu fechten 戰はんが爲に und そして nicht um davonzulaufen 逃げ出す爲にではなく in die Schlacht 戰に gehe 行く」 endlich 遂に der General 大將は ließ ihn……bleiben 彼の止ることを許した nachher その後 bald 間もなく der Hauptmann 大尉は mutig 勇敢に in die Schlacht 戰に ging 出掛けた eine Kugel 一發の彈丸が das hölzerne Bein 木製の足を zerschmetterte 粉碎し und て er 彼は fiel nieder 倒れた in der Nähe 近くに war ゐた welcher 所の ein anderer Offizier 他の士官が einen Soldaten 一人の兵士を rief 呼び寄せ und て sagte 云つた geh'「出掛け und て einen Arzt 醫者を hole つれて來い」 der Hauptmann 大尉は sagte 云つた das「それは nötig 必要 ist nicht ではない lieber 寧ろ einen Zimmermann 大工を一人 hole つれて來い」

【註】——1. General は陸軍大將・將官。大將夫人は從つて Frau General といふ。日本語で女將といふと料理屋などのお內儀の事になつて仕舞ふが、これはさうではない、堂々たる大將夫人である。— 2. könne は接續法。— 3. nach vier Wochen = nach

einem Monat. このやうな具合に二週間前(後)の vor (nach) zwei Wochen の代りに vor (nach) vierzehn Tagen を使ふ。併し一週間 eine Woche の代りには acht Tage を用ゐる、sieben Tage といはない、從つて先週の今日といふ時には heute vor acht Tagen である。— 4. 勿論 mit dem natürlichen Beine の略。— 5. 逃げる時は迅速を要するから木製の脚は都合がわるい。— Beine (脚) といふ單語は先づ第一に「逃亡」を聯想させる。西洋語共通の心理である。

9. Der Handwerksbursche.

Ein Schiff wurde von Mannheim den Neckar hinauf nach Heidelberg gezogen. Da kam hinterher ein Handwerksbursche mit einem Sack und einem Paar[1] schwerer Stiefel auf der Schulter. Da sprach er zum Schiffer: „Darf ich mitgehen für[2] Geld und gute Worte[3]? Was muß ich geben?“ Der Schiffer, der ein lustiger Gesell war, antwortete: „Fünfzig Pfennig, wenn Sie im Schiffe sitzen wollen. Wenn Sie aber ziehen helfen, nur zwanzig.“ Der Bursche fing an zu rechnen: „50 Pfennig — 20 Pfennig; 20 von 50 bleibt 30. Diese dreißig Pfennig kann ich verdienen,“ dachte er, und warf den Sack und die Stiefel in das Schiff. Dann nahm er eins von den Seilen, an welchen man das Schiff zog, über die Schulter und half ziehen nach Leibeskräften, denn er dachte: „Wir kommen früher hin, wenn ich fleißig bin.“ In Heidelberg angekommen, zahlte er seine 20 Pfennig für die Erlaubnis mit zu ziehen, nahm sein Gepäck wieder und ging lustig seinen Weg.[4]

〔譯〕 **der Handwerksbursche** 職人の徒弟

ein Schiff 一艘の舟が von Mannheim マンハイムから den Neckar hinauf ネツカアル川を遡つて nach Heidelberg ハイデルベルヒまで wurde gezogen 曳かれてゐた da すると hinterher 後から auf der Schulter 肩に einem Sack 一箇の嚢 und と einem Paar schwerer Stiefel 一足の重い長靴とを mit 持つた ein Handwerksbursche 一人の職人の徒弟が kam やつてきた da そこで er 彼は zum Schiffer 船頭に sprach 云つた für Geld und gute Worte「金と親切と

で ich 私が mitgehen 一緒に行つても darf よいか was いくら ich 私は geben 出さねば muß ならないか」 ein lustiger Gesell 飄輕な男 war であつた der 所の der Schiffer 船頭は antwortete 答へた wenn 若し Sie 貴君が im Schiffe 舟に sitzen 腰掛けてゐ wollen ようと思へば fünfzig Pfennig 五十布(フェンニヒ) aber 併し wenn 若し Sie 貴君が ziehen〔舟を〕牽くのを helfen 助けてくれゝば nur zwanzig ただの二十布だ der Bursche 徒弟は zu rechnen 勘定し fing an 始めた 50 Pfennig「五十布〔と〕20 Pfennig 二十布が 50 五十 von から 20 二十〔を引けば〕30 三十 bleibt 殘る diese dreißig Pfennig この三十布を ich 私は verdienen 儲けることが kann 出來る」er と彼は dachte 考へた und そして den Sack 嚢 und と die Stiefel 長靴とを in das Schiff 舟の中に warf 投げ込んだ dann それから er 彼は man 人々が das Schiff 舟を an welchen それによつて zog 引いてゐた〔所の〕eins von den Seilen 綱の中の一本を über die Schulter 肩に nahm 擔つ und て nach Leibeskräften 力のあらん限り ziehen 引くのを half 助けた denn 何故といふのに wenn「若し ich 私が fleißig 勤勉で bin あれば wir 我々は früher より早く kommen hin 彼處に着くだらう」と er 彼は dachte 考へた〔から〕 in Heidelberg ハイデルベルヒに angekommen 到達して er 彼は mit 一緒に zu ziehen 曳くことの für die Erlaubnis 許可に對して seine 20 Pfennig 彼の二十布を zahlte 支拂ひ sein Gepäck 彼の嚢を nahm wieder また擔いで und そして lustig 愉快に seinen Weg その道を ging 進んで行つた

〔註〕—1. ein Paar は一對。ein paar は einige 若干の。— 2. この für は「な代價として支拂つて」の意。— 3. für Geld und gute Worte は、單に「金を拂つて」といふ事に過ぎない。後の方の「優しき言葉」といふのは單なるお愛想である。交通機關の發達しなかつた時代の旅人達の弱味が、斯うした昔ゆかしき形式的挨拶の詞となつて殘つてゐるのは注目に價する。— 4. seinen Weg が四格であるから gehen が他動詞のやうに見えるがさうではない。「彼の道をゆく」といふ時には二格の seines Weges gehen か或はこの場合のやうな四格の seinen Weg gehen を用ゐる。

10. Die zwei Offiziere.

Ein Offizier trat eines Abends in das Schlafzimmer seines Freundes. „Schlafen Sie schon, mein Freund?“ fragte er ihn.

„Nein," antwortete der andere, „was wünschen Sie?" „Ich bin unglücklich im Spiele gewesen," sagte der erste, „und habe all mein Geld verloren. Ich komme nun, Sie[1] zu bitten, mir zehn Taler[2] zu leihen, ich werde versuchen, mein Geld wieder zu gewinnen." „Lassen Sie mich in Ruhe," sagte der andere; „sehen Sie nicht, daß ich schlafe?"

〔譯〕 **die zwei Offiziere** 二人の士官

ein Offizier 一人の士官が eines Abends ある晩 seines Freundes 彼の友達の in das Schlafzimmer 寢室に trat 入つて行つた er 彼〔入つて行つた士官〕は ihn 彼〔友達の方〕に fragte 尋ねた mein Freund「わが友よ Sie 貴君は schon もう schlafen 寢てゐるのか」 der andere 後者は antwortete 答へた nein「いゝや〔寢てゐない〕 Sie 貴君は was 何を wünschen 望むか」 der erste 前者は sagte 云つた ich「私は im Spiele 賭事で unglücklich 不運で bin .....gewesen あつた und そして all mein Geld 私の金をみんな habe.....verloren 失つた ich 私は zehn Taler 十タアレルを mir .....zu leihen 私に貸して呉れることを Sie 貴君に zu bitten お願ひする爲に nun 今 komme やつてきたのだ ich 私は mein Geld 私の金を wieder zu gewinnen 儲け戻すことを werde versuchen 試みよう」 der andere 相手は sagte 云つた mich「私を lassen Sie.....in Ruhe 構つて下さるな Sie 貴君は ich 私が schlafe 眠つてゐる daß のが sehen わから nicht ないのですか」

〔註〕——1. Sie は四格。日本語から考へると「誰々に願ふ」で三格にしたいが四格を用ゐねばならない。— 2. Taler は昔時行はれた貨幣の名。

11. Eine witzige[1] Antwort.

Friedrich Wilhelm der Erste von Preußen war sehr witzig und hatte gern witzige Leute um sich. Ein junger Mann hoffte durch seinen Witz eine Stelle am Hofe zu erhalten. Er ging jeden Tag in den Garten des Königs, weil er hoffte, den König dort zu sehen. Eines Morgens traf[2] er ihn wirklich. Der König ging zu ihm und begann mit ihm zu sprechen. Er erhielt schnelle und gute

Antworten und schien damit zufrieden zu sein. Der junge Mann faßte Mut[3] und bat um eine Stelle, die zur Zeit leer war. Der König überlegte einen Augenblick und sagte: „Ich kann Ihnen jetzt nichts versprechen. Ich muß zuerst mit meinem Minister reden. Aber sagen Sie mir, woher kommen Sie?" „Ich bin ein Berliner,[4] Ihre Majestät". „Es tut mir leid," sagte der König, „denn alle Berliner taugen nichts". „Ich bitte um Entschuldigung, Ihre Majestät, aber es gibt unter ihnen auch gute Leute," sagte der junge Mann. „Ich selbst kenne zwei". „Wer sind diese zwei?" fragte der König. „Der eine," antwortete der Mann, „ist Ihre Majestät, und der andere bin ich". Der König lächelte, und am folgenden Morgen erhielt der Mann die gewünschte Stelle.

〔譯〕 **eine witzige Antwort** 氣の利いた返答

von Preußen プロシアの Friedrich Wilhelm der Erste フリイドリヒ・ヰルヘルム一世は sehr 非常に war witzig 頓智があつ und て gern 好んで witzige Leute 頓智のある人々を hatte.....um sich 身邊に集めてゐた ein junger Mann 一人の若者が durch seinen Witz その頓智によつて am Hofe 宮廷に於ける eine Stelle ある位置を zu erhalten 得ようと hoffte 志した er 彼は dort そこなら den König.....zu sehen 國王に會へると hoffte 信じた weil ので er 彼は jeden Tag 毎日 in den Garten des Königs 國王の庭園に ging 出掛けた eines Morgens ある朝 er 彼〔若者〕は ihn 彼〔國王〕に wirklich 實際 traf 出會つた der König 國王は zu ihm 彼のところに ging やつて來 und て mit ihm 彼と zu sprechen 話し begann 始めた er 彼〔國王〕は schnelle 迅速にし und て gute よい Antworten 答を erhielt 得た und そして damit その答に zufrieden zu sein 滿足した schien やうに見えた der junge Mann 若者は faßte Mut 勇氣を起し und て zur Zeit 當時 leer 空いて war ゐた die ところの um eine Stelle ある位置を bat 乞ひ求めた der König 國王は einen Augenblick 一瞬間 überlegte 考慮し und て sagte 云つた ich「私は jetzt 今 Ihnen 貴君に nichts 何も versprechen 約束することは kann 出來〔ない〕 ich 私は zuerst 先づ mit meinem Minister 私の大臣と

reden 話しをし muß なければならない aber が Sie 貴君は woher 何處から kommen 來たのか mir 私に sagen Sie お云ひなさい」 ich「私は ein Berliner 伯林人 bin です Ihre Majestät 陛下」 der König 國王は sagte 云つた es「それは tut mir leid 殘念である denn といふのは alle Berliner 伯林人は皆 nichts 何にも taugen 役に立た〔ない〕」 der junge Mann 若者は sagte 云つた Ihre Majestät「陛下 ich bitte um Entschuldigung aber 失禮ですが unter ihnen 伯林人の中には gute Leute 良い人々 auch も es gibt 居ます ich selbst 私自身も zwei 二人 kenne 知つてゐます」 diese zwei「その二人とは wer 誰で sind あるか」と der König 國王が fragte 尋ねた der Mann 男は antwortete 答へた der eine「一人は Ihre Majestät 陛下 ist であり und また der andere もう一人は ich 私 bin です」 der König 國王は lächelte 微笑した und そして am folgenden Morgen 次の朝 der Mann その男は die gewünschte Stelle 望みの地位を erhielt 得た

【註】——1. 英語の wit が Witz m. — 2. treffen, traf, getroffen. 「或人に出會ふ」といふ時 treffen を使へば「或人に」は四格。begegnen を使へば三格。— 3. 「勇氣を起す」意。einen Entschluß fassen は「決心する」。— 4. Berliner「伯林人」と同じやうに Londoner 倫敦人、Wiener ヰーン人、Tokiver 東京人、Osakaer 大阪人。

12. Der Wolf und der Geiger.[1]

Es ging einmal ein Geiger nach Hause von einem Jahrmarkte,[2] wo er den Leuten gespielt hatte bis tief in die Nacht. Er ging nicht auf der Straße, sondern durch den Wald, und weil es sehr dunkel war, fiel er endlich in eine Grube, welche der Jäger gegraben hatte, um Wölfe zu fangen. Der Schreck war schon groß genug für den Geiger, als er von der ebenen Erde plötzlich hinab fiel. Seine Angst wurde aber noch größer, da er unten auf etwas Lebendiges fiel, das wild aufsprang. Da merkte er, daß es ein Wolf war, der ihn mit feurigen[3] Augen ansah. (續く)

【譯】 der Wolf und der Geiger 狼とヴイオリン彈き

einmal ある時 ein Geiger 一人のヴイオリン彈きが er 彼が bis tief in die

Nacht 夜晩くまで den Leuten 人々に gespielt hatte 演奏した wo 所の von einem Jahrmarkte 祭市から nach Hause 家へと ging 歩いた er 彼は auf der Straße 往來の上を ging nicht 歩まない sondern で durch den Wald 森を通つて〔歩んだ〕 und そして sehr 非常に es.....dunkel war 暗かつた weil ので er 彼は endlich 遂に der Jäger 獵師が Wölfe 狼を um.....zu fangen 捕へる爲に gegraben hatte 掘つて置いた welche 所の in eine Grube 穴の中に fiel 落ち込んだ er 彼が von der ebenen Erde 平坦な土地から plötzlich 突然 hinab fiel 下へ落ちた als 時に schon 既に der Schreck 驚愕は für den Geiger ヴイオリン彈きにとつて groß genug 充分大で war あつた aber ところが er 彼が unten 下で wild 激しく aufsprang 跳び上る das 所の auf etwas Lebendiges 何か生きてゐるものに fiel のしかかつた da 時に seine Angst 彼の不安は noch größer 尙益々大と wurde なつた da すると er 彼は es それが mit feurigen Augen 烱々たる眼光で ihn 彼を ansah 睨んでゐる der 所の ein Wolf 一匹の狼で war ある daß 事を merkte 認めた

【註】——1. ヴイオリンは Geige f. 或は外來語で Violine (ヴオリーネ) f. を使ふ。— 2. Jahrmarkt は一年に一度或は數度開かれる大市。— 3. Feuer n. (火) から來た形容詞。

Der Mann hatte nichts in der Hand als seine Geige, und in[1] seiner Angst fing er an, vor dem offenen Rachen des Wolfes alle seine Stücke[2] zu spielen, die ihm aber diesmal nicht lustig vorkamen. Dem Wolfe schien aber die Musik zu gefallen,[3] denn er fing an laut zu heulen, was[4] wohl ganz besonders gesungen sein sollte. Die anderen Wölfe in dem Walde, da sie ihren Kameraden so singen hörten, stimmten auch ein, und ihr Geheul kam manchmal so nahe, daß der Geiger jeden Augenblick fürchtete, es käme noch ein anderer, oder selbst[5] ein dritter Gast in die Grube hinein. Der Geiger sah wiederholt in die Höhe, ob der Tag nicht bald käme; denn das Geigen war ihm in seinem Leben nicht so langweilig[6] geworden, und er hätte lieber Holz gehauen[7] ein ganzes Jahr lang, als eine Nacht vor dem Wolfe gegeigt. (續く)

【譯】 der Mann その男は in der Hand 手に als seine Geige ヴイオリンよりほかには nichts 何物をも hatte 持つてゐ〔なかつた〕 und そして in seiner Angst 不安の儘に er 彼は des Wolfes 狼の vor dem offenen Rachen 大きく開いた口の前で alle seine Stücke 腕に覺えのある限りの曲を zu spielen 彈き fing an 始めた aber 併し die その曲は diesmal 此際は ihm 彼に lustig 樂しく vorkamen 思はれ nicht なかつた aber 併し dem Wolfe 狼には die Musik 音樂が zu gefallen 氣に入つた schien らしかつた denn 何故といふに er 狼は laut 聲高く zu heulen 吼え fing an 始めたから was そしてそれは wohl 大方 ganz besonders 特にすぐれて gesungen sein 歌はれてゐた sollte のかもしれなかつた in dem Walde 森の中の die anderen Wölfe auch 他の狼達も ihren Kameraden その仲間が so そんなやうに singen 歌ふのを sie hörten 聞いた da ので stimmten.....ein 唱ひ和した und そして ihr Geheul 彼等の吼聲は manchmal 時々 so nahe 非常に近くに kam 來た daß ので der Geiger ヴイオリン彈きは noch ein anderer もう一匹の oder 或は selbst ein dritter Gast 三匹目のお客さへ in die Grube 穴の中に es käme.....hinein 這入つて來はしないかと jeden Augenblick 刻一刻 fürchtete 恐れてゐた der Geiger ヴイオリン彈きは bald 間もなく der Tag ..... käme 晝間になりは nicht しない ob かと wiederholt 繰返し繰返し sah.....in die Höhe 上を見た denn 何故といふに das Geigen ヴイオリンを彈くことが ihm 彼にとつて in seinem Leben その生涯中 so langweilig こんなに退屈に war.....nicht.....geworden なつたことはなかつた〔から〕 und そして er 彼は eine Nacht 一晩 vor dem Wolfe 狼の前で gegeigt ヴイオリンをひく als くらゐなら lieber むしろ ein ganzes Jahr lang まる一年の間 hätte Holz gehauen 木を伐つたであらう

【註】——1. 狀態 (Zustand) を表はす in である。「不安の狀態に於て」の意。— 2. Stück n. には種々の意味があるがこゝでは樂曲の意。— 3. gefallen, gefiel, gefallen. — 4. この was に就いては文法 171 項參照。gesungen sein〔二卷文法 117 項〕、sollte〔三卷文法 249 項〕。— 5. この selbst は日本語の「.....さへ」に當る。— 6. 退屈といふ名詞は Langweile f. — 7. hätte gehauen は接續法第二式 (約束法) である。

Ehe der Morgen kam,[1] waren schon zwei Saiten an seiner Geige zerrissen, und als es Tag wurde, riß die dritte, und der Geiger

spielte nun auf der vierten und letzten. Wäre die auch zerrissen, hätte der Wolf, der durch das viele Heulen noch hungriger[2] geworden war, ihm kaum[3] Zeit gegeben um neue Saiten aufzuziehen, sondern hätte ihn sogleich aufgefressen.[4] Da kam zum Glück der Jäger, der den Wolf schon von weitem singen hörte. Er zog den Geiger heraus und schoß dann den Wolf. Der Geiger ging seines Weges und versprach sich,[5] künftig am Tage und auf dem geraden Wege nach Hause zu gehen.

【譯】 der Morgen 朝が kam 來る ehe 前に schon 既に an seiner Geige 彼のヴイオリンの zwei Saiten 二本の絃は waren.....zerrissen 斷ち切れてゐた und そして es Tag wurde 夜が明ける als と die dritte 三本目の絃が riß 切れた und そして der Geiger ヴイオリン彈きは nun 今や auf der vierten und letzten 最後の四本目の絃で spielte 演奏した die auch この絃も wäre..... zerrissen 若し斷ち切れたならば durch das viele Heulen 盛んに吼えたために noch hungriger 尙一層空腹に geworden war なつてゐた der 所の der Wolf 狼は ihm 彼に neue Saiten 新しい絃を um.....aufzuziehen 張るための Zeit 時間を kaum 殆んど hätte.....gegeben 與へ〔ない〕 sondern で ihn 彼を sogleich 直ちに hätte.....aufgefressen 食ひ平げたであらう da すると schon 既に von weitem 遠方から den Wolf 狼が singen 歌ふのを hörte 聞いた der 所の der Jäger 獵師が zum Glück 幸なことには kam やつて來た er 彼は den Geiger ヴイオリン彈きを zog.....heraus 引き出し und て dann それから den Wolf 狼を schoß 射擊した der Geiger ヴイオリン彈きは ging seines Weges 其處を去つた und そして künftig 今後は am Tage 晝間 und そして auf dem geraden Wege 眞直な道を通つて nach Hause zu gehen 歸宅しようと versprach sich 期し誓つた

【註】——1. かういふ時に日本語では普通「朝にならない內に」といふやうな否定の言葉を使ふ。— 2. 比較級で比較されるものがないやうであるが「吼えない時よりも尙」のつもりである。— 3. kaum〔文法本卷 397 項〕。— 4. auffressen は「啖ひ盡す」。— 5. jemand verspricht sich etwas は「確かにさうなると心に期する」「さう心に決める」の意。sich は勿論三格〔文法二卷 155 項〕。

13. Doktor[1] Barth.

Im Jahre 1850 ging Doktor Barth, der berühmte deutsche Reisende, nach Afrika, um die Wüste Sahara zu untersuchen. Eines Tages verließ er seine Kameraden, um einen Berg zu besuchen, der in der Nähe war. Er ging so weit, daß er sich endlich verirrte. Der letzte Tropfen von dem warmen Wasser, das er in einer Flasche mitgenommen[2] hatte, war getrunken, und die Sonne schien mit einer schrecklichen Hitze auf den armen Mann. Nirgends[3] war eine Quelle zu sehen. Das harte Brot, von[4] dem er genug hatte, konnte er nicht essen, Wasser war sein einziger Wunsch. So wanderte er den ganzen Tag über Sand und Steine und schaute umsonst[5] nach seinen Kameraden, umsonst nach Wasser. (續く)

【譯】 **Doktor Barth** バルト學士

Im Jahre 1850 一八五〇年に der berühmte deutsche Reisende 有名なドイツの旅行家 Doktor Barth バルト學士は die Wüste Sahara サハラ砂漠を um .....zu untersuchen 調査する爲に nach Afrika アフリカに ging 行つた eines Tages ある日 er 彼は in der Nähe 近所に war あつた der 所の einen Berg ある山を um.....zu besuchen 見に行く爲に verließ.....seine Kameraden その同僚の所から去つた er 彼は daß er sich endlich verirrte 遂に道を迷つた程 so weit 遠くに ging 出掛けた er 彼が in einer Flasche 壜に入れて mitgenommen hatte 携帶してゐた das 所の von dem warmen Wasser お湯の der letzte Tropfen 最後の滴も war getrunken 飲み盡されてゐた und そして die Sonne 太陽は mit einer schrecklichen Hitze 非常な熱で auf den armen Mann 慘めな彼を schien 照した nirgends 何處にも eine Quelle 泉は war.....zu sehen 見え〔なかつた〕 er 彼が genug 充分に hatte 持つてゐた von dem 所の das harte Brot 固いパンを er 彼は essen 食べることは konnte 出來 nicht なかつた Wasser 水が sein einziger Wunsch 彼の唯一の希望で war あつた so かくて er 彼は den ganzen Tag 終日 über Sand und Steine 砂と石との上を wanderte 歩き廻つた und そして schaute nach seinen Kameraden 彼の仲間達を

見つけようとしたが umsonst 無駄であつた nach Wasser 水を〔見つけようとしたが〕 umsonst 無駄であつた

【註】——1. Doktor はドイツでは大學を卒業したものの稱號であるから丁度日本の學士にあたる。— 2. mitnehmen は分離動詞。— 3. nirgends は英語の nowhere と同じ。— 4. genug 等の「量詞」は、謂はば名詞のやうなものであるから、「パンを充分」と云はないで、パン「の」充分を、と云ふのが例である。殊にパンは、水や金屬と同じやうに、「物質名詞」であるから、たとへ genug がなくても Ich esse vom Brot (私はパンをたべる) 等と云ふ。此の場合の von dem (dessen 一字に換へても好い) を「それを」と四格の樣に譯したのは genug を副詞的に譯すための便法である。— 5. umsonst はこゝでは vergebens の意味で英語の in vain に當る。

Die Sonne ging unter, und der arme Reisende sank erschöpft[1] nieder[2] an dem Fuße eines dürren Baumes. Die Anstrengung, die Hitze, vor allem aber der Durst, hatten seine Kräfte erschöpft[3] und mit Entsetzen dachte er an die brennende Sonne des nächsten Tages. Die Qual des Durstes und des Fiebers, welches in ihm brannte, war stärker als die Müdigkeit. Da ging die Sonne wieder auf. Kaum hatte er so viel Kraft, daß er sein Haupt ein wenig rühren konnte, als[4] sich der Schatten des Stammes wendete. Um Mittag war der letzte Schatten verschwunden[5] und ruhig erwartete er den Tod. (續く)

【譯】 die Sonne 太陽は ging unter 沒した und そして der arme Reisende あはれな旅行者は erschöpft 疲れ果てて eines dürren Baumes 枯れた樹の an dem Fuße 足下に sank.....nieder 倒れた die Anstrengung 努力 die Hitze 熱さ aber 併し vor allem 就中 der Durst 渴が seine Kräfte 彼の力を hatten.....erschöpft 疲れ果てさせて仕舞つてゐた und そして er 彼は des nächsten Tages 翌日の an die brennende Sonne 赫々たる太陽のことを mit Entsetzen 恐怖して dachte 考へてゐた des Durstes 渴き und と in ihm 彼の中に brannte 燃えさかつてゐた welches 所の des Fiebers 熱との die Quall 苦しみは die Müdigkeit 疲勞 als よりも war stärker 甚しかつた da すると die Sonne 太陽が wieder 再び ging.....auf 昇つた er 彼が sein Haupt その頭を ein wenig

少し rühren 動かす konnte ことが出來る so viel.....daß だけの Kraft 力すら kaum hatte 殆んど無くなつた als 時には〔意地惡くも〕 der Schatten des Stammes 幹の蔭が sich wendete 方向を轉じた〔日なたになつてしまつた〕 um Mittag 晝頃 der letzte Schatten 最後の蔭が war.....verschwunden なくなつて仕舞つてゐた und そして ruhig 靜かに er 彼は den Tod 死を erwartete 待つてゐた

【註】——1. 疲れ切つて。— 2. niedersinken は分離動詞。— 3. この erschöpft は註の 1 と同じ形であるが用ゐ方は違ひ、これは hatten と一緒になつて過去完了を形成してゐる。— 4. als〔文法本卷 300 項〕。— 5. verschwinden, verschwand, verschwunden.

In seinem Fieber glaubte er, das Rauschen einer Quelle zu hören, aber er hatte nicht die Kraft, ein Glied[1] zu rühren. Da, als sein Leben fast zu Ende war, hörte er den Schrei eines Kamels und sah einen seiner Kameraden, der ihn suchte. „Wasser!" war das einzige Wort, das er sprechen konnte; an einem Tropfen Wasser[2] hing[3] sein Leben. Der Kamerad hatte Wasser gebracht; er badete ihm das Gesicht, gab ihm zu trinken und Doktor Barth war gerettet.

【譯】 in seinem Fieber 熱に浮かされて er 彼は einer Quelle 泉の das Rauschen さざめきを zu hören 聞くと glaubte 思ひ作した aber 併し er 彼は ein Glied 肢體の一も zu rühren 動かす die Kraft 力を hatte nicht 持つてゐなかつた da すると sein Leben 彼の生命が fast 殆んど zu Ende war 終らうとした als 時に er 彼は eines Kamels 一頭の駱駝の den Schrei 鳴聲を hörte 聞き und また ihn 彼を suchte 探してゐた der 所の einen seiner Kameraden 彼の仲間の一人を sah 見た Wasser「水を」〔といふのが〕 er 彼の sprechen 語り konnte 得た das 所の das einzige Wort 唯一の言葉で war あつた an einem Tropfen Wasser 一滴の水に sein Leben 彼の生命が hing 懸つてゐた der Kamerad その仲間は Wasser 水を hatte.....gebracht 持つて來てゐた er 彼は ihm das Gesicht 彼の顏を badete 水で洗ひ ihm 彼に gab.....zu trinken 飲む水を與へ und かくして Doktor Barth バルト學士は war gerettet 救はれたのであつた。

【註】——1. Glied n. は英語の member. — 2. ein Tropfen Wasser「一滴の水」は一杯の葡萄酒 ein Glas Wein, 一壜のビール eine Flasche Bier 等と同じ使ひ方。— 3. hangen, hing, gehangen.

14. Die Schildbürger.

Die Schildbürger hatten ein neues Rathaus gebaut, hatten aber die Fenster vergessen. Als sie es nun einweihen[2] wollten, war es so dunkel, daß einer den andern nicht sehen konnte. Die Ursache aber blieb ihnen unbekannt, wie sehr sie auch[3] darüber nachdachten. Endlich beschlossen sie einen großen Rat[4] zu halten, um die Sache zu untersuchen. (續く)

【譯】 die Schildbürger シルダ[1] の市民

die Schildbürger シルダの市民は ein neues Rathaus 新しい市會議事堂を hatten.....gebaut 建てた aber が die Fenster 窓を hatten.....vergessen 忘れて仕舞つてゐた nun さて sie 彼等が es それを einweihen 開場し wollten ようと思ふ als と es それは einer 一人が den andern 他の人を nicht sehen konnte 見ることが出來ない daß 位 so dunkel 暗く war あつた aber 併し die Ursache 原因は wie sehr .....auch どんなに sie 彼等が darüber それに就いて nachdachten 熟慮しても ihnen 彼等に blieb.....unbekannt 依然としてわからなかつた endlich 遂に sie 彼等は die Sache 本件を um.....zu untersuchen 究明する爲に einen großen Rat 大會議を zu halten 催すことを beschlossen 決定した

【註】——1. Schilda, Schildburg は、口碑に謠はれた「馬鹿者の町」。— 2. 店びらき、除幕式、渡りぞめ、披露等、何にでも使ふ字。— 3. wie ..... auch 如何に.....しようとも。— 4. こゝでは會議・審議の意であるが、また會議員・評議員の意になる。大學の Professor で功勞ある人などの稱號に Geheimrat といふのがある。日本の評議員に當るのであらう。さういふ人達に Herr Professor 何々と呼び掛けると Bitte, Geheimrat! (失禮ですが Geheimrat とお呼び下さい) といふ人もあるさうである。

Als der bestimmte Tag gekommen war, versammelten[1] sich all die Schildbürger, ein jeder zündete ein Licht an, damit[2] sie einander in dem dunklen Rathause sehen könnten, und sprachen dann ihre

Meinung[5] aus. Die Mehrheit[4] schien geneigt, den ganzen Bau bis auf den Grund niederzureißen und neu aufzubauen. Da trat einer hervor, der immer der Allerweiseste gewesen war, und sprach: „Wer weiß, ob man nicht das Tagelicht in einem Sacke tragen kann, wie das Wasser in einem Eimer? Keiner von uns hat es jemals versucht. Wenn es geht, so werden wir großes Lob bekommen; geht es aber nicht, so kostet[5] der Versuch nichts". (續く)

【譯】 der bestimmte Tag 定められた日が gekommen war 來る als と all die Schildbürger シルダの市民は皆 versammelten sich 集まつた ein jeder 誰もが einander お互を in dem dunklen Rathause 暗い議事堂内で damit sie sehen könnten 見得る爲に ein Licht 燈火を zündete.....an 點けた und そして dann それから ihre Meinung その意見を sprachen.....aus 述べた die Mehrheit 多數〔の人〕は den ganzen Bau 全建築を bis auf den Grund 基礎の處まで niederzureißen 取毀つ und て neu aufzubauen 新たに建て直す geneigt 氣になつてゐる schien やうに思はれた da すると immer いつも der Allerweiseste 最も賢い人 gewesen war であつた der 所の einer 一人の人が trat.....hervor 進み出 und て sagte 云つた man「人が das Wasser 水を in einem Eimer 手桶に入れて〔持ち運ぶ〕 wie やうに das Tagelicht 日の光を in einem Sacke 袋に入れて nicht.....tragen kann 持ち運び得ない ob と wer weiß 誰が云ひ得るか keiner von uns 我々の中の誰もが jemals 曾つて es それを hat.....versucht 試みたことが〔ない〕 wenn 若し es geht それが出來れば so さうすれば wir 我我は großes Lob 大なる賞讃を werden.....bekommen 得るであらう aber 併し geht es.....nicht それが出來なければ so とて der Versuch この試みは kostet.....nichts 少しも費用が掛らぬ

【註】——1. 名詞は Versammlung (會合) となる。— 2. この damit は「.....せんが爲に」といふ目的を表はす。— 3. 一般的には「意見」であるが、哲學上の用語としては「臆見」として「正しい認識」に相對して用ゐられることがある。— 4. 多數決 Mehrheitsbeschluß m. — 5. kosten は英語の to cost と同じに「價する」といふ意味であるが、もう一つ同じ綴で「味ふ」to taste といふ意味もある。

Dieser Rat schien so gut, daß sie beschlossen, ihn in aller Eile

auszuführen. Deswegen[1] kamen sie gleich[2] nach Mittag, wo die Sonne am besten scheint, vor das neue Rathaus, jeder mit einem Geschirr, in dem er das Tagelicht fangen wollte. Einige brachten auch Schaufeln und Gabeln, damit nichts versäumt werde. (續く)

【譯】 dieser Rat この提議は schien so gut, daß 非常によいやうに思はれたので sie 彼等は ihn これを in aller Eile 大急ぎで auszuführen 實行することに beschlossen 決定した deswegen それ故に sie 彼等は die Sonne 太陽が am besten 一番よく scheint 照る wo 時刻の gleich nach Mittag 正午過ぎたばかりの時に vor das neue Rathaus 新議事堂の前に kamen やつて來た jeder 誰もが das Tagelicht 日の光を in dem er fangen wollte 捕へ入れようと思つた所の mit einem Geschirr 容器を持つて einige 數人の人は nichts 少しも versäumt werde 手落ちのない damit やうに Schaufeln シャベル und や Gabeln 熊手 auch まで brachten 携へてきた

【註】——1. deswegen = deshalb. — 2. gleich, sogleich, sofort.

Sobald nun die Glocke eins geschlagen hatte, da konnte man Wunder sehen, wie sie zu arbeiten anfingen. Viele hatten lange Säcke, in diese ließen sie die Sonne scheinen bis auf den Boden; dann knüpften sie die Säcke rasch zu[1] und rannten[2] damit in das Rathaus, um das Licht auszuschütten. Andere taten dasselbe mit gedeckten Gefäßen, wie Töpfen, Kesseln und Zubern. Einer wollte das Licht mit einer Heugabel in einen Korb laden, ein anderer mit einer Schaufel. (續く)

【譯】 nun さて die Glocke 鐘が eins 一時を geschlagen hatte 打つて仕舞ふ sobald....., da や否や man 人は wie sie zu arbeiten anfingen 彼等の仕事し始める仕方の Wunder 驚異を sehen 見ることが konnte 出來た viele 大勢 lange Säcke 長い袋を hatten 持つてゐて in diese この中に sie 彼等は die Sonne 日光を bis auf den Boden 底まで ließen.....scheinen 照らさした dann それから sie 彼等は die Säcke 袋を rasch すばやく knüpften.....zu 紐で緊め und て

das Licht 光を um.....auszuschütten 振ひ出すために damit 袋を持つて in das Rathaus 堂内に rannten 駆け込んだ andere 他の人々は dasselbe 同じ事を Töpfen 壺や Kesseln 釜 und や Zubern 手桶 wie のやうな mit gedeckten Gefäßen 覆ひのある容器で taten なした einer ある人は das Licht 光を mit einer Heugabel 枯草用熊手で in einen Krob 籠の中に laden 積込まうと wollte した ein anderer また ある人は mit einer Schaufel シャベルで〔積込まうとした〕

〔註〕——1. zuknüpfen (紐を結んで締める)〔文法第二卷 144 項〕。— 2. rennen, rannte, gerannt.

Ein Schildbürger aber verdient[1] besonders erwähnt zu werden, welcher das Tageslicht mit einer Mausefalle fangen und so in das Rathaus tragen wollte. Und so arbeiteten sie den ganzen Tag, so lange die Sonne schien, mit solchem Eifer, daß sie vor Hitze und Müdigkeit fast zu Boden sanken. Zuletzt sagten sie: „Es geht nicht, aber es wäre doch schön gewesen, wenn es geraten wäre[2].“ Und dann gingen sie alle in das Wirtshaus und labten sich, auf gemeine Kosten[3] mit Wein, weil sie für das allgemeine Wohl[4] gearbeitet hatten.

〔譯〕 aber 併し das Tageslicht 日の光を mit einer Mausefalle 捕鼠器で fangen 捕へ und so かくて in das Rathaus 堂内へ tragen 運ばうと wollte した welcher 所の ein Schildbürger 一人のシルダの市民は besonders erwähnt zu werden 特筆大書する verdient 値打がある und so かくして sie 彼等は die Sonne 太陽が schien 輝いてゐる so lange 間 den ganzen Tag 終日 arbeiteten.....mit solchem Eifer, daß 非常に熱心に働いたので sie 彼等は Hitze 熱さ und と Müdigkeit 疲勞との vor 爲に fast 殆んど zu Boden sanken 倒れん〔ばかりであつた〕 zuletzt 遂に sie 彼等は sagten 云つた es geht nicht「こいつは駄目だ aber 併し wenn 若し es それが geraten wäre 成功したならば es それは doch 確に schön 結構で wäre ..... gewesen あつたであらう」 und dann そしてそれから sie 彼等は für das allgemeine Wohl 一般の幸福のため

に weil sie.....gearbeitet hatten 働いたのであるから alle 皆 in das Wirtshaus 飲食店に ging 行つ und て auf gemeine Kosten 公の費用で mit Wein 酒で labten sich 元氣を回復した

〔註〕——1. verdienen は「値する」と「儲ける」との二樣の意味がある。從つてこれが名詞になつた Verdienst も功勞 (n.) と儲 (m.) との二の意味がある。性が異るところに注意。— 2. これは geraten (= gelingen) の接續法である。— 3. Kosten (費用) は現今主として複數で使ふやうである。— 4. Wohl = Heil n. (幸福)。

15 Die Sage von Wilhelm Tell.

Unter dem Kaiser Albrecht regierte in der Schweiz[1] ein Vogt Namens Geßler,[2] der sehr unrecht handelte. Um den Gehorsam des Volkes auf die Probe zu stellen, ließ er in Altorf, unter einer Linde, wo viele Leute vorbeigingen, eine Stange aufstellen, einen Hut darauf legen und gebot, daß jeder, der vorbeiginge,[3] sich vor dem Hute neigen sollte, als ob der König selbst da wäre. Auch stellte er einen Wächter hin, der alle anzeigen sollte, die dem Gebote nicht folgten. Das Volk war über diesen Übermut sehr erregt,[5] aber aus Furcht vor dem Kaiser wagte niemand zu widerstehen. (續く)

〔譯〕 die Sage von Wilhelm Tell ギルヘルム・テルの傳說

unter dem Kaiser Albrecht アルブレヒト皇帝の代に in der Schweiz 瑞西に於ては sehr unrecht 非常に不正な handelte 行をしてゐた der 所の Namens Geßler ゲスレルといふ名前の ein Vogt 代官が regierte 支配してゐた den Gehorsam des Volkes 人民の從順を um.....auf die Probe zu stellen 試してみるために er 彼は in Altorf アルトルフに viele Leute 多くの人々が vorbeigingen 通りすぎる wo 所の unter einer Linde 菩提樹の下に eine Stange 一本の竿を ließ.....aufstellen 立てさせ einen Hut 帽子を darauf その上に [ließ]..... legen 置かせ und て vorbeiginge 通りすぎる der 人は jeder 誰でも vor dem Hute 帽子の前で als ob 宛も der König selbst 國王自身が da そこに wäre ある〔かの如く〕 sich.....neigen お辭儀をし sollte なければならない daß と

gebot 命じた auch 又 er 彼は dem Gebote 命令に nicht folgten 從はない die 所の alle すべての人を anzeigen sollte 報告すべき der 所の einen Wächter 番人を stellte......hin そこに置いた das Volk 人民は über diesen Übermut この驕慢に就いて sehr 非常に war erregt 興奮してゐた aber が vor dem Kaiser 皇帝に對する aus Furcht 恐怖から niemand 何人も zu widerstehen 反抗することを wagte 敢てし〔なかつた〕

【註】――1. die Schweiz (瑞西) はいつも女性の定冠詞を附ける。―2. Hermann Geßler がその全部の名。―3. これは接續法である。―4. hinstellen は分離動詞。―5. erregen は動かす、刺戟する、興奮する。名詞は Erregung f.

Da ging an einem Sonntage im November ein ehrlicher Mann, Wilhelm Tell genannt, und weit und breit[1] als ein tapferer Schütze bekannt, an dem Hute vorüber, ohne sich vor ihm zu neigen. Das ward[2] dem Vogt angezeigt. Am Montage danach ließ er Tell zu sich rufen und fragte, warum er seinem Gebote nicht gehorsam wäre und sich nicht vor dem Hute geneigt hätte. Tell gab zur Antwort: „Lieber Herr, es ist nicht aus Verachtung[3] geschehen. Ich dachte nicht, daß Euer Gnaden[4] es als eine Beleidigung ansehen würden“. (續く)

【譯】 da すると im November 十一月の an einem Sonntage ある日曜日に Wilhelm Tell genannt ギルヘルム・テルといふ名前で und そして weit und breit 到る處 als ein tapferer Schütze bekannt 勇敢な射手として知られてゐた ein ehrlicher Mann 一良民が vor ihm 彼〔帽子〕の前で ohne sich......zu neigen お辭儀をしないで an dem Hute 帽子の前を ging......vorüber 通りすぎた das この事が dem Vogt 代官に ward......angezeigt 報告された am Montage danach その次の月曜日に er 彼は Tell テルを ließ......zu sich rufen 召喚させ und て warum 何故 er 彼〔テル〕が seinem Gebote 彼〔代官〕の命令に nicht gehorsam wäre 從はない und で vor dem Hute 帽子の前で sich nicht......geneigt hätte お辭儀をしなかつたかを fragte 尋ねた Tell テルは gab zur Antwort 答へて曰く lieber Herr「殿様よ es それは aus Verachtung 輕蔑の念から ist

nicht......geschehen 爲されたのではございません ich 私は Euer Gnaden 閣下が es それを als eine Beleidigung 侮辱と ansehen würden お見做し遊ばさう daß とは dachte nicht 思ひませなんだ。」

【註】――1. weit und breit = überall. ―2. werden の過去でたゞ單數のみに用ゐ ich, er ward; du wardst となり、ich, er wurde; du wurdest と同じである。兩者は、Daniel Sanders: Wörterbuch der Hauptschwierigkeiten in der deutschen Sprache に據れば大した區別はなく、一の文章で口調の上から兩方使つてゐる下の如き例もあるさうである。Abend w a r d's und w u r d e Morgen (Schiller). ―3. Verachtung は輕蔑で Achtung は注意・尊敬。一體 ver- といふ Präfix が附くときは意味が反對になる場合とさうでない場合とがある。höhnen (嘲弄する)、verhöhnen (嘲弄する)。heiraten (娶る)、verheiraten (結婚させる)。Bindung (縛ること)、Verbindung (結ぶこと)。― Käufer (買ふ人)、Verkäufer (賣る人)。bitten (願ふ)、verbitten (斷る) 等。―4. Gnade f. は英語の grace. それから生じたのが Euer Gnaden (閣下、殿樣) といふ成句で、普通は Ew. Gnaden と省畧する。

Nun war Tell ein so guter Schütze mit der Armbrust,[1] daß man kaum einen besseren fand, und hatte drei Kinder, zwei Knaben und ein Mädchen. Der Vogt ließ diese holen und sprach: „Tell, welches von deinen Kindern ist dir das liebste?“ Tell antwortete: „Herr, sie sind mir alle gleich lieb“. Da sprach der Vogt: „Tell, du bist ein guter Schütze, wie ich höre; nun sollst du mir deine Kunst zeigen und einen Apfel von[2] dem Haupte eines deiner Kinder schießen; triffst du ihn nicht auf den ersten Schuß, so kostet es dir dein Leben“. Tell erschrak über diese Worte, und bat den Vogt, Mitleid mit ihm zu haben, denn es wäre unnatürlich,[3] daß er auf sein eigenes Kind schießen sollte[4]; er wollte lieber sterben, sagte er. Der Vogt aber sprach: „Den Schuß verlange ich und nicht dein Leben. Du mußt es tun oder du und dein Kind sollen[5] sterben“. Nun sah Tell, daß es keinen Ausweg gab, bat Gott, daß er ihn und sein Kind behüten möge,[6] nahm seine Armbrust, spannte sie, legte den Pfeil auf[7] und steckte einen zweiten Pfeil in seinen Koller.[8] Der Vogt selbst nahm Tells ältesten Knaben,

stellte ihn an einen Baum und legte ihm einen Apfel auf den Kopf. Tell zielte und schoß den Apfel durch die Mitte.[9] (續く)

【譯】 nun さて Tell テルは man 人が kaum 殆んど einen bessern よりよき〔射手〕を fand 見出さ〔なかつた〕 daß 位の ein so guter Schütze mit der Armbrust 弩の名射手で war あつた und そして zwei Knaben 二人の男の子 und と ein Mädchen 一人の女の子との hatte drei Kinder 三人の子供を持つてゐた der Vogt 代官は diese 後者〔子供達〕を ließ.....holen つれて來さし und て sprach 云つた Tell「テルよ welches von deinen Kindern お前の子供達の中のどれが ist dir das liebste お前に一番可愛いか」 Tell antwortete テルは答へた Herr「閣下 sie 彼等は sind mir alle gleich lieb 皆等しく可愛ういございます」 da sprach der Vogt そこで代官が云つた Tell「テルよ wie ich höre 私の聞く所に依れば du お前は ein guter Schütze 名射手 bist ださうな nun さて du お前は mir 私に deine Kunst お前の技術を zeigen 示し und て eines deiner Kinder お前の子供達の一人の von dem Haupte 頭から einen Apfel 林檎を schießen 射 sollst ねばならぬ du〔若し〕お前が auf den ersten Schuß 最初の一發で ihn 林檎に trifft 中て nicht なければ so kostet es dir dein Leben お前の命に價する(お前の命はないぞ)」 Tell テルは erschrak über diese Worte この言葉に驚いた und そして Mitleid mit ihm zu haben 自分に同情されんことを bat den Vogt 代官に願つた denn 何故といふに er 彼が auf sein eigenes Kind 自分自身の子供をねらつて schießen sollte 射るといふ daß 事 es (それ) は unnatürlich 不自然で ist ある〔から〕 er 自分は lieber むしろ sterben 死に wollte 度い〔と〕 er 彼は sagte 云つた aber 併し der Vogt 代官は sprach 云つた den Schuß「射ることを ich 私は verlange 望むの und で dein Leben お前の生命を〔望むのでは〕 nicht ない Tu お前は es それを tun し mußt なければならぬ oder さもなくば du und dein Kind お前とお前の子供とは sollen sterben 死なねばならぬ (殺して仕舞ふぞ) nun 今や Tell テルは daß es keinen Ausweg gab 逃れる道がない事を sah 知り Gott 神に er 神が ihn und sein Kind 彼と彼の子供とに behüten möge 加護を垂れん daß 事を bat 願ひ nahm sein Armbrust その弩をとり spannte sie それを張り legte den Pfeil auf 矢を番へ und て einen zweiten Pfeil 二本目の矢を in seinen Koller その裝褐の中に steckte 入れた der Vogt selbst 代官自身が Tells

ältesten Knaben テルの一番上の男の子を nahm 拉致して ihn 彼を an einen Baum 樹の側に stellte 置き einen Apfel 一個の林檎を ihm.....auf den Kopf 彼の頭の上に legte 置いた Tell zielte テルは狙をつけ und て schoß den Apfel durch die Mitte 林檎の眞中を射貫いた

【註】——1. 引金で發射する弓。— 2. 頭「から」射る、は「射落す」の意。— 3. 「不自然」とは「人倫にもとる」「人情に背く」。— 4. 文法三卷 249 項。— 5. 同上。— 6. 文法三卷 209 の (1) を見よ。— 7. 張つた後に矢を番へるのが Armbrust が普通の Bogen (弓) と違ふ點。— 8. Koller は、山野を跋渉する狩人のための皮製の上着で、芝居でやる時には、この矢を胸の合はせ目に差すさうである。— 9. 此の語法に就ては本卷の文法 416 項を見よ。次の den Apfel durch die Mitte に就ても同樣。

Der Vogt wunderte sich nicht wenig über diesen meisterhaften[1] Schuß und lobte Tell wegen seiner Kunst. „Aber eins," sprach er, „mußt du mir sagen. Was bedeutet es, daß du einen zweiten Pfeil in deinen Koller stecktest?" Da zögerte Tell mit der Antwort, aber endlich sagte er: „Das ist eine Gewohnheit bei den Schützen." Der Vogt wußte wohl, daß Tell etwas anders im Sinne gehabt hatte,[2] und sagte freundlich: „Tell, diese Antwort kann ich nicht annehmen. Sage mir die Wahrheit und fürchte nichts; du sollst deines Lebens[3] sicher sein." Da sprach Tell: „Nun, Herr, da Ihr mich meines Lebens[4] versichert habt, so will ich Euch die Wahrheit sagen. Hätte ich den Apfel verfehlt und meinen Sohn getroffen, so hätte ich Euch mit dem anderen Pfeile gewiß nicht verfehlt." (續く)

【譯】 der Vogt 代官は über diesen meisterhaften Schuß この堪能な射擊に就いて nicht wenig 少からず wunderte sich 驚いた und そして wegen seiner Kunst その技術に就いて lobte Tell テルを賞めた sprach er 彼は云つた aber「併し eins 一つだけ mußt du mir sagen おまへに訊きたい事がある Du お前が einen zweiten Pfeil 二本目の矢を in deinen Koller お前の裝褐の中に stecktest 差した daß 事 es (それ) は was bedeutet 何を意味するか(どういふわけだ)」 da すると Tell テルは zögerte.....mit der Antwort 返事を躊躇した aber が endlich 遂に sagte er 彼は云つた das「あれは eine Gewohnheit bei

den Schützen 射手仲間の習慣です」 der Vogt 代官は Tell テルが etwas anders 何か他の事を im Sinne gehabt hatte 志してゐた daß 事を wußte wohl 充分に承知してゐた und ので freundlich 馴々しく sagte 云つた Tell「テルよ diese Antwort この返事を ich 私は kann.....nicht annehmen 本當と思ふことは出來ない sage mir die Wahrheit 有體に申せ und そして fürchte nichts なにも心配するな Du sollst deines Lebens sicher sein お前はお前の生命が安全であるべきだ（お前の生命を保證してやらう）」 da そこで Tell テルが sprach 云つた nun「では Herr 閣下よ da Ihr mich meines Lebens versichert habt 命を保證して下さつた上は so will ich Euch die Wahrheit sagen 事實の通りを申し上げませう hätte ich〔若し〕私が den Apfel verfehlt 林檎を外づし und て meinen Sohn getroffen 私の息子に中ててゐたら so さうすれば ich 私は mit dem anderen Pfeil もう一本の矢で gewiß 確に hätte.....Euch.....nicht verfehlt あなたを外づしはしなかつたでせう

【註】——1. meisterhaft は Meister（長・親方・名人・大家）的の意、從つて優れたる（ausgezeichnet）の意となる。— 2. im Sinne haben = beabsichtigen. — 3. この二格は sicher の爲に支配されたのである。Seines Lebens nicht sicher sein といふと「彼の生命に危險がある」。— 4. これも j. einer Sache（二格）versichern と versichern に支配されて二格なのである。斯う云ふ二格は、「…に關して」だと思へばよろしい。

Darüber erschrak der Vogt und sagte: „Deines Lebens habe ich dich zwar[1] versichert; weil ich aber deinen bösen Willen gegen mich entdeckt habe, so will ich dich an einen Ort führen lassen, wo du weder[2] Sonne noch Mond sehen wirst, damit ich vor dir sicher sei." Hierauf[3] ließ er ihn binden und auf ein Schiff bringen, um ihn in sein Schloß bei Küßnacht[4] zu führen. （續く）

【譯】 der Vogt 代官は darüber erschrak その言に驚い und て sagte 云つた ich「私は zwar 成る程 deines Lebens habe.....dich.....versichert お前の生命を保證はした aber が deinen bösen Willen gegen mich 私に對するお前の惡意を ich.....entdeckt habe 發見した weil 上は damit ich vor dir sicher sei 私がお前から害せられる氣遣ひがないやうに wo du weder Sonne noch Mond sehen wirst 日も月も見ない所の an einen Ort ある場所に so will ich dich.....führen lassen

お前をつれてゆかせようと思ふ」 hierauf 斯く言つて er 彼（代官）は ihn 彼を ließ.....binden 縛らせ und て ihn 彼を in sein Schloß bei Küßnacht キユスナハト附近にある 彼（代官）の城に um.....zu führen つれてゆく爲に auf ein Schiff bringen 舟に運ばせた

【註】——1. zwar は aber と共に「.....ではあるが併し」の意になる。— 2. weder .....noch = 英語の neither.....nor. — 3. この場合の hierauf は時間的な意味である。「かう云つてから」といふ程の意。— 4. 瑞西に於ける地名。

Als sie nun auf dem See[1] waren, da brach ein so gewaltiger Sturm los,[2] daß alle zu Grunde zu gehen glaubten. Da sprach einer der Diener zum Vogt: „Herr, Ihr seht die Gefahr, in der wir sind; nun ist der Tell ein starker Mann und versteht ein Schiff zu regieren[3]; man sollte ihn jetzt in der Not gebrauchen." Sogleich wandte[4] sich der Vogt an Tell mit den Worten: „Wenn du glaubst, uns aus dieser Gefahr retten zu können, so sollst du aus deinen Banden befreit werden." Tell gab zur Antwort: „Ja, Herr, ich glaube mit Gottes Hilfe uns retten zu können." Also wurden seine Bande gelöst, und er trat an das Steuerruder, sah aber immer nach einer Gelegenheit zu entfliehen, und auf[5] seine Armbrust, welche im Schiffe bei dem Steuerruder lag. Und als er der Felsplatte nahe war, die seitdem den Namen „Tellsplatte" hat, drückte er das Ende des Schiffes mit aller Macht an den Felsen, ergriff seine Armbrust und sprang hinauf auf die Platte; das Schiff aber stieß er mit Gewalt in den See hinaus. （續く）

【譯】 nun さて sie 彼等が als.....auf dem See waren 湖水に出ると da すると brach ein so gewaltiger Sturm los, daß すばらしい暴風雨が急に起つたので alle 皆は zu Grunde zu gehen glaubten 沈むかと思つた da すると einer der Diener 家隷の一人が zum Vogt 代官に sprach 云つた Herr「閣下 Ihr あなたは wir 我々が in der.....sind その中にある所の die Gefahr 危險を seht 見る（御覽の通り我々は危險である） nun 所で ist der Tell ein starker

Mann テルは強い男であつ und て versteht ein Schiff zu regieren 舟を操縱することを心得てゐる man 人は jetzt in der Not 困つてゐる此際 ihn 彼を gebrauchen 使用す sollte べきだ」 sogleich 直ちに der Vogt 代官は mit den Worten 次の言葉を云つて wandte sich.....an Tell テルの方に向いた〔即ち〕 wenn「若し du お前が uns 我々を aus dieser Gefahr retten zu können この危險から救ひ出し得ると glaubst 思へば so sollst du aus deinen Banden befreit werden お前はお前の縛から解放されるべきだ（お前の縛をほどいてやらう）」 Tell gab zur Antwort テルは返事をした ja「左樣 Herr 閣下 ich 私は mit Gottes Hilfe 神の助を得て uns retten zu können 我々を救ひ得ると glaube 思ひます」 also かくて wurden seine Bande gelöst 彼の縛は解かれた und そして er trat an das Steuerruder 彼は舵に歩み近づいた aber 併し sah.....immer nach einer Gelegenheit zu entfliehen 逃れ去る機會を常に覗ひ und また im Schiffe 舟の中に bei dem Steuerruder 舵の側に lag あつた welche 所の auf seine Armbrust 彼の弩を〔狙つてゐた〕 und そして als er der Platte nahe war 彼が岩（磐石）に近づいた時に die seitdem den Namen „Tellsplatte" hat（それは爾來「テル岩」といふ名を得てゐるが）er 彼は das Ende des Schiffes 舟の舳を mit aller Macht あらん限りの力で an den Felsen 岩に drückte 押しつけ ergriff seine Armbrust 彼の弩を掴み und そして auf die Platte 岩の上に sprang hinauf 跳び上つた aber das Schiff 併し舟を er 彼は mit Gewalt 力をこめて in den See 湖水に stieß.....hinaus 突き出した

【註】——1. 湖水とは瑞西の中部にある Vierwaldstätter See の事である。— 2. losbrechen は「急に起る」「勃發する」。— 3. regieren は「支配する」。二格を支配するなどといふ時の「支配する」はこの regieren の譯である。名詞は Regierung f.（支配・政治）。— 4. wenden, wandte（又は wendete), gewandt（又は gewendet). — 5. und sah auf seine Armbrust である。

Nun kletterte er am Felsen hinauf und floh durch das Land, bis[2] er an die Landstraße bei Küßnacht kam, wo der Vogt vorbeigehen mußte, um nach seinem Schlosse zu kommen.[2] Da verbarg er sich im Gebüsche, den Vogt erwartend.[3] Als dieser mit seinen Dienern, die mit genauer Not[4] dem See[5] entgangen[6] waren, geritten kam, nahm Tell seine Armbrust und schoß dem Geßler einen Pfeil durch

die Brust, so daß er tot zu Boden sank. Dann floh Tell über das Gebirge in seine Heimat; das Volk aber freute sich, daß der Tyrann[7] gefallen war, und seitdem wird Tell „Der Befreier der Schweiz" genannt.

【譯】 nun さて kletterte er am Felsen hinauf 彼は岩を攀ぢ登つ und て floh durch das Land 國を横切つて逃げ bis 遂に er 彼は der Vogt 代官が um nach seinem Schlosse zu kommen 彼の城に行く爲に vorbeigehen mußte 是非とも通りすぎねばならない wo 所の an die Landstraße bei Küßnacht キユスナハト附近の國道まで kam やつて來た da そこで er 彼は den Vogt erwartend 代官を待ちながら im Gebüsch 藪の中に verbarg.....sich 隱れた dieser 後者（代官）が mit genauer Not 辛うじて dem See 湖水から entgangen waren 逃れて來た die 所の mit seinen Dienern 家隷達と共に geritten kam 馬に乘つてやつてくる als と Tell テルは seine Armbrust 彼の弩を nahm とり und そして schoß dem Geßler einen Pfeil durch die Brust 一本の矢をゲスレルの胸を通して射た so daß そこで er tot zu Boden sank 彼は死んで仆れて仕舞つた dann それから Tell テルは über das Gebirge 山地を越えて in seine Heimat 彼の故郷に floh 逃げ歸つた aber 併し das Volk 人民は der Tyrann 暴君が gefallen war 仆れて仕舞つた daß 事を freute sich 喜んだ und そして seitdem 爾來 Tell テルは Der Befreier der Schweiz「瑞西の解放者」と wird.....genannt 呼ばれてゐる

【註】——1.〔文法本卷 300 項を參照せよ。〕bis は「.....迄」で、こゝでは接續詞として使はれてゐる。そしてかういふ文章の場合は、英語でコムマの次に till がくると上の方から譯していつて「遂に」と譯されるが、それと同じ具合に譯した方がよい。— 2. 東京辯ではかういふ時に「彼の城にゆく」といふが、關西辯では獨逸語などと同じやうに「來る」といふやうである。— 3. この erwartend は現在分詞で「待ちながら」の意味で、英語の進行形に當つてゐる。それ故こゝのところを英語に譯すと waiting for the bailiff となる。獨逸語には進行形はない〔文法 114 參照〕。併し英語の進行形を獨譯するに不自由は感じない。Ich stand が I was standing の意味であることは、同じく文法の 114 に出てゐるし、こゝの場合のやうに現在分詞を使ふこともある。またもつと複雜な文章で現在分詞を使へない時には indem を使へば「...しながら」の意味は充分表はされる。例へば Sitting in my garden amid the evening scent of roses, I read Walten's Life of Hooker. といふ英文を獨譯

すれば畧次のやうになるであらう。Indem ich in meinem Garten mitten in den duftenden Abendrosen saß, las ich Waltons „Leben von Hooker". 同樣に次のやうに indem を用ゐた獨文は英文に譯されるときは必ず進行形が使用されるであらう。Indem er sich auf sie stützte, kam er die Treppe langsam herab. (彼は彼女に凭りかゝりながら階段を徐々に降りて來た)。Er verließ uns, indem er heftige Drohungen ausstieß. (彼は激しい脅迫を叫びながら我々のところを去つた) 一然し英語の進行形も勿論いろいろ複雜な意味を持つてゐるから、以上でその意味を表はし盡せるといふのではない。— 4. mit genauer Not は或は mit harter (又は knapper) Not とも云ひ「辛くも」の意味である。「命からがら」とも云へる。— 5. この dem See は三格であるが Ablativ m. (離格或は奪格と譯す) の意で湖水「から」と譯す。— 6. かういふ ent- の Präfix をもつ動詞は Ablativ を支配することが多い。例へば jemandem etwas entreißen (或人から或物をひつたくる) 文法本卷 419。— 7. この Tyrann はギリシヤ語から出た字であるから發音はチユらンである。第一卷文法 37 の (6)

15. Martin Luther.

Martin Luther, der Sohn eines Bergmannes, Namens Hans Luther, wurde zu[2] Eisleben geboren, am 10. November 1483.[3] Das Kind war aber kaum[4] ein halbes Jahr alt, als die Eltern Eisleben verließen und nach dem fünf Stunden[5] entfernten Mansfeld zogen, weil die Arbeit da einen besseren Lohn[6] versprach.[7] Ihre Hoffnungen zeigten sich auch wohl begründet,[8] und sie erwarben mit der Zeit ein ansehnliches Vermögen.[9] (續く)

【譯】 **Martin Luther** マルティン・ルッテル

Namens Hans Luther ハンス・ルッテルといふ名前の der Sohn eines Bergmannes 一鑛夫の息子である Martin Luther マルティン・ルッテルは zu Eisleben アイスレーベンに於て am 10. November 1483 一四八三年十一月十日に wurde.....geboren 生れた aber 併し das Kind その子供が war.....kaum ein halbes Jahr alt 半歲になるかならない中に die Eltern Eisleben verließen 兩親はアイスレーベンを去つた und そして die Arbeit da そこ (マンスフエルト) に於ける仕事が einen besseren Lohn versprach より良き報酬を與へて與れる見込があつた weil ので nach dem fünf Stunden entfernten Mansfeld 五時間行程距つてゐるマンスフエルトに zogen 移つた ihre Hoffnungen 彼等の期待は

auch wohl 亦實に begründet 根據あるものだつた zeigten sich ことがわかつた und そして sie 彼等は mit der Zeit 段々に ein ansehnliches Vermögen かなりの財產を erwarben 得た

【註】——1. これはルーテルでなくてルッテルと讀い。— 2. 場所を示すとき in も使ふがこの zu も使ふ。例へばミユンヘン博物館は das Museum zu München と云ふ。— 3. am zehnten November vierzehnhundertdreiundachtzig と讀む。— 4. kaum....., als に就ては本卷文法 300 項を見よ。— 5. eine Stunde といへば「一時間」であるがまた「一時間に歩き得る行程 (從つて五粁か六粁)」を表はす。— 6. Lohn は報酬・賃金で、賃仕事を Lohnarbeit f. と云ふ。— 7. versprechen は「約束する」「見込がある」。— 8. begründet は「基礎のある」「確實な」の意。begründen, Begründung を哲學では「基礎付ける」「基礎付け」と譯してゐる。— 6. Vermögen は「能力」「財產」。

Der Vater schickte den Knaben früh in die Schule, und bei schlechtem Wetter nahm er ihn auch zuweilen[1] auf die Arme und trug ihn dahin. In jenen Zeiten war die Zucht sehr streng. Zu Hause wie[2] in der Schule wurden die Kinder oft unbarmherzig geschlagen, selbst wegen Kleinigkeiten. Der kleine Martin wurde einst fünfzehnmal an einem Vormittage von seinem Lehrer geprügelt. Er lernte aber fleißig den Katechismus, die zehn Gebote,[5] das Vaterunser,[6] die christlichen Gesänge und die lateinische Grammatik. (續く)

【譯】 der Vater 父は den Knaben 少年を früh 夙に in die Schule 學校に schickte 送つた und そして bei schlechtem Wetter 天氣の惡いときには er 彼 (父) は ihn 彼 (少年) を zuweilen 時々 nahm.....auf die Arme 抱き上げること auch さへあつた und そして ihn 彼を dahin そこ (學校) へ trug 抱いて行つた in jenen Zeiten 當時は die Zucht 訓育が sehr streng 非常に嚴格で war あつた zu Hause 家に於ても wie in der Schule 學校に於ても die Kinder 子供等は oft 屢々 unbarmherzig 無慈悲に wurden.....geschlagen 打擲された selbst wegen Kleinigkeiten 瑣細な事の爲めにも〔打たれた〕 der kleine Martin 幼きマルテインは einst 嘗て an einem Vormittage 午前中に fünfzehnmal 十五回

von seinem Lehrer 彼の先生から wurde.....geprügelt 毆打された aber 併し er 彼は fleißig 勤勉に den Katechismus 宗教修身や die zehn Gebote 十誡や das Vaterunser「我等が父よ」や die christlichen Gesänge 基督教の歌（讃美歌）や und die lateinische Grammatik ラテン語の文法を lernte 學んだ

【註】——1. zuweilen = manchmal. — 2. この wie は sowohl als の意味で、かういふ時には上から「家に於いても學校に於ても」と譯すべきで「學校に於けるが如く家に於て」の意ではない。— 3. モーゼの十誡のこと。— 4. 「天に在ます我等の父よ」で初まる祈禱。

Als er vierzehn Jahre alt war, sandte ihn der Vater nach Magdeburg in die Schule. Da hatte der Knabe eine schwere Zeit. Freunde hatte er keine und vor seinen strengen Lehrern zitterte er. Weil er sehr arm war, mußte er durch Singen vor den Türen[1] das tägliche Brot verdienen. Als die Eltern von der Not ihres Sohnes hörten, nahmen sie ihn nach Hause und schickten ihn im folgenden Jahre nach Eisenach in die Schule, weil sie dort Verwandte[2] hatten. Allein[3] diese Verwandten waren selbst so arm, daß sie dem Knaben wenig helfen konnten, und so mußte er immer noch in den Straßen singen und auch zuweilen hungrig[4] zu Bette gehen. Eines Tages, da er vor der Türe eines wohlhabenden[5] Bürgers,[6] Namens Conrad Cotta, sang, trat die Frau desselben auf die Schwelle und winkte dem Knaben einzutreten. Diese gute Frau hatte schon oft die klare und sanfte Stimme des Knaben in der Kirche mit Vergnügen gehört, hatte nun Mitleid[7] mit ihm in seiner Armut, und nahm ihn an ihren Tisch. (續く)

【譯】 er 彼が vierzehn Jahre alt war 十四歲であつた als 時に der Vater 父は ihn 彼を nach Magdeburg マーグデブルクへ in die Schule 學校に sandte 送つた da そこで der Knabe 少年は eine schwere Zeit 困難な時を hatte 持つた（少年の多難な秋であつた） Freunde 友達といふものを er 彼は keine 一人も hatte 持つてゐ〔なかつた〕 und そして vor seinen strengen Lehrern 彼

の嚴格な先生達に對して er 彼は zitterte 慄へてゐた er 彼は sehr arm 非常に貧乏で war あつた weil ので er 彼は vor den Türen 戸口の前で durch Singen 歌ふことによつて das tägliche Brot 日々のパンを verdienen 得 mußte ねばならなかつた die Eltern 兩親が von der Not ihres Sohnes その息子の難儀の事を hörten 聞く als と sie 彼等は ihn 彼を nach Hause 家に nahmen 連れてゆき und そして im folgenden Jahre 次の年に ihn 彼を weil sie dort Verwandte hatten そこ（アイゼナーハ）に親類があつたので nach Eisenach アイゼナーハへ in die Schule 學校に schickten 送つた allein 併しながら diese Verwandten 此等の親類は selbst 自身 waren.....so arm, daß 非常に貧乏であつたので sie 彼等は dem Knaben 少年を wenig helfen konnten あまり助けることは出來なかつた und so それ故 er 彼は immer noch 相變らず in den Straßen 街道で singen 歌は mußte ねばならなかつた und そして auch zuweilen また時々 hungrig 飢ゑて zu Bette gehen 就褥し〔なければならなかつた〕 eines Tages 或日 er 彼が Namens Conrad Cotta コンラート・コツターといふ名の vor der Tür eines wohlhabenden Bürgers 裕福な一市民の戸口の前で sang 歌つてゐた da 時に die Frau desselben その人の妻が auf die Schwelle 閾の上に trat 出て來 und て dem Knaben 少年にeinzutreten 入るやうに winkte 麾いた diese gute Frau 此の親切な妻は schon oft 既に屢々 die klare und sanfte Stimme des Knaben 少年の朗らかな、穩やかな聲を in der Kirche 教會に於て mit Vergnügen 樂しんで hatte.....gehört 聞いてゐて nun 今や in seiner Armut 貧乏であることに hatte.....Mitleid mit ihm 彼に對して同情し und そして ihn 彼を an ihren Tisch その食卓に nahm つれてきた

【註】——1. 戸口の前で讃美歌を歌ふのである。— 2. 親戚關係といふことを Verwandtschaft f. といふ。— 3. この場合の allein は接續詞で「併しながら」の意味である。— 4. 飢といふ名詞は Hunger m. — 5. Er hat es wohl（彼はそれを良く持つ＝裕福である）。— 6. Bürger は市民・公民。 Weltbürger といふと世界市民即ちコスモポリタンのことを云ふ。— 7. 共に喜ぶことは Mitfreude f. といふ。

Als er achtzehn Jahre alt war, ging er nach Erfurt auf die berühmte Universität daselbst. Sein Vater, der inzwischen wohlhabend geworden war, wollte, daß sein Sohn das Recht[1] studiere, denn er glaubte, Martin würde auf diesem Wege zu einem ehrenvollen

Amte gelangen. Mit allem Eifer studierte er die sogenannten[2] sieben freien Künste,[3] und keine Minute im Tage blieb unbenutzt. (續く)

【譯】 er 彼が achtzehn Jahre alt 十八歲に war なつた als 時に er 彼は nach Erfurt エルフルトへ auf die berühmte Universität daselbst そこにある有名な大學へ ging 行つた inzwischen その間に wohlhabend geworden war 裕福になつてゐた der 所の sein Vater 彼の父は sein Sohn 彼の息子が das Recht 法律を studiere 學ぶ daß 事を wollte 欲した denn 何となれば er 彼は Martin マルテインが auf diesem Wege この (法律の) みちで zu einem ehrenvollen Amte 名譽ある官職に würde.....gelangen 達するであらうと glaubte 信じてゐた〔から〕 mit allem Eifer 極めて熱心に er 彼は die sogenannten sieben freien Künste 所謂七の學問を studierte 勉强した und そして keine Minute im Tage 一日の中の一分も blieb unbenutzt 利用されないでゐることは〔なかつた〕

【註】——1. Recht には正當・權利といふ意味と法律といふ意味とある。— 2. sogenannt は英語の so-called に同じ。— 3. sieben freie Künste とは 昔時 自主獨立の人 (der freie Mann) に必要だとされた知識で、文法・辯證法・修辭學・算術・幾何・音樂・天文學の七を云ふ。

In seinen freien Stunden besuchte er am liebsten die Bibliothek[1] der Universität. Nachdem er zwei Jahre in Erfurt gewesen, und schon zwanzig Jahre alt war, fiel ihm eines Tages ein Buch in die Hände, das ihm bis dahin völlig unbekannt war—eine lateinische Bibel. Zu[2] seiner großen Verwunderung entdeckte er darin viel mehr als was am Sonntag in der Kirche vorgelesen[3] wurde. Der fromme[4] Student las darin mit der größten Lust, und er ging nach Hause mit dem Wunsche: O, wenn ich nur auch ein solches Buch hätte[5]! Bei der ersten Gelegenheit kehrte er in die Bibliothek zurück, suchte wieder seinen Schatz auf, und las mit immer größerer Freude. (續く)

【譯】 in seinen freien Stunden 彼の自由な時間に er 彼は am liebsten 最も好んで die Bibliothek der Universität 大學の圖書館を besuchte 訪れた er 彼が zwei Jahre 二年 in Erfurt エルフルトに gewesen ゐて und そして schon

既に zwanzig Jahre alt war 二十歲になつた nachdem 後に eines Tages 或日 ein Buch 一冊の本が fiel ihm.....in die Hände 彼の手中に落ちた das それは ihm 彼に bis dahin 其時まで völlig unbekannt 全く知られてゐなかつた〔卽ち〕 eine lateinische Bibel ラテン語の聖書〔であつた〕 zu seiner großen Verwunderung 彼が大いに驚いたことには er 彼は darin その (聖書の) 中に was am Sonntag in der Kirche vorgelesen wurde 日曜日に教會で朗讀される事柄 als より viel mehr 遙かにより以上の事柄を entdeckte 發見した der fromme Student 敬虔な學生 (ルッテル) は mit der größten Lust 極めて大いなる興味を以て las darin それを讀んだ und そして er 彼は〔次の如き〕 mit dem Wunsche 希望を以て ging nach Hause 家に歸つた〔卽ち〕 O あゝ wenn ich nur auch ein solches Buch hätte! 私もかういふ本を持つてゐればいゝに! bei der ersten Gelegenheit 最初の機會に (機會があると早速) er 彼は in die Bibliothek 圖書館に kehrte.....zurück 歸り wieder また seinen Schatz 彼の寶 (聖書のこと) を suchte.....auf 探し求め und そして mit immer größerer Freude 益々大いなる喜びを以て las 讀んだ

【註】——1. Bibliothek = library. — 2. この zu は結果を表はしてゐる。英語の To our astonishment he has succeeded. (驚いたことには彼は成功した) の to と同じ使ひ方である。— 3. 名詞は Vorlesung (朗讀・大學の講義)。— 4. 名詞は Frömmigkeit (敬虔)。— 5. wenn 以下は英語の If I had also such a book! と同じ〔文法 111 參照〕。

Das Studium[1] des Rechts gefiel Luther nun immer weniger, und nachdem er im Jahre 1505 Doktor der Philosophie[2] geworden, fing er an, die alten Klassiker[3] zu lesen; doch darin fand er auch nicht den Frieden, den er suchte. Da beschloß er, sein ganzes Leben dem Dienste Gottes zu weihen, der Welt zu entsagen[4] und in einem Kloster den Frieden seiner Seele zu suchen. So ging er am 17. August 1505, spät nachts, an das Tor des Klosters in Erfurt, klopfte an und bat um Erlaubnis einzutreten. Das Tor öffnete sich und schloß sich wieder hinter ihm; der gefeierte[5] Lehrer war ein armer Mönch[6] geworden, ohne daß sein Vater etwas davon wußte. (續く)

【譯】 das Studium des Rechts 法律の研究は Luther ルッテルに nun 今や gefiel.....immer weniger 益々氣に入らなくなつた und そして er 彼が im Jahre 1505 一五〇五年に Doktor der Philosophie 哲學士と geworden なつて nachdem 後 er 彼は die alten Klassiker zu lesen 古典を讀み fing.....an 始めた doch 併し darin そのうちに auch も亦 er 彼は den er suchte 求めてゐた所の den Frieden 平和を fand 見出さ nicht なかつた da そこで er 彼は sein ganzes Leben 全生涯を dem Dienste Gottes 神への奉仕に zu weihen さゝげ der Welt zu entsagen 世を捨て und そして in einem Kloster 修道院に於て den Frieden seiner Seele その魂の平和を zu suchen 求めようと beschloß 決めた so そこで er 彼は am 17. August 1505 一五〇五年八月十七日に spät nachts 夜遅く an das Tor des Klosters in Erfurt エルフルトの修道院の門のところまで ging 行き klopfte an 〔門を〕 叩き und そして einzutreten 入ることの bat um Erlaubnis 許可を乞ふた das Tor 門が öffnete sich 開き und そして wieder 再び hinter ihm 彼の後で schloß sich 閉ぢた der gefeierte Lehrer 名聲ある教師は war ein armer Mönch geworden 貧乏な一僧侶となつた ohne daß sein Vater etwas davon wußte 彼の父はその事に就いて少しも知らないで

【註】——1. Studium の複數は Studien である。— 2. Doktor der Philosophie はたゞ哲學科を卒業したもののみではなく、日本の文學部・理學部といつたやうなものを卒業したものが受くる稱號である。— 3. 元來 Klassiker といふのは必ずしも古くなくとも文豪・名家を云ひ、klassisch a. といつても「模範的な」といふ意味であるが、一般的には古典文學者 (名詞)、古典の (形容詞) といふ意味に用ゐられてゐる。— 4. einem Dinge entsagen は「ある事を斷念す」「放棄する」の意。名詞は Entsagung. — 5. gefeiert は「祭り上げられた」の意。— 6. Mönch = monk.

Im Kloster fand Luther auch keine Ruhe. Eine große Freude aber für ihn war eine lateinische Bibel, worin er alle Tage lesen konnte. Die Mönche sagten zwar[1]: „Nicht mit Studieren, sondern mit Betteln kannst du dem Kloster nützlich[2] sein," aber er ließ sich durch diese Worte nicht stören. Allein er hatte manche trübe Stunde. Einmal schloß er sich mehrere Tage lang in seine Zelle, aß und trank nicht, und merkte nichts, was um ihn vorging. Da er nicht zum Vorschein kam,[3] dachten die Mönche, es[4] sei ihm ein Unglück

begegnet: sie brachen die Türe ein,[5] fanden Luther auf dem Boden liegen, und nur mit großer Mühe brachten sie ihn wieder zur Besinnung.[6] (續く)

【譯】 im Kloster 修道院に於て Luther ルッテルは auch また keine Ruhe 少しの安靜をも fand 見出さなかつた aber 併し für ihn 彼にとつての eine große Freude 大いなる喜びは war eine lateinische Bibel ラテン語の聖書であつて worin er alle Tage lesen konnte 彼はそれを毎日讀むことが出來た die Mönche 僧侶達は nicht mit Studieren「勉强することによつてではなく sondern て mit Betteln 乞食することによつて kannst du dem Kloster nützlich sein お前は修道院の役に立つことが出來るのだ」sagten zwar と云つたのではあつたが aber 併し er 彼は durch diese Worte この言葉によつて ließ sich.....nicht stören 煩はされなかつた allein 併しながら er 彼は hatte manche trübe Stunde 多くの悲しい時を持つた (苦い經驗を嘗めてゐた) einmal ある時 er 彼は mehrere Tage lang 數日の間 in seine Zelle 彼の僧房に schloß.....sich 閉ぢ籠つて aß und trank nicht 食べも飲みもせず und そして merkte nichts, was um ihn vorging 彼の周圍で起つた何事にも氣が付かなかつた da er nicht zum Vorschein kam 彼が姿を見せなかつたので die Mönche 僧侶達は es sei ihm ein Unglück begegnet 彼が不幸な目に遭つたのだと dachten 考へた sie 彼等は brachen die Türe ein 戸口を破つて入り込み fanden Luther auf dem Boden liegen ルッテルが床の上に横つてゐるのを見出した und そして nur mit großer Mühe 大骨折をしてやつと sie 彼等は ihn 彼を wieder 再び brachten zur Besinnung 正氣にかへした

【註】——1. zwar は下の aber と共に「成る程.....ではあるが、併し」の意味を成す。— 2. 利益・收益といふ名詞は Nutzen m. — 3. zum Vorschein kommen は「隱れてゐるのが現はれる」(aus der Verborgenheit hervortretend erscheinen). — 4. この es は文法上の主語であるが意味の上からは ein Unglück が主語である。— 5. einbrechen は分離動詞。— 6. Besinnung は意識といふやうな意味であるが Gesinnung は心の持ち方・心構・性向といつたやうな意味である。

Im Jahre 1508 wurde er endlich aus dieser unangenehmen Lage befreit. Friedrich der Weise,[1] Kurfürst von Sachsen, lud ihn ein,

nach Wittenberg zu kommen, um Professor der Philosophie an der neuen Universität daselbst zu werden. Luther folgte freudig dem Rufe und so kam er nach Wittenberg und nahm seine Wohnung in einer Zelle[2] des alten Klosters, die noch jetzt den Reisenden gezeigt wird. Zehn Jahre später wurde er Professor der Theologie[3] und auch Prediger in der Schloßkirche. Sein Predigen machte großes Aufsehen, denn er sprach sich sehr frei aus über die vielen Mißbräuche, die in die Kirche eingeschlichen waren. Er ging auch weiter. Am 31. Oktober 1517 schlug er 95 in lateinischer Sprache geschriebene Sätze (Theses)[4] an die Tür der Schloßkirche zu Wittenberg und forderte jedermann auf, dieselben anzugreifen. Diese wurden sogleich gedruckt, kamen in alle Teile des Landes und wurden eifrig gelesen. Dieser Tag wird allgemein gefeiert in Deutschland als der Anfang der großen Reformation. (續く)

【譯】 im Jahre 1508 一五〇八年に er 彼は endlich 遂に aus dieser unangenehmen Lage この厭やな境遇から wurde.....befreit 解放された Friedrich der Weise, Kurfürst von Sachsen サクソニヤの選帝侯フリードリヒ賢侯は daselbst そこで（ヰツテンベルクで）Professor der Philosophie an der neuen Universität 新しい大學の哲學教授に um.....zu werden なる爲めに nach Wittenberg zu kommen ヰツテンベルクに來るやうに lud ihn ein 彼を招待した Luther ルッテルは freudig 喜んで dem Rufe 招聘に folgte 從つた und so かくて er 彼は nach Wittenberg ヰツテンベルクへ kam 行つた und そして seine Wohnung その住居を in einer Zelle des alten Klosters 古い修道院の僧房に nahm 定めた die その僧房は noch jetzt 今でも尙 den Reisenden 旅行者に gezeigt wird 觀せられてゐる zehn Jahre später 十年後に er 彼は Professor der Theologie 神學教授 und 及び auch Prediger in der Schloßkirche 城の教會の說教師とも wurde なつた sein Predigen 彼の說教は machte großes Aufsehen 大評判になつた denn 何となれば er 彼は in die Kirche 教會に eingeschlichen waren 紛れ込んでゐた die 所の über die vielen Mißbräuche 多くの惡弊に就いて sehr frei 大いに自由に sprach sich.....aus 意見を述べた〔から〕 er ging auch weiter 彼は尙先へ進んだ（進出した）am 31. Oktober 1517 一五一七年十月三十一日に er 彼は 95 in lateinischer Sprache geschriebene Sätze (Theses) ラテン語で書かれれ九十五の命題を an die Tür der Schloßkirche zu Wittenberg ヰツテンベルクの城の教會の戸に schlug 打つけ und て dieselben anzugreifen これを論駁せよと jedermann 江湖に forderte.....auf 挑んだ diese 此等は sogleich 直ちに wurden .....gedruckt 印刷され in alle Teile des Landes 國のすべての部分に kamen 行き亘り und そして eifrig 熱心に wurden.....gelesen 讀まれた dieser Tag この日は allgemein 一般に in Deutschland ドイツに於て als der Anfang der großen Reformation 大宗教改革の初として wird.....gefeiert 祝はれてゐる

【註】——1. この der Weise は綽名。第何世といふときにも Heinrich der Vierte（ハインリヒ四世）といふ風に云ふ。— 2. Zelle 英語の cell に當り、こゝでは僧房だが、細胞といふ意味もある。— 3. ギリシヤ語の theos は神といふ意味。— 4. Theses は複數形。單數は Thesis 又は These. 複數に Thesen といふ形もある。

Luther hatte[1] viel von seinen Feinden zu leiden, und sein Leben war mehrmals in Gefahr. Er vollendete jedoch seine Übersetzung der Bibel und starb ruhig in seinem Bette am 18. Februar 1546, in derselben Stadt, wo er geboren wurde.

【譯】 Luther ルッテルは von seinen Feinden 彼の反對者から hatte viel.....zu leiden 盛に苦しまされねばならなかつた und そして sein Leben 彼の生命は mehrmals 度々 war.....in Gefahr 危險な狀態にあつた jedoch 併しながら er 彼は seine Übersetzung der Bibel その聖書の飜譯を vollendete 完成し und そして ruhig 安らかに in seinem Bette そのベットで am 18. Februar 1546 一五四六年二月十八日に in derselben Stadt, wo er geboren wurde 彼が生れたのと同じ町で（即ちアイスレーベンで）starb 死んだ

【註】——1. この haben は zu leiden と共に「ねばならぬ」といふ必然性を表はしてゐる。

16. Gutenberg und die Erfindung der Buchdruckerkunst.

Daß wir heutzutage für wenig Geld gute Bücher kaufen können, verdanken wir einem Deutschen, Johann Gutenberg, der im Jahre

1397 in Mainz[1] geboren wurde. Wegen eines Aufstandes unter den Bürgern mußte die Familie Gutenberg nach Straßburg[2] fliehen, wo sie dann wohnen blieb, nachdem der Friede hergestellt war.

(續く)

〔譯〕 **Gutenberg グーテンベルク und と die Erfindung der Buchdruckerkunst 印刷術の發明**

wir 我々が heutzutage 現今 für wenig Geld あまり金を拂はないで gute Bücher 良い書物を kaufen können 買ひ得る daß といふことは wir 我々は der im Jahre 1391 in Mainz geboren wurde 一三九一年にマインツで生れた Johann Gutenberg ヨーハン・グーテンベルクなる einem Deutchen —ドイツ人に verdanken 負つてゐる wegen eines Aufstandes unter den Bürgern 市民の間の或る暴動のために die Familie Gutenberg グーテンベルク家は nach Straßburg シユトラスブルクへ fliehen 逃げ mußte ねばならなかつた wo そこに sie グーテンベルク家は dann それから nachdem der Friede hergestellt war 平和が恢復した後 wohnen blieb 依然として住むことになつた

〔註〕——1. Mainz はドイツ西南部のライン河に沿へる都會。— 2. Straßburg もライン河に臨んでゐるが Mainz よりずつと上流にある、言ひ換へれば南方にある。アルサス（ドイツ語では Elsaß）地方にあつて昔からドイツのものになつたりフランスに所屬したり變轉した都會でそこの大學もドイツ領のときはドイツ人の教授によつて占められてゐたが、世界大戰後はフランス領となり、從つてフランス人の教授を擁してゐる。

Gutenbergs Jugend ist völlig[1] unbekannt; so viel ist aber gewiß, daß er in den Jahren 1436 bis 1438 in Straßburg mit mehreren Männern in Verbindung trat, um Spiegel zu machen, aber auch Bücher auf einer von Gutenberg erfundenen Presse[2] zu drucken. Diese Presse war aber sehr unvollkommen, und es ist gewiß, daß es in Straßburg Gutenberg nicht gelang, ein Buch zu drucken.

(續く)

〔譯〕 Gutenbergs Jugend グーテンベルクの青年時代は ist völlig unbekannt 全然知られてゐない aber 併し er 彼が um Spiegel zu machen 鏡を造るために aber 併し auch 亦 Bücher 書物を auf einer von Gutenberg erfundenen Presse zu drucken グーテンベルクによつて發明された印刷機で印刷するために in den Jahren 1436 bis 1438 一四三六年より一四三八年まで in Straßburg シユトラスブルクに於て mit mehreren Männern 數人の人々と in Verbindung trat 連絡を附けた so viel.....daß といふことだけは ist.....gewiß 確かである aber 併し diese Presse この印刷機は sehr unvollkommen 非常に不完全 war であつた und そして in Straßburg シユトラスブルクに於ては daß es..... Gutenberg nicht gelang, ein Buch zu drucken グーテンベルクが書物を印刷することを成就しなかつたといふことは es ist gewiß 確かである

〔註〕——1. völlig = vollständig, ganz und gar. — 2. Presse 印刷機の他に新聞のことにも使はれる、Neue Freie Presse などといふ新聞がある。

Schon damals druckte man Bilder mit Reimen[1] und Sprüchen[2]; das geschah aber so: In eine Tafel[3] von hartem Holz wurde das Bild ausgeschnitten und die Sprüche auch. Das Ganze wurde dann mit einer Art Tinte oder Farbe bestrichen und auf das Papier gedruckt. Gutenberg aber dachte, wenn er die Buchstaben aus der Tafel herausschneiden würde, so könne er sie anders zusammensetzen und neue Wörter bilden, und das tat er. Jetzt hatte er bewegliche Buchstaben und konnte viel mehr leisten als vorher. Zum Beispiel[4], hatte er die losen Buchstaben A, B, E, N, D, so konnte er daraus bilden die Wörter: Abend, End, Bad, Band, und so weiter; waren sie aber in die Tafel geschnitten, so konnte er damit nur das eine Wort Abend drucken. Das, kann man leicht sehen,[5] war ein großer Fortschritt. (續く)

〔譯〕 schon damals 當時既に man 人々は Bilder mit Reimen und Sprüchen 詩句や格言のある繪を druckte 印刷してゐた aber 併し das それは so 次の如くに geschah 起つた（次の樣な具合で行はれてゐた）〔即ち〕 in eine Tafel von hartem Holz 堅い木の板に das Bild 繪が wurde.....ausgeschnitten 切りこまれ und それから die Sprüche auch 格言も亦〔切りこまれる〕 das Ganze 全體

は dann それから mit einer Art Tinte oder Farbe 一種のインキ或は繪具で wurde.....bestrichen 塗られ und て auf das Papier 紙に gedruckt 印刷〔された〕 aber 併し Gutenberg グーテンベルクは wenn 若し er 彼が die Buchstaben 文字を aus der Tafel 板から herausschneiden würde 截りとれば so さうすれば er 彼は sie その文字を anders 別樣に zusammensetzen 組立て und て neue Wörter bilden 新しい語をつくり könne 得るだらうと dachte 考へた und そして das それを er 彼は tat やつた jetzt 今や er 彼は bewegliche Buchstaben 動かし得る字型を hatte 持つた und そして als vorher 以前より viel mehr 遙に多く〔の事を〕leisten なし konnte 得た zum Beispiel 例へば er 彼が A, B, E, N, D アー、ベー、エー、エン、デーの die losen Buchstaben ばらばらの活字を hatte 持つてゐれ so ば er 彼は daraus それで Abend, End, Bad, Band アーベント、エント、バート、バント und so weiter 等の die Wörter 語を bilden 組み konnte 得るのであつた aber 併し sie その活字が in die Tafel 板に waren.....geschnitten 切りこまれてゐると so さうすると er 彼は damit それで das eine Wort Abend アーベントといふ一字を konnte er .....nur.....drucken 印刷し得るに過ぎなかつたのである das それは kann man leicht sehen 人々は容易に解し得るのであるが ein großer Fortschritt 大進歩で war あつた

【註】——1. Reim m. は元來詩の韻のことであるがそれから詩句のことを云ふ。— 2. Spruch m. は名句・格言。— 3. Tafel f. には板・表・食卓等の意味がある。— 4. zum Beispiel = zum Exempel. — 5. kann man leicht sehen は間に挿入した句である。

Gutenberg jedoch fand, daß die hölzernen Buchstaben nicht lange hielten und daher nicht schön druckten; auch kostete es viel Zeit und Mühe, so viele Buchstaben aus Holz zu schneiden, als zu einem großen Buche nötig waren. So kam er auf den Gedanken, Buchstaben aus Blei, Zinn oder Kupfer zu machen, aber ehe er dies ausführen konnte, verließ er Straßburg und ging nach Mainz zurück. Hier trat er in Verbindung mit einem reichen Manne, Namens Fust, der ihm das Geld versprach, um eine Druckerei[1] zu errichten. Der Gewinn sollte zwischen beiden geteilt werden. Hätte

es[2] der ehrliche Gutenberg mit einem ehrlichen Manne zu tun gehabt, so hätte er jetzt den Lohn für all sein Denken und Arbeiten erhalten können, allein Fust war ein Mann, der das Geld über alles liebte, und er sah in Gutenberg nur einen Mann, den er zu seinem eigenen Vorteil[2] gebrauchen könne. (續く)

【譯】 jedoch 併しながら Gutenberg グーテンベルクは die hölzernen Buchstaben 木製の活字が nicht lange hielten 長持ちがしない und し daher それ故に nicht schön druckten 綺麗に印刷しない daß といふことを fand 見出した auch 又 als zu einem großen Buche nötig waren 大きな本に必要な so viel Buchstaben だけの活字を aus Holz zu schneiden 木から切りとる es 事は viel Zeit und Mühe 多くの時間と勞力とを kostete 費さした so そこで er 彼は Buchstaben 活字を aus Blei, Zinn oder Kupfer 鉛・錫或は銅から zu machen 作るといふ auf den Gedanken 考に kam 到達した aber 併し ehe er dies ausführen konnte 彼がこれを完成し得る前に er 彼は Straßburg シュトラスブルクを verließ 去つ und て ging nach Mainz zurück マインツに歸つた hier こゝで er 彼は um eine Druckerei zu errichten 印刷所を設立するために ihm 彼に das Geld versprach 金を約束した der 所の Namens Fust フストといふ名前の mit einem reichen Manne 富裕な人と trat.....in Verbindung 關係するやうになつた der Gewinn 利益は zwischen beiden 兩者の間に sollte.....geteilt werden 分割される筈であつた der ehrliche Gutenberg 誠實なグーテンベルクが mit einem ehrlichen Manne 誠實な人間と hätte es.....zu tun gehabt 關係してゐたら so さうであつたとすれば er 彼は jetzt 今や den Lohn für all sein Denken und Arbeiten すべての彼の思索と勞作とに對する報酬を hätte..... erhalten können 得ることが出來たであらう allein が併し Fust フストは der das Geld über alles liebte 何よりも金を愛してゐた war ein Mann 人であつた und そして er 彼は in Gutenberg グーテンベルクを zu seinem eigenen Vorteil 彼(フスト)自身の利益のために den er.....gebrauchen könne 使ひ得る nur ein Mann 人とのみ sah 見てゐた

【註】——1. Druckerei f. は印刷業・印刷所。印刷といふ字は Druck m. 併しこの Druck といふ字には壓すこと、壓迫といふ意味もある。— 2. es mit jemandem zu tun haben「或人を相手としなくてはならない」。この es に就いては文法三卷 278 參照。

Inzwischen hatte Gutenberg seine Metall-Buchstaben fertig und war nun bereit, mit dem Drucke eines Buches anzufangen.[1] Das erste Buch, welches durch diese neue Erfindung entstand, war eine Bibel. Er begann den Druck im Jahre 1452 und im Jahre 1455 war er vollendet. Das Werk hatte aber ungeheure Kosten verursacht,[2] und da nun Fust sein Geld mit Zinsen[3] verlangte, und Gutenberg nicht zahlen konnte, so verlor er sein ganzes Eigentum, so wie den Lohn für all seine Arbeit. (續く)

【譯】 inzwischen その間に Gutenberg グーテンベルクは seine Metall-Buchstaben その金屬活字を hatte.....fertig 整備し und て nur 今や mit dem Drucke eines Buches anzufangen 一冊の書籍の印刷を始める war.....bereit 用意が出來てゐた durch diese neue Erfindung この新しい發明によつて welches .....entstand 出來上つたところの das erste Buch 最初の書籍は war eine Bibel 聖書であつた Er 彼は den Druck 印刷を im Jahre 1452 一四五二年に begann 始め und て im Jahre 1455 一四五五年に war er vollendet それは完成した aber 併し das Werk 事業は ungeheure Kosten 非常な費用を hatte..... verursacht 費さしたund そして nun さて Fust フストが sein Geld mit Zinsen その金を利息を附けて verlangte 要求し und て Gutenberg グーテンベルクが nicht zahlen konnte 支拂ふことが出來なかつた da ので so そこで er 彼は sein ganzes Eigentum 彼の全財產 so wie 幷びに den Lohn für all seine Arbeit 彼の全勞作に對する報酬を verlor 失つた

【註】——1. mit etwas anfangen「或事を始める」。— 2. verursachen は元來「惹起する」「生む」といふ意味である。— 3. 單數は Zins m.

Das geschah im November 1455. Gutenberg sah sich[1] gezwungen, wieder seine Vaterstadt zu verlassen und wieder wanderte er nach Straßburg. Dort hoffte er eine neue Druckerei zu errichten, um sein tägliches Brot zu verdienen. Allein diese Hoffnung erfüllte sich nicht und er mußte auch diese Stadt wieder verlassen. Während dieser vortreffliche Mann Hunger und Not leiden mußte, und kaum

einen Ort hatte, wo er sein Haupt niederlegen konnte, wurden Fust und Peter Schöffer, der in Verbindung mit ihm getreten war sehr reich durch Gutenbergs Erfindung. (續く)

【譯】 das その事（全財產を失つたこと）は im November 1455 一四五五年十一月に geschah 起つた Gutenberg グーテンベルクは wieder 再び seine Vaterstadt その生都を zu verlassen 去ら sah sich gezwungen ざるを得なかつた und そして wieder またもや er 彼は nach Straßburg シユトラスブルクに wanderte 移住した dort そこで er 彼は um sein tägliches Brot zu verdienen その日々のパンを稼がんがために eine neue Druckerei 一の新しい印刷所を zu errichten 設立せんと hoffte 期待した allein さりながら diese Hoffnung この希望は erfüllte sich nicht 充されなかつた und そして er 彼は auch diese Stadt この都會をも wieder また verlassen 去ら mußte ねばならなかつた dieser vortreffliche Mann この卓越せる人が Hunger und Not 飢と艱難とに leiden mußte 苦しまねばならず und そして wo er sein Haupt niederlegen konnte その頭を横たへることの出來た（枕することの出來た）kaum einen Ort hatte 場所すら殆んど持たなかつた während 間に Fust フスト und と der in Verbindung mit ihm gerieten war 彼と關係するやうになつた Peter Schöffer ペーテル・シエツフエルとは durch Gutenbergs Erfindung グーテンベルクの發明によつて sehr reich 非常に金持に wurden なつた

【註】——1. 逐字譯、自分が强ひられたのを看て取つた。

Gutenberg kehrte nun nach Mainz zurück, wo ein reicher Bürger, Namens Humery, ihm das nötige Geld anbot, um eine Druckerei zu errichten. Auch dieser Versuch hatte keinen guten Erfolg, denn bald nachher brach ein Krieg aus, in welchem die Stadt Mainz erobert[1] und zum Teil verbrannt wurde. Die Not in der Stadt wurde dadurch so groß, daß Gutenberg seine Druckerei wieder aufgeben mußte. Dazu[2] kam auch ein anderes Unglück, daß seine Gehilfen auswanderten und Druckereien in anderen Städten errichteten, so daß sein Geschäft nicht so vorteilhaft war wie früher, denn die Konkurrenz[3] machte die Bücher immer billiger. (續く)

【譯】 Gutenberg グーチンベルクは nun 扨て nach Mainz マインツへ kehrte.....zurück 歸つてきた wo そこで Namens Humery フメリといふ名前の ein reicher Bürger 富裕な一市民が um eine Druckerei zu errichten 印刷所を設立するために das nötige Geld 必要な金を ihm 彼に anbot 提供した auch dieser Versuch この試みも亦 hatte keinen guten Erfolg 良い結果を得なかつた denn 何故といふに bald nachher その後間もなく ein Krieg 戰爭が brach..... aus 勃發し in welchem その戰爭に於て die Stadt Mainz マインツの町は erobert 占領され und て zum Teil 一部分 verbrannt wurde 燒き拂はれた〔から〕 die Not in der Stadt 町の中の困窮は dadurch そのために wurde.....so groß, daß 非常に大となつたので Gutenberg グーチンベルクは seine Druckerei その印刷所を wieder また aufgeben mußte 放棄しなければならなかつた dazu これに auch 尙また seine Gehilfen 彼の助手達が auswanderten 他へ移住し und て Druckereien 印刷所を in anderen Städten 他の町々に errichteten 設立した daß といふ ein anderes Unglück 他の不幸が kam 加はつた so daß その結果 sein Geschäft 彼の事業は wie früher 以前程 nicht so vorteilhaft war 有利ではなかつた denn 何となれば die Konkurrenz 競爭は die Bücher 書籍を immer billiger 益々安價に machte した〔から〕

【註】——1. erobern 占領する、征服する。Eroberung 占領・征服。Eroberer 征服者。—2. この dazu は加之といふやうな意味である。—3. Konkurrenz = der Wetteifer, Wettstreit.

Es tut einem leid, sagen zu müssen, daß dieser verdienstvolle Mann, dem die Menschheit[1] so viel zu verdanken hat, arm und gebeugt durch das Unglück, welches ihn durch sein ganzes Leben begleitete, im Jahre 1469 starb. Er wurde in seiner Vaterstadt begraben, wo im Jahre 1837 ihm ein herrliches Denkmal errichtet wurde.

【譯】 die Menschheit 人類が so viel 大いに dem.....zu verdanken hat 負ふ所のあつた所の dieser verdienstvolle Mann この功勞多き人が durch sein ganzes Leben その全生涯を通じて welches ihn..... begleitete 彼に隨つてゐた(彼から離れなかつた所の) durch das Unglück 不幸のために arm und gebeugt

貧乏で意氣銷沈して im Jahre 1469 一四六九年に starb 死んだ daß といふことを sagen zu müssen 言はねばならない es のは tut einem leid 殘念至極である er 彼は in seiner Vaterstadt その生都に wurde.....begraben 埋められた wo そこに im Jahre 1837 一八三七年に ihm 彼のために ein herrliches Denkmal 立派な記念碑が errichtet wurde 建てられた

【註】——1. Menschlichkeit といふ字もあるが、これは人情・人間性といふやうな意味である。

17. Die erste Fahrt des Kolumbus über den Ozean.

Es war ein denkwürdiger Tag, als am 3. August 1492 die drei Schiffe des Kolumbus, die Santa Maria, Pinta und Nina den Hafen von Palos[1] verließen und dem unbekannten Weltmeere zusteuerten.[2] (續く)

【譯】 **die erste Fahrt des Kolumbus über den Ozean**
コロムブスの大洋を越えての最初の航行

am 3. August 1492 一四九二年八月三日に die Santa Maria, Pinta und Nina サンタ・マリア、ピンタ、ニナといふ die drei Schiffe des Kolumbus コロムブスの三隻の船が den Hafen von Palos verließen パロスの港を去つ und て dem unbekannten Weltmeere zusteuerten 未知の大洋に向つて舵をとつた als 時は es war ein denkwürdiger Tag それは記念すべき日であつた

【註】——1. Palos はスペインの西南部にある港。—2. Steuer n. は舵。

Der Admiral segelte geradeswegs nach den kanarischen Inseln,[1] um unter dem Parallelkreis[2] dieser spanischen Eilande[3] westwärts über Antilia und Zipangu[4] nach Indien zu segeln. Da aber bereits am vierten Tage das Steuer der Pinta[5] beschädigt wurde, mußte man den Hafen in Gomera[6] aufsuchen und sah sich[7] dadurch vier Wochen auf den kanarischen Inseln festgehalten. Erst am 6. September setzte Kolumbus die Fahrt wieder fort[8] und steuerte mit

Nordostpassat nach Westen. Schon am dritten Tage, am 9. September, entschloß er sich, eine zwiefache Berechnung der täglich zurückgelegten Meilenzahl zu führen und in dem jedermann zugänglichen Schiffsbuche kleinere Ziffern aufzuführen, als er selbst die Entfernungen schätzte,[3] um, wie er in seinem Tagebuch sagt, die Mannschaft nicht durch die Größe der zurückgelegten Meilenzahl zu erschrecken. (續く)

【譯】 der Admiral 船隊長(コロムブス)は dieser spanischen Eilande 此等のスペインの島(カナリヤ群島)の unter dem Parallelkreis 平行圈を westwärts 西方へ über Antilia und Zipangu アンテイリアと日本とを通つて nach Indien インドまで um.....zu segeln 帆走せんが爲に geradeswegs 眞すぐに nach den kanarischen Inseln カナリヤ群島まで segelte 帆走した aber 併し bereits am vierten Tage 四日目にもう das Steuer der Pinta beschädigt wurde ピンタ號の舵が毀損した da ので man 人々は den Hafen in Gomera ゴメラの港を aufsuchen 訪は mußte ねばならなかつた und そして dadurch そのために vier Wochen 一ケ月 auf den kanarischen Inseln カナリヤ群島に sah sich.....festgehalten 滯留させられた erst am 6. September 九月六日に漸く Kolumbus コロムブスは die Fahrt 航海を setzte.....wieder fort 再び繼續し mit Nordostpassat 東北の貿易風で steuerte.....nach Westen 西方に進んだ schon am dritten Tage 三日目に既に am 9. September 〔即ち〕九月九日に er 彼は wie er in seinem Tagebuch sagt その日記に於て云つてある如く durch die Größe der zurückgelegten Meilenzahl 背後に横たはる浬數の大いさによつて die Mannschaft 一行を um.....nicht.....zu erschrecken 驚かさない爲に der täglich zurückgelegten Meilenzahl 毎日後にした浬數の eine zwiefache Berechnung.....zu führen 二重の計算をし und て in dem jedermann zugänglichen Schiffsbuche 誰にも手にし得べき(誰が見てもよい)航海誌には als er selbst die Entfernungen schätzte 彼自身が距離を見積つたのよりも kleinere Ziffern aufzuführen より少い數字を書き載せることに entschloß.....sich 決心した

【註】——1. アフリカの西北部にある群島。— 2. ある地點の平行圈とはその地點を通り赤道に平行線を引いたもの、從つて赤道に於ては最長となり、北極南極にては

一點となる。カナリヤ群島は北緯三十度位のところにある。— 3. Eiland は主として詩に用ゐる。Insel と同じ。— 4. 日本のことで Japan, Japan, Japon は皆これから轉じたのである。— 5. 舟は女性である。— 6. カナリヤ群島中の一島である。— 7. sah sich = fand sich, war. — 9. fortsetzen は分離動詞。— 9. schätzen は評價する、見積る。

Am 13. September, bei Einbruch der Nacht, beobachtete Kolumbus zuerst die Deklination[1] der Magnetnadel. Die Abweichung gegen Nordwest nahm am folgenden Tage noch zu. Drei Tage später machte er die Wahrnehmung, daß ein rascher Wechsel[2] des Klimas eintrat. (續く)

【譯】 Am 13. September 九月十三日に bei Einbruch der Nacht 日暮に Kolumbus コロムブスは zuerst 始めて die Deklination der Magnetnadel 磁針の偏差を beobachtete 認めた die Abweichung gegen Nordwest 西北への偏差は am folgenden Tage 次の日に noch 尙 nahm.....zu 增した drei Tage später 三日後に er 彼は ein rascher Wechsel des Klimas 氣候の急速な變化が eintrat 始まつた daß といふ die Wahrnehmung 知覺を machte なした〔認めた〕

【註】——1. Deklination = Abweichung. — 2. Wechsel の發音はヱクセル。變化といふ他に爲替などといふ意味もある。

Schon vom 16. September an, wo die Schiffe zuerst in das Sargasso-[Tang]-Meer[1] eintraten, glaubte er Anzeichen von der Nähe eines Landes oder von Inseln zu bemerken. Das Schiffstagebuch enthält darüber eine Reihe[2] von Bemerkungen. Am 18. galt[3] ein dunkler Horizont als Zeichen von großer Nähe des Landes; am 19. bildete sich ein Nebel ohne Wind, eine sichere Andeutung von Land. Auch die schwimmenden Tangmassen, welche häufig angetroffen wurden, galten als Beweis dafür. Tangmeer liegt zwischen 20° und 35° n. Br.[4] und reicht gegen West bis an den Rand des Golfstroms.[5] Das Kraut bedeckt die Oberfläche nicht in gleichmäßig dichten Massen, sondern treibt in langen Streifen in der Richtung des herrschenden[6] Windes. Diese Streifen bestehen aus mehreren

Reihen Krautbüscheln, jeder einzelne höchstens einen Fuß lang; es sind vom Strande losgerissene Stücke, welche absterben und allmählich untersinken, so daß von einer Behinderung der Fahrt eines Schiffes nicht die Rede sein kann.[7] (續く)

【譯】 wo die Schiffe zuerst in das Sargasso-[Tang]-Meer eintraten 船が始めてザルガソー（海藻）海に入り込んだ時の schon vom 16. September an 九月十六日から既に er 彼は von der Nähe eines Landes oder von Inseln 陸地や島が近づいた事の Anzeichen 兆が glaubte.....zu bemerken 認められると思つた das Schiffstagebuch 航海日誌は darüber その事に就いて eine Reihe von Bemerkungen 數々の記入を enthält 含んでゐる am 18. 十八日には ein dunkler Horizont 暗い水平線が als Zeichen von großer Nähe des Landes 陸地が大いに近づいた徵候として galt 見なされた am 19. 十九日には ein Nebel 霧が ohne Wind 風もないのに bildete sich 生じた eine sichere Andeutung von Land〔それは〕陸地の確かな暗示であつた welche häufig angetroffen wurden 屢々出會つた auch die schwimmenden Tangmassen 水に流れてゐる海藻の群も galten als Beweis dafür その事（陸地の近いこと）の證左と見なされた dieses Tangmeer この海藻海は liegt zwischen 20° und 35° n. Br. 北緯二十度と三十五度との間にあつ und て gegen West 西方へ bis an den Rand des Golfstroms メキシコ灣流の緣のところまで reicht 達してゐる das Kraut 草は die Oberfläche 表面を bedeckt.....nicht in gleichmäßig dichten Massen 等しい密度の群で蔽つてゐるのではなく sondern て in langen Streifen 長い帶狀をなして in der Richtung des herrschenden Windes 主なる風の方向に treibt 流れてゐる diese Streifen 此の帶狀のものは jeder einzelne 各々一つが höchstens 精々 einen Faß lang 一呎の長さの aus mehreren Reihen Krautbüscheln 數多くの草の束から bestehen 成立つてゐる es sind それらは welche absterben und allmählich untersinken 凋萎して徐々に沈むところの vom Strande losgerissene Stücke 海濱からもぎ取られた一部分 so daß なので von einer Behinderung der Fahrt eines Schiffes nicht die Rede sein kann 船の航行が防礙されるといふことは問題となり得ないのである

【註】—1. sargassum とは Beerentang（ほんだはら）のことで、Sargasso-Meer も Tang-Meer も同じことである。—2. Reihe は列、順番といふやうな意味だが eine Reihe

Jahre（多年）の如く「ある續つた相當の數」を表はす。—3. gelten は「價する」「勢力がある」「有効である」といふやうな意味で、Der Prophet gilt nicht im Vaterland. といへば「豫言者は祖國で勢力がない」（豫言者は國に容れられず）といふことになる。哲學ではこの gelten を「妥當する」從つて Gültigkeit を「妥當性」と譯す。妥當といふ言葉は普通には「穩當」といふやうな意味に解せられて「あの人の主張は妥當だ」といへば、過激に失しないで肯綮に中るといふ位のことになるが、この gelten の譯の妥當はそれとは少し違つて「或るものが或る價値のあることを認められる」といふ意味である。序に、gelten に妥當といふ語を始めてあてはめた人が果してさういふことを考へてゐたかどうかはわからないが、當といふ字は現今支那で質屋のことをいふので、質屋といふところでは云ふ迄もなく質草が（縱ひ値切られても）いくらいくらの價値あるものと認められる、つまりその額だけのものとして gelten するのである。法律上では geltend machen（名詞は Geltendmachung）と云へば（權利などを）行使することである。—4. n. Br. は nördlicher Breite（二格）の略で「北緯の」の意。20° の上の小さい丸は Grad と讀む。—5. Golfstrom はメキシコ灣から流れ出る暖流である。—6. herrschen は「支配する」「優勢である」の意。Es herrschen hier epidemische Krankheiten.（當地では傳染病が流行してゐる）。herrschende Meinung（輿論）。—7. davon kann keine Rede sein = das ist ausgeschlossen（その事は問題外だ）。

Der beständig günstige Fahrwind erregte in den Matrosen die Befürchtung, es[1] werde wegen des herrschenden Ostwindes die Rückfahrt sehr erschwert, wo[2] nicht unmöglich gemacht werden. Als am 23. September die Krautmassen wieder dichter die Oberfläche des Wassers bedeckten und das Meer so ruhig und glatt blieb, äußerte sich die Besorgnis des Schiffsvolkes laut: man werde in dieser Gegend niemals einen günstigen Wind zur Rückkehr nach Spanien treffen. Als dann aber das Meer sich erhob, ohne daß ein Wind wehte, und eine rauhe See entstand, waren alle höchlich erstaunt. (續く)

【譯】 der beständig günstige Fahrwind 絶えず好都合だつた順風は in den Matrosen 水夫に wegen des herrschenden Ostwindes 東風が勝味なために die Rückfahrt 復航が wo nicht unmöglich gemacht werden 不可能とはならなくとも es werde.....sehr erschwert 大いに困難となるだらうといふ die Befürchtung 恐怖を erregte 喚び起した am 23. September 九月二十三日に die Krautmassen

草の大群が wieder 再び dichter より密に die Oberfläche des Wassers 水面を bedeckten 蔽ひ und そして das Meer 海が so ruhig und glatt blieb 相變らず靜かに滑かなまゝだつた als 時 die Besorgnis des Schiffsvolkes 船員の心配は äußerte sich laut 言動に現れた〔卽ち〕 man 人々は in dieser Gegend この地方では zur Rückkehr nach Spanien スペインへ歸るための einen günstigen Wind 好都合な風に niemals 決して werde.....treffen 會は〔ない〕だらう〔といふ意見が洩れた〕 aber 併し dann それから ohne daß ein Wind wehte 風も吹かないのに das Meer sich erhob 海が高くなつ(荒れ) und て eine rauhe See enstand 荒い海になる als と alle 皆は höchlich 大いに waren.....erstaunt 驚いた

【註】——1. es werde 以下の文章は die Befürchtung に掛る。そして es は文法上の主語で意味上の主語は die Rückfahrt. — 2. この wo は wenn, falls と同じやうな意味である。

Am 25. September besprach[1] sich der Admiral mit Martin Alonso Pinzon über eine Karte, welche er ihm vor drei Tagen geschickt und auf welcher in dieser Gegend einige Inseln eingetragen[2] waren. Offenbar handelte[3] es sich dabei um die Karte Toscanellis[4] und die[5] etwas südlich vom Schiffskurs vermutete Insel Antilia. Martin Alonso glaubte diese Insel sogar zu sehen; auch Kolumbus teilte diese Ansicht und schätzte die Entfernung auf etwa 25 Meilen.[6] Infolgedessen ließ der Admiral gegen West steuern, aber am folgenden Tage klärte sich der Irrtum auf: man war durch das dunkle Aussehen des Horizonts getäuscht worden. Daß aber die Insel Antilia in der Nähe liegen müsse, bezweifelte Kolumbus nicht. Am 3. Oktober glaubte er diese Insel bereits hinter sich zu haben; denn Anzeichen von Land hatte er genug gehabt, aber er wollte seine Zeit nicht mit dem Aufsuchen verlieren, weil Indien sein Ziel war. (續く)

【譯】 am 25. September 九月二十五日に der Admiral 船隊長は mit Martin

Alonso Pinzon マルテイン・アロンゾ・ピンツオンと welche er ihm vor drei Tagen geschickt 彼(コロムブス)が彼に三日前に送り und そして auf welcher その上に in dieser Gegend この地方に einige Inseln 數箇の島が eingetragen waren 載つてゐた〔ところの〕 über eine Karte 地圖に就いて besprach sich 話し合つた offenbar 明かに dabei 此の場合は um die Karte Toscanellis トスカネリの地圖 und と die etwas südlich vom Schiffskurs vermutete Insel Antilia 船のコースよりはいくらか南方に〔あると〕推測される島のアンテイリアが handelte es sich 問題となつてゐたのである Martin Alonso マルテイン・アロンゾは diese Insel この島が zu sehen 見えると sogar さへ glaubte 思つた auch Kolumbus コロムブスも teilte diese Ansicht この見解を頒つ und て die Entfernung 距離を auf etwa 25 Meilen 約二十五浬と schätzte 計つた Infolgedessen 其故に der Admiral 船隊長は gegen West 西に向つて ließ.....steuern 進ましめた aber 併し am folgenden Tage 次の日に der Irrtum 誤謬が klärte sich.....auf 明かになつた〔卽ち〕 man 人々は durch das dunkle Aussehen des Horizonts 水平線の暗い樣子のために war.....getäuscht worden だまされたのであつた aber 併し die Insel Antilia アンテイリア島が in der Nähe liegen müsse 近くにあるに違ひない daß といふことを Kolumbus コロムブスは bezweifelte.....nicht 疑はなかつた am 3. Oktober 十月三日に er 彼は diese Insel この島を bereits 既に hinter sich zu haben 後方に通り越したと glaubte 思つた denn 何故といふに Anzeichen von Land 陸地の徵候を er 彼は hatte.....genug gehabt 充分持つた(認めた)〔から〕 aber 併し er 彼は weil Indien sein Ziel war インドが彼の目標であつたので seine Zeit 彼の時間を mit dem Aufsuchen (島を)探すことに verlieren 空費しようとは wollte 欲し nicht なかつた

【註】——1. sich besprechen の過去。— 2. eingetragene Schutzmarke といふと登錄商標のこと。— 3. es handelt sich um etwas 文法三卷 271. — 4. トスカネリはイタリヤのフローレンスの人でコロムブスに西航すれば印度に達する事を敎へた人。— 5. この die は Insel の冠詞である。— 6. この Meilen は四格である、卽ち前の auf が四格を支配してゐるのである。

Es unterliegt keinem Zweifel,[1] daß, je länger die Fahrt dauerte, die Mannschaft immer lauter ihre Besorgnis aussprach, vielleicht

auch sogar allerlei[2] Drohungen gegen den fremden Führer, gegen den Liguren[3] laut werden ließ,[4] wenn auch die dramatische Ausschmückung dieser Stimmung, welche in der Erzählung von einem Vertrage gipfelt,[5] den Kolumbus sollte eingegangen sein, einer spätern Zeit angehört. Dennoch soll[6] der Admiral sich dazu verstanden haben, nach drei Tagen umzukehren, wenn bis dahin das gesuchte Land noch nicht aufgefunden sei. Die Matrosen drohten ihren Führer ins Meer werfen zu wollen; sie seien von dem ligurischen Menschen betrogen und ins Verderben gebracht. Diese bedenkliche Stimmung unter dem Schiffsvolke bestätigt Kolumbus in seinem Tagebuche, wenn er am 14. Februar 1493, also auf dem Heimwege, berichtet, daß er schon auf der Hinfahrt viel von den Leuten zu leiden gehabt, weil alle einstimmig erklärt hätten, umkehren zu wollen, und daß sie sich zu Drohungen gegen ihn hätten hinreißen lassen. (續く)

【譯】 je länger die Fahrt dauerte 航海が長く續けば續く程 die Mannschaft 乘組員が ihre Besorgnis その心配を immer lauter 益々聲高く aussprach 述べ vielleicht auch 恐らくまた gegen den fremden Führer 外國人の指揮者に對し gegen den Liguren 卽ちゼノア人に對し sogar allerlei Drohungen 色んな威嚇さへも laut werden ließ 口にした daß といふことは es unterliegt keinem Zweifel 疑を容れない —— den Kolumbus sollte eingegangen sein コロムブスが承諾したとか云ふ in der Erzählung von einem Vertrage 契約書の物語で gipfelt 大詰に達してゐる welche ところの die dramatische Ausschmückung dieser Stimmung この氣分の劇的な尾鰭は wenn auch まづ einer spätern Zeit angehört 後世に屬してゐる（後世の作り話である）が。 dennoch それにしても der Admiral 船隊長は wenn 若し bis dahin その時までに（三日後までに） das gesuchte Land 尋ねてゐる陸地が noch nicht aufgefunden sei 未だ見つからなければ nach drei Tagen 三日後に umzukehren 後戻りをする dazu ことを soll..... sich.....verstanden haben 承諾したといふことである die Matrosen 船員達は ihren Führer その指揮者を ins Meer werfen zu wollen 海の中に投げ込まうと

drohten 脅かした sie 彼等は seien von dem ligurischen Menschen betrogen ゼノアの人間に欺かれ und て ins Verderben gebracht 破滅に陷入れられた〔なぞと口走つた〕 Kolumbus コロムブスは in seinem Tagebuche その日記に於て weil alle einstimmig erklärt hätten, umkehren zu wollen 皆が異口同音に引返したいと聲明したので schon auf der Hinfahrt 既に往航に於て viel von den Leuten 人々から大いに daß er.....zu leiden gehabt 苦しまされねばならなかつたこと und そして sie 彼等が zu Drohungen gegen ihn 彼を脅迫するまでに sich..... hätten hinreißen lassen 輕擧盲動した daß ことを am 14. Februar 1493 —四九三年二月十四日に also auf dem Heimwege すなはち歸路に於て wenn er..... berichtet 報告してゐるのは diese bedenkliche Stimmung unter dem Schiffsvolke 船員の間に於けるこの險惡な氣配を bestätigt 確證せるものである。

【註】——1. 「それは如何なる疑にも供せられず」が逐字譯。— 2. allerlei は語尾をとらない。— 3. Liguren とは古代に北部イタリヤに住んでゐた人を指し、その土地のことは Ligurien といふ、また Ligurische Republik といふと Republik Genua のことで、コロムブスがゼノア（ドイツ語では Genua といふ）出の人であるためにかくいふのである。— 4. lassen に就いては文法 253 參照。— 5. 「頂する」「盛り上る」。— 6. この soll に就いては文法 249 の (7) を參照。

Vom 7. Oktober an[1] beschloß Kolumbus einen südwestlichen Kurs beizubehalten. Er wurde dazu durch den Flug zahlreicher Vögel veranlaßt,[2] welche nach dieser Richtung zogen; denn er wußte, daß die Portugiesen der Beobachtung[3] des Fluges der Vögel die Entdekkung mancher Inseln verdankten. Auch am 10. Oktober beklagten sich seine Leute wieder über die lange Dauer der Reise, aber der Admiral belebte ihre Hoffnung auf[4] reichen Gewinn, der in sicherer Aussicht stehe. Übrigens[5] fügte er hinzu, ihre Klagen nützten nichts, da er unter allen Umständen mit Gottes Hilfe seinen Weg fortsetzen werde, bis er Indien erreicht habe. (續く)

【譯】 vom 7. Oktober an 十月七日よりは Kolumbus コロムブスは einen südwestlichen Kurs 西南方のコースを beizubehalten 持續することに beschloß 決した er 彼は nach dieser Richtung この方向に zogen 飛んでゐた welche

所の zahlreicher Vögel 數多の鳥の durch den Flug 飛翔によつて wurde dazu .....veranlaßt さう（西南方にゆくこと）する可く促された（さうするやうになつた）denn 何故といふのに er 彼は die Portugiesen ポルトガル人が die Entdeckung mancher Inseln 多くの島の發見を der Beobachtung des Fluges der Vögel 鳥の飛翔の觀測に verdankten 負つた（觀測のお蔭である）daß といふことを wußte 知つてゐた〔から〕 auch am 10. Oktober 十月十日にも seine Leute 彼の部下達は wieder また über die lange Dauer der Reise 航海が長く繼續することに就いて beklagten sich 苦情を云つた aber 併し der Admiral 船隊長は der in sicherer Aussicht stehe 見込確實と稱する auf reichen Gewinn 豐かな利得に對する ihre Hoffnung 彼等の望みを belebte 賑はした übrigens それに er 彼は unter allen Umständen どんな事情があつても mit Gottes Hilfe 神の御加護を得て bis er Indien erreicht habe インドに到達するまでは da er.....seinen Weg fortsetzen werde その航路を續けてゆく故に ihre Klagen nützten nichts 彼等の苦情は何の役にも立たないと fügte.....hinzu 附け加へた

【註】——1. von.....an に就いては文法 240 參照。— 2. veranlassen は「あることをするやうにさせる」。名詞は Veranlassung 誘因・機會。— 3. Beobachtung の發音はベおーバハトゥング。— 4. この auf は「.....を期しつつ」といふ意味で、auf gut Glück（運を天に任せて）auf jeden Fall（どんな事があつても）といふやうに使はれる。「左樣なら」といふときの Auf Wiedersehen の auf も同じで、この Wiedersehen は四格である、つまり「再會を期して」「また會はんまで」といふ意である。— 5. übrigens は「その他の點については」或はこの場合の如く außerdem と同じで「その上に」。

Kolumbus war zu fest überzeugt, dem Ziele seiner Wünsche nahe zu sein. Ohne Schwankung war er in den ersten Wochen westwärts gesteuert und wich nur in den letzten Tagen mit bewußter Absicht[1] von dieser Richtung ab. （續く）

【譯】 Kolumbus コロムブスは dem Ziele seiner Wünsche 彼の希望の目標に nahe zu sein 近づいてゐることを war zu fest überzeugt 餘りにも固く確信してゐた ohne Schwankung 搖ぎなく（確乎として）er 彼は in den ersten Wochen 最初の數週間 westwärts 西方へ war.....gesteuert 進んでゐた und そ

して nur in den letzten Tagen たゞ最後の數日に mit bewußter Absicht 故意と von dieser Richtung その方向から wich.....ab 離れた

【註】——1. 「意識した意圖を以て」。

Man war bereits mehr als 750 Meilen von den Kanarien entfernt. Das Schiffsvolk spähte immer eifriger nach Land aus; denn dem Glücklichen, welcher zuerst dasselbe erblicken sollte, waren reiche Geschenke und eine jährliche Pension[1] von 10,000 Maravedis[2] verheißen. Da infolgedessen zu wiederholten Malen der Ruf „Land!" erscholl, ohne daß die daran geknüpfte Erwartung sich erfüllte, so wurde bestimmt, daß derjenige, welcher die Gemüter[3] auf solche Weise vergeblich in Aufregung versetzte, in Zukunft keinen Anspruch auf die ausgesetzte Belohnung[4] haben sollte. （續く）

【譯】 man 人々は bereits 既に mehr als 750 Meilen 七五〇浬以上も von den Kanarien カナリヤ群島から war entfernt 遠ざかつてゐた das Schiffsvolk 乘組員は immer eifriger 益々熱心に spähte.....nach Land aus 陸地を探した denn 何故といふに welcher zuerst dasselbe erblicken sollte 最初にそれ（陸地）を見付けるであらう所の dem Glücklichen 幸運兒には reiche Geschenke 夥しき贈物 und と eine jährliche Pension von 10,000 Maravedis 一萬マラヱデイの年金とが waren.....verheißen 與へられることが約されてゐた〔から〕 infolgedessen その結果 zu wiederholten Malen 度々 der Ruf „Land!"「陸地だ」といふ叫聲が die daran geknüpfte Erwartung それ（叫聲）と結び付いてゐる期待が ohne daß.....sich erfüllte 實現されることなしに erscholl 響き亙つた da ので so そこで die Gemüter 人心を auf diese Weise 斯ういふ風に welcher..... vergeblich in Aufregung versetzte 徒に激せしめる所の derjenige 者は in Zukunft 將來 auf die ausgesetzte Belohnung 揭げ約された報酬に對する keinen Anspruch 權利を haben sollte 持たせない daß といふことが wurde bestimmt 定められた

【註】——1. Pension の發音はパンシおーン或はパンジおーン。恩給・年金の他に下宿料・下宿屋などといふ意味もある。— 2. 1 Maravedi は昔時のスペインの貨幣でわ

が約八圓に當るといふが、昔の貨幣の價値を測定するのはなかなか困難である。德川時代の一兩がどの位の値打があつたかは容易に解らないし、また現今の貨幣でも明治初年の一圓と今の一圓とでは大なる懸隔がある。— 3. Gemüt n. は「情緒」で、心理的に云へば意識の知的活動である認識と區別されるものである。— 4. 報酬を公けに發表して約束することを eine Belohnung aussetzen といふ、卽ち「懸賞」。

Aber trotzdem blieben aller Augen mit gespannter[1] Aufmerksamkeit auf den fernen Horizont im Westen geheftet, zumal[2] sich die echten Anzeichen von Land zu mehren schienen. Am Morgen des 7. Oktober gab die Nina, welche vorausgesegelt war, durch einen Kanonenschuß[3] das Signal, daß man Land sehe; aber man mußte wiederum eingestehen,[4] daß man sich getäuscht habe. Die nun folgende Niedergeschlagenheit wurde aber bald wieder gehoben; am 9. Oktober spürte man einen frischen Hauch[5] der Luft, wie wenn er von fernen Blütenbäumen herüberwehe. Am 11. Oktober fischte man bei dem Admiralschiffe einen frischgrünen Zweig, bei der Pinta einen mit Feuer bearbeiteten Stab und einen Zweig mit roten Beeren aus dem Wasser. Am späten Abend sah Kolumbus vom hohen Hinterkastell seines Schiffes aus einen Lichtschein, der sich vorwärts zu bewegen schien, als ob jemand eine Fackel trage; auch andere, die er herbeirief, glaubten dasselbe zu erkennen. Man befand sich in der Tat in der Nähe des Landes. Wenige Stunden später, am 12. Oktober morgens 2 Uhr, sah der Matrose Rodrigo von Triana auf der Pinta einen flachen, sandigen Strand im Mondschein leuchten; denn man hatte sich dem Lande von der Seite bereits bis auf zwei Seemeilen genähert. (續く)

【譯】 aber 併し trotzdem それにも關らず aller Augen すべての人の眼は mit gespannter Aufmerksamkeit 注意を緊張して auf den fernen Horizont im Westen 西方の遠い水平線に blieben.....geheftet こびり附いてゐた zumal 殊に die echten Anzeichen von Land 陸地の眞の徵候が sich..... zu mehren schienen 增す

やうに思はれたので。 am Morgen des 7. Oktober 十月七日の朝に welche vorausgesegelt war 先に帆走してゐた die Nina ニナ號が durch einen Kanonenschuß 一發大砲を發射して daß man Land sehe 陸地が見えたといふ das Signal 信號を gab した aber が man 人々は daß man sich getäuscht habe 見誤つたことを wieder またもや mußte.....eingestehen 告白しなければならなかつた aber 併し die nun folgende Niedergeschlagenheit 續いて起つた落膽は bald 間もなく wieder また wurde.....gehoben 高められた (意氣が揚つた) am 9. Oktober 十月九日に man 人々は einen frischen Hauch der Luft 爽々しい微風を wie wenn 宛かも er それ (風) が von fernen Blütenbäumen 遠くの花咲ける樹々から herüberwehe 吹き渡つてくる〔かのやうに〕spürte 感じた am 11. Oktober 十月十一日に man 人々は bei dem Admiralschiffe 船隊長の船の近所で einen frischgrünen Zweig 鮮かな綠色の枝を bei der Pinta ピンタ號の傍では einen mit Feuer bearbeiteten Stab 火で加工した棒 und と einen Zweig mit roten Beeren 赤い漿果の附いてゐる枝とを aus dem Wasser 水から fischte 引揚げた am späten Abend 夕方晩くなつて Kolumbus コロムブスは als ob 宛かも jemand 誰かが eine Fackel trage 松明を翳してゐる〔やうに〕vorwärts 前方に der sich .....zu bewegen schien 進んでゐる樣に見える einen Lichtschein 光を vom hohen Hinterkastell seines Schiffes aus 彼の船の高い後部高甲板から sah 見た die er herbeirief 彼が呼び寄せた auch andere 他の人々も dasselbe それを glaubten..... zu erkennen 認める氣がした man 人々は in der Tat 實際 in der Nähe des Landes 陸地の近くに befand sich 居た wenige Stunden später 數時間後 am 12. Oktober morgens 2 Uhr 〔卽ち〕十月十二日朝二時に der Matrose Rodrigo von Triana auf der Pinta ピンタ號乘組の水夫トリアナのロドリゴは einen flachen, sandigen Strand 平坦な砂地の海濱が im Mondschein leuchten 月光の裡に輝いてゐるのを sah 見た denn 何故といふに man 人々は dem Lande 陸地に von der Seite 側面から bereits bis auf zwei Seemeilen 既に二浬のところまで hatte sich.....genähert 近づいてゐたのであつた。

【註】——1. spannen は「張る」「緊張する」といふ動詞。緊張といふ名詞には Spannung と Gespanntheit との二つがある。— 2. zumal は普通「殊に」といふ副詞に使はれるが、こゝでは接續詞として使はれてゐる。schienen といふ動詞が最後に來てゐることがこれを證してゐる。— 3. Kanone f. は大砲である。今はあまり聞かないが我陸軍で加農砲 (カノン砲) と云つてゐたのはこの語である。— 4 eingestehen はたゞ ge-

stehen ともいふ、名詞の告白・白狀も從つて Eingeständnis n. 又は Geständnis n. — 5. Hauch は呼吸・「といき」である。從つて極く微かな「そよぎ」の事を云ふ。

Ein Kanonenschuß verkündete die glückliche Entdeckung den beiden nachfolgenden Schiffen, und sowie[1] es Tag wurde, sahen sie eine anmutig grüne Insel vor sich liegen. Die Überfahrt von den kanarischen Inseln hatte 32 Tage gedauert. Entzückt und mit Freudentränen im Auge stimmte Kolumbus der Lobgesang „Te Deum laudamus“[2] an und alle seine Gefährten stimmten mit ein. Man umringte den noch vor kurzem geschmähten Führer und brachte dem Helden seine Huldigung dar.

【譯】 ein Kanonenschuß 一發の大砲の發射は die glückliche Entdeckung 幸運な發見を den beiden nachfolgenden Schiffen 後續する兩船に verkündete 告げた und そして sowie es Tag wurde 晝間になるや否や sie 彼等は eine anmutig grüne Insel 快い綠色の島が vor sich liegen 眼前に横はつてゐるのを sahen 見た die Überfahrt von den kanarischen Inseln カナリヤ群島からの渡航は hatte 32 Tage gedauert 三十二日續いたのであつた entzückt 有頂天になり und そして mit Freudentränen im Auge 眼に喜びの涙を浮べて Kolumbus コロムブスは den Lobgesang „Te Deum laudamus“ 讃美歌「Te Deum laudamus」(謝恩讃美歌) を stimmte.....an 歌ひ始めた und そして alle seine Gefährten 彼の同行者は皆 mit 一緒に stimmten.....ein 唱和した man 人々は den noch vor kurzem geschmähten Führer 少し前まで尙罵倒されてゐた指揮者を umringte 取圍み und そして dem Helden この偉人に brachte.....seine Huldigung dar 恭順の意を表はした

【註】——1. sowie は sobald と同じ意味で接續詞。— 2. 拉丁語で、te 汝 Deum 神を laudamus 我らは稱ふ。

文法講座目次

第四卷

第三十六講 不定法 (主として zu を伴ふ場合)

頁
281. 引用形 (Nennform) としての不定法… … … … … … … … 325
282. 不定法の名詞化 … … … … … … … … … … … … … 326
283. zu を伴ふ不定法の一般的性質 … … … … … … … … … 327
284. 不定代名詞 es, das 等を先行詞とする zu を伴ふ不定法 … … 329
285. 名詞を先行詞とする、zu を伴ふ不定法 … … … … … … … 330
286. 「云々するために」といふ、zu を伴ふ不定法… … … … … … 330
287. 「云々するにしては」といふ、zu を伴ふ不定法 … … … … 331
288. 「云々すれば」といふ、zu を伴ふ不定法 … … … … … … 332
289. ohne, statt, anstatt の次の zu を伴ふ不定法 … … … … … 332
290. 形容詞を規定する、zu を伴ふ不定法 … … … … … … … 333
291. 述語としての zu を伴ふ不定法 … … … … … … … … 333
292. zu erklärend 等 … … … … … … … … … … … … … 335
293. 關係代名詞を含む際の zu を伴ふ不定法 … … … … … … 335
294. 副文章が疑問詞を含む際の zu を伴ふ不定法… … … … … … 336
295. 過去の不定法 … … … … … … … … … … … … … 337
296. zu を伴ふ不定法は省略副文章とも觀らる … … … … … … 338

第三十七講 接續詞

297. 接續詞の分類 … … … … … … … … … … … … … 340
298. 從屬的接續詞の主なるもの … … … … … … … … … … 340
299. 認容の意味を有する接續詞 (構文の諸形態) … … … … … … 341
300. 一般に從屬文が有し得る二つの意味傾向 (意學的考察) … … 345
301. 後續的意味を表現する助詞 denn. … … … … … … … … 352
302. 並立文章の如き形態を備へながら其の意味形態は從屬的なる場合 … … … … … … … … … … … … … … … 353

頁
303. 文意を受ける was (171 の復習) … … … … … … … 354
304. 竝立的接續詞の主なるもの … … … … … … … … 354
305. 竝立的接續詞の後に於ける配語 … … … … … … … 356
306. aber, nämlich 等の位置 … … … … … … … … … 356
307. 對照的接續詞の主なるもの … … … … … … … … 357
308. 對照的接續詞の用法 … … … … … … … … … … 358
309. 前置的接續詞とは何ぞや?… … … … … … … … … 360
310. 前置的接續詞の主なるもの … … … … … … … … 365
311. 前置的接續詞は必ず一語に掛かる … … … … … … … 367

第三十八講　副　　詞

312. 形容詞は大抵其の儘を副詞に用ひる … … … … … … 370
313. 副詞と客語的[述語的]形容詞とを混同する勿れ … … … … 370
314. 空間概念の副詞 … … … … … … … … … … … … 373
315. da と dort の區別 … … … … … … … … … … … 373
316. 名詞の附加語になる場合 … … … … … … … … … 375
317. 空間概念の副詞の序列 … … … … … … … … … … 375
318. unter と unten, etc. … … … … … … … … … … 377
319. draußen, etc. … … … … … … … … … … … … 377
320. dran, drauf. etc. … … … … … … … … … … … 377
321. rein, raus, etc. … … … … … … … … … … … 378
322. -wärts の語尾 … … … … … … … … … … … … 378
323. treppab, treppauf, etc. … … … … … … … … … … 378
324. 副詞化する傾向ある名詞の四格 (空間概念の部) … … … … 379
325. 時間概念の副詞 … … … … … … … … … … … … 379
326. 副詞化した名詞の四格 (時間概念の部) … … … … … … 381
327. morgen früh … … … … … … … … … … … … … 382
328. 方法の副詞 … … … … … … … … … … … … … 382
329. Genetivus absolutus の副詞化 … … … … … … … … 383
330. 批評の副詞 … … … … … … … … … … … … … 386
331. 結果の副詞 … … … … … … … … … … … … … 386
332. 副詞句、または副詞的規定 … … … … … … … … … 387
333. 副詞句の假定强調用法 … … … … … … … … … … 387

第三十九講　數　　詞

頁
334. 基數 … … … … … … … … … … … … … … 390
335. 20 から 99 までの算へ方 … … … … … … … … … 391
336. 三單位が讀めれば後はみな讀める … … … … … … … 392
337. 1926 等の讀み方 … … … … … … … … … … … 393
338. 數詞 ein- と不定冠詞との區別 … … … … … … … … 393
339. 數字は女性なり。8=die Acht … … … … … … … … 393
340. Tausende von Menschen … … … … … … … … … 394
341. 序數 … … … … … … … … … … … … … … 394
342. 名詞の後の序數には基數を用ふ … … … … … … … 394
343. Karl V. … … … … … … … … … … … … … 395
344. erstens, zweitens, etc. … … … … … … … … … 395
345. 分數 ein Drittel … … … … … … … … … … … 395
346. 回數 einmal, zweimal … … … … … … … … … … 396
347. 倍數 einmal, zweimal … … … … … … … … … … 396
348. 重數 einfach, zweifach … … … … … … … … … … 396
349. 種數 einerlei, zweierlei … … … … … … … … … 396
350. 日附の書き方 … … … … … … … … … … … … 397
351. 時刻の唱へ方 … … … … … … … … … … … … 398
352. 量詞 … … … … … … … … … … … … … … 398

第四十講　固有名詞

353. 人名に就て … … … … … … … … … … … … … 402
354. 强音の法則 … … … … … … … … … … … … … 403
355. 人名の格變化 … … … … … … … … … … … … 404
356. 人名を附加語にする 'sch- … … … … … … … … … 406
357. 地名を附加語にする -er … … … … … … … … … 406
358. 稱呼 (die Anrede)… … … … … … … … … … … 406
359. 國名の形容詞は小文字に書く … … … … … … … … 407
360. 國名、形容詞、國人名 … … … … … … … … … … 407
361. Die Müllers sind verreist … … … … … … … … … 408

第四十一講　命　令　法

頁
362. 命令法に關する一般の規則 … … … … … … … … … 409
363. Gib! … … … … … … … … … … … … … … … 409
364. Geben wir! … … … … … … … … … … … … … 410
365. Er gebe! … … … … … … … … … … … … … 411
366. 命令法の諸種の形態 … … … … … … … … … … … 411

第四十二講　過去分詞と現在分詞

367. 現在分詞 … … … … … … … … … … … … … 413
368. 現在分詞を基礎とする附加句 … … … … … … … … … 414
369. 過去分詞の意味 … … … … … … … … … … … … 415
370. 過去分詞を基礎とする附加句 … … … … … … … … … 419
371. 分詞を基礎とする客語的[述語的]副詞句 … … … … … … 417
372. Eine Kugel kam geflogen … … … … … … … … … … 419
373. 過去分詞の命令法的用法 … … … … … … … … … … 420
374. 過去分詞の次の haben, sein の省略 … … … … … … … 420
375. 過去分詞の純形容詞化 … … … … … … … … … … 421

第四十三講　間　投　詞

376. 間投詞の主なるもの … … … … … … … … … … … 422
377. ja と nein の使ひ分け … … … … … … … … … … 427

第四十四講　疑問詞と疑問文に就て

378. was と其の複合形 … … … … … … … … … … … 429
379. welcher, welch ein … … … … … … … … … … … 429
380. wer … … … … … … … … … … … … … … … 429
381. 其他の疑問詞 … … … … … … … … … … … … 430
382. 疑問文と感嘆文との配語法の相違 … … … … … … … … 431
383. 疑問詞を先に立てた副文章 … … … … … … … … … 432
384. 疑問文に諸種の色彩を附ける助詞 … … … … … … … … 432
385. 肯定形の疑問文 … … … … … … … … … … … … 435
386. Ich weiß nicht was 等 … … … … … … … … … … 434

頁
387. 副文章が疑問詞を含む際の配語(既出) … … … … … … … 4.5
388. 文章の途中に挿入される感嘆文 … … … … … … … … 435
389. was, welches の不定指示代名詞的用法 … … … … … … … 436
390. Wissen Sie was? … … … … … … … … … … … … 436
391. ja の一用法 … … … … … … … … … … … … … 436
392. 反語 … … … … … … … … … … … … … … … 437

第四十五講　否定詞と否定文

393. 否定詞の主なるもの … … … … … … … … … … … 438
394. mehr の用法 … … … … … … … … … … … … … 438
395. kein の用法 … … … … … … … … … … … … … 439
396. 二重の否定は肯定に歸る … … … … … … … … … … 440
397. 準否定詞 kaum, wenig 等 … … … … … … … … … … 441
398. 否定前綴 un- に就て … … … … … … … … … … … 443
399. その他の否定的造語法 … … … … … … … … … … 444
400. 定形を打ち消す nicht の位置 … … … … … … … … … 445
401. 局所强調の目的を以てする nicht の後置 … … … … … … 446
402. 稍用法の困難なる否定形式 … … … … … … … … … 447
403. nicht……sondern … … … … … … … … … … … 448
404. kein……doch … … … … … … … … … … … … 449
405. wie nie, wie je 等 … … … … … … … … … … … 450

第四十六講　補　　追

406. der Name od. der Namen … … … … … … … … … … 451
407. des Naturalismus… … … … … … … … … … … … 452
408. Ein gut Ding … … … … … … … … … … … … 452
409. Ihr armen Menschen!… … … … … … … … … … … 453
410. 無語尾の形容詞 … … … … … … … … … … … … 454
411. Die Sofas … … … … … … … … … … … … … 455
412. Die Fräuleins … … … … … … … … … … … … 455
413. ein Mägdlein schön und hold … … … … … … … … … 456
414. 主語二格と補足語二格 … … … … … … … … … … 456
415. Das Prinzip der Voraussetzungslosigkeit… … … … … … 458

頁
416. Er küßte mir die Hand … … … … … … … … … 459
417. Er trinkt seinen Kaffee … … … … … … … … … 460
418. Ethischer Dativ [關心の三格] … … … … … … … … 461
419. 離格 (Ablativ) の意になる三格… … … … … … … … 463
420. Das ist dem Bürgermeister seine Tochter… … … … … … … 464
421. 二個の四格を支配する動詞 … … … … … … … … 464
422. 格支配が日本語と違ふ動詞 … … … … … … … … 466
423. 結果的客語 (Ergebnisprädikat) を伴ふ語法 … … … … … … 468
424. 結果的補足語 (Ergebnisobjekt) を伴ふ語法 … … … … … … 468
425. 所謂 inneres Objekt [內面的補足語]… … … … … … … … 469
426. als [……として] の省略 … … … … … … … … … 470
427. 客語 [述語] の代名詞化 … … … … … … … … … 470
428. 形容詞に附く數量規定は四格 … … … … … … … … 471
429. 二格支配の動詞 … … … … … … … … … … … 471
430. Lativa [搬動詞] … … … … … … … … … … … 473
431. Du, der du so groß bist, —— … … … … … … … … 476
432. Von dem ich weiß, daß er ——… … … … … … … … 477

関口存男生誕 100 周年記念著作集
ドイツ語学篇　6
独逸語大講座 第3巻
独逸語大講座 第4巻

1994年2月10日　第1版発行

著　者　関口存男 (せきぐち つぎお)
発行者　前田宗治
発行所　株式会社 三修社
〒110 東京都台東区下谷1-5-34
電話 03-3842-1711 (代表) 03-3842-1631 (編集)
編集担当 柴田明子
印刷所
製本所　株式会社 平文社
製　函　永井紙器印刷株式会社
装　幀　樋口 新

原本：独逸語大講座 第3巻 / 1931.3.15. 初版 外国語研究社
独逸語大講座 第4巻 / 1931.5.16. 初版 外国語研究社

©1994 Printed in Japan ISBN4-384-00060-X C1384

本著作集の中には、人権の侵害となる差別的な表現が見られます。しかし、著者自身による訂正が不可能なことと、著作や翻訳作品の時代背景を考慮いたしまして、そのままの形で掲載することにいたしました。読者の皆様にはこの点をご理解いただき、良識をもってこの著作集をご愛読くださいますようお願い申し上げます。
株式会社 三修社

R <日本複写権センター委託出版物>
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269 5784)にご連絡ください。